女子文壇

第九年　七月號　第九號

明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十
大正二年六月二十五日印刷納本（五日印刷納本）
大正二年七月一日發行（毎月一回一日）



東京
女子文壇社發行

趣味ある新音譜大々的賣出し

座ながら妙韻絶調に浴し古今の名士悉く眼前に集まる蓄音器と音譜の威力は實に大したものである
弊店は時勢の變遷と華客の趣向とに鑑み玆に最新音樂中より特に珍しきもの四種を選み満天下の諸賢に紹介したいのである

◎ドンブラコ

妙な名前のドンブラコ之れぞ天下の兒童諸君に桃太郎一代記を節面白く語らんと北村季晴氏が多年苦心の結果出來上がつた傑作で帝劇オペラ及オケストラ部員の演奏である聽いて益々面白く自身鬼が島にあるの感がある

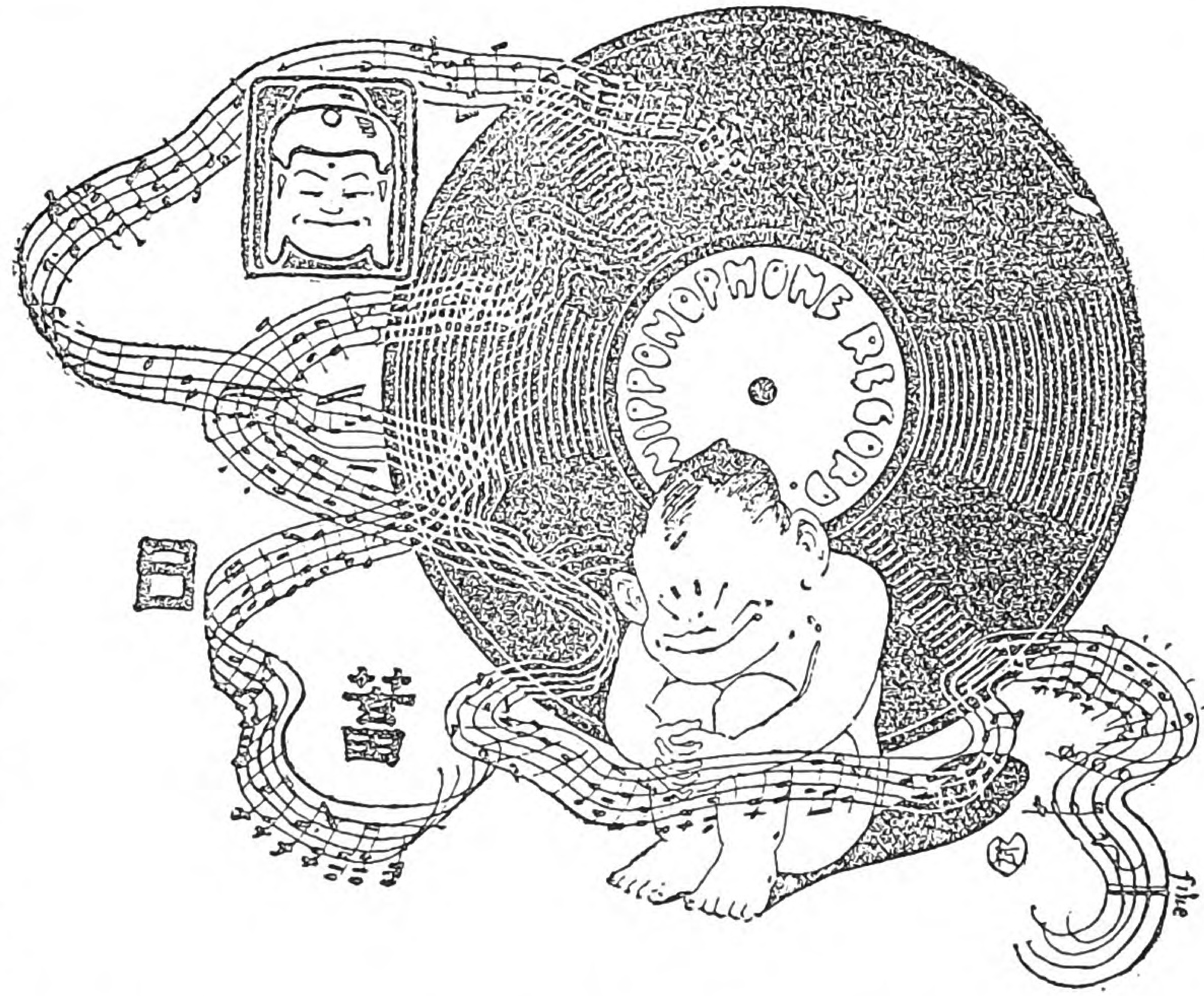
◎軍樂隊

陸軍戸山學校が多年研究に腐心せる結果軍樂隊の進歩は實に大したもので余く昔日の觀を留めない殊に同校が曩に英國に於て大喝采を博したる軍用鞄に到つては其抑揚の妙なる所殆んど形容の詞がない

◎浪花節

久々振りの吉田奈良丸、東家樂遊の浪花節何れ劣らぬ斯界の勇士其の獨得之聲調は遺憾なく音譜の上に現はれて居る

注文番號	商標	曲名		演奏者
二三七二	鷲印兩面盤	日本雜曲集(軍用鞄)	二	陸軍戸山學校軍樂隊
二三七三		同	一	同
二三七六	同	同	三	同
二三七七		同	四	同
二三八六	同	御伽歌劇ドンブラコ(桃太郎)	一	北村季晴及初子
二三八七		同	二	帝國劇場オペラ及オ
二三八八	同	同	三	ケストラ部員
二三八九		同	四	同
二三九〇	同	同	五	同
二三九一		同	六	同
二三二三	同	大石妻子別れ	上	東家樂遊
二三二四		同	中	同
二三二五	同	同	下	同
二三二六		岸本亟之進		同
一八四八	奈良丸印兩面盤	加藤淸正毒饅頭	一	吉田奈良丸
一八四九		同	二	同
一八五〇	同	同	三	同
一八五一		同	四	同



鷲印兩面盤金壹圓五十錢也
奈良丸印兩面盤金貳圓也

此等の音譜は凡て弊店所有の川崎工場に於て製造せらるゝものにして吹込みより各位に供給する迄の手續は實に弊店一千有餘名の使用人に依てなされ四十の出張所と三百七十有餘の特約店とが北は樺太より南は臺灣西は大連に到る迄帝國の何れの地にも供給致します

東京市京橋區銀座一丁目
株式會社日本蓄音器商會本店
長電話京橋{二五七番 二五八番}

女子文壇

七月號

第九年第九號

目次

涼風



春期増刊『婦人文藝』は發賣禁止されたり

目下編輯中の女子文壇七月増刊『新しき文藝』は大體に於て『婦人文藝』と同じく、若き婦人の思想を發表せるものなり。只『婦人文藝』は發賣禁止の命を蒙りたれば、編者は謹んで不穩の思想を告白せるものを避け、許さるべき範圍に於て新しき婦人方の熱烈なる創作又は自由なる感想を紹介せり

▲小笠原貞子其他新進婦人數名の短篇小説

新しき文藝

女子文壇

七月十五日増刊

定價金拾八錢
送料壹錢五厘

東京市京橋區大鋸町
女子文壇社發兌
（振替口座第壹七貮九番）
賣捌全國各地雜誌書店

講談雜

七月特別號　三百餘頁一冊　金參拾錢　送料二錢五厘

- 武士道銘々傳 御所の五郎丸……馬琴
- おとみ與三郎 浮名の横櫛……桃葉
- 俠客 樊噲の平六……燕玉
- 雲霧仁左衛門……伯龍
- 怪談 常盤木太夫……南玉
- 仇討 褸袍の錦……貞山
- 落語 權助提灯……燕枝
- 此糸蘭蝶 枕琴夢通路……春輔
- 文學藝妓 失戀記……高子
- 續兒雷也お梶……伯知
- 落語 おばけ屋……圓右
- 前田犬千代……南陵
- 花柳艶話小說舞妓 妓日記……美登里
- 浪花節 田大炊……虎春
- 幇間總まくり……蕉雨
- 易者のうら表……無腸公子

△雜錄▽

○落語の新しい進捗○藝人と癖○講談世界館○女義界憎まれ口○柳派の頭領株○演劇月々語…………○俳句○都々逸○一ト口噺○冠句○へなぶり○物は付○川柳○編輯便り其他滿載

口繪　例に依つて艶麗比無…

挿繪　執筆　蕭伯　古洞、英朋　宗方、春帆　泣葉の諸氏

發行元　東京神田旅籠町一丁目　文光堂　（電話下谷四八一九）　振替東京九五五

（最寄書店ニ品切レノ時ハ本社ニ取揃アリ直接御注文願上候）

誰も見た者がない小說不如歸の

浪子の實寫眞

本號揭載

婦人世界

七月一日發行　八卷八號　定價拾五錢　郵稅一錢五厘　半年郵稅共一圓五錢　一年二圓五錢

男に負けず働く巴里女

日本の新らしき女を愧死せしむ

▲子供の散步と遠足と旅行…岸邊福雄

▲都會の女と田園　下田歌子

▲綠綬褒章を賜はりし宮のさ子刀自

▲姑の恩を思うて嫁に優しくする……緒方國手母堂

▲日に焦けぬ衣服と傘…藤浪ドクトル

名流婦人の夏の暮らし方

は何人も之を手本として暑さを忘るべき絶好の讀物なり

浪子の寫眞

本誌獨得、天下一品の寫眞は本號の口繪として掲載す少女時代、處女時代、結婚時代の三葉ともに絶品なり

▲少女の夏の洋服と寢冷え知らず……

▲米國中流家庭の生活……

▲雇人に子供を育てさせる母親………

▲藥になる餡の菓子…弦齋夫人

▲箱二つで長椅子ができる…櫻井近子

村井弦齋氏の小說 子寶

は滿天下の婦人をして紅涙を絞らしむ。是非一讀あれ

▲避暑に行かず 轉地もせず

汗を流して働く女

涙ある人は見よ暑さを忘れむ

發行所　東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社　振替口座三二六番　賣捌全國各地書店

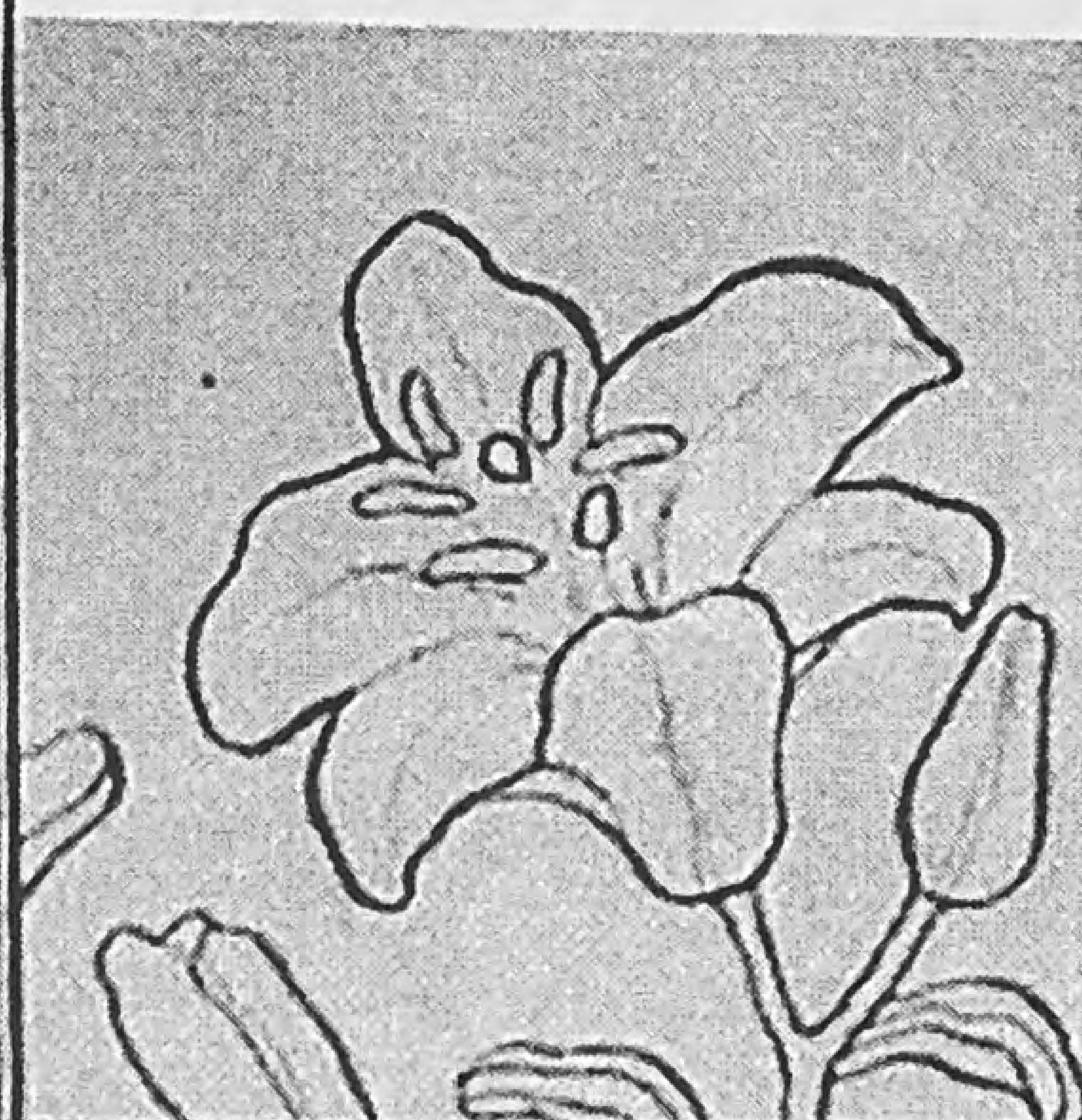
平塚明子

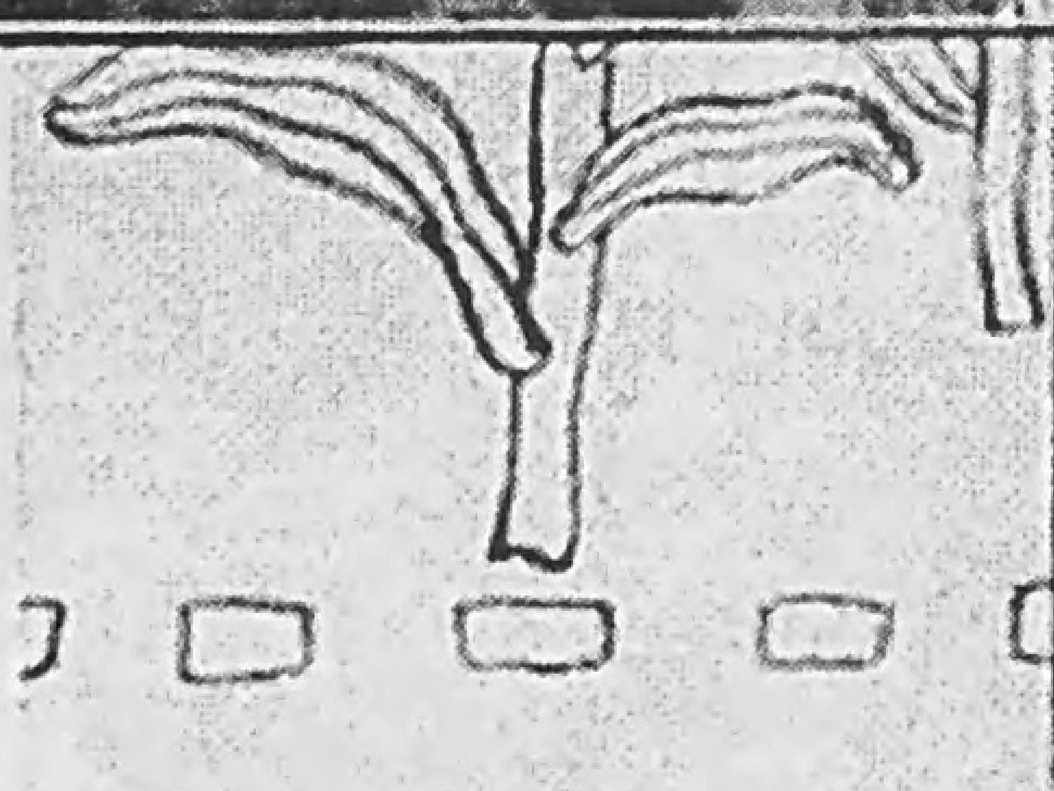


山百合



伯爵前田利同氏令嬢くら子





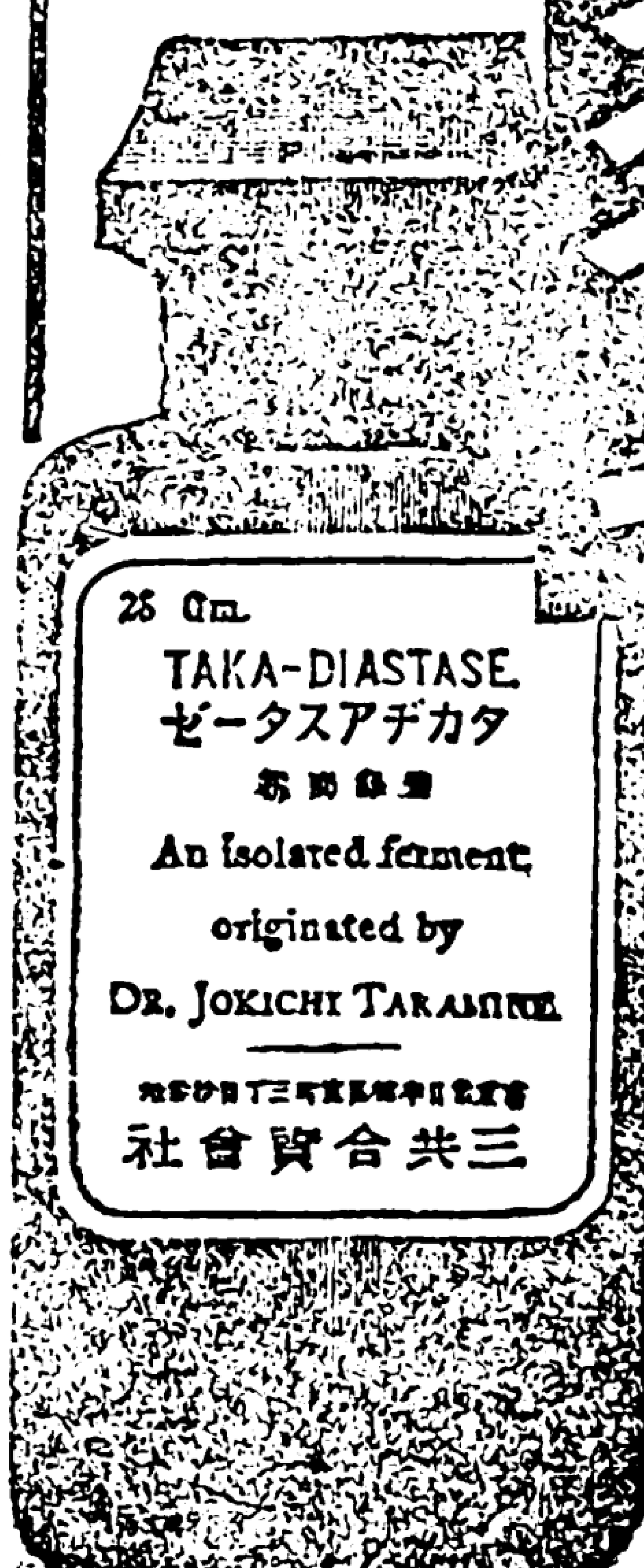


伯爵亀井茲常氏令妹須賀子

本剤と同一なる消化効力ありと稱し粗悪品を强賣する向あり信用厚き薬舖より御買上を乞ふ

タカヂアスターゼ

類似品數多あり
高峰博士發明品と
御指定を要す



本剤の試驗報告
御申越次第進呈す

發賣元 東京市日本橋區室町三丁目拾番地 三共株式會社

セブバルロ氏 規那鉄葡萄酒

規那と鐵とを純良なる葡萄酒に包合せしめたるものにして風味佳良之を貧血、虚弱、重病の恢復期神經衰弱食慾不振等に用ゐれば血液を增加し元氣旺盛となる各藥店及洋酒舖にあり類似模造品あり注意

輸入元 東京 齋藤滿平

總代理店 東京市日本橋區室町三丁目 三共株式會社

THE GIRL'S GRAPHIC

少女畫報

第七月號 定價拾五錢 郵税一錢五厘 前金 六冊郵税共金九十錢 十二冊金一圓七十五錢

編輯顧問 高島平三郎 倉橋惣三 先生

讀物

▽笑のいろ〳〵 編輯顧問 倉橋惣三

▽童話 千本松原……ゆめ二

▽少女小品 小さき胸……森の下草

▽少女お伽 敏子と人形……與謝野晶子

▽少女對話 まぼろし……みゆき女

▽少女小説 はなれ雲……三津木春影

▽女學校參觀記……我川

▽クラス會……鈴子

▽一口噺……

▽節婦沼田うの子刀自……天山

▽少女實話『曇り日』……谷江風

▽花ことば……きよじ

▽繪さがし……

畫報

●金魚●花●盆景●海●夏の朝

寫眞小説『梅雨晴』

●さみだれ●別莊の庭●お茶の水より（通學途上撮影）

▽アイスクリーム……

▽樺太みやげ……

▽虎の門にて……

▽清き流れ……

▽授業ぶり（東京千代田と）

▽お作法（麹町高女）

▽懸賞寫眞（解答と新題）

讀物

▽少女理科 雷物語……若月紫蘭

▽少女小説 姫がき……尾島菊子

▽繪草紙……沙夢郎

▽少女家事 冷しい飲料 日本女子大學教授 手塚かね子

▽少女冒險奇談 姫の行衞……斷水樓主人

▽忘れえぬ人々……竹久夢二

▽少女手工『夏のショール』蓮子

▽別れ……萬代恒志

▽蒸る風……しらん

▽物覺えの惡い鸚鵡……幸田純一

▽讀者と記者

▽判じ繪

▽和歌…作文…其他

口繪

●ある朝（鮮麗無比原色版） 太田三郎氏筆

●姉樣待ッて（極彩色石版刷） 萬代恒志氏筆

東京市京橋區鍜治橋外 振替東京一一八一番
東京社
電話京橋二三二五番 各地書店雜誌店に有

▲面白く有益なる男女必讀書出づ!!



安産の心得

一册送料共 金廾二錢 切手代用一割増

▲本書目次▲如何にせば妊娠するか▲子をはらみしを知る法▲妊娠中食物其他の注意▲つわりの話▲體内の子の毎月の變化▲出産の用意▲分娩時の注意▲出生兒の手當▲マグリの害▲出産前知法▲出ぬ乳を出す法▲產婆來らぬ前出產せし時の心得▲授乳の注意▲出産夫婦別居すべき日數▲出産屆書式▲産後の注意▲産前産後產の話▲子を生み苦しき話や失敗談色々▲流産の話▲早産の話▲難産の話▲胎内の子の男女を知る法▲どうすれば安産するか等妊娠出産の事を懇意▲產婆の秘密▲產婆を頼む注密書入れにて面白く分りやすく記せるものゝ男女必讀の良書也

發行所 東京神田區錦町 振替東京一六一八番 學友社書店

●色白くなる

色黒き方、青き方、赤すぎる顏の御方は郵便切手二錢封入御手紙下さい色白く美しくなるよい藥を御知らせ致します。日にやけて黒くなつたなどはすぐなほります。皆樣に御實驗を願ひました所「日本一の黒美人なと笑はれた生れつきの色黒が色白くなりました」とか「美人の神樣と拜んで居ります」などいふを始め數千通の御禮狀をいたゞいて居ります。

東京市神田區錦町三 高柳こう子

美顏と化粧法

一册送料共三十七錢私方へ御申越あれば特別割引二錢切手十五枚にて送本致します

目次の大略▲色白くなる方法▲赤き顏を櫻色にする方法▲シワのよらぬ方法▲キメを細かにツヤを出す方法▲口にやけるを防ぐ方法▲色を白くする方法▲手の色を白くする方法▲髮の色を黒くする方法▲毛のぬけるを止める方法▲毛をのばしつやを出す方法▲ふけを去る方法▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法▲あるべき所に毛なきを生ずる方法▲やせる法とる法▲鼻を高くする方法▲髮をよくする方法▲入浴の方法▲化粧品の選び方▲おしろいのつけ方▲衣服の模樣と縞柄▲衣服の縫方▲衣服の着方▲其他色々皆誰にもすぐ出來る事ばかり記せる良書なり

●本書著者 東京神田區錦町三 高柳こう子

最も人にきらはれる わきが

の病に罹られたる御方又永年慢性わきがにて色々の治療を施されても治らずに苦まるゝ御方の爲めに不思議によくきく治療藥を御知らせ致します御望みの御方は御遠慮なく只返信料三錢切手御送り下されば御知らせ致します

東京神田區錦町三ノ三 中村喜三郎

肺病の奇藥

一般世人が不治症と斷定しつゝある肺病は決して不治症ではありません本病に襲はれ悲觀しつゝある人は郵券二錢を添へ照會せられよ療養法及び不思議に治療の奇藥を詳細に御通知致し升（文句の盜用及轉載を嚴禁す）

東京府荏原郡大森海岸八幡電車停留場上 川名助次郎



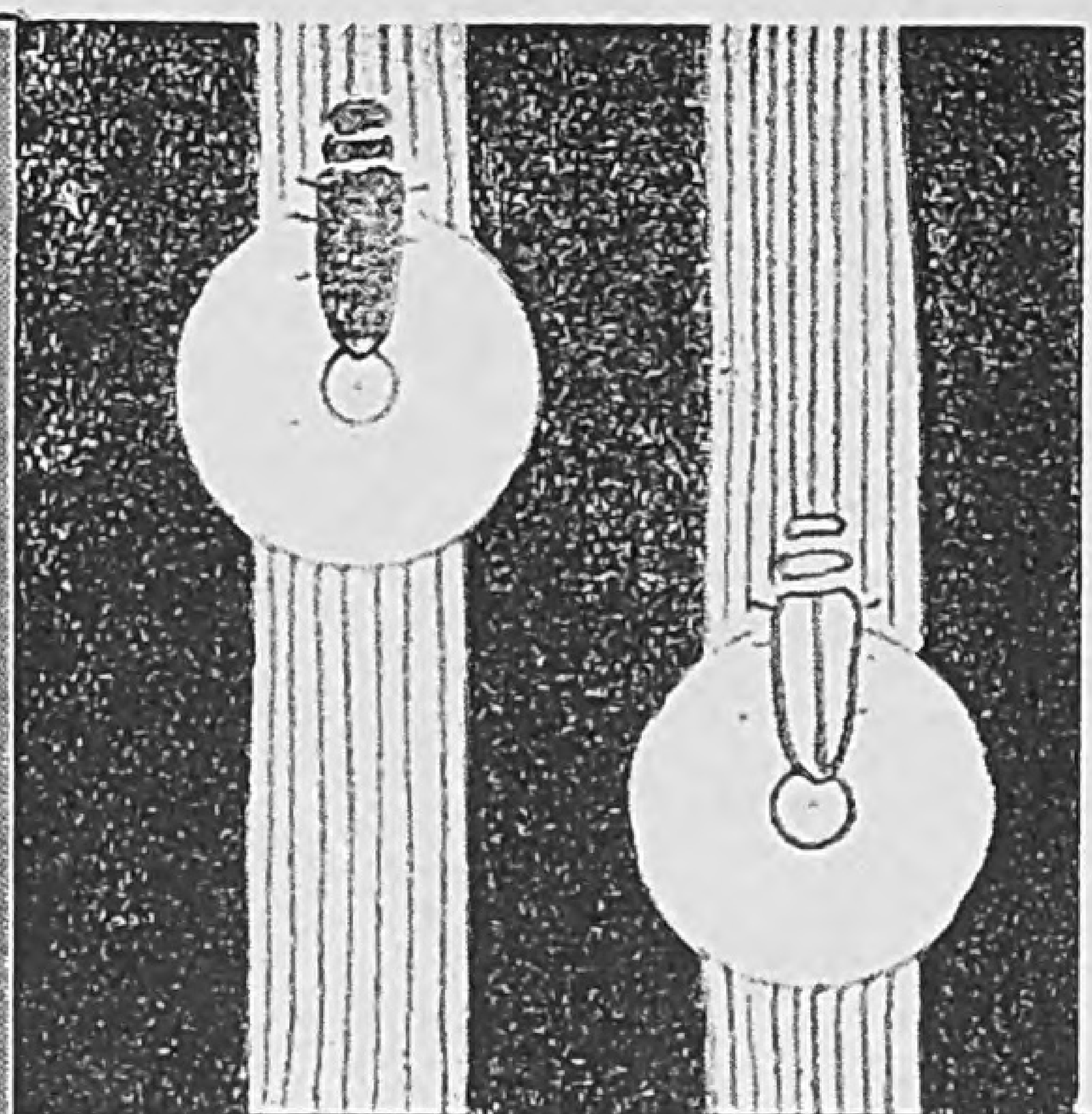
◎美しい筆蹟の主は唯？

いくら美人でも字が拙ければ『あの方はイヤに容姿のいゝのを鼻にかけてゐるが、あの字を御覧なさい、どうせ碌な家柄の人じやないわ』と罵られ、之れと反對に如何に容貌が媿くても、字を美しく書けば『あの方は實に美しい筆蹟だ、ホンとうに羨やましい、どういふ身分の方かしら』と人々から譽められます。容貌の美媿は決して其人の心の美媿を定めないが、筆蹟の美媿は直に其人の家柄、身分、性質、人格の良否美媿をあらはすやうに世人は思ふ。然るに多くの御婦人達が化粧にのみ浮身をやつし筆蹟の上達に苦心せられぬのは非常な間違ひです。筆蹟は決して性來のものではありません。六ケ月で如何なる惡筆も見違へる程の能筆となることの出來る專賣特許習字速成法は東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會へ「ハガキ」にて照會次第無料にて速成法見本及會則を進呈す



（團博士邸内の舟あそび、中央の立姿は博士令孃、右端青木領事官補夫人）

夏草

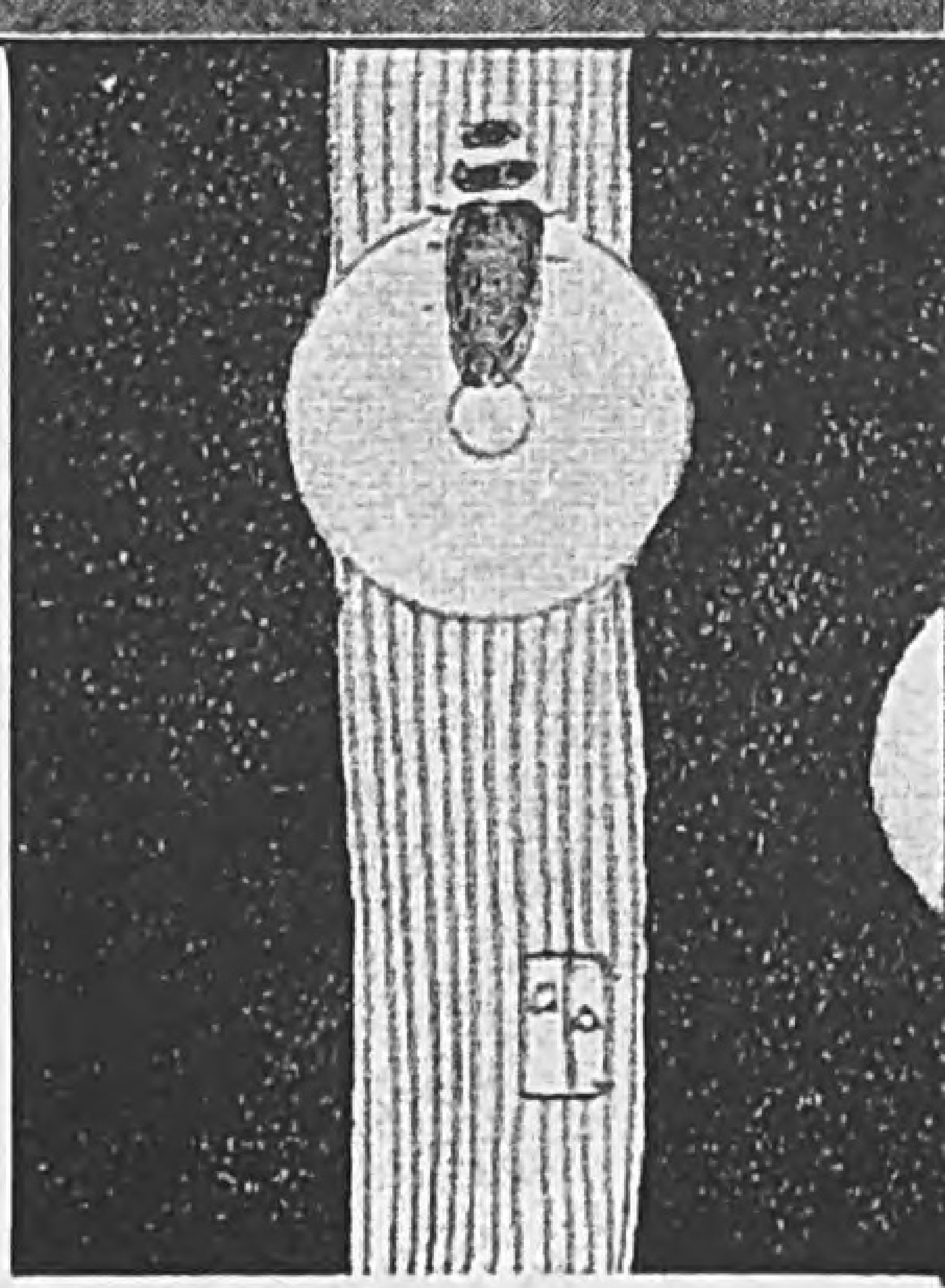




子爵阿部正功氏令嬢要子



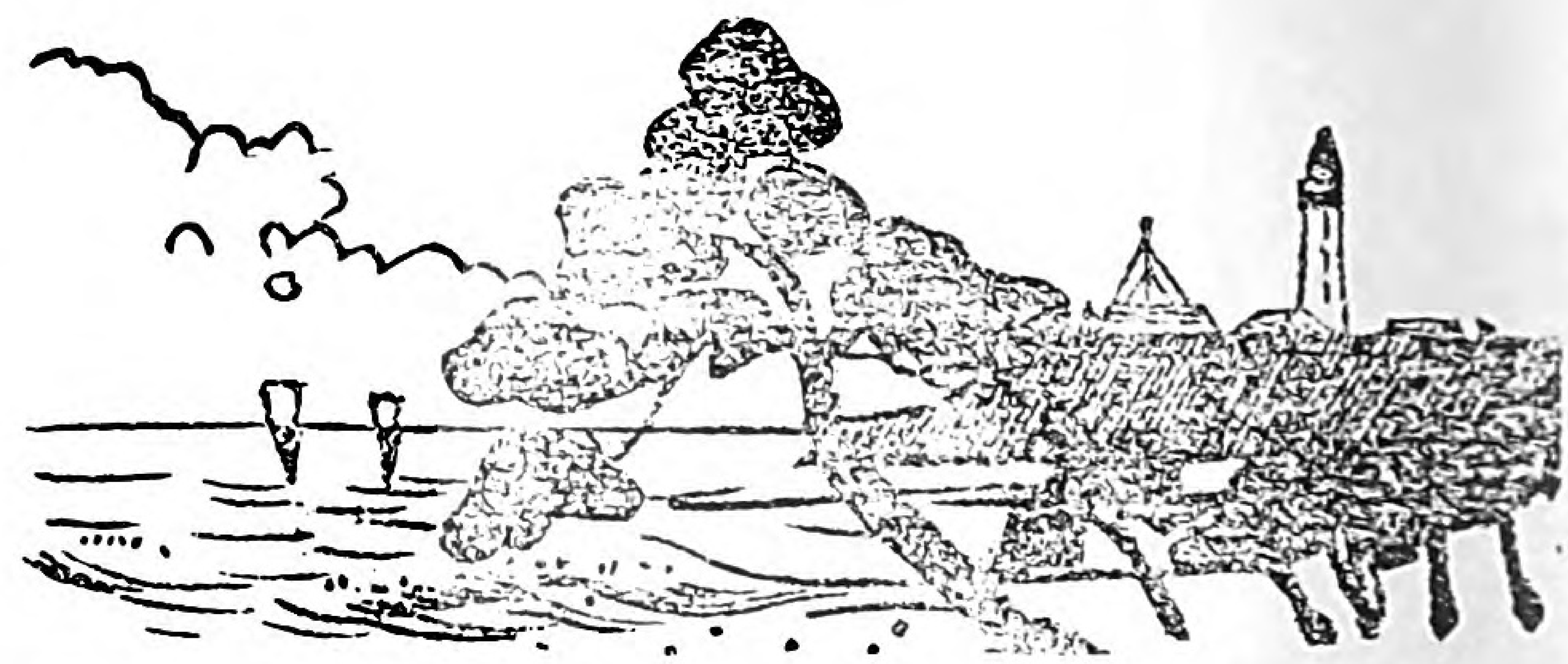
伯爵徳川達孝氏令嬢繍子



銚子は 犬吠岬と 磯の濱 と紫

山十印

最上醤油



醸造元 千葉縣銚子港 岩崎重次郎 （電話銚子三〇番 振替口座五七二番）

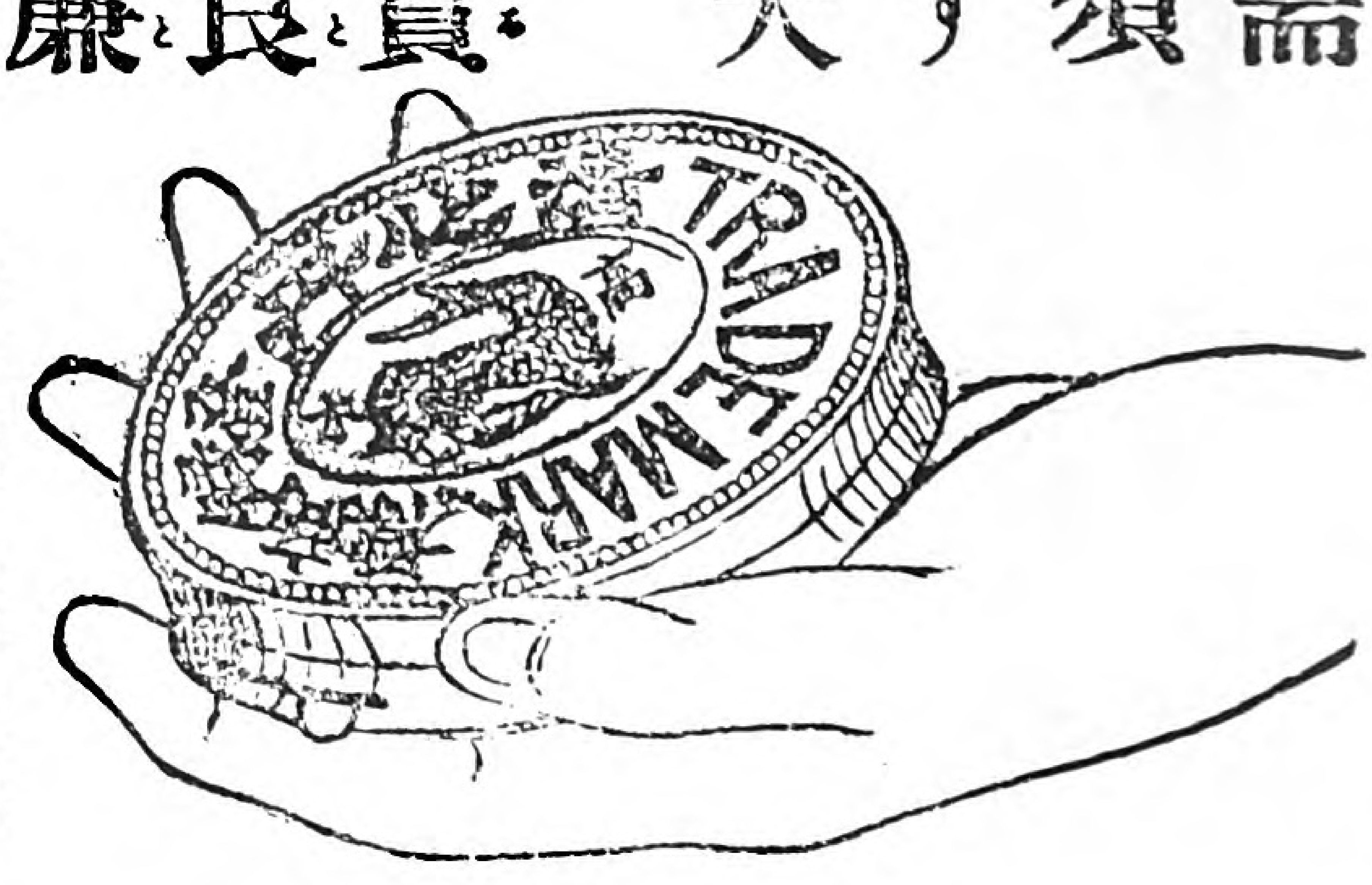
人若し藥を需めんとせば須く選擇を要す

清心丹の三大特色は

一効能の確實

二品質の善良

三價格の低廉



主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過飲過食、惡心嘔吐、溜飲宿食、中暑中寒、下り痢疝痢、舟車不快、咯痰咳嗽、咽喉不調、齒痛口臭、

定價（壹圓箱入 五拾錢箱入 參拾錢罐入 拾五錢罐入 拾貳錢瓶入 貳拾錢紙包 拾錢紙包 五錢紙包）

本舗 東京市日本橋區元大坂町八番地 高木與兵衛

○化學療法研究所發見○

生殖器陰萎病

最新發見
特効新劑

本劑○ルブナールは最新式化學に依り發見せられ○幾多の研究と實驗に依り効能を確め得たる唯一の生殖器新劑なり、本劑の特効は男女手淫、過淫の害より起る陰萎症並びに勃起力衰弱○精神性陰萎○衰弱性陰萎○老衰陰萎○神經衰弱症○萎縮○早漏○夢精○遺精種々の原因より來る發育不全○快美減少根氣元氣の衰弱等に對して偉大なる卓効を奏す。該病患者は最後の試藥として本劑二十日分或は一ヶ月分を試みよ。忽ち元氣旺盛身體及び生殖器共肥滿強壯となり人生最大の快樂を全ふする事を得べし

（藥物ルブナール價）

拾日分 金壹圓貳拾錢　貳拾日分 金貳圓貳拾錢
壹ヶ月分 金參圓也　貳ヶ月分 金五圓五拾錢
（送料各拾貳錢）

（山師的の廣告と同一視するなかれ）

最新發見 わきが必治法

藥物攝生 對症療法

元來わきが症なるは難治の慢性症にて未だ該療法の完全したるなし。當所如何にしても本症の全治法を發見なさんと最新化學を應用し多年研究に研究を重ねし結果漸やく完成せるを以て該病患者數百人に實驗せし處殆んど百發百中の好成績を收め得たり、豈に當所の光榮たらんや、該病にて困難の諸彦は最後の試驗として本療法方を試みられよ。

本療法僅かにして根本的に苦惱を去り得べし以て天賦の幸福を全ふせられん事を。詳細なる使用法、攝生法等は現品に添付す

（販賣定價）

輕症用 一人分 一圓五十錢
重症用 一人分 二圓五十錢　送料各八錢
慢性症用 一人分 五圓五十錢

化學療法研究所
東京下谷區御徒町一ノ九　安崇製藥部　振替東京九八四八番

學生諸君へ急告!!

▲學生諸氏が研學に際し多大の時間と腦力を費して最も困難を感ぜらるゝは暗記物の問題なり▲之等の暗記物に苦しまるゝ方は宜しく速に本會の新式記憶術を利用せらるべし▲新式記憶術は手品應術の如き類にあらず心理應用精妙無限の新案にして本術を應用すれば何程困難なる問題にても默讀一過直ちに且つ永久に之を記憶するを得べし▲而して本術の應用には何等の設備を要せざるを以て車中途上の別なく零碎なる時間を利用して多大の有益なる事項を記憶するを得べし▲本術の講習希望者には速成通信教授の方法により講義錄を頒布して短期間を以て確實に習得せしむ、會費卒業迄金壹圓貳拾錢とす▲本會講義錄には參考として古今の記憶術を述べ更に新式記憶術の原理原則より說き起し數學、外國語、法律、地理、歷史及び其他の諸學科に對する夫々特種の記憶術を詳說し更に各種業務用記憶術、娛樂的記憶術等數十項に亘りて懇切明細に說述す▲而して本術には何人にても容易に習得し得ること、實地に應用して偉効を奏し得ること、練習を要せずして直に應用し得ること、の三大特色を有し實用に適せざる理論一片のものとは全く其趣を異にす。

實務家諸君へ急告

▲事務の敏活を計らんとする實務家諸君は宜しく速に本術を利用せらるべし▲本術は學生の爲に最大なる福音なると共に實務家に對しては更に有用なる利器たるべし▲商品價格、電話番號地名人名等の記憶其他萬般の事物の記憶に本術を應用すれば諸君は今後更に手帳（備忘錄）を要せざるに至るべし。

青年子女へ急告!!

▲一般の青年子女諸君は宜しく速に破天荒の新案たる本術を利用して精神的偉効を收められよ▲成功の捷徑は偉大なる記憶力を養成するにあり。

○實驗報告及詳細說明書は此雜誌名記入の上申込あれ無料送呈す

大阪市西區新町北通一丁目三十四番地
大阪記憶學會



未來の立身を望む者は必ず見よ

催眠術通信教授

説明書無代進呈

不可思議なる幽理と靈怪學の幻術とを應用せるが如き方法にて我が心の儘に人々の身心を統御し得ると云ふことは、如何なる事業に於ても成功の捷徑である。諸子よ冷靜なる頭腦を以て、立身成功家の過去の行程を考へらるゝの時、吾人の斷定の僞で無いことをいなみ難いであらう。催眠術及心力波及術はこれが法則を研究する科學であつて單に人を眠らしむるに止まる術ではない。これを應用して疾病を治療し惡癖を矯正し得るは今や確固なる事實であつて進んでこの原理を應用し處生上大なる利益を得るは實に理の當然である斯術は正則完全なる本會の通信教授法により、僅少の學費と日時とを以て確實に習得する事を得べし斯術の説明及實驗、本會々則等を詳述せる書冊は、葉書にて申込次第送呈すべし

大阪市東區生玉町

帝國神秘會

一輪の薔薇



小川一雄氏夫人豐子

みづいろ



男爵三井八郎右衛門氏令孃のり子

男爵住友吉右衛門氏令孃孝子

獨逸國新發明
家庭用シユミ拔劑

ファーノメン

獨逸ハンブルグ、ジアウグ、エングバー會社特製



◉家庭用シユミ拔劑「ファーノメン」は現に獨逸國に於ては一般家庭に缺くべからざる重寶品となつて居りますから實に其需用高と云ふものは頗る廣大なるもので有ます、弊商會は多年海外各種輸入品の日本一手特約を致して居りますが「ファーノメン」の如き斯んな重寶便利な家庭用シユミ拔劑は又と世界にありません、まだ日本では「ファーノメン」の發賣日尚淺く實地にお使用の方も尠なく從て御存じの方も多くは有りませんから弊商會は「ファーノメン」がシユミ拔劑として全く空前の良品なることを一般家庭に御推擧の價値あるものと認めまして玆に御披露いたします。

本品の効能

和洋服の襟アカ、酒、醬油、和洋食の汁、アセ、其他油類一切のシユミは輕便に且つ完全にとれる煉白粉やうの品です是非一度使つて御覽全く驚き升よ。

大阪市北區老松町一丁目

電話東二九六四番
振替大阪一七九八〇番

日本一手發賣元 長南商會

東京神田大通鍋町
電話本局一八一八番

關東代理店 大木合名會社

有名なる賣藥化粧品小間物呉服店にあり

定價金卅五錢　送料八錢

●少年少女達の家庭最良讀物

佐々木邦氏作 好評

二人やんちやん

再版

▼中判美裝 武田壽氏石版彩色畫 木版色刷挿畫六葉入 正價金參拾五錢 送料金六錢

いたづら小僧日記で有名の、佐々木邦先生の作ですから、大人にも小供にも面白いことと請合の書物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも爭ふて購求され。此頃の好著として、持て囃されて居ります。（諸新聞好評あり）

出版元 東京 京橋區大鋸町十一 振替東京壹七貳九 女子文壇社

どこの本屋でも取次販賣して居ます

女子文壇叢書

（第壹編）

水野葉舟先生序
前島優梨子作

大好評 初版將に盡んとす

小說 町むすめ

溫順珠の如き女の心を持ちて女の生活を描寫したる完全無垢の短篇小說集

全一冊 寸珍 二百七十頁 作者寫眞入 正價參拾錢 送料金四錢

（第貳編）

河井醉茗先生序
山田邦枝子著

好評如湧 初版將に賣切れんとす

姿見日記

舊い世界から新しい世界へ出やうとして水火の中をも辭せざる新らしい女の血あり淚ある叫びを聞け

全一冊 寸珍 三百餘頁 著者寫眞入 正價參拾五錢 送料金四錢

東京市京橋區大鋸町十二番地
女子文壇社出版
（振替口座 東京一七二九）
全國書店取次販賣

白樺叢書

有島生馬著及挿畫　島崎藤村序

蝙蝠の如く

裝幀優美箱入
紙數四百頁及挿畫
定價金壹圓　送料八錢

王國から都會へ、畫室から街頭へ、その樣に人から人へ旅した間に著者の豊かな心が汲み取つた材料で、畫布の上にも現はれなかつたものまで、玆に索る事が出來る。佛國北方のボーヂュの森や、ベニスの水の都や、羅馬郊外の化物屋敷や、瑞西の避暑地や、伊太利の山村で、讀者は森林官や、狂はしい畫家や、美しき女優や、大ペスタロッチの子孫や、興行師の群に入り世界を流浪せる日本の孤兒と會する事も出來る、旅先での三枚のスケッチは更に本書に興を添へやう。

挿畫　葡萄棚の露臺、材木、ヴン・ボッツェト

武者小路實篤君

世間知らず

定價八拾錢
送料八錢

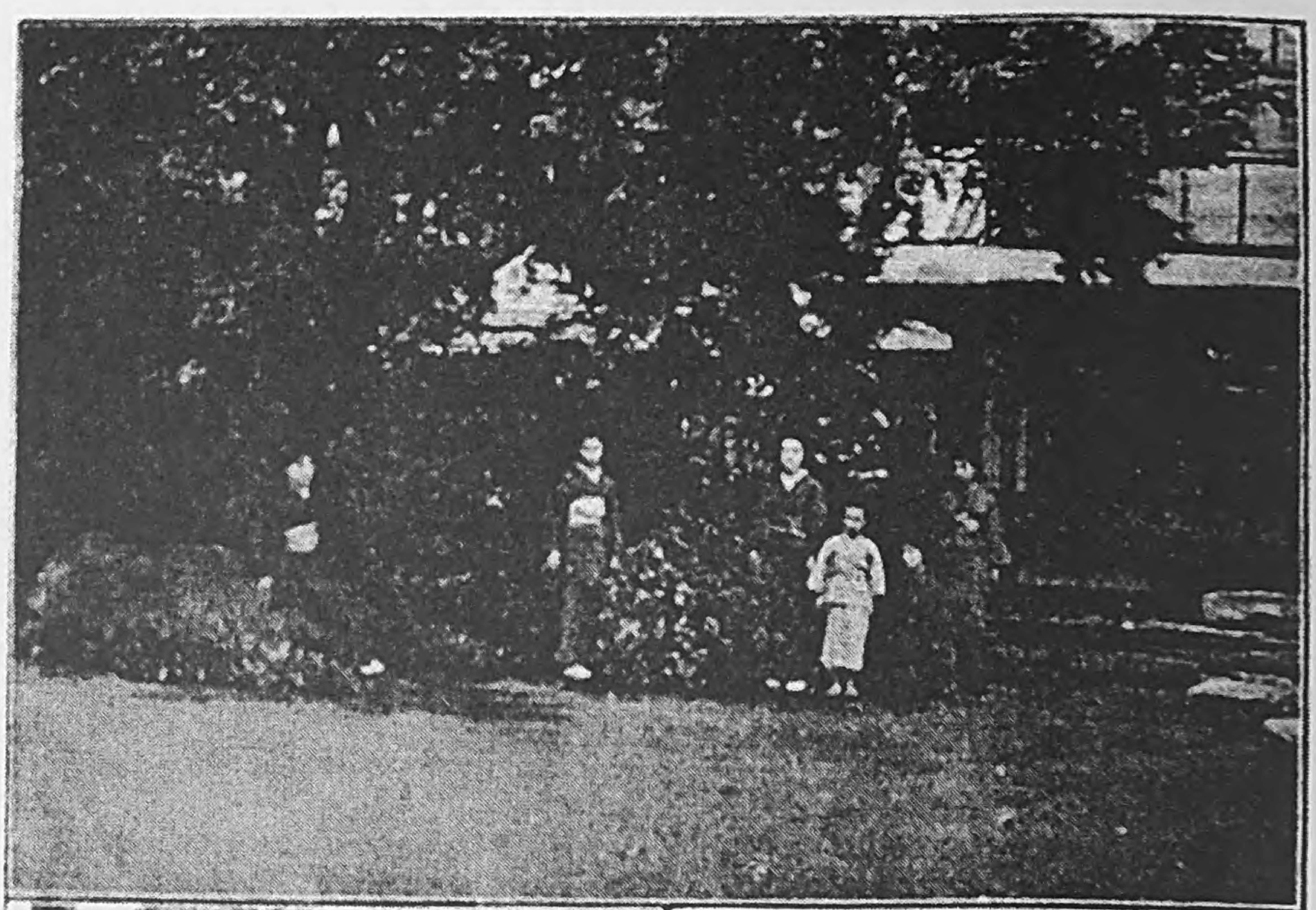
志賀直哉著

留女

定價壹圓
送料八錢

發行所　東京麴町二丁目二　振替東京二〇九一四　洛陽堂　電話番町二四五八

郊外の邸宅



園博士邸の奥座敷



仝上小庭より奥庭へ



仝上應接室

瀧しぶき



（伊豆湯河原不動の瀧）

新文林

第一巻第八號　（七月號要目）　定價拾錢郵税壹錢

發行所　東京神田今川小路　忠誠堂　振替東京二〇四三一番　電話本局四九六六番

前號發賣禁止　七月號　大飛躍を見よ

面白い浮世の娯樂恐しい社會の裏面

う

探偵實話「新潟の悲劇」
諸國花柳通信
昔は强盗今は牧師
電車釣淫賣の實例
麹町山本家の秘密
女子大學卒業の女髪結
八王子の奇人

其他『演藝欄』は辛辣なる批評と評論に滿され『浮くらぶ欄』は全國各地方に亘る美談佳話醜聞惡行の記事を以て埋められ『讀者文藝欄』亦大に振ひ外に大懸賞募集あり、而して全記事總べて事實にして一つの虚構なく一々現場寫眞・挿入しあるは既に定評ある本誌獨特の特色なり

最近柳橋藝者戸籍調
街頭に歌を賣る孝女
苦學生を裝へる色魔
破鏡を泣く薄命美人

き

近代劇協會の艶聞
女醫學校長の珍家庭
顛倒不如歸
萬龍盛衰記

日本橋區役所内の暗闘
暈染般若物語
高尾山上の狂人窟
土井子爵の愛妾
御滿足の沖男爵
醫師か黄金魔か
逗子の海を汚す艶魔

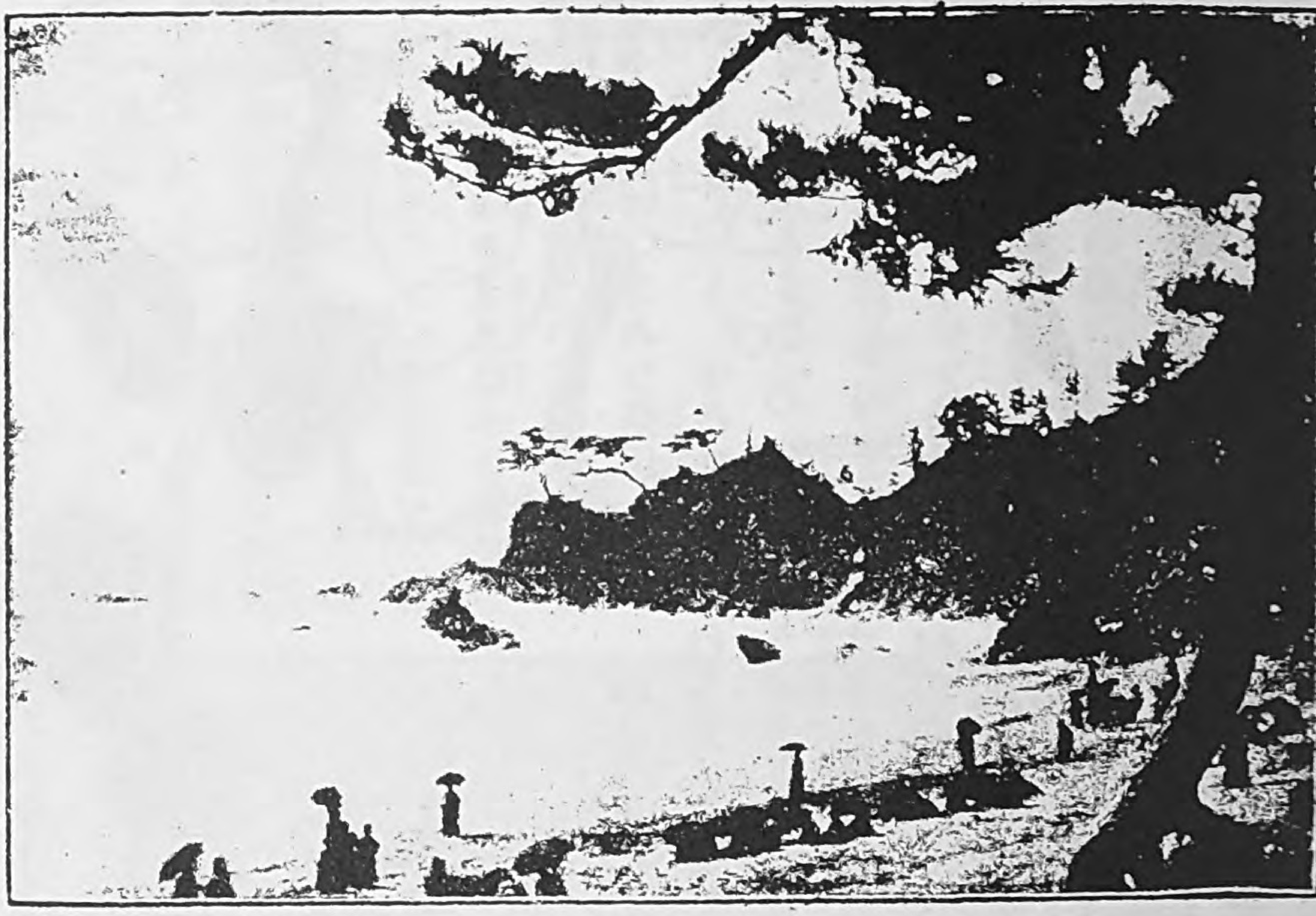
東京花柳界探險記
詐僞に等しき露店師内幕
學生のカンニング手段
藝者に勝る濱町の女
早稻田の新風聞
横濱の南京蕎麥屋内幕
大阪の怪談と仙臺の怪談

よ

本誌獨特記事悉く現狀鮮麗の寫眞挿入

定價　一册送料共金拾壹錢　半年分前金六拾參錢

東京市京橋大鋸町　振替二四三七九番　樂文社發行　（電話京橋六〇七番）　賣捌全國各地書店



第九年第九號

女子文壇

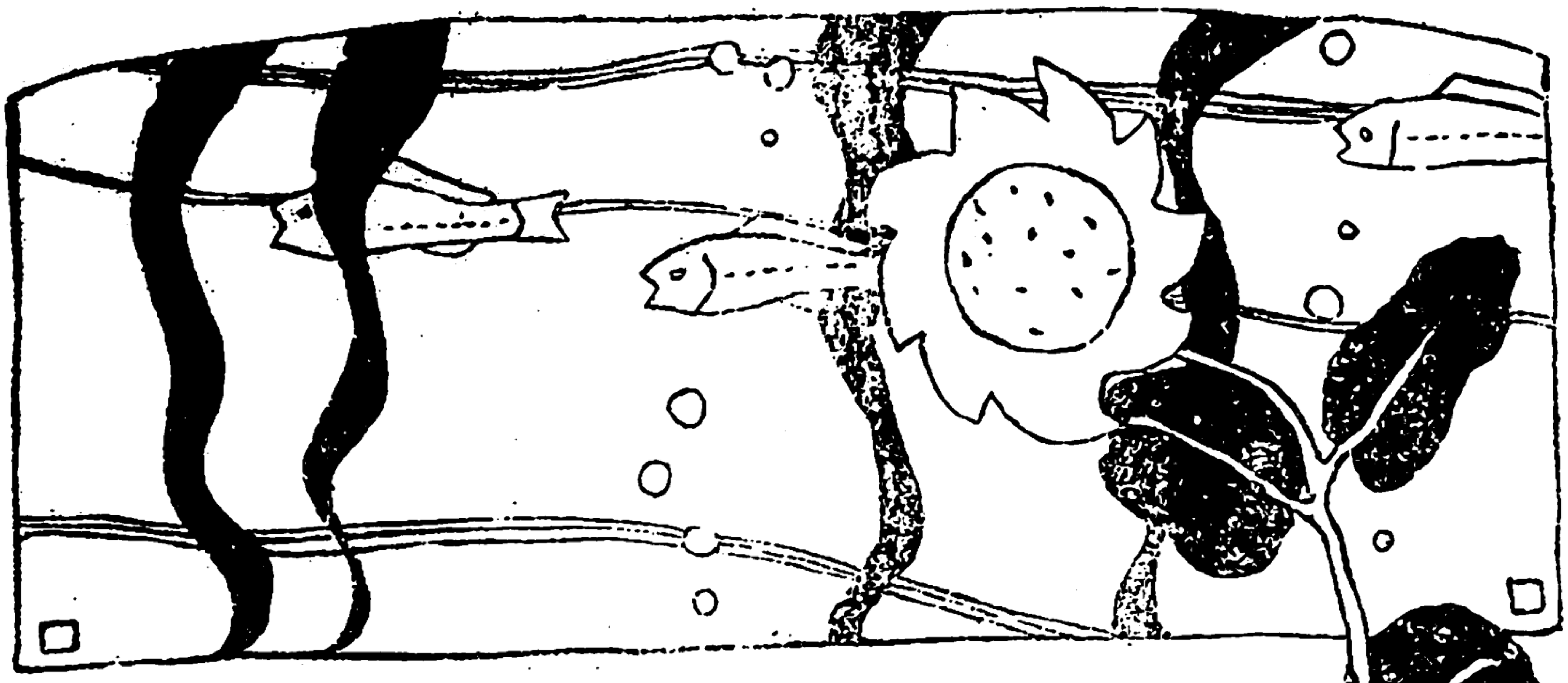
七月號

山より海へ

山より降りて來て海を見た時には、海の大きさに驚かぬものはあるまい。

峰また峰の重なり合つた山ふところに入つてしまふと、周圍から恐ろしい力に壓迫されるやうで、其靜寂しい悲哀に堪へ得られなくなるであらう。斯くて山の裾を幾廻り越え〳〵て、漸く山が開かれて來る時に、山の切目から遙に透明な天を見て、其下には海があるだらうと思ふ時、何んなにか魂は躍るであらう山のはづれから青い〳〵海の色を見た時に、心は美しく覺めるであらう。

山から降りて來たものは、ひろ〳〵と自由に動いてゐる海の岸に立つて、歡樂と、憧憬に胸は海よりも高く波打つであらう。



婦人研究（つゞき）

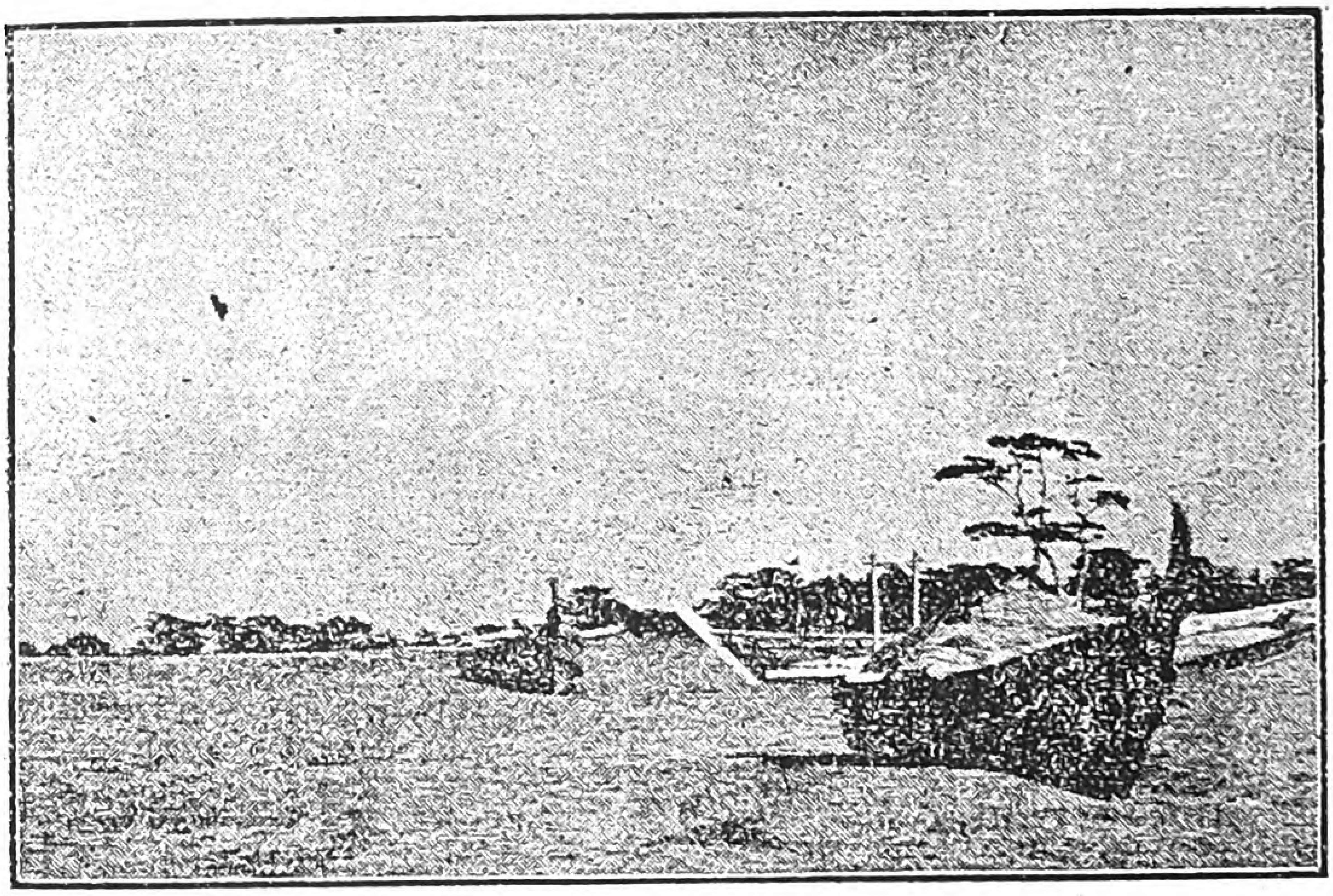
菊池幽芳

婦人が男子に對し隷屬的關係に甘んずるやうになつたのは、歷史あつて以來の事實であるが、併し有史以前に遡つて見れば、必らずしもさうでは無つたやうである。否多くの傳說や人類史家などの研究によると、却つて婦人が社會に主要の地位を占めて居るやうに思はれる。日本でも上代においては却つて婦人が活動をして居つた。これは世界を通じて同じ事で、古代に遡ると社會の表面に表はれて活動をした婦人はなか〳〵多い。社會の秩序が立ち、分業といふやうなものが多く行はるゝに至つて、今日のやうな男女關係が生れて來たのである。

キップリングが原始時代の社會を想像して、そのころの男は野獸と何の選ぶところがなく、魚や獸を獵つて歩くだけ、行きあたりばつたりに寢起して家と

いふ觀念は無つた。かういふ狀態の間に理想の生活を夢み出し男に對する最初の訓練をなしたのは女で、まづ乾いた洞穴を見つけて、奇麗な砂を敷き、その奧に火を焚いた。穴の入口には馬の革を乾したのを尻尾を下にして吊つて體裁を作つた、そして男に向つていふには「足を拭いてお入りなさい、私達は家を作りませう」と。かういふ風に書いて居るが、これは決してキップリングの空想とのみは思はれない。野獸の如き男を始めて訓練したのは女であつたに相違ない。人類史家の所謂マトリアルカーの時代は、乃ち女が男を訓練した時代である。マトリアルカーといふ詞は母の主權を意味するので、母が一家の最上權を有して居つた時代を指すのである。その遺風の存して居るところが今日でも、北米ロッキー山の中の二三部落に、南米のアロワーク、リーラン、マキユシユスといふやうな部落民の間に、また南部亞非利加の黑人ダマラス人、ベギユアナ人、中部ザンベシ人、亞細亞へ來るとポリネシアやニユージーランド人の間にあるといふ事である。

この時代の次に表はれた半は傳說的時代にアマゾニスムといふのがある。卽ち女戰士の義で、女が一家の主權を握つて居つた結果、だん〳〵專横になり、男子を壓迫するだけでは承知が出來ず、バビルンを建設したセミラミスの如くシーザーやアントニーを捕虜にしたクレオパトラの如く、世界を征服せずんば止まざらんとした。傳說に表はれた女王ま



富士裾野の松原


朝の讀書

たは女英雄の數は夥しいほどある、そのころの希臘の勇士といふものはヘルキユール、テーゼー、デオニゾスなどを始め皆アマゾニスム卽ち婦人に對する勝利者である。かういふ勇士等が男性的道理を宣言して婦人を奴隷とするに至つたので、男子專制の時代はかくて來り、以て今日に及んだといふ譯である。

この男子專制時代が二千年も續いて居たとすると、婦人が今日男女の關係を一變しやうとして覺醒の叫びを發したのは、寧ろ遲いと云つてもいゝ位で、私はその潜伏期が長かつたゞけ、それだけ婦人の新運動には無限の潜勢力があるものと觀察して、遂にその目的を達する日ある事を疑はない一人である。そこで私は前號には今日の婦人の新要求に對し、果してそれを要求する資格の有りや無しやを研究するため三個の觀察點を擧げ、生理的觀察と心理的觀察を試みた譯であつたが、次には社會的觀察に就てお話したいと思ふ。

▲社會的觀察

今日の婦人は從來女の有しなかつたいろ〱の權利を要求して居るのであるが、彼等の要求の一部が社會的に容れられた實跡について少しく觀察して見ると、實に思ひ半ばに過るものがあるのである。こゝに婦人に對し、公職に就く事を認め、若くは政治上の權利を與へて居る國々の實例を擧げて見たいと思ふ。

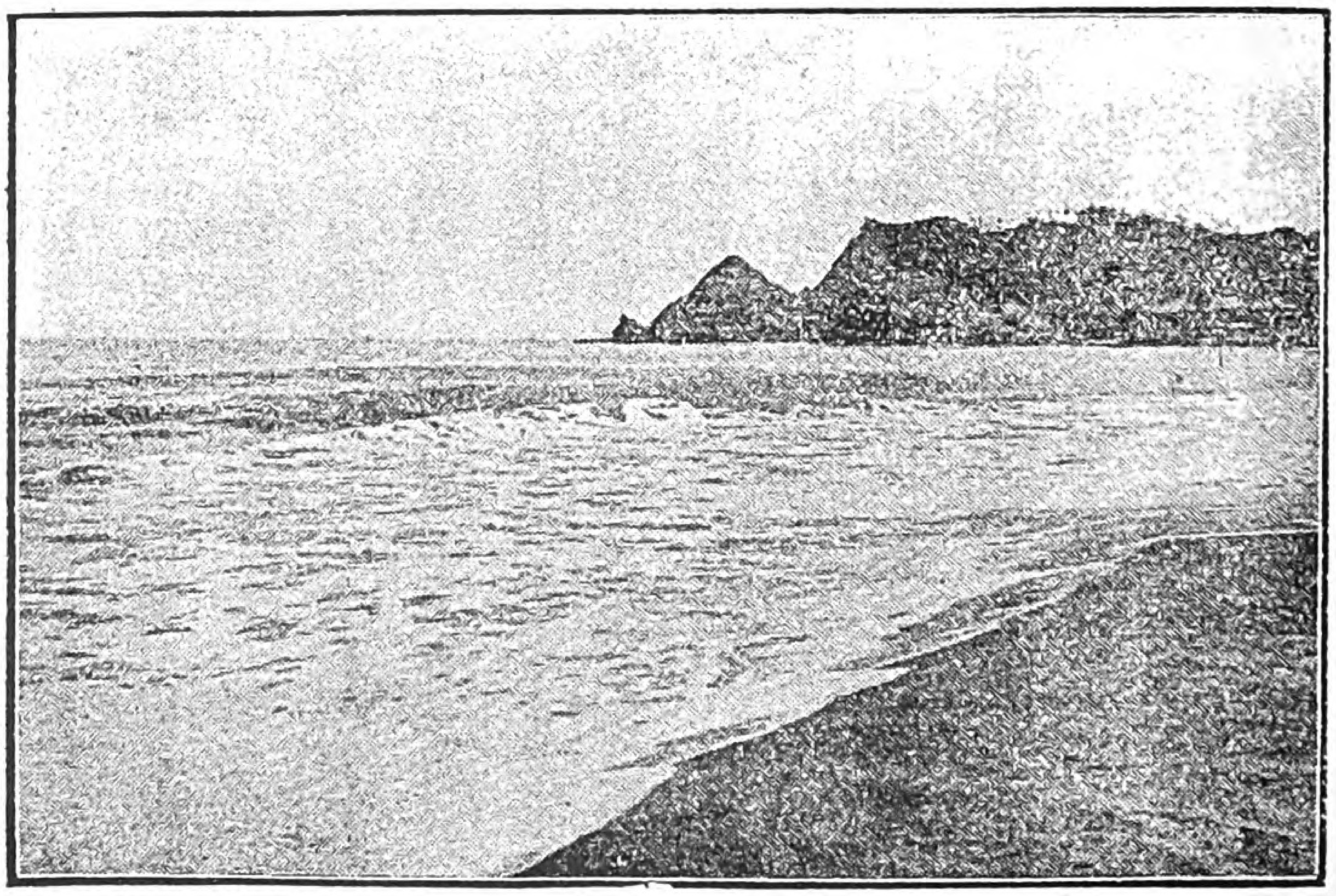
かの英國では御承知の通りサフラジエツトといふ女

權論者が放火、爆發等あらゆる狂暴の手段を繞らして政權を與へよと叫んで居るのであるが、婦人に政治上の權利を與へて居るところは、歐羅巴にはあまり無いが、既に或種の權利は與へられてあるので、日本の婦人が此種の何等の權利を持つて居ないのと同日の談ではない。

瑞典では婦人が歐羅巴で一番早く市町村議員の選擧權被選權を持つて居り、現在は五つの都市に十一人の市會議員を出して居る。昨年の議會には國會議員の選擧、被選兩權を婦人に與ふるの議案が皇帝より提出され、下院は通過したが上院で否決された。諾威では更に進んで國會の選擧權迄有する事になつて居る。芬蘭では選擧被選兩權を併せ有する。その外には參政權を與へて居るところはないが、併し市町村會議員などの公職につく位迄は大抵の文明國では許されて居る。英國でも市町村會議員の選擧權と被選權は女が持つて居るのである。

米國になると各州によつて違ふが、カリフオルニアコルラド、アイダホ、ウター、ワシントン、ワイオミング等の諸州では議會の選擧、被選兩權を婦人に與へて居る。

さて女子に多くの權利を與へて居るその結果がどうであるかといふに、諾威、の社會狀態は近年著しく改善され、家庭などの模樣が、歐羅巴の他の諸國よりも善くなつたといふ事が説かれ、そして



上總大東岬

その原因を婦人の自覺に歸して居るのである。また芬蘭では五年以來議會の被選權を女子に與へ、現在二十五名の女子國會議員を有して居る位であるが、その社會狀態は大變に改善された、その實例として小兒と若き女子を保護する二三の法律が出來、産婦の保護法も制定され、女子職工の保護やら、私生兒に對する誤れる慣習の改善、アルコールの禁止といふやうな社會改良に必要なさまぐの機關やら法律が女子の手によつて實現を見るに至つた。殊に著しく改善されたのは女子の勞働の有様で、今迄のやうに無法の安い賃金で衞生の設備の不完全なところで、過度に勞働せしめられるといふ歐洲諸國を通じての弊害、所謂スヰーチングシステムなるものが地を拂ふに至つたのである。

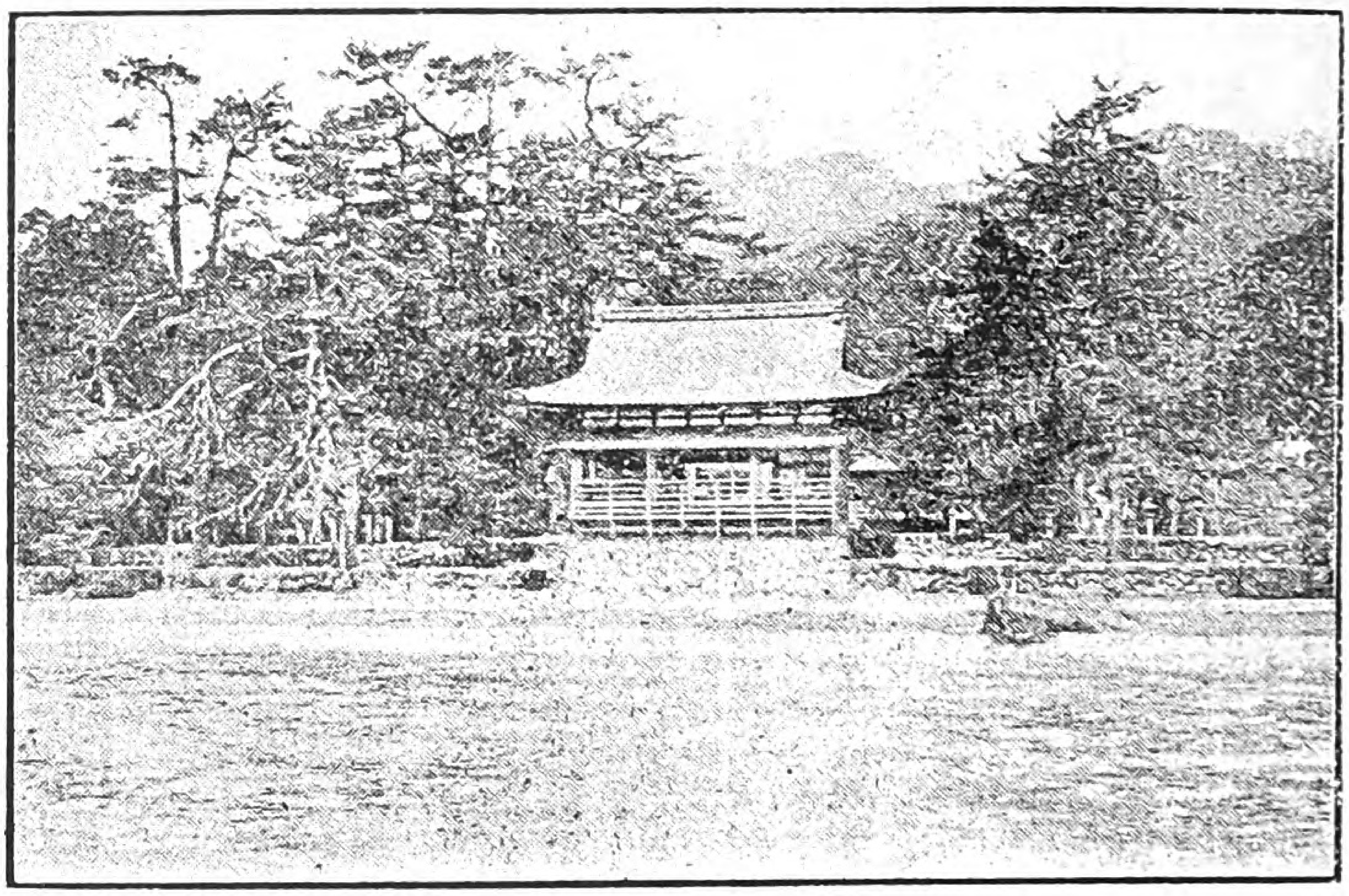
また亞米利加においては、前記女子の參政權を許した諸州では、所謂政商といふものが跡を絶ち、アルコールの禁止が到るところに行はれ、勞働者の家庭が非常に改善された。ワイオミングの一市では曩に女の市長を選んだが、この女市長は就任の翌日、全市の酒舖に閉鎖を命じた、女市長はそのために大なる迫害を被つたのであるが、毅然として迫害を冷眼視して居る中三箇月たつと市に泥醉者を見ず、犯罪の數が頓に減じ反對を唱へた市民までが女市長を謳歌するに至つた。

それからこゝに婦人に參政權を與ふる事が離婚減少の原因になつたといふ意想外の例さへあるのである。前記のワイオミングでは婦人が參政權を得ぬ以前に比べると、今日では離婚數が七プロセント半に減じた。また十五年來女子が參政權を有するニユージーランドでもそれ以前に比し、離婚數が矢張七プロセントに減じた。そこでこれを解釋するものは、婦人の公生涯に入る事は、家庭の葛藤のやうな小問題に齷齪たらしめざる、一の緩和劑である。全體人間といふものは主人に對しては反抗するが、同等の人には反抗しない、それ故男女全然同等の權利を有つ事になれば、決して反抗の態度を取る事がないから、つまり離婚沙汰などが少なくなるのであると。穿ち過て居るやうではあるがそこにまた一つの爭ふべからざる眞理もあると思ふ。

先達倫敦タイムス其他の大新聞の持主ノースクリッフ卿が演説して、英國では多數の女新聞記者が出來て以來、大英國新聞記者は大變に上品になり、その地位の向上を見たと云つたが、これも面白い見方であると思ふ。

由來歐洲には、その國の文明の度が高いほど婦人は自由で、婦人が自由であるほど一國の文明は高いといふ傳説があるが、人類の進歩といふ着眼點から觀察して、私はこの傳説の誤りなき事を思ふものである。婦人の新要求が必らずしも無理ではない以上、また婦人が生理的に心理的に男子に比して一長一短、互に優劣なしと制定するの正當なるを思ふ時、男子的意地を立てたり、反抗的態度を取つたりするには及ぶまいと思ふ。女には女の本領があつて、家庭を守る事は女の本分でもあり、また家庭が女の避難所である以上女が家庭を忘れるといふ事は到底あり得べからざる事である。

決して家庭を離れてはいけない賢母良妻とならなければならんと束縛を加へたり制限したりしやうとするから、そこに反抗が起るのである。若し今日の男子が眞に婦人の意志を尊重し、人として、發達を遂げしむる事を助長したならば、婦人はその天性として男子の好伴侶となり、眞の社會改善が、そこに始めて行はれるといふのである。――(完)――



敦賀常宮神社

朝露に汚れて涼し瓜の泥　芭蕉

夕涼み能くぞ男に生れける　其角

維新前後の婦人の氣象

山路愛山

明治の敎育を受けるやうになつてからの薩長の婦人はどうなつたか知らないが、まだ五十年そこ〳〵であるから、それ程以前の風を變へてはをるまいと思はれる。

維新の頃の薩長の女は槪して剛健で、質素で、尙武の氣風が盛んであつた。鄕士などの娘でも、百姓の娘と變らずよく働き、柔弱なところなどは少しも無かつた。婦人が一般に强かつたので、其間に育つた子供も自ら强い士風を養成せられた事は云ふまでもない。

明治九年頃であつた、私の生國の靜岡へ、大迫定淸と云ふ人が權令となつて來て居つた、此の大迫定淸と云ふ人は薩摩の人であつて今の大迫男爵の親であつた其の當時の權令は今の知事であるが、其の權令の威張つた事は今の知事の比ではない、ちやうど殿樣と云ふやうな風であつた。その權令の大迫定淸が家に歸ると旦那も奥樣も一緒になつて、そこらの百姓と同じやうに働かれた。

その頃靜岡には維新に負けた舊幕臣が多く集つて居た、其の家封に離れた武家人が習はぬ商法を始て損をするものが多く遂には乞食同樣になつたものもあつたそのやうに困つた人が多かつたが、其の妻女は矢張袖を長くして日を暮し甲斐々々しく臺所に働くと云ふ事はしなかつた、然るに勝つた薩摩人で權令とも云はれる人が、質素で剛健で、お百姓をしたりするのを見るといかにも之れでは此の强い薩摩の人達に負けた筈だと思つた事があつた。

もつとも靜岡に逃げて來た舊幕臣の妻女にも偉い人はあつた。田口卯吉の姉の木村とう子と云ふ婦人などは自分の子を眠らせるのに唐詩選を子守唄にしたと云ふ逸話がある位で、筆耕をして生活の助けにしたやう

な偉い人であつたが、それは失意難境に處してや丶振つた人で、鹿兒島人のやうに得意順境にあつて、質素に、勤勉であつたのは一層偉い。何時の世にも、國が盛えるには女が強い。

長州は一々聞いて見ないが、矢張女は強かつたやうである。長州の豪傑の母に長井雅樂子と云ふ婦人があつた、此の人の夫は長州の立派な政事家であつたが、早く死んで雅樂子は自分一人の手でその子を育てた。此の雅樂子が子供の馬術の稽古を監督するのに、馬の汗が白くなつて出て居ないと承知をしない、厩の掃除等は必ず手づからさせる事にしてあつた。さう云ふ母をもつてゐたから其の子供も亦立派な人となつた。

此れに反して幕府の人々の妻女は實に柔弱なものであつた。お鳥目などゝ云つて金はけがらはしいと云つて表にはいやしんで腹の中では慾ばつてゐたが、錢勘定は知らぬ方がいゝなどゝ云つた。少しいゝ家では女中など澤山つかつて、女中の多いのを誇つて居た、長い袖の着物を着て愚圖々々して一日を送り、男に對して何の足しにもならなかつた。行儀といつてもあまりよくない。

薩摩と長州との軍が江戸に攻め入つた時、薩長で一番困つたのは幕府の彰義隊でもなく、其の陸軍でもない、幕臣の娘に士風を腐敗させられる事を恐れたので西鄕なども是れを痛く心配したやうである。

土佐なども維新の時、鄕士の中で勤王を唱へたものが多い、勿論その中には女で士氣を鼓舞するものもあつた。

薩摩の婦人に名の現れた人をあげると、幕府の十三代將軍家定の奥方に天璋院篤子樣と云ふ方があつた。此の方は薩摩の別家の娘で、本家の娘として幕府にお入嫁になつた、これは恐ろしく大きな婦人で、學問もあり申分のない方であつた、其の前に高臺院樣と云つて將軍家齊の御臺所は、これも薩摩の島津重豪と云ふ方の娘であつた。淑德のあつた婦人で、家齊公は子供の多い方で四十何人と云ふ數であつたが、いづれも生みの子の如く愛せられたので、非常に子供方が慕はれたと傳へられてゐる。薩摩から來た將軍の御臺所は皆えらいやうである。

意志と智慧と美と力

與謝野寛

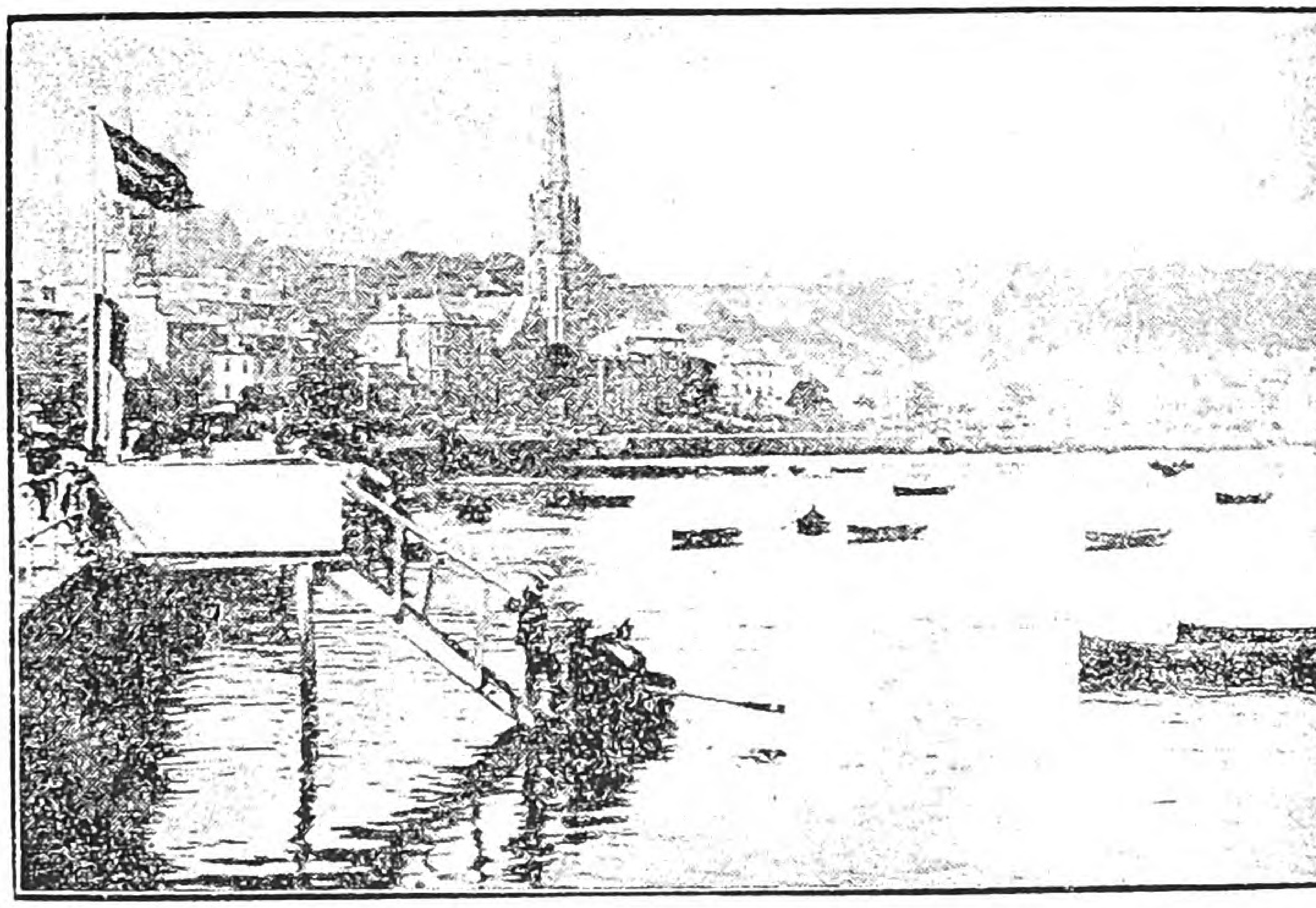
日本の男は誰も初物好でありながら、偶ま少數の新しい女と自稱する者が出て來たのを見て、白晝に妖怪でも現れた樣に驚いたり冷笑したり、更に其れを壓へ附けやうとしたりするのは滑稽だ。さう云ふ連中に「お前達は皆古い男か」と反問して遣つたら屹度厭な顏をするだらう。自分達は何れも一見識ある當代の新しい男の積で居ながら、女丈は永久古い女の埒内に封じて置かうと云ふのは餘りに身勝手な量見だ。新しい女とは在來の女に對して云ふ計でなく、さう云ふ古い量見の男に對して挑戰する新しいアマゾン軍を云ふのである。

男の側では役に立たない舊慣に囚れて漫然と毛嫌する丈で、そんな女の發生せずには置かぬ理由に何等の眞面目な考察も經て居ないが、女の方では微弱ながらも新しい生活を切開かうとする內心の自覺的要求がある。勿論新しがつて居る女の書いた物などを讀むと大抵齒の浮く樣な半可通計で、英國や佛蘭西の樣な新しい婦人の程度に達する事は未だ何時の日だか解らないが、そんな齒の浮く樣な意見でも從來の奧樣やお孃さんには書き得なかつたものだ。以前なら芋を洗つたり洗濯をしたりする丈で一生を奴隷的に終つた女が、曲りなりにも文章を書いて、人らしい充實した新生活を要求し出したのは、其丈日本の女が進步したのである予は只管其れを歡迎する。予は社會生活の上に一人でも役に立つ相手が欲しいのであるから、弱者の位地に久しく屈して居た女迄が、文運普及の餘德で人並の自覺を初め出し、大膽にも男子と手を執つて協同生活の相手に成らう、競爭者に成らうとするのは賴しい事

だと思ふ。
併し新しい女に對して、もつと根柢のある力強い批難や壓迫が盛に起らねばいけない。新聞の三面記事や座談の材料として冗戯半分に男子側から取扱はれて居る間は駄目だ。眞面目に全社會の問題に上る樣に成らなければ、日本の新しい女も憂ふるに足らない。今の内に少し壓迫を加へて見るがいゝ、眞に根強い實力を有つた運動なら益々壓迫に刺激せられて發達する筈だが、今の樣な微弱な新しい女の程度に止るなら、譯もなく多少の壓迫位で退散して仕舞ふに決つてる。



また女の方も壓迫が怖くて泣寢入になる樣なら眞のアマゾン軍とは云はれまい。予は羅馬やナポリの美術館で多くのアマゾンの石像を觀て、意志と智慧と美と力とを備へた斯んな立派な體質の女が今も居たら、大抵の男は其下風に立たねば成るまいと思つて、つくづく其れに見惚れざるを得なかつた。其れと同時に聯想されたのは、英國の女學生其他一般に英國の若い女の容貌が、概して怜悧な中に凜として侵し難い威容を備へ、如何にも内心に自ら恃む底力を有つて居相に見え



英國ニユーカツスル港

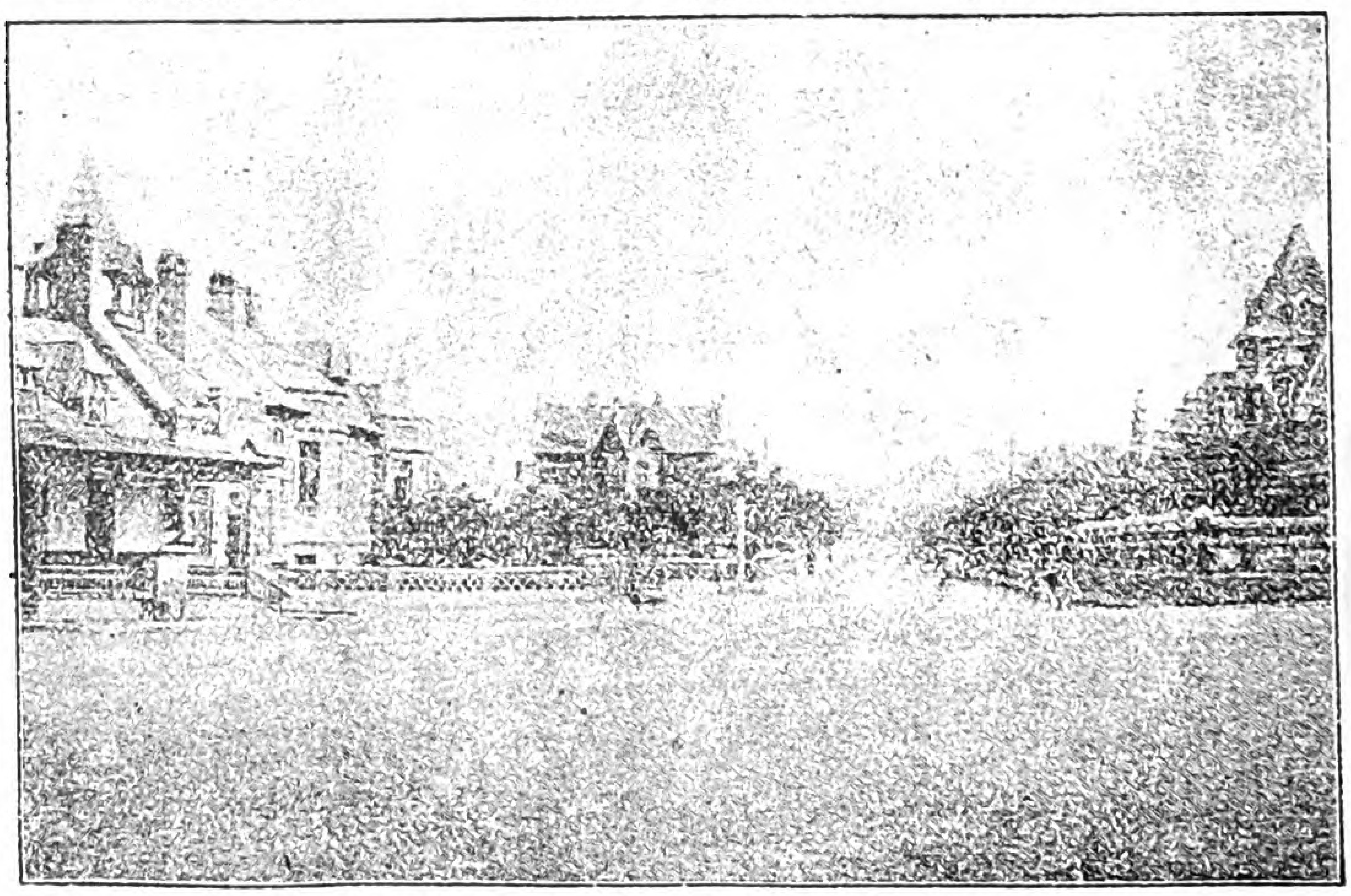
た事である予にはアマゾンの女戰士の像から受ける印象と英國の若い女から受けた印象とは殆ど似た物であつた予は其容貌を見た丈でも倫敦の若い女が參政權運動に熱狂するのを毫も不思議だとは感じない。況んや經濟上に於て先づ多數に獨立し、次いで教育に於て男子と對立する事の出來る實力を有つて居る彼等の多數が豐富なる生の活動を要求するのは正當であると思つた。

日本の新しい女は之を英佛の其れに比ぶれば少しも新しい點を發見し難い、まだ〱古い女である。歐洲の婦人問題は之を言換れば婦人の勞働問題、政治問題である。佛蘭西丈でも四百二十萬人の婦人勞働者と七萬人の婦人の官公吏が居る。此外婦人の資本家、獨立して商業を營んで居る女戸主、女流文學者、女優、女流美術家等を擧ぐれば、經濟上に於て獨立自營の實力を有つて居る女の數は佛國の人口の四割强に當るのである。其れで佛國今日の富は其大半は婦人の力だと言はれる。如此き富の力を有して女が政治運動にも盛に參加しつゝあるのは怪むに足らない。女權運動は英國の其れに比較する程度には達して居ないが、現に七萬人の女權論者が佛蘭西にも活動して居て、其副首領たるブリユンシユヰツク夫人が予に語つた所では一人の女權論者が平均して二十人の婦人の贊成者を有して居ると云ふ事であつた。

日本の新しい女はまだ第一經濟上に獨立の生活をして居る者が無い。殆ど皆が皆親兄弟若くは良人の脛かぢりである。衣食住の上に一人立の出來ない樣な微弱な無力な女が、口先や行爲許で男子と對抗しやうとす

るのは笑ふべき事である。さうして其哀れな新しい女が何を要求して居るかと云へば「思想の自由」の外に無い様である。歐洲の新しい女は疾くの昔に其様な自由なら得て仕舞つて居る。彼等は勝手にどんな書物でも讀んで居る。彼等は好きな學問藝術を學んで居る。巴里のスルボン大學で予の目撃した所では、科に由ると女子の聽講者の方が多い事があつた。斯う云ふ具合に思想の自由などは早く通越して、彼等は勞働に於て或は政治に於て男子と對立する自由を要求する迄に進んで居る。

併し遲れ馳せながら日本の女が思想の自由を得やうと思ひ立つたのは結構だ。成ることなら其れと一緒に親兄弟の脛かぢりを耻ぢて衣食住の獨立を思ひ立つがよい。思想計りで生活は出來ない。衣食住は男の厄介になつて居ながら思想丈獨立しやうと云ふのは蟲が好すぎる。女が經濟上に獨立すると云ふ事は非常な強味だ。其實力を基礎にして立つなら思想の自由や結婚の自由などを獲得するのは容易な事に違ひない。雜誌なんかの上で新しい女がどんな議論をしやうと、男の方にはもつと上手の思想家が澤山ゐて、もつと巧い筆で書いて居るから今の處何の恐慌も惹起すまいが、各種の勞働に女がどし〳〵割込んで來る事になつたら、其經濟上の競爭者をじつと見ては居られない、何分適切な現實の利害問題だから、其處に初めて男と女との眞の鬪爭が始まるだらう。何うしても何かで劇烈な一戰を經なければ新しい女の要求は通らないのだから、今後續々起つて來る新しい女には其丈の嚴肅な眞劍な覺悟が必要だ。



大連兒玉町通

たまゆら

三ヶ島よし

このおのが弱き心に從ひて君を戀ふるを責と思ひぬ

涙落つわが眞相を穿たれしこのうれしさにこのかなしさに

すくなくも我には死かなみづからを知りつくすてふめでたきことは

踐まんにもはや道なしと惑ふかなよきことのみを敎へらるれば

身をはなれ今にほはしき夕野にも抱くと歌はむ心あれかし

奪はるゝものもたまはるものもなきあぢきなき世に君を見しかな

戀するやあな美しきことかなとほゝゑまるゝも身には沁むかな

しのびのむ涙がものを言ふさまのしらじらしさを我とおぼえぬ

忘るべきときにわするゝあたはずばおのれ君にも見捨てられなむ

星見えて若葉を落つる一しづくあやしきものとなりにけるかな

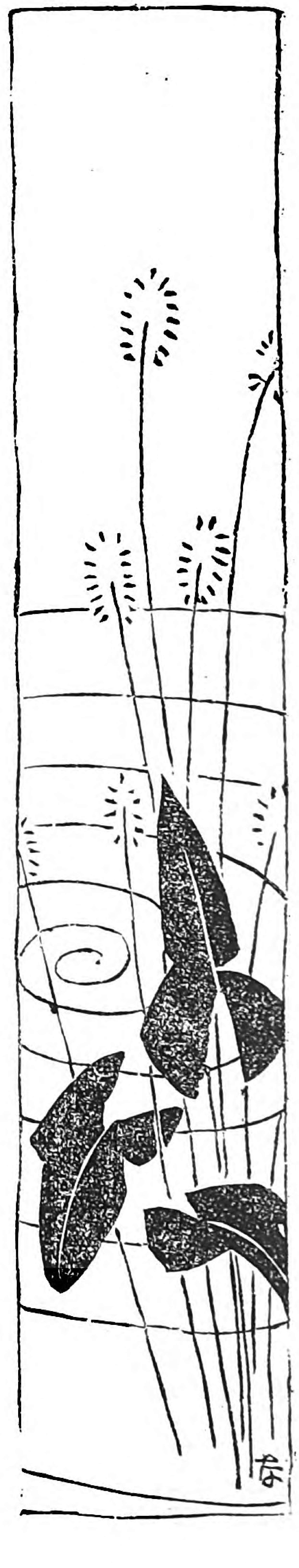
われはいと寂しきものと思へども生きてしあればよしと言ふかな

かなしみと幸とを同じ時に知るこれぞ流離の心なるらむ

ものゝみな不思議に見ゆるたまゆらに逢ひてやう〱悲みの消ゆ

われ君に死をも托してありながらこのまゝ死ぬもよしと思ひぬ

ゆくりなくうつしごゝろを失ひてまことの我をなげしかなしさ



平塚明子論

善良なるお孃さん

相馬御風

私が平塚明子と云ふ名を知つたのは、丁度今から七年前即ち明治四十年に飯田町の成美女學校と云ふ英語專門の女學校へ敎へに行く事になつた、その時からです。その女學校は當時ユニバーサリスト敎會の牧師をして居られた赤司繁太郎氏の經營して居られたもので今は廢校になつてしまひましたが當時は相當に盛でした。校長は亡くなられたケート博士、敎師には生田長江氏、安倍二郎氏、山縣五十雄氏、透谷未亡人北村美那子女史などが居られました。私の受持つたのが二年級で、その中に平塚氏が居られたのです。併し平塚氏は他の生徒とは少々性質を異にした一種の聽講生と云ふ風な格でした。何故さうであつたかは知りませんでしたが、兎に角さうでした。

それについて面白い話が一つあります。それは私がその學校へ行き出してからまだ間のない或日の事でした。私は平塚氏がそのやうな一種特別な資格の生徒である事をまだ知らなかつたものですから、ある時間に輪講を平塚氏に當てたのです。ところが平塚氏は「私はさう云ふ事はしなくても好いのです」と云つて斷はるのです。私は變な事を云ふ女だと思つたものですから「やらなくても好くても惡くてもそんな事はどうでも好い、おやんなさいと云つたらおやんなさい」と云ふ風に責め初めて、他の生徒の手前どうしてもやらせやうとしましたが、先方はどうしても承知しません。「やれば出來ない事はありませんが、しなくても好いのですから」しまひにはこんなことまで云ふのです。こんなことで三十分も云ひ爭ひましたが、結局私の方が根負けして「それではやむを得ない」と云ふ事になつてしまひました。併し私もひどく癪にさはつたものですから、後でそれを赤司氏に話して「どうもあゝ云ふ生徒があつては困ると申しますと、その時始めて赤司氏からあの生徒は特に聽講生と云ふ格で入れたのだからと云ふ事を話されたのでした、それにしても頑固な女があればあるものだと、それから特別に平塚と云ふ名に注意するやうになりました。これなどは一寸した事ですが、平塚氏の性格の一面をよく表はして居ると思ひます。

尤もそんな事がなくても、その頃の平塚氏は風采——と云ふよりは服裝の好みや髮の結び方などに、他の生徒と比べて著しく異つたところがありました。而もそれが派手とか厭味とか云ふのではなくて、非常に凝つた趣味から特に自分だけの形をとゝのへたと云ふ風なものでした。そしてその頃のその方面の特色は、今日も依然として平塚氏に見る事が出來るのです。

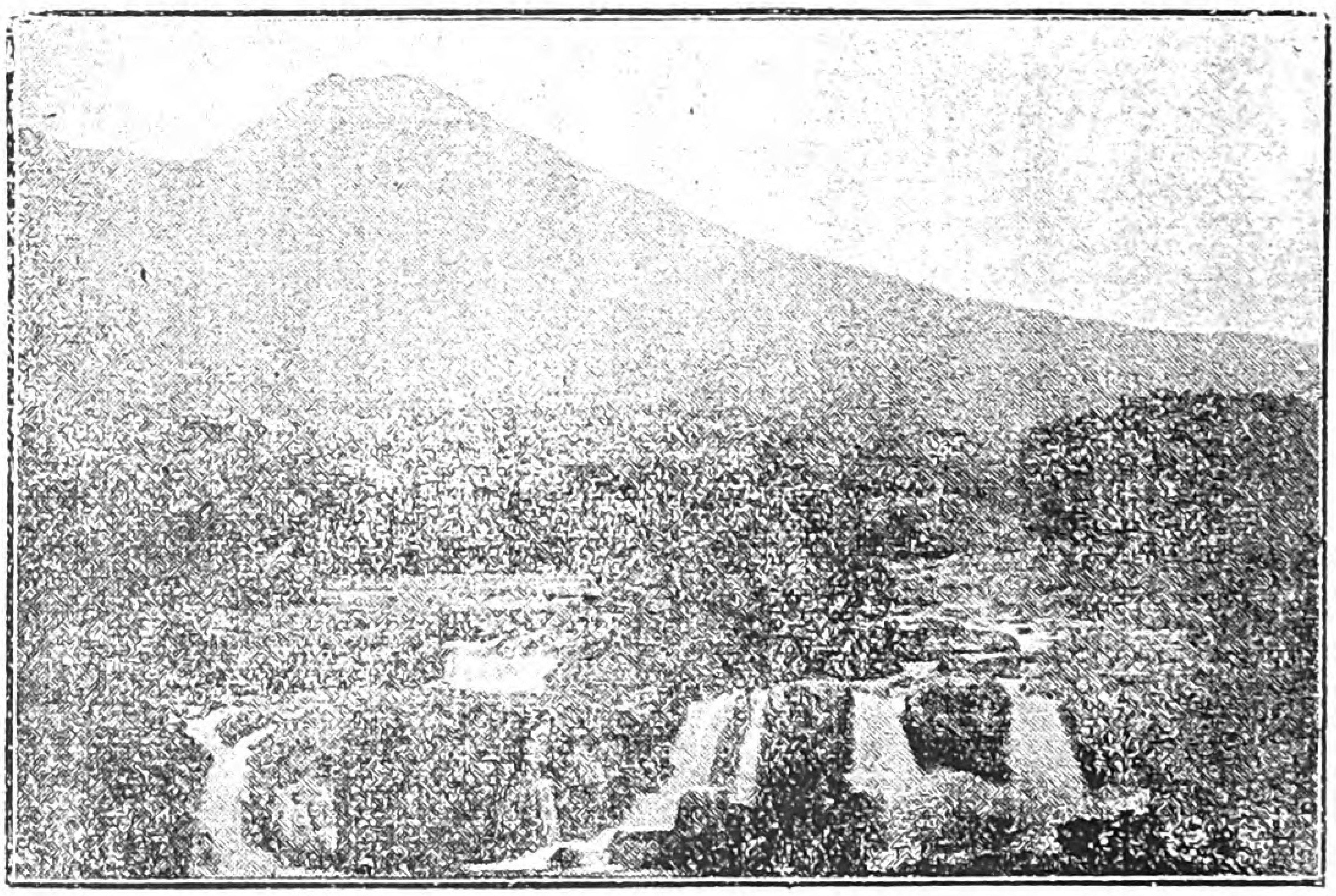
だがかう云ふ風な話を始めた日には、紙數がいくらあつても足りないと思ひますから、そんな事は止しにして、先づざッと現在の平塚明子氏に對する私一個の感想を御話しする事にしませう。

それについて私の先づ第一に申したい事は、世間が

平塚氏をどう云ふ風に見誤つて居るかと云ふ事についてゞす。此の點に關しては六月の「文章世界」に岩野泡鳴氏が書いて居られるのに同意します。卽ち岩野氏の云はれた如く世間では平塚氏の森田草平氏との關係から、森田氏の作品「煤煙」『自叙傳』等に描かれて居る女性をそのまゝ平塚氏だと思ひ込んで居るのです。そしてそれが平塚氏に對する世間の誤解のもとゝなつて居るのですが、直接に平塚氏を知つて居る者から見ればこれ位馬鹿げた事はありません。

平塚氏は決して世間の考へて居るやうなそんな變つた人ではありません。第一平塚氏自身が『青鞜』やその他の雜誌で毎月のやうに發表して居る思想について見ても、私達は少しも異常なものを認めません。たゞ當り前の事を云つてあるに過ぎないのです。私達はむしろ平塚明子女史——日本に於けるニユー、ウーマンの先驅者であるが如く噂される平塚明子女史の思想の、あまりに平凡にあまりに着實なのに驚いて居る位で、世間の人達がろくに解りもしないでがや〳〵云ふやうにさう特別に變つたところなどのあるのを少しも認めて居りません。

料理屋へ行つて酒を飲んだり、吉原見物に出かけたと云ふ事が變つて居ると云ふのですか。馬鹿馬鹿しい。そんな事は世間普通の人のだらにやつて居る事ではありませんか。いかに話の種に乏しいからと云つて、そんな事まで問題にして騷ぐと云ふのは何と云ふ馬鹿氣た世間でせう。



沼津あいつぼの瀧より富士を望む

要するに平塚女史は普通の女です。怪物でもなければ天才でもありません。普通の立派なお孃さんです。容貌もしとやかで美しいし、ものごともしとやかでやさしい立派なお孃さんです。もしどこかに變つたところがあるとすればそれは頭の善い點です。頭が非常に明晰で、女としては珍らしい論理的思考に長けた人です。それに今一つ意志が強い。ひねくれたのではなくて、極くうぶな正直な強固な意志を持つて居る。そしてその明晰な頭腦と強固な意志とが平塚氏をして今日の地位を保たせて居るのです。

森田氏との關係の眞相如何は別として、兎に角あの事の爲めに世間から受けた迫害と嘲笑とは、日本の古い家庭に生れ育つた若い女としては、非常な打擊であつた筈です。大概の弱い女ならば、ヤケになるか、自殺でもするかどうかあつたに違ひありません。併し平塚氏の強固な意志と明晰な頭腦は、少しも氏自身の心生活を亂させなかつたのです。しかもますます正々堂堂とした生活へ氏を導いて來たのです。私は此の一事だけでも、尊敬に値する人格を平塚氏に認めます。

繰り返して申します。平塚氏は決して變つた女ではありません。やさしい、善良なお孃さんです、そしてその思想はどちらかと云へば平凡です。あまりに道德的です。あまりに嚴格です。もし平塚氏に對して私の不滿を述べなければならぬとすれば、私は何よりも先づ平塚氏の思想がなぜもつともつと大膽であり得ないかと云ふ事を述べたいのです。第一に平塚氏の思想はまだ概念的と云ふ範圍をいくらも出て居ません。第二に現在の生活狀態そのものに對する批判が不分明です。第三に自己の中心要求の攫み方が甚だ微弱且曖昧です全體から見てまだまだ初期のローマンチシズムの境致をいくらも出て居ません。現實的欲求が甚だプーアです。

要するに私は平塚氏のあまりに令孃風なのに寧ろあきたらないのです。敎師と云ふやうな臭味のあるのが更にいやなのです。なぜもつともつと大膽に、多欲に、率直に、平易に、出られないものでせう。私はこの點

で新らしい女の先驅者を以て自ら任じやうとする態度のある平塚氏の事業よりも、今の所――少なくとも今のところ官能の上から自己の生活そのもの〻苦しさを感じ訴へて居る作家としての田村俊子女史の事業を尊く思ふのです。更に一歩を進めて云へば平塚氏は自分だけの生活の上に、もつと〱痛切な不滿にぶつからなければだめだと思ひます。理窟でない眞實の不滿と苦しみとに。そしてそれを理窟からでなく、實感の上から切り破らうとするやうにならなければ。

『圓窓』の著者に

水野葉舟

『圓窓より』と云ふ本を五月十五日の朝　私は手にした。ちやうど私の忙しい時である爲めに、それを精讀する事が出來ずに居る。從來から『青鞜』と云ふ雜誌を始終見ると云ふ機會があるので、多少此の『圓窓より』の著者に對して思つた事がある。然しその人の書いたものが一つに纏まつたものとして見ると、それを通讀すると、此れまでに斷片的に考へて居たのとは違つて、その人の全體の力が現れてゐるとおもふ。

本當を云ふと此の本を精讀した上で、私が此の著者を更に理解し得たと云ふ時に此の著者に就て自分の考へて居る事を述べて見たいと思つてゐた。それで今こヽに話す事は、私の考へたほんの一點である。此れは此の本の著者に對して禮を缺く事だと思ふ。然しこれだけの前提を置いて考へて行けば、私が今こ〻で云はうとする事で結論をつけやうとするのではないと云ふ事が思つて貰へると思ふ。

私の此の著者に對して第一に要求したいと思ふ事はもう少し深く人間と云ふ事を考へて貰ひたい、一方から云へば自己の生と云ふ事に對し、一方から云へば總ての生に對してもすこし自由で流動した心で、深く考へて貰ひたいと思ふ。

此の著者は一體明快な頭を持つてゐる人である。ワイヅな人である、勇氣もある、自分を戲談でなく考へ



ペンチに凭れて

やうとする心が明らかな人である。根本を云つたならば、聰明な尊敬すべき人であると思ふ。然し意外に正直でないところがある、私はもうすこし此の人が愚直な人であつてほしい。もう少し混濁した人であつてほしい、惑亂し易い人であつて欲しい、もうすこし自己の生と云ふ事に對して心を開いて、生きて居る細胞が要求する通りに動いて、さういふ底から自分の生の力を見出さうとする人になつてほしい。

若し『圓窓』と云ふ一冊の本だけを見たならば、意外に此の著者が盲目であると云ふ事を感ずるかも知れない、少し曖昧な言葉であるけれども、聰明なる無智と云ふ言葉を私は思ひます。非常に醒めて居るべくして意外に眠つて居る人のやうに思へる。人の醒めると云ふ事は、私の心ではものが透明に見えると云ふ事ではない、醒めた人は何もかも透明に見えたと云ふ事は嘘である。醒めたと云ふ事は、闇黒を知ると云ふ事かもしれない、眞實に自己の生の中心に光りが現れて、その生の臨む宇宙は闇である、私の覺醒はこゝに脚がふみこむ事ではないかと思ふ。無智と云ふ言葉が非常に人に對する不謙遜な言葉であるとされたらば、それはつまらない感情問題である此の位聰明で、此の位大膽で、此の位醒めやうとしてゐる人でありながら、此の人の中に眞實に自分が生きて、動いて沸騰してゐる姿が見えない、私にはまだ非常にはつきりとは解らないが、何處かに間違ひがあるやうにおもはれる。特に此の集のしまひに、その人

の藝術的作品がある。それを見ると此の人の理智の世界は眞から生きて、握つて、つまりその人の肉體となり、その人の生の動く力となつてゐる理智でない、推理の順を追つて、生を離れた理智でありはせぬかと云ふ疑が起る。

おそらくこれから後に、我々の同胞の婦人達の中でワイヅでクリーヤな頭をもつた、此の著者のやうな人が多くあらはれるであらうと思ふ。然し私はそれをあまり望まない。

私から思ふと此の著者は、自己をも一度根底から破壞してほしい、此の聰明が一度愚鈍になつてほしい、此の人の豐富な生活を血と肉とで求めてほしい、もすこし分裂してほしい、今の統一されて居る此の美しさが弱いと思ふ、極めて薄弱な透明な道でありすぎると思ふ、もすこし濁つたらいゝと思ふ。

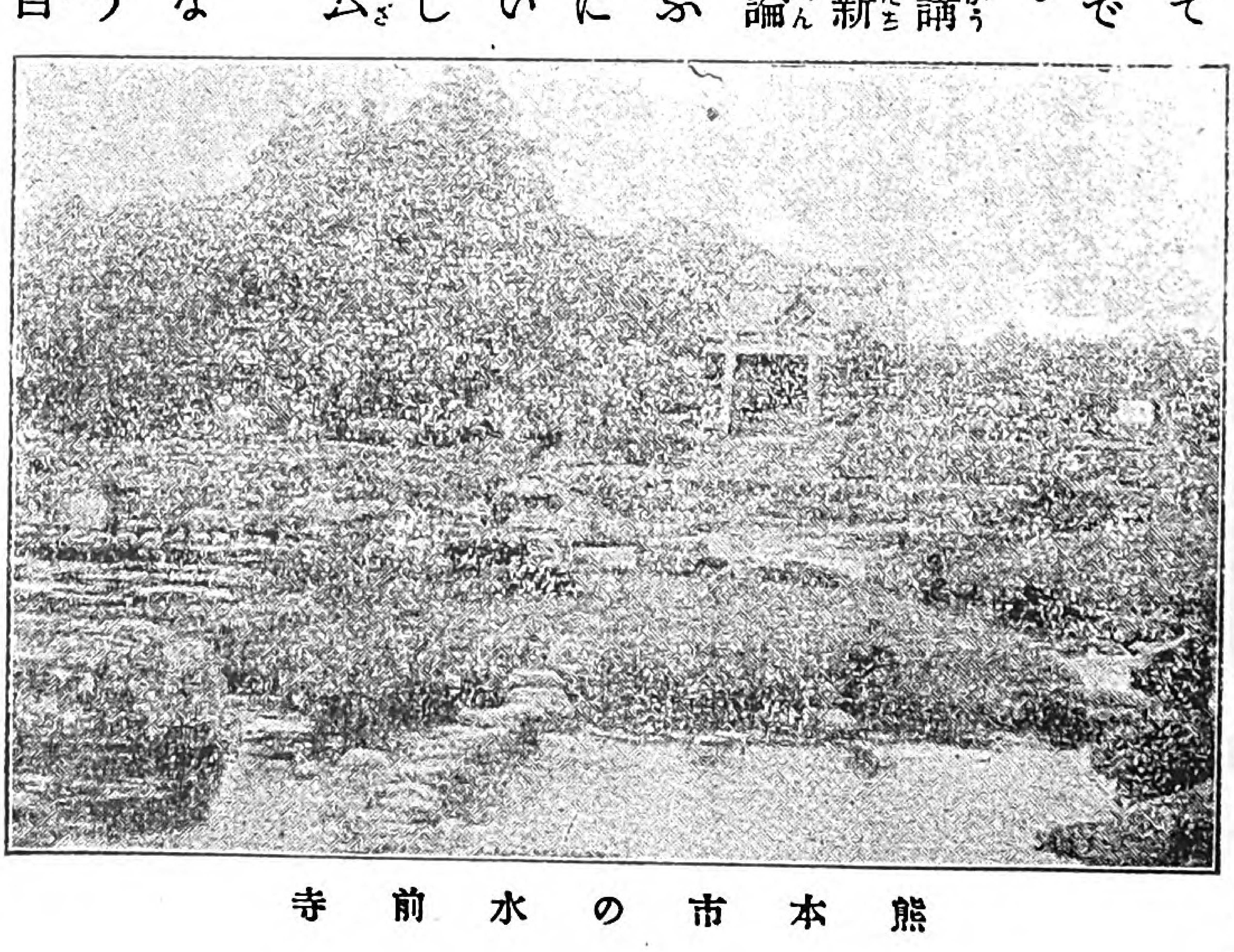
其のほか『青鞜社』について考へた事や、女が目をさます事を恐れる世間の人についての感想なども云ひたいとは思ふが、それは他日に讓る事とする。

御免を被りたし

生田長江

私も「婦人問題」に就いては、眞面目に考へて見たいと思つてゐる一人であります。青鞜社の講演會に、「新しき女を論ず」と云ふ題目の下につまらないお喋りをしたこともございます。

しかしながら、斯う云ふ眞面目



熊本市の水前寺

な題目が、最近二三箇月のやうに惡くジァアナライズされて、廉價なる流行物になつて來ると、つひ持前の性分で、當分のところ口をつぐんでゐやうかと思ふのであります。

「婦人問題號」も器用な雑誌屋さんによつて、手取早く無造作に出來上りました。「新しき女」の事實も手取早く無造作に決定され、それに對する手取早く無造作な意見も、えらい人達の名を署して、一時に濫發されました。すべてが馬鹿々々しく、すべてが不愉快です斯う云ふ心持になつてゐる場合、「新しき女」としての平塚明子女史を、批評させられるのも、あまり有難くはないのです。

今日、明子さんを論ずると云ふことが、世間の爲めに必要な事でせうか。ためになる事でせうか。それとも明子さん其人の爲めに必要な事でせうか。ためになる事でせうか。

何かの爲めに必要だとか、ためになるとか云ふのなら、いや〳〵ながらでも論じませうが、差當つて別にそんな事もなさゝうぢやありませんか。

それに私は、長らくつき合つてゐることでもあり、妙な好奇心から讀んでくれる人達に、面白く讀んで貰ふやうな「明子論」を試みるべく、あまりに明子さんを知り過ぎてゐます。と同時に、私自身の眞面目な批評的興味を動かされるほどには知らないのです。此後知るときが來るかも知れません。その時は誰一人「婦人問題」や「新しき女」なぞ口にしなくなつてゐやうとも（そしてそれは餘り遠い事でもありますまい）、私は遠慮なく「明子論」をもやります。

兎に角、今日の處は、平におことわりを致します。

自分の言ひ得ること

與謝野晶子

自分にはお答がしにくい、何故ならまだよく平塚さんの全體を知つて居ませんもの。詳しい傳記の解らない古人の人格なら、其筆になつた物丈を見て批評する

外に致方がないことですけれど、現に生存して居る人達の人物論には是非その私の生活を實際に知つて、其議論とか作物とかゞ、何れ丈眞實を語つて居るかを見極めた上に批評する必要がありませうと思ふのです。いろんな臆測を加へて本人の迷惑になるのを關はない人物論は厭ですから。自分は青鞜の社員で入らつしやる御婦人の中で、上野葉子さんの論文を其大膽に於て其精透な論理に於て、一番見ごたへのあるものとして敬服して居ります。其次に葉子さんに比べて大分議論の方法は粗硬なやうですけれど、他を先づ威壓してかからうとする樣な、向意氣の強い平塚さんの文章を、多少の反感を有ちながらも感歎して讀んで居ります。

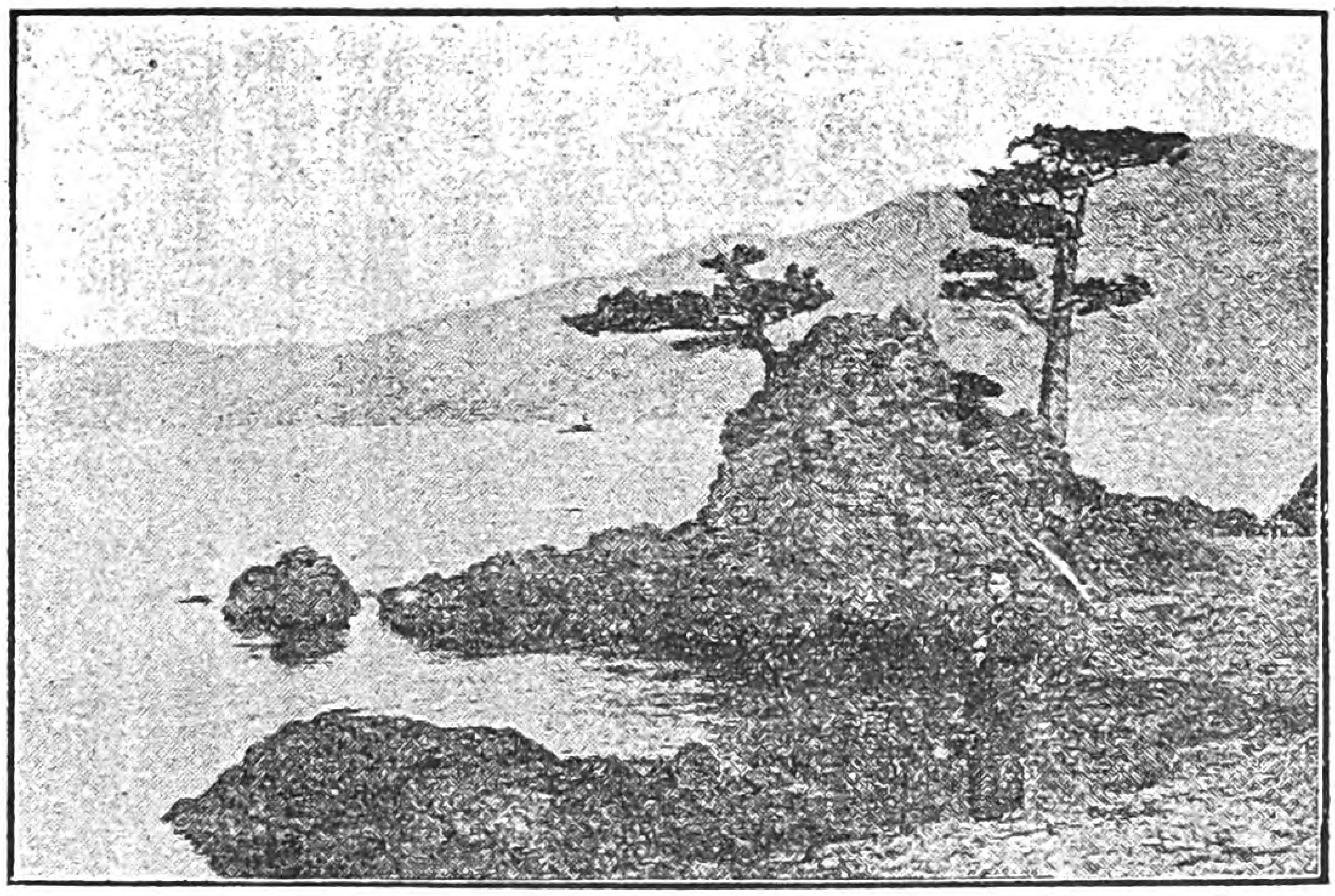
奮發して貰ひたい

宮田修

私も平塚さんに一度は逢ひたいと思つて居るが、訪ねてくれる譯もなければ、訪ねてゆく譯にもゆかないので、まつたく知らない人であるから何ともはつきりした事は云はれないが、ある時女學世界で手紙風にして何か短く話をしてあつたのを見て、しつかりした事を話しをする人だと思つた事があります。

逢つて話をしたと云ふ人から間接に聞いても、明晰な頭腦を持つてゐる人のやうで、青鞜社の他の人は矢張知らないが、其の人達の論文などゝはそこにいくらか段がついてゐるやうである。

世間では青鞜社と云へば、奔放な婦人の集りであるやうに云つて居るが、成程中には奇矯な眞似をする人もない事はあるまい。そんな點から見れば感服する譯はないのであるが新しい女の特性としては、男性的であり反抗的な點があるのは免かれがたい處かもしれないが我々の新しい女の標準から云へばやはり遺憾な事である。反抗的な事を云ひ、男性的な事をするよりももつと意味の深い事が新しい女として澤山あると思つて居る。女の精神生活を高いところに持つて行きたいと云ふ事を考へる上から云へば、古い習慣に拘んで、



敦賀松ケ崎

消極的の道徳を後生第一に守つてゐる舊式の女の中にどうかして進まうとして努力する人のあるのは大に迎へなければならぬと思ふ。私は此點に於て新しい女を歡迎する一人であつゝ始終其の方面、人には注意を拂ひたいと思つてゐる。

そこで私は今日までの青鞜社のやりかたには、全然同意を表するわけにはゆかない事があつて、個人的にはいゝとしても、社會に對し其の關係を考へ足りないところがあるやうで、婦人の地位を高める上には、却つて妨害するやうな事をして居はしないかとおもはれるのを殘念な事だと考へて居る。

然し個人としての平塚明子さんは、その書いたものを通し、あつたと云ふ人の噂によつて想像して見てもなか〳〵しつかりした處がある。で、自分はとりわけて平塚と云ふ人の將來に一種の興味をもつてゐるので世間が無暗にたゝき倒して了はうとするのに反對するものである。よくある事で、一寸でも毛色のちがつた人があると一種の惡戯でこれを喜劇の人物に見立てゝその渦巻きの中に入れ去らうとする傾向があるが、どうかさう云ふ事をしないやうに、もつと眞面目に、どこまでか發達する處まで導く人があつて然るべきだと思つて居る。

平塚と云ふ人が讀んで居る讀書の量や、考へて居る範圍は、忌憚なく云へば、多くの婦人からは着眼もま

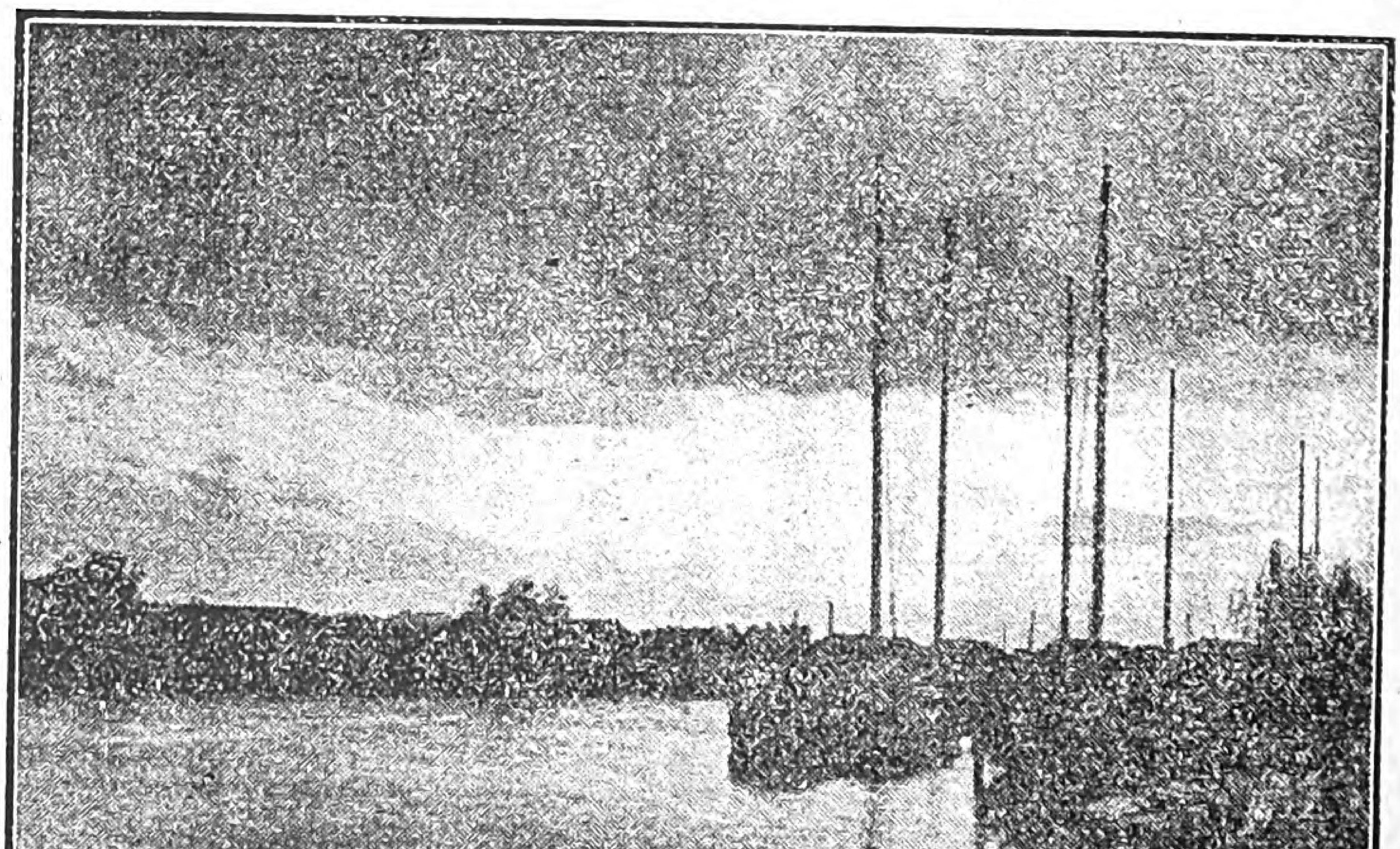
さり、量に於ても多いかと察せられるが是れをば新しい婦人の旗じるしの下に云へば、婦人界の先覺者として立つ人として見るには、其の學識其の經驗ともに十分と云ふ譯ではない、更に將來に向つて修養すべき點が多いやうに思ふ。

凡て本を讀み、見識を立てるには、その土臺となる頭腦がしつかりしてゐなければ、本屋の番頭が本を讀むやうに纏められたものとはならないが、あの平塚と云ふ人には、今後修養して、それをまとめてしつかりした思想を樹て、いつかは何者かを創造り出すと云ふ見當はつくやうに見られる。自分はこの人の奮發を促すとゝもに、世間の人がこの人に對して、同情のある見方をして、同情のある待遇をするやうに望んで居る

知らない人

上司小劍

私は平塚と云ふ人を知らないが一寸何か話をして見ませう。知らないと云つても、逢つた事があると云へば云はれぬ事もない。いつであつたか岩野泡鳴君をたづねて二人の女の人が來たのに、ちらと逢つた事がある。脊の高い人と色の白い人とであつたが、後でその脊の高い人は尾竹、色の白い人は平塚さんであると云ふ事を聞いた。見たと云へばそれ位の事で、平塚といふ人は



常陸霞ヶ關の夕照

溫順しい怜悧さうな顏をしてゐる人と云ふ印象を受けて居る位である。

　では平塚さんの書いたものを讀んだかといふに別にこれと云ふものを讀んでは居らないので、漠然として話がしにくい。唯手元にある中央公論に短いものを書いてある、それによつて見た處だけでは、どうもまだ婦人問題ばかりではなく、人生についての考へも深い根柢がないやうにおもはれる。けれどもこれは平塚さん一人に止まらず、現在の婦人全體が、これからといふ處であるから、それを云ふのは無理であるかも知れない、ずつと昔の男女同權を唱へ空漠な事を云つてゐた時代に比ぶれば、無論しつかりした自覺が出來やうとしてゐるには違ひないが、まだどうも根柢がない。

　私はまへにも云ふとほり平塚さんを直接には知らないが、友人である岩野泡鳴氏や淸子さんを通じて明子さんの噂はきいてゐる事がある。それによると今の女の中では極めて聰明な方らしいから、あの人及び靑鞜社については、始終眞面目に考へたいと思つて居る。

靑鞜社の外にまだ二三の婦人の研究會や團體があるやうだけれども、ある女の人の云はれたやうに、私も靑鞜社以外の會は聞いたゞけに胸が惡くなるやうな一人である。靑鞜社だけはいつも眞面目な同情をもつて始終見てゐたいと思つてゐるが、前にも云つたやうにまだどうも深い根柢がないやうで、明子さん個人としても將來の人である事は云ふまでもない。すでに靑鞜社及び平塚さんが將來のものであるとすれば、それを評論の題目とすべきではないやうである。

　私は靑鞜社及び、平塚さんが理解のない俗衆の間違つた標準の上から、新しい女の中心と目指され、見當ちがひの迫害をうけてゐるやうなのを見ると、單に靑鞜社もしくは平塚さんが氣の毒なばかりではない、日本の婦人の進んでゆく上からも惡い事だと思つてゐるいつの時にもある事であるが、無智蒙味な俗衆の低級の觀念の上から見て、眞面目に取り扱ふべきものを戲談半分に取りあつかつて、面白がらうとするのは、まことに殘念な事である。

五ケ條の要領

岩野泡鳴

一、婦人の自覺運動（若しくはその下地）として青鞜社の出來たのは結構な事です。

二、女子教育の弊害は今日その極に達して居ます、その反對は早晩起るに違ひありません、近頃の婦人運動はその一部です。

三、平塚女史は少くともその代表者でせう、世間の誤解してゐるやうにあばずれな、また奇狂な婦人ではありません、全くその反對のおとなしい、然しその云ふところには熱のある婦人です、そしてまだ處女だと云へませう。

四、六月の女子文壇に菊池氏が『彼等は思想の上に新しい女ではなく、行爲の上に新しい女である』と云つてますが、平塚女史を初め青鞜社の連中はまだ行爲の上に進むまで行つてません、その反對に思想の上でばかり覺醒の必要を感じてゐるのです。

五、『圓窓』は佛教的因襲がありますが、わが國の婦人で、あれだけの思索力を示したものはない。

平塚さんの爲に悲む

河井醉茗

一

原始女性は太陽であつたらうが、平塚明は人間なることを悲しむ。

平塚明子が單に『圓窓』の一著者として止むならば何事もなからうが、彼女の心と共に行ひも動いたならば、彼女の爲に悲むべきことが多からうと思ふ。

雷鳥は海拔一萬尺の山でなければ棲まぬ、一萬尺より遙に低い山には下りて來ない、最も高い地に棲む鳥である、人世の高踏を主義とし、生活の超人を理想とする彼女が、自らいてうを以て名づくることに不思議はない、らいてうとして物言ふ彼女は、平塚明として行ひ、動く時に、彼女も亦一の女性であり、一の人

間であることを自ら悲まないであらうか、自分は彼女の爲に悲む一人であることを明言する。

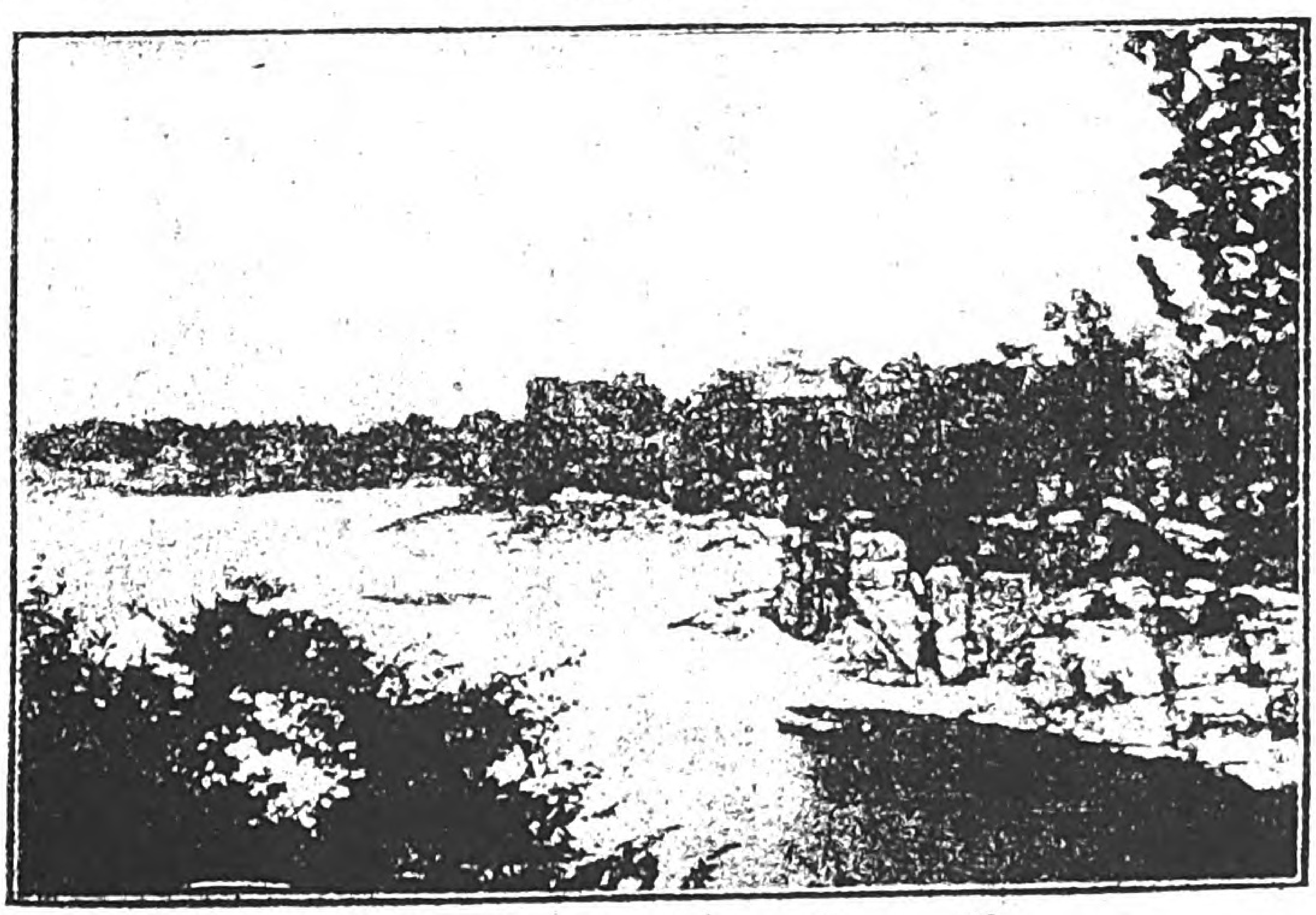
二

平塚さんは誰も知る如く、一見して氣高い態度がある、香煙籠る圓窓の室に、袴を穿いて端然と坐つてゐる平塚さんの姿は、到底多くの女性に通有する姿ではない、禪學から來たか、何から來たかは自分は深く知らないが、あれだけの訓練を經たことに對しては大いに敬意を捧ぐべきものであらう。

又平塚さんは大いなる服從性の女であらう、世に謂ふ處の新しき女は、十人が十人まで反感を有してゐる始終衝動的に反抗して行く言動が能く見えるのだが、平塚さんには其が輕卒に表はれて居らぬ。大いなる抵抗の力あるものは、大いなる服從の力を持つてゐる。

平塚さんは聰明である、考へる人である、重んずる人である、假令今後平塚さんの身に何んなことが起つて來ても、それだけは信じたい。

大いなる渦捲の起つた時、平塚さんは大いに苦しむ人であらう、新しく覺めんとする苦痛を深く味つてゐる人であらう。男性の方から見て、なほ其苦痛を破つてゆく力が弱いやうに見えるのは至當だが、現今の女性としては、平塚さんなどは、眞先に突破つて行かうとする勇氣のある方である、徹底して行かうとするから其處



秩父の山中

に幾多の障害が起るのだらうけれど、平塚さん自身は其矛盾を知つてゐるであらう。

三

近代文藝の進歩は、人をして自ら神なりと思はしむるに至つた。

平塚さんも亦、自然のために其魂を欺かれてはならぬ、無限に高き階段の何の邊に立つてゐるか自明するを要しない、此の如き自明が次第々々に忘られて行く日に於て、平塚さんと云ふ人の眞の姿が一層強く鮮かに表はれて來なければならぬ。

自分が平塚さんの爲に悲むといつたのは別の意味もあるが、併し何れにしても悲むことは免れない、願はくば善良なる意味に於て悲みたいと思ふ。



海水浴の後

平塚さんの印象

もゝよ

私達は日常多くの人に接してゐる間に、いつその人に逢つても、どういふ場合にその人の話を聞いても、その人がいつも同一の顔色をして、同じ考をたへず機械のやうにくりかへし、逢ふ毎にその人の話の量の乏しくなりゆくのを感じる時は心の底から一種の悲しみに耐へなくなる。その人の生活の落ちてゆくのを杞憂するとゝもに、自分までもその下り阪のみちづれとなるやうな不安を抱かないでは居られ

ない。

然るに面晤の數の增すとゝもに其の人は多方面な性格が見え、その人の顏色に益々新しみを見出し、話をするに從つて、その語る言葉のうちに自分の心が端睨しがたいと思はれ『まだ此の人の生活の中には自分がある』と思はないでは居られない人に接する時は、云ふ可からざる快感を感じるものである。

一度其の人に接したきりで直ぐ自分の興味をたやすく飽滿させられる場合は實に自他ともにいたましき悲哀である。私はその考へから、女の人にあつて、常にその悲哀をくりかへし味つてゐた。甚しい時にはその女の聲をもの丶十分も聞いてゐる間に、もうその女の全體の價値が消え去り、その女に對する好意としてはたゞその女と逢はないやうにするより外はないとさへ思ふ事もある。

さういつたやうな心持でたえず、他人の生活の中に自分の一種の欲求を漁つてゐるやうな立場の私が――此の私が平塚さんにあつた時の印象を語りたいやうな心持がする。

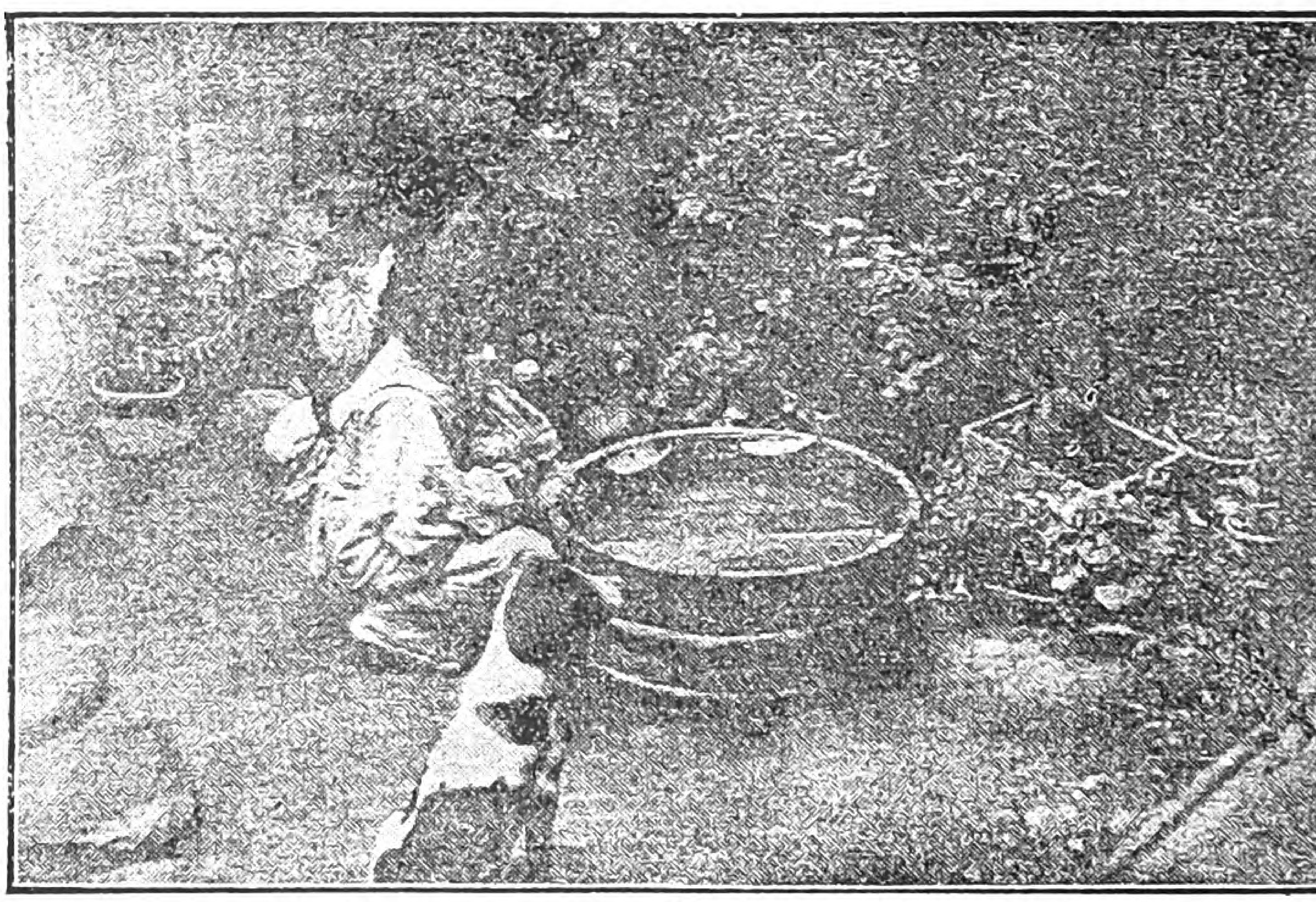
平塚さんを、はじめて私が知つたのは去年の秋上野のある料理店の一室の會の席上であつた。其の時の平塚さんの印象はまづその胸――濶い長い而して眞直に開いた胸と優雅な容貌、殊に豐かな下ぶくれの頰の美しさと、沈着な柔かく低い音聲とであつた。それはすべて私の見ぬうちの空想に對して、格別に意外な事であつた。

『私が平塚……………』

かうもの柔らかに聞える聲を耳にした時は自分の心まで柔ぐやうな親しみをおぼえた。而して其の室に居ならぶ女の人達の中で、その人ほど行儀正しいものいひの叮嚀な、態度のいつも崩れる事のない樣子を眺めた時は、此の人を見た事が嬉しくてならないやうな心持だつた。

その次には平塚さんの書齋で逢つた時である、其の人は、洗ひ髮の毛を、きれいな額に二つに別けて末を紐で結んで、セルの袴をはいて、響も立てず、袴をさ

ばいて、疊に根をつけた樣にしつかりと端座して怜悧な顔は思ひあがつたやうな色に見えるのだつた、氣取つてさうしてゐるとすれば厭な感じが發作的に私の胸に生ぜねばならない。けれどもさうでなかつたのを見ると、此の人の此の場合の顔色はやはりこの人のある一面の生活の自然な表現なのである。二時間ばかり話をしてゐる間に、私は平塚さんがきはめて剛直な心の激しいほど直なところに威嚴をもつた人だとおもはれた。其の低い笑聲のはしにまで用意のあるのが私のやうな女の感情をおさへて、いかにも重たくてならなかつた。このやうな人を女だと云ふのは違つた事のやうにおもはれたりした最近の平塚さんはかうであつた。見當のちがつた。迫



花壇の水そゝぎ

害？をうけてゐるといつてもいゝやうな立場の、その噂をさま〴〵な方面からきくにつけて、間接ながら案ぜられる心持は、私にもあつた。

私は一種の思ひやり――さういふ場合の在り來りの女の心持である用事をもつて、訪れてみた。

その人に逢ふともうすぐ激越しやすい私は、沁々と見上げて、涙ぐましい感情がはげしくこみあげたのだつた。而して在り來りのセンチメンタルな言葉が口をついて出やうとした。然し、私はその人の顔色を見て、自分のすべての感情をもみけしてしまつた冷靜な靜かな聰明なその人の眼が私を見てゐる、其の時心から賢い人だと私は思つた。

冗なことを一言も云はない平塚さんは、云はないだ

けそれだけ、接するもの〻心には意味が深い、未來、未來、この人にはそれが光るやうなものとして置かれてある。この人を今語るには、たゞ未來の二字で結論するより外はない。

未來のある人は常に動いてゐる。平塚さんは逢ふ毎に顔色の新しみのある人だと云ふ事を私は云ひたいのである。

其の談話の量は增す事はあつても減ずる事はない。

終りに私は『圓窓より』に對する私の心持を述べたい

此の書には開卷の一ページに、畏れながら、我が眞太陽のみまへに、我が心奥なる眞人のみにて、この年頃のさゝやかなるいとなみを捧ぐ。と書かれてゐる。此の十數字には、絶對の敬虔な態度が現れて、どれ程平塚さんか、自己に對する信仰の熱の烈しい人であるかゞおもはれる。

逢つた時その事を一寸云ひ出すと、平塚さんは頰を一寸あかくして、何にも云はずに微笑した。平塚さんのおとなしい笑顔はまことに美しい。

『圓窓より』の序

——らいてう——

私は一切の舊きもの〻敵である。
けれどそれは必ずしも不善なるが故ではない。
舊きものには生命がないからだ。
實に舊きものはすでに、すでに「死」の所有に歸したものだからだ。

私は一切の新しきもの〻味方である。
否、新しきものそれ自身でありたい。
何故なら、新しきもの〻中には常に必ず生命の核が宿つてゐるからだ。
潑溂たる眞生命は新生、又新生かくて無限に生成發展するものだから。
常に眞太陽と共なる私は日に日に新に、新より新を通じて永遠に流れる生命の火焔でありたい。
人は今日は過渡期だと云ふ。
けれど私に於ては今日と、明日と、明後日も、恐らくすべて過渡期であらう。
後を顧ると「死」が大きな手を開いてゐる。
私は直往邁進せねばならぬ。

女子文壇化粧顧問　藤波芙蓉先生實驗發明

毛はへ 抜毛止 強髪劑（きやうはつざい）

清韓臺樺各送料参拾錢ゾヽ

◉定價一瓶金九拾五錢　送料市内四錢、地方八錢

芙蓉先生曰く「これは自分が發明した良劑ではない、英國の有名なる侍醫ロコック先生が、毛髪の生育を促がし、脱毛を防ぐ常用御料として、故ヴイクトリア女皇の爲に苦心して創製された顯著なる強髪劑ですが、西洋人に適するもの其儘日本人によいとも限られないから永いとそが効否を實驗した結果、多少の改良を加へたに過ぎんので、主材には大した變りはないのであるから、之を使用して効驗を得た人は宜しくロコック先生に感謝するが至當です」。以て此強髪劑の非凡の選良化粧材たることが了解されるでせう。

艶肌劑（えんきざい）

清韓臺樺各送料参拾錢ゾヽ

◉定價一瓶金六拾錢　送料市内四錢、地方八錢

「艶肌劑」は顔のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にも、白粉下にもなり、而して白粉のノリをよくし、お化粧を落付かせる化粧料であります。

西洋式 煉洗粉 トレートクリーム液

清韓臺樺各送料参拾錢ゾヽ

◉定價一瓶金七拾五錢　送料市内四錢、地方八錢

「植物性洗粉」は洗粉として理想的のものであつたけれど原料が時々需要を充たすと能はざるため、希望者の不便を釀すと少からず、如何にもしてこれに代るものをと遂に此純植物性洋式煉洗粉を皆樣のお化粧の資料に供することゝなりました、それに先の植物性洗粉はアブラ性の人には極めて好適材でしたけれどアレ性の方には適せぬ缺點があつたに反し此トレートクリーム液は何れの皮膚の人にもふさはしく、キメを細かにするのみならず、使用の簡便なる洗粉に比して使ひ心地よく、剃刀アブレするやうな弱き皮膚の人でも其アレを防ぐの力を有して居ります。

日やけどめ

清韓臺樺各送料参拾錢ゾヽ

◉定價一瓶金四拾錢　送料市内四錢、地方八錢

此「日やけどめ」は季節々々に、朝夕郊外の散策又は海邊の漫歩の折、之を御顔に御つけになつて出られ、御歸りになり又御つけになれば、日に焦けることなく、又やけたのを綺麗に除ります、化粧水の代用としても結構です。

化粧した 艶美水

◉定價一瓶金五拾錢　送料市内四錢、地方八錢

肌を美にし、白粉のノリをよくする最も優越なる化粧水として現時歐洲に稱讃されつゝある「女神の膚の色」を主材とし、これに芙蓉先生の權威ある學理ト實驗よりの艶美料を合劑して調製されたる化粧水です。

從來の「化粧水」は啻に原料がこの艶美水より高價なるのみならず、肌膚を艶美ならしむる點も此艶美水に及ばざるを以て、撤回する事に致しました。

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

ゴールトクリーム

◉定價一瓶金壹圓　送料市内四錢、地方八錢

「コールドクリーム」の美顔料としての効用は、之をお化粧なさる前によく御顔なり、御手なりに摺込み、紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、アブラの出るのを防ぎアレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ、光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ、殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。』但此クリームは美顔劑で、世のクリーム類の如く御化粧下用には立ちません、「艶肌劑」と「コールドクリーム」とは艶肌美顏の姉妹劑です。

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

クセ毛なほし 美髪劑

◉定價小瓶參拾錢、中瓶五拾錢、大瓶壹圓　送料市内四錢、地方八錢

「美髪劑」は十有三種悉く人體皮膚並に毛髪の滋養となる純植物性のものより成り、天性のチヾレ毛には些しも効能はありませんが、クセ毛なら何んなひどいものでも直ります、譬へクセ毛の人でなくとも、毛がやはらか過ぎてハエギハもビンも、タボも下り易い毛髪でも、之を防ぐことが出來ます、又毛髪が硬くも自由の利かない人でも、すなほな好い毛髪となります、加ふるに毛髪の色澤を美しく致します。

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

美髪香油

◉定價一瓶金壹圓五拾錢　送料市内四錢　地方八錢

「香油」は美髪劑の總ての効能を具有してある外に、一時的にチヾレ毛を直し、毛をフクラマス力をもつて居りますから、如何なる毛の薄い御方でも、これをつけて髪を御結ひになれば、フツクリとして澤山の毛のやうに見えます、又皮膚が剝脱してフケが出たり、毛髪が赤く細く枯痩するのを直す權威を備へて居ります。

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

注意

▲本品は世間にある化粧品と異なりワザと粧飾をなさゞる實用專一主義の責任ある無類珍品ですから、速に御試用あれ

▲本品は本社代理部の外一切發賣を許されぬ珍品なれば直接本社代理部へ御申込下さい

藤波式化粧料 專賣元

東京市京橋區大鋸町十一番地
振替口座東京第壹七貳九番
（電話京橋六〇七番）

女子文壇社代理部

（海內唯一）

秀才文壇

（青年伴侶）

七月一日發行 **特別號** 一冊卅五錢（送料二錢） 半年分一圓卅五錢 一年分二圓五十錢

△閑人（アンドレーエフ）……川路柳虹譯

△孔雀と抱擁（對話）……佐々木繁

△裝幀雜話……鈴木三重吉

△巴里より巴里へ……正宗得三郎

△飜譯に就て……武林無想庵

◎靈魂の行くゑ……岩野泡鳴

◎約婚（アレキセイ・トルストイ）……米川正夫譯

現文壇の主潮

△思想即生活、靈肉合體……樋口龍峽

△內容的傾向……相馬御風

△二つの慾望……秋田雨雀

△飜譯熱時代……生方敏郎

△感想二三……吉江孤雁

◎倦い朝……三木露風

◎晚餐會（キイランド）……前田晁譯

△虛子の新傾向雜感を讀んで……大須賀績

○蠅の木伊乃（詩）……加藤介春

○そろ（詩）……山村暮鳥

○ひとりぽつち（詩）……前田夕暮

青年文藝 小說、小品、對話、書簡、我が鄕土

青年文藝 評論文、長詩、短歌、短文、俳句、六號文壇

發行所 東京神田旅籠町一丁目 **文光堂**（振替東京一九五五 電話下谷四八一九）

賣捌 東京堂○東海堂○北隆館○上田屋○至誠堂○永久堂

一年間につゞく

名流婦人日記

五月一日より十日まで

東京圖書會社專務取締
關屋祐之介氏夫人　關屋愛子

五月一日。雨しとゞにふる、けふはめづらしう友のおはさでさびしき折から、寺田ぬしとひましぬ。

夕ぐれかぜさへあらく吹きそひぬ。

とし子かへさの道いかにとのみながめられぬ。

五月二日。今日は母君の命日なり、わするゝひまなくてひまゐらすれど、ふたゝびあひまつらむすべもなきが、たへがたくてなみだがちなり。

五月三日。濱ぬしをとひまゐらせしに母君の御病重らせ給ふよしうけ給はりて、よそ事ならでおしはかられつゝ、よわきこゝろのはやなみだぐみしを見せまゐらせじと、御物語をよそにまぎらす折しも雨はげしくなりて、はたゝ神さへとゞろとゞろにきてゆれば、車にていそぎ家路につきぬ。

五月四日。はれたり。けふは長唄の大會ありてとし子ともなひて行く、あはせきぬのあはき色とりぐに美しき御子たちの鈴ふるごともうたひますが、愛らしとも愛らし、とし子初時雨をうたふ。

風のけなればはやめておいとま申す。

五月五日。格子ぬしをとひまゐらす、さとし樣のたけたかうなり給ひしにおどろかれぬ。

よる壽子樣と電話にて御物語申す。

五月六日。あさより表のまれ人多くおはしてにぎはしかりし一日なりき。

五月七日。久々の君たち御こしにてつきせぬものがたりに夜ふくるまで。

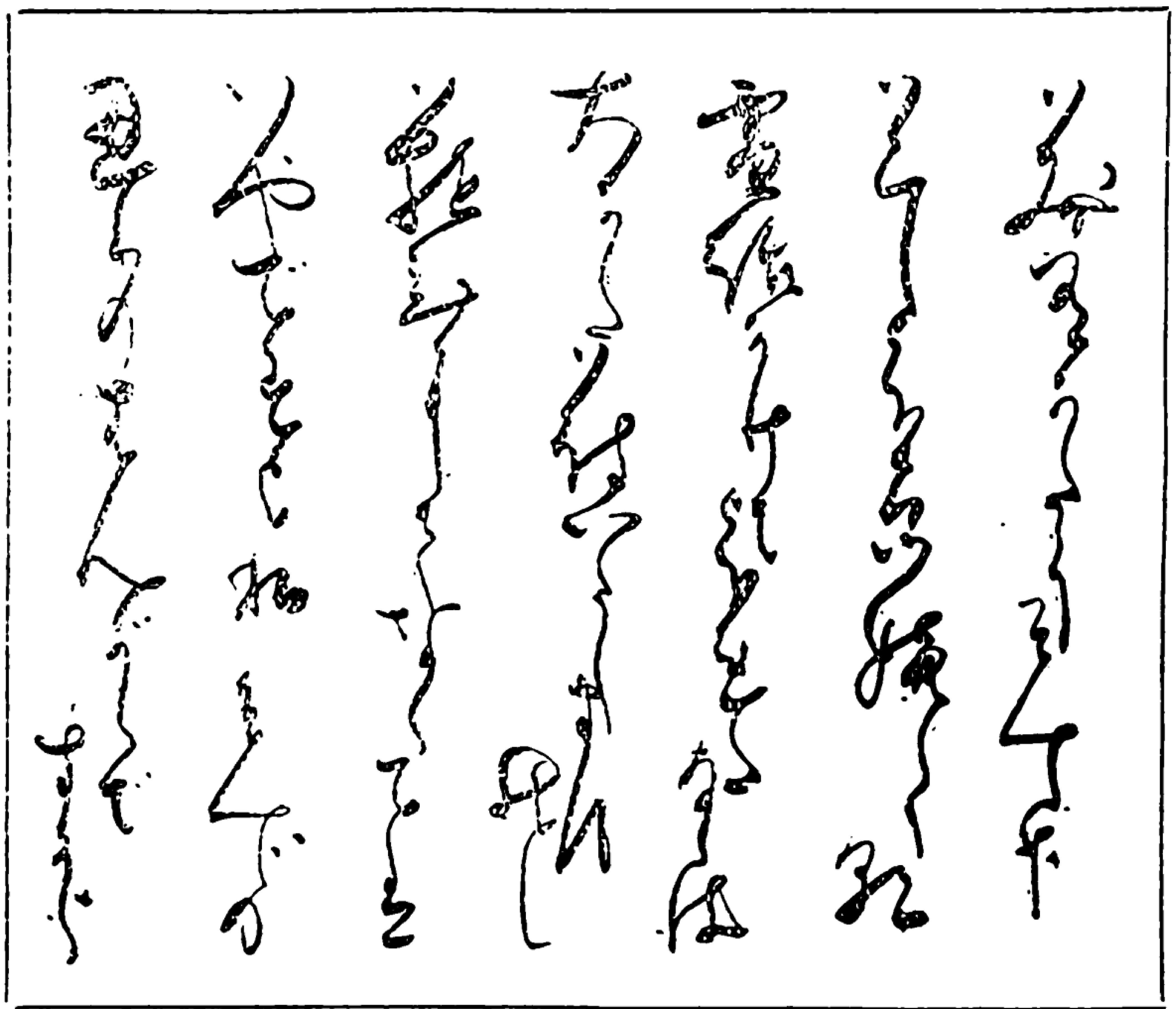
はゝ君いまさばこの君たちの來り給ひしを、いかによろこばしうおもひ給ふらんなどまたもなみだなり。

五月八日。大掃除とて朝とくよりはじむ。

とし子學校のかへさ、久子さまよりうばらのいろよきを給はりしとて、例の花をめづる心のうれしげに語る。

五月九日。しるすべき事もあらでくれたるさびしき日。

五月十日。りき子ぬしめづらしうおはしぬ。さまぐの御物語に興ふかき心をおどろかしつるは又も雹よ、雨もつようみぞれの中に音たてつ。主人はいまいで給ひぬ、電車の中ならむ、傘はもちておはしたり。



關屋夫人の筆蹟

敏子は水道ばしあたりならむ朝かさもたでゆきたるを心もとなし。

はしりかへりしとし子、見しらぬ人のかさの中にいりて、かどまでおくり給ひつとかたるに嬉しくて一言の禮ものべたしと思へどかひなし。

小雨になりし頃、りき子ぬしかへり給ひぬ。



晝顏や
朝顏に似て
あはれなり

十一日より二十日まで

日本火災保險會社長
川崎[illegible]氏夫人
川崎清子

五月十一日。晴天、日曜日。

今日はきのふにかはり、心地よきまでに晴れわたる春の空、日の光りのどかなれど、何となく肌さむく覺えぬ。

起床後手早くおのが身仕度をすまし、夫君とゝもに朝食をなす處へ、豐の出で來り何かと打ち興ずるもをかし。

ほどなく夫君の外出し給ふお手傳ひなどなし送り參らせ、あとかたづけなどにとりまぎれ、とかくなすうちに正午とはなりぬ。

午後より豐のきものなど出し、あれやこれやとつもり合はせ縫ひはじむ。針のはこびをなしつゝ夕食のこん立、また買ものゝ電話など命じ置き、三時半子供を入浴させ、己もするし夫君の御歸宅をまつ。

夜食後豐を相手に打ちさわぎ思はず時をすごし十時臥床。

五月十二日。晴天、月曜日。

今日もまたすみ渡り春の光り何となく外なつかしき空となりぬ、夫君御出勤後、豐を連れて近きわたりをそゞろ歩き正午頃歸宅しぬ。

午後髪を結び、豐を入浴させおのが身もすまし、夕まぐれになれども今宵は夫君御約束ありとて、夜食には御歸宅なし。一日子供の世話にてなれぬ身のいたらぬがちの悲しさ、何かと手まはりかね、夜に入りて漸く靜かに讀書または親しき友への御便り認む。

夫君御歸宅後、しばし御物語して臥床、十一時半。

五月十三日。雨、火曜日。

しと〳〵と雨の音聞えしかば、何となく心地はれや

かならず、起床す。御出勤後けふの如き日こそ針仕事ゆるりとなすこそよけれと、所せまきまでにひろげとりちらしぬ。

卯の花くだしてふ五月雨靜けき日なれど、きのふにかはるはださむさ、火鉢ひきよせ手をかざす、何んたる不順の時候ぞ。

子供も外出の出來かねて、氣むづかしき事のみ云ひて困らす。

約束の花や午後うち來り數種切花とり置き、座敷にそれ〴〵さしかへ、飾りなほす、夜食後豊のねむがればねかしつけ、夫君の御歸宅をおまち致し、枕元にて讀書なしつゝ見まもる。

幼きものゝ靜けき眠りにいかなる夢をやむすぶらん

五月十四日。晴、風ふく、水曜日。

晴れし今日の空心地よう起き出でゝ、夫君を送り參らせてとりちらせしあとかたづける。豊を乳母につけ番町の祖父母樣の許に遊びにつかはす、午餐に赤星樣へ私共兩人御招きにあづかれば、夫君とおのがきものをとりそろへたる後、髮を結び仕度して夫君の御歸宅をまち、御供して家を出づ。

けふは久かたぶりに、皆さまに御めもじ致し、この上のう樂しく時のたつのもしらず、心なしに夕ぐれまぢかくまでも御邪魔致し、歸途につく。近きわたりに母上の住ませ給へば訪れて燈ごろ歸宅す。

今宵夫君は古き親しき友の送別會とて途中にて御わかれ致し、おのれ一人家に歸る、夜食後は事なくふける、十一時寢につきぬ。

五月十五日。曇、後雨、木曜日。

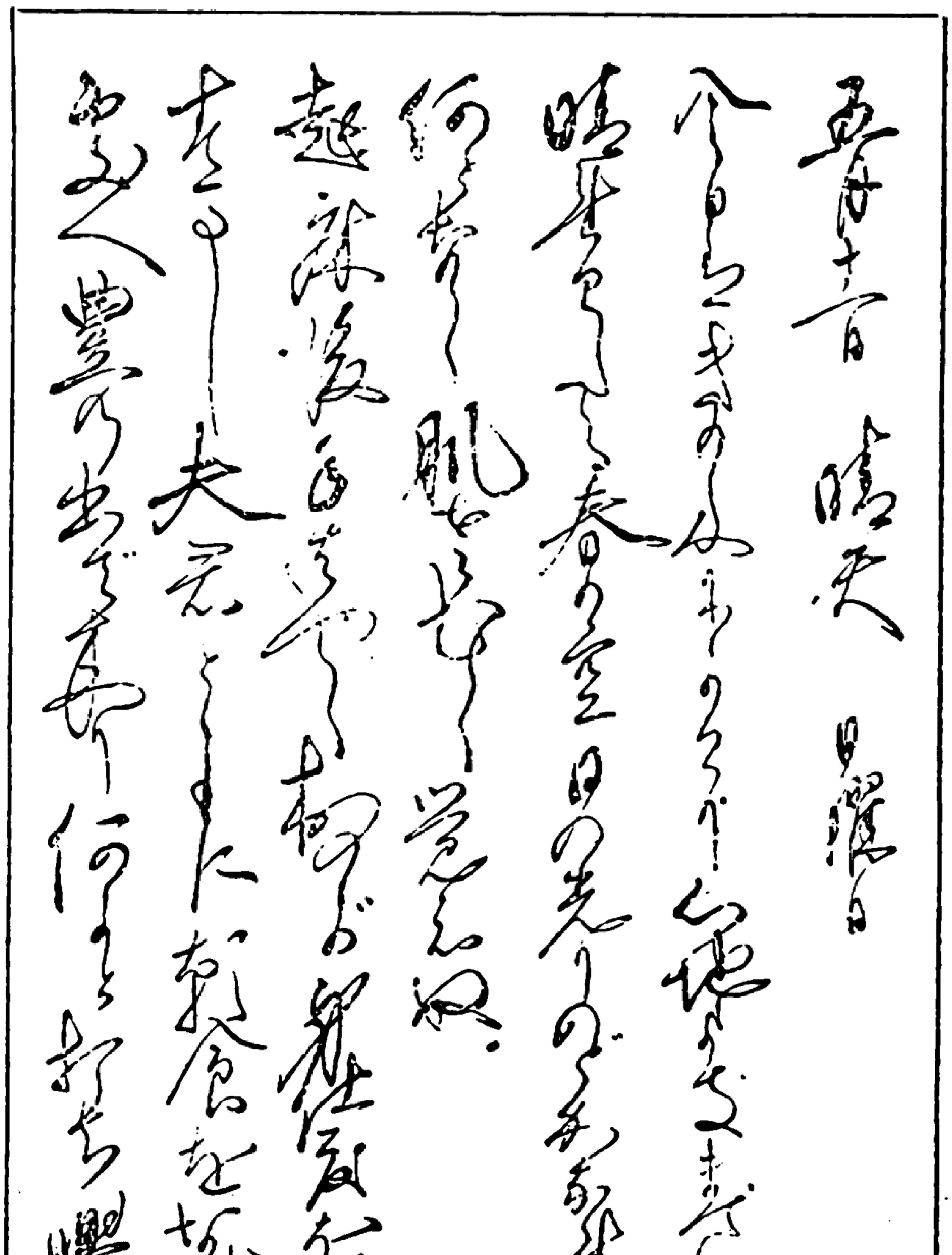
曇りたる空の何となくうすら寒く羽織とり出す

御出勤後、女ども相手にかたづけものに午前中はすぎぬ。午後豊を連れ番町へ遊びに行く、三時頃より今にもふり出さん空もやう、風でもひかさせなば大變とおもひ急ぎ御いとま申して歸る。

夕方より細かきもの降り來りしかば、またも今宵は五月雨夜食後、しばらくぶりに師の君の手本出して昔習ひし筆のあとくりかへし習ふ。

五月十六日。雨、金曜日。

昨夜よりの雨ふりつゞき、心地何となくはれやかならざれば、子供相手に打ち笑ひたのしく時のたつのも打ちわすれぬ。午後髪をそろへ、入浴を豊とゝもになし、かねてよりの縫ひかけしものなど出し、燈光る頃まで取りちらし、夜食のしらせにいそぎかたづけはじめぬ。夜は夫君御用ありて御帰宅なければ、ひとりすまし、終りて久し振りに次の者あつめ蓄音機きかせて、樂しむさまを見れば、おのづとわが身もたのしかりき。あすの日を何かとして晴れやかなる空にかはれかし、子供ある身はのどかなる日てそたのしけれ。



川路夫人の筆蹟

五月十七日。晴、土曜日。

おもひのまゝに晴れし空、夫君御出勤後、豊を乳母とゝもに散歩に出しぬ。

午前中、是非なき急用にて手紙したゝめ出し、机の上をとりちらせしかば手文庫などの始末をなしぬ。

午後豊とゝもに入浴なし、夜食の用意に臺所に出でゝ女ども相手にあれやこれやと洋食の仕度をなし、夫君の御帰宅を今か〳〵とおまちす。

夜は豊のやすみたる後、夫君御書見のかたはらにて、おのれも讀書なしつつ御用をうかゞふ。明日は日曜日かとおもへば、おのづと心おちつき、朝の間なりと他の日よりは、ゆるり

と出來るからそれのみたのしく靜けき眠りにつきぬ。是は十一時を知らせぬ。

五月十八日。晴、日曜日。

晴れやかなる日曜の午前中は、家の事にとりまぎれ午後より雜司ヶ谷なる鬼子母神さまへ、豐の丈夫なれかしと御願ひに參り、色々と御守頂戴して、夕ぐれ前に家に歸りぬ、久しぶりに野外に出でかぎりなき田畑の中を路のあるまゝに、あちらこちらと歩く心地よさ



甲斐御嶽の石門

都の内にて大路のみ行きゝする身の、かくひろびろとせし野の景色ながむれば、氣もすが〲しう、ふく風もすめるこゝちせり。歸宅後、豐を入浴させおのれもすませり。

夜はこれと云ふ用もなく、御無沙汰の處へ御便り出す。

五月十九日。晴、月曜日。

朝日の光りまばゆきまでに窓よりさしこめるに心せかれて起床す。

夫君御出勤後、豐を連れ庭に出でゝ暫し遊び居るうち、正午ちかくなれば、髮を結ひ、午後より久しく御たづね致さねば御わびかた〲高橋延子樣を御訪れ申せしが、をりあしく他へ母上樣とゝもに、御外出との事とて、殘念ながら御いとま申して、途中御無沙汰致せし海江田きゑ子樣を御たづね致し、久しぶりにて御めもじなし、親しき友の三人の母とならせ給ひし御樣子見るにつけ、年月のたつのははやきものよなど、相かはらず昔にかへり、樂しく御もの語をなし、日くれ方

まで御邪魔致し御名殘りおしくお別れ申しぬ。

夜は夫君御歸宅、一日ありし事ども御話し致し臥床

五月二十日。 雨、火曜日。

眠よりさむれば、軒のあま音にけふもまた五月雨。

夫君御出勤後、新聞など打ちひろげ讀み終りし處へ昨日注文せし豊のきもの持ち來りければ、あれこれと求めぬ。

午後豊と入浴なし、夕方近くまで豊のやすみたるが寢起きの氣むづかしき處へ、外出の出來かねてやかましき事のみいひて困らせければ、蓄音機してきかせ子供の相手にて過し、昔にかへりし心地して笑ひ興じ、火ともし頃迄遊びすごしぬ。

豊も食後より晝のつかれに心よく眠りにつきければ夫君御外出ゆゑ、おのが部屋にて新らしく版せし面白きとの噂たかき本うち開き、讀みはじめ深く興に入り時のたつのも知らず、夫君御歸宅の車の鈴に驚き走り出でぬ。暫しの後臥床なせり。

五月二十九日。 木曜日。晴。　（遠山英子）

今日は待ちに待つたる西ヶ原行の日なり、五時頃より支度し、皆様と共に上野を發車したるは八時三十五分なりき。間もなく王子に下車し、東京蠶業講習所に至る。二階の大講堂にてしばしいこひたる後、所長の方の蠶業の發達及び此處の設備等につきてのお話を聞き、一技師の案内にて標本室、蠶室、製絲室等を順次に參觀す。一つ〳〵其宏大、精密なるに感服せざることなく、殊に多くの女生徒が熱心に絲を製せるさまは實に感じ入りたり。

一時頃歸途に就き、途中、飛鳥山に遊び、師の君もろとも西洋鬼などす。

歸りの汽車中にてふと二三首うかびぬ

九重の大宮人もしづの女が
　かふこのわざをいとなまれつゝ

なにならぬ蟲のはきいだす絲なれど
　みくにのとみのもとゝこそなれ

（右紙面の都合にて四三頁のつゞき遠山令孃の日記を此處に掲ぐ、なほ三十、三十一、兩日の分は次號に掲載すべし、記者）

二十一日より三十一日まで

御歌所参候遠山英一氏令嬢　遠山英子

五月二十一日。 水曜日、晴。

いとかひぐ〳〵しきはたきの音に、ふと目さめぬ。さても早くよりさわぐものかなと呟やきつゝ戸を繰ればこは如何に日は早空高く登りてはづかしき程なり。いそぎ例の事ども終へて、父君への御挨拶もそこそこにして學校へといでたちぬ。

一時間目は繪畫にて鳥の寫生をする。あまりみごとなる鳥にて、かへりて色のぬり方むづかしく一方ならず苦しめらる。

けふは久しぶりにてピアノの稽古をする。この次より「ソナチネの一」をせよとの仰せありたり

放課後に英語會開かれ、講演の後藤棚の本にて茶菓をとりていと樂しかりき、四時歸宅。晩餐後裁縫をはじめ思はず長時間を費し、勉强はそこ〳〵にして十時頃臥戸につきぬ。

五月二十二日。 木曜日、晴。

あかつき方に大地震ありて、樂しき夢路を半ばにて破られいとくちをし。

されど地震の爲に皆あわたゞしく起きいで、朝寢の弟までもとく起きいでたれば、これは雨の地震かしらなどゝ大笑ひす。

髪を結び居たる所へ、女中の手紙を持ち參りしかば何かといそぎ封を開けば、この度米井清子の君が、松村氏に嫁がせ給ひて、その御披露の御通知なりき。

今日は武田先生の裁縫の日なれば、樂しみにして學校へ行く。

第四時間目はお歌にて、この前に作りたる新樹をかへして下さる、例によりおこゞとを澤山に頂戴する。

をり／＼は河鹿の聲もきこえきて
　わかばしづけき谷のしたみち

午後は佐藤先生より養蠶の事につきて御話ありたり。

歸りてより御琴へ行く、けふより四季の調を習ひ始む。

復習後橫濱の伊藤樣へ文いだす

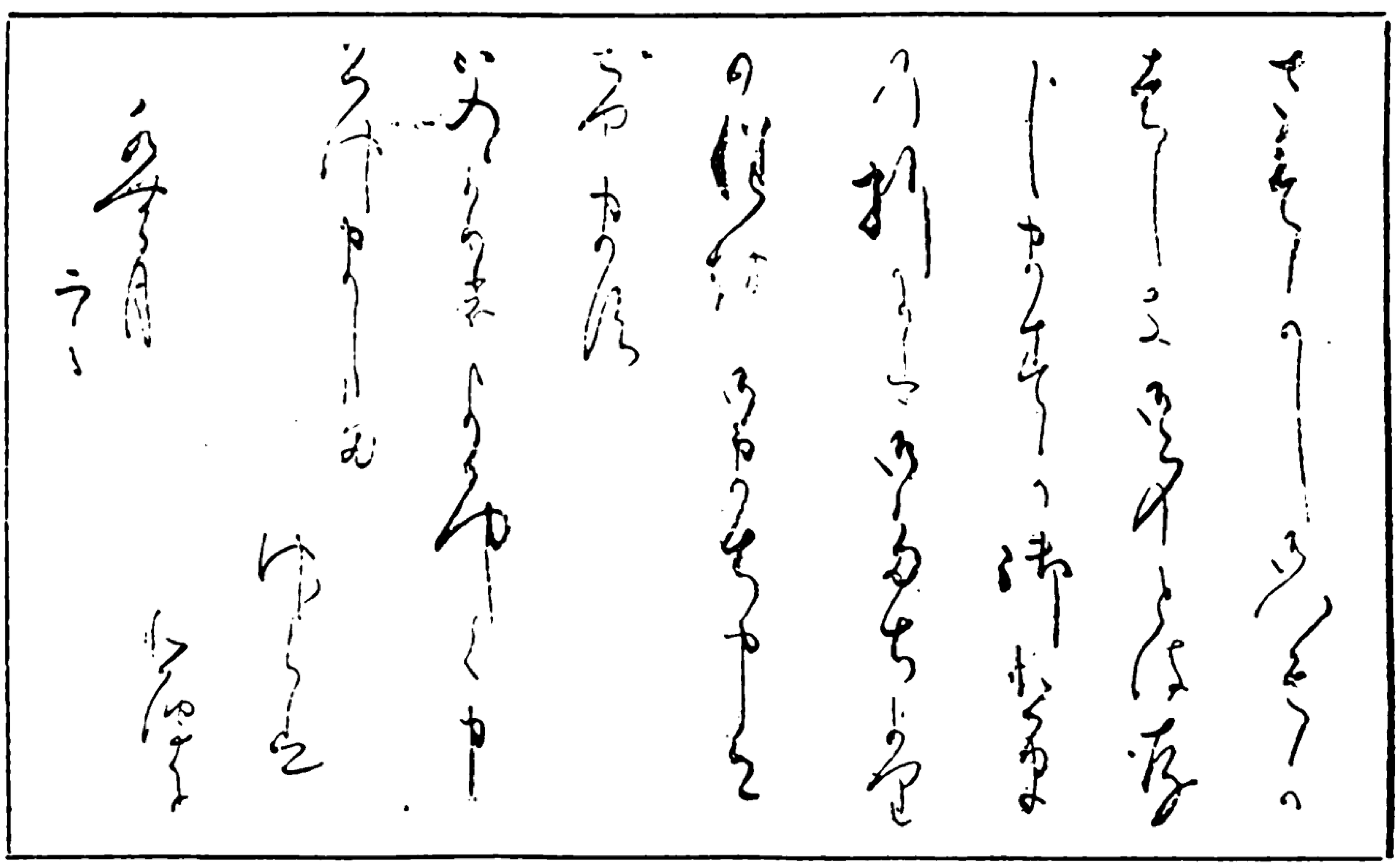
五月二十三日。金曜日、晴。

今日は空よくはれていとすがすがし。

朝餉たうべつゝかたへの新聞を見れば　聖上陛下御不例との事にいたく胸なやまさる、たゞ／＼一日も早く御平癒の程を祈りまつりぬ。

けふのお習字は色紙の書方を習ふ。

花壇の白百合やチューリップ等いと麗しく咲きたるに胡蝶の休らふ樣、實にやさしき眺なり。



遠山英子孃の筆蹟

家に歸り見れば久しぶりにて仙臺の幼年校の弟より使きたれり、いつも健かに勉學なし居る由、てよなう嬉し。

父上御歸宅後弟と例の五目ならべをする、勝ちつ負けつ。

夜は英語の豫習を一生懸命に。

五月二十四日。土曜日、晴。

今日はいと朝ねして六時半頃やう／＼目さめぬ、文机の上に二通の手紙ありたり、一つは寺田樣より、一つは伊藤樣よりの御返事となりき、みづえさす並木の若葉のひまより愛らしきさくらんぼうの見ゆるに思はず、

　實櫻や忘れて通る人ばかり

の句を思ひいで、一人ほゝゑみつゝ校門を入りぬ。

朝の時間は、修身にて自覺といふ事につきて御話をうかゞひぬ。

來る二十九日に五年級は西ヶ原の蠶業講習所へ見學に行く事となりたり、いと樂しみなり。

午後は宅の歌のお稽古日なり。

けふは螢と新竹といふ題なり。

皆樣御歸りの後、米井樣へ御祝に上る、こしをれながら御祝として、

千よろづにいやさかゆらんあひおひの
　　まつのときはの清くもあるかな

と詠みてまゐらす。

夕つ方待ちわびし少女書報届きぬ、しばし讀みて後裁縫す、黒の絽のかたさと、へらのわからぬとにいと苦しむ。

五月二十五日。 日曜日、晴。

日曜日なれば、いたづらに束髪に結つて見る。

朝のほどより來客多くおちつかず。

午後より父君は大久保の西澤樣と青山の高崎樣へと御いでましになる。

近きうちに西洋史の試驗あれば、いづこへも行かず一人文机に向ひぬ。

ふと去年の今頃は、重き病にをかされ、葉山の里に保養に行きましゝ母君にいと御心配をかけ、わざ〳〵歸り來たまひ、又御歸葉の後も大いに心もとなく思し給ひて「園守の心づくしの程を思はゞ」などいふいとかたじけなき御歌をもたまひつるに、はからずも九月頃より母君の御病にはかに重らせ給ひて、心をつくししわがいのりも、いとねんごろなる皆のみとりもかひなく、遂に泣けど叫べど歸りまさぬ旅路につかせ給ひし事ども思ひいでゝ、一人袂をしぼりぬ、これが常とはいへ變り行く世の悲しさよ、あゝ。

折しも幼き弟の隣の部屋にて、何氣なく歌唄ふ聲ききて一しほ涙をそへぬ。

夜は皆と天神樣へおまゐりに。

五月二十六日。 月曜日、晴。

今朝始めて床に飾りし「かきつばた」のいと大きや

かに、ゆかりの色なまめかしく咲きいでたり。

この頃は雀の子が朝まだきよりさへづり歩きて、いと愛らしけれど又かしまし。

第二時間目の幾何は試驗なりき、意外の問題に驚く

歸宅後二三人の來客ありたり。

夜は父君の御背などもみ參らす、父君の眠り給ふと共に、眠氣もよほし遂にそのまゝ臥戸につく。

五月二十七日。火曜日、雨。

ふと目さめてガラス越に庭を見れば、久しぶりにて雨の樣子なり。

絹絲のやうな細い雨がしと〳〵と降る淋しい日、常に人通りの少ないこの道筋は、尙更靜かにて唯二三羽の燕が雨にぬれて電信線にとまれるのみ。

けふは學校の當番にて少し早く家を出づ。

はき掃除の後壁のしみを家政にて習ひし石鹼洗を應用して洗ひしに、よほど美くしくなりければ學びしかひありと思ひていと嬉し。

今日は海軍紀念日なれば、小笠原大佐より日本海大海戰の御話ありたり、時間の不足の爲くはしき御話もなく、只かの大海戰に勝利を得たるは、東郷大將の確乎たる自信と、將卒の獨斷と服從の力とによるとの事なりき。

第二時間の歷史はケーザー及びオクタウイアヌスの事蹟にて、古今に稀なる二大豪傑の人となりいと愉快にうかゞひたり。

歸宅後お琴へ行く、夜は歷史をさらふ。

五月二十八日。水曜日、晴。

雨後見渡す限り渺々として蒼海の如し。

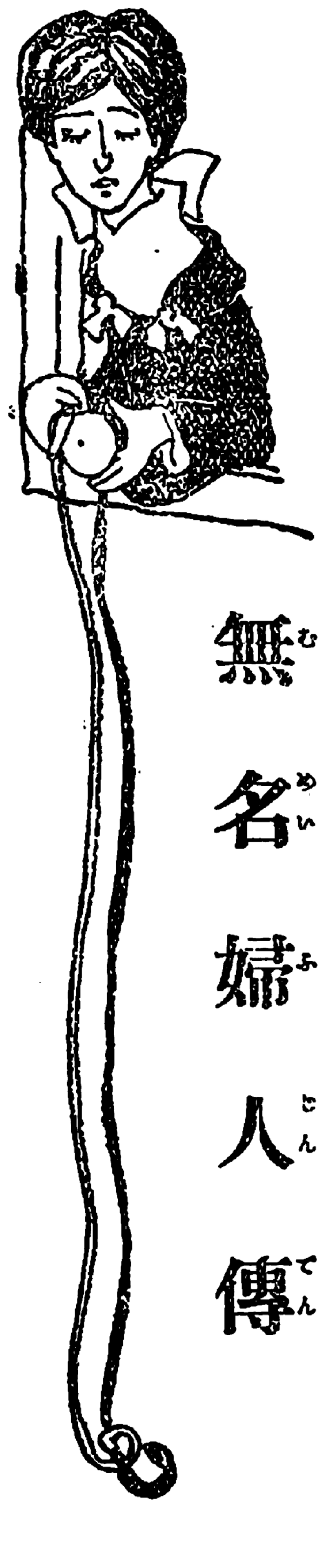
今日は　皇太后陛下の御誕辰の日なれば休學なり。

かはりゆく世の悲しさに又しも袂しぼりぬ。

父君の御いでましの後、宮島豐子の君の御許へ遊びに行く、いつもながら御優しき御言の葉に遂々長居す

午後より切通の岩崎樣へ行く、途中にて銀座の二葉によりてたぼ止めを求む。

折よく小母君も御在宅にてしばしよも山の雜談にふけりぬ、又しも亡き母上の昔ばなしのみ多くて。



無名婦人傳

（二七）無情の舅姑を恨んで切り落したる丸髷を夫の前に捧げし不幸の婦人

櫻木雪江（麹町）

女といふものが如何に果敢ないものか、それについて新しく知つた一つのお話があります。

明星軒といふ球戯場の一人娘と呼ばれた美人のお秀さんは、蝶よ花よと兩親に愛され、腹違ひの兄さんとも仲睦しく、高等女學校まで卒業して何不足ない境遇でした。

商賣柄とて若い人達の出入の多いことゝて引く手は數多ありましたが、中々しつかりした江戸ッ子肌のお秀さんは、一度とて浮いた噂を聞いた事さへありませんでした。

丁度お秀さんが二十歳の時に、近所の羅紗問屋の二男に是非と望まれて止むなく懷しい親の手元を離れて嫁ぐことゝなりました。

先は世間に名高い富豪のことゝて、店の者七八人、奥には舅姑長男夫婦と小姑と、自分等夫婦と總勢十何人の家族です。其の多い中に女中は只一人、嫂さんとお秀さんとは毎日々々眼の廻るやうな忙しさで、ろくろく眠る隙もありません、夫れに姑は大の勝氣の喧しやとて、行儀作法の正しいこと暑中の汗のだく〳〵流れる時でも、横坐り一つしないといふ有樣、お秀さんは元來蒲柳の性で烈しい活動に馴れない爲め、中々堪へ

られません。嫂さんと心を合して一生懸命に働いてをりました、けれど不馴れな二人を見て何んで默つてゐられましやう、一々言葉に力を入れて當るのです。又小姑は女の末つ子とて我儘存分自分に氣に入らぬ事があれば直ぐ姑に告げ口して姑の心を荒らげます。其の上日本橋邊に居る良人の姉さんや海軍に嫁いでる姉さん達が度々來ては、「お秀の遣り方が惡い」とかそれは酷い小言の云ひやう、お秀さんは嫂さんと寄ると障ると藏の後や勝手の隅で泣き合ひました。晝は力の限り働いて氣苦勞の絕え間なく、夜は皆寢靜つてから裁縫で、寢るのが十二時過ぎになります。朝も一番先に起きて隣りの部屋の嫂さんを呼び、二人は同時に働くやうにしてをります、何方が早くても叱られますので呼び合ふやうにして一寸の隙も油斷はなりませぬ。

お秀さんは身に勝つた仕事の爲に時々床につくことがありました、良人は望んだ位ですから愛して居たのでしたが、一體放蕩兒とてお秀さんがお嫁に來て三日目の晩、もう家を明けるやうな不始末、お秀さんは情けなく悲しく物足りなく思つたのです、姑は倅の放蕩を止めさす爲めに美しい好いたお秀さんを無理にもらつたのださうです。



木かげの風

如何に強く苛められても嫂さんは二歳になる可愛い子供があつた爲めに、力強かつたのですが、悲しいかなお秀さんにはまだ出來ませんでした。

或る雨のびしよ〱降つて物憂い晩でした、舅姑と

姉さん二人は集つて良人に責めてゐるのです、あんな弱い體ぢや子供も出來ないし、先へいつて仕方がない明日にでもいよ〳〵歸すがいゝ、と小聲で云ふのが襖越しにお秀さんの耳に入りました、お秀さんは卒倒せん計りに驚き悲しんで、二階にかけ上りさめ〴〵と泣き伏しました。口惜しいやら情けないやら自分の身の不遇をかこつて、今夜が居治めと決心しました。

親の權利と姉さん二人の威光とは良人に勝利を得させませんでいつも弱かつたのです、夫は何ともお秀さんに云ひませんでしたが、氣の所爲か冷やかな素振りが見え透いて、お秀さんをます〳〵失望させてしまひました、お秀さんは心を鬼として鏡臺の引出しから剃刀を出して、惜しげもなく丸髷の根元からプツヽりと切り落し、夫の前に捧げました、良人を初め家中の者は大變驚きまして刃物を隱して置かないのが手落ちだと云つたさうです。翌日早々お秀さんは戀しい我家に歸りました。

運の惡い時は惡いもので、其の月の末頃お秀さんは姙娠してる事がわかりました、毎日々々泣き暮し優しい兩親の慰めで生きてる位でした、早速先方へ其の事を話し込み日立つてから子供は引き取られることゝなつたのです。

ある晩お秀さんは一人窃と家を出まして、支店より歸る夫を路に待ち受けました、いろ〳〵と身の振り方を話し、子供があること故再び元のやうにと頼み入りました、其時良人は冷やかに頭を振つて、「虛弱なお前に到底堪へられまい、體が大切だから靜かに保養せよ」といふやうな挨拶、おや子供は長男としてくれるやう頼みましたら、如何しても聞入れずとう〳〵庶子といふ事にして、永久の別れをしたのです。

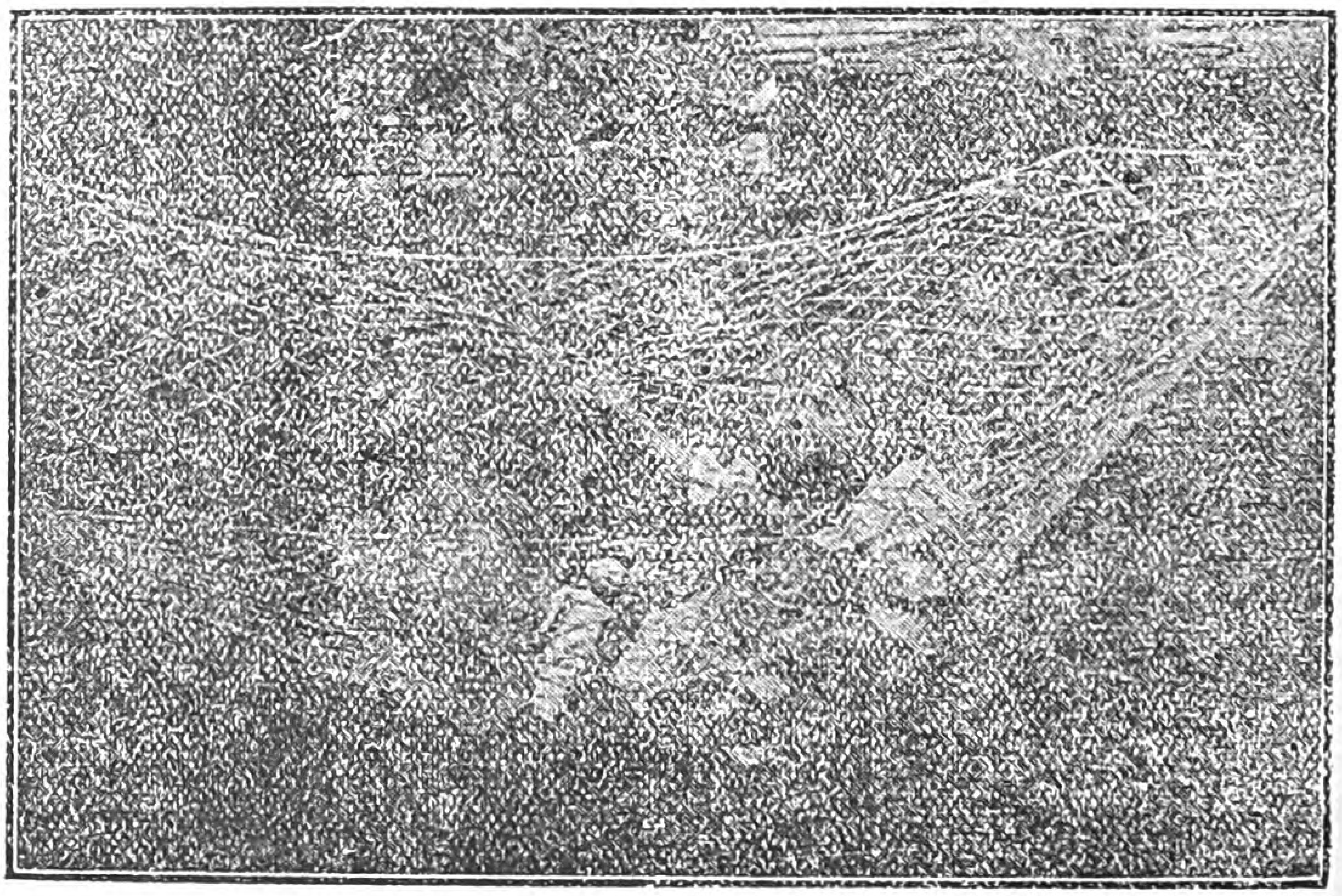
生れた子供は玉のやうな男の子、どんなにお秀さんは手放し度くなかつたでしやう、泣く〳〵可愛い子供と又しても別れなければなりません、身も心も痩せ衰へて病床に二月餘り臥す身となりました。

月日は流水の如く經て、病氣は次第に快くなり、際立つ肩の細り、美しい人は凄いやうになりました。

明けても暮れても苦勞の絶え間なく、とう〳〵一年は立ちました、毎々禪學の書を讀んだり、基督敎の書を見たりして慰めてをりました。

丁度芒の風に蟲の音細る一日、神田のある敎會へ通ひ初めて、神の御前に身の懺悔をいたしました、すると後の方で「お秀さんでしやう」と吾が名を呼ぶ人がありますから驚いて見れば怖ろしや、先の良人の姊が二人立つてをりました、敎會等に行くやうな性質の人ぢやないのがどうして來られたものかと不思議の眼を張つてをりました。

其時姊さん二人は涙を流して、己れの罪を神樣の前に誓つてお秀さんに謝したのです、お秀さんも柔しく云はれて、自分の至らない罪を詫びて、三人は仲良きお友達となりました。

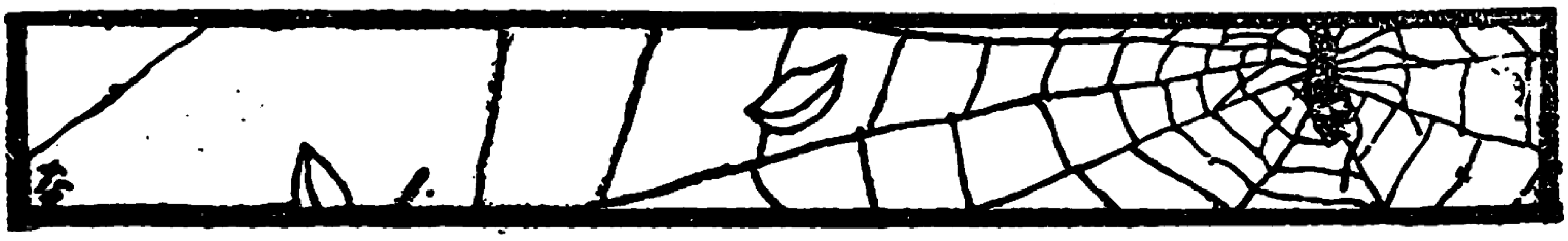


眼が覺めるとハンモツクの中

「私達二人は屹度お秀さんのお力になつて働きますよ、何卒今日から遊びにも來て下さい」と泌み〴〵お秀さんに云つて別れたのです。

姊さん二人は容姿は普通でしたけれども、裁縫書畫盆景茶の湯活花禮儀作法、何一つとして女の道を辨へないことなき怜悧者です、夫れ故物の解りも人以上早いのです、さぞ私の至らぬところの多いのは齒痒く思はれたことでしたらう、あゝ自分が惡いのです、とお秀さんは涙を流して私に語られました。

何に不足なき身と生れながら、精神の傷手に絶えられず、尙美しき二十四の齡を、孤獨で暮して居られるのであります。



一日の挽歌

ゆきのしたの小さき花
銀白色に光り
草葉ひやゝかにそよめきて
夕暮は來れり。

暗と水氣のしづけき舞踏、
白きコカインのにほひ、そこはかとなく
うすやみの虛空よりたゞよふ。

夕暮の銀白色の花のいろ
呼吸すればをのゝきふるへ肌にしむ。

あゝわれ涙おさへてほゝゑみ
一日の幸をうたふ事を
知りそめしより、

滅び行く夕暮の
魔僧の呪咀堪へがたし。

衣裳のいざなひ

重き紫紺の袖のいろ
鮮血のやうな緋のおりもの
思ひ屈してしどけなく
身にまつはれば、

おろかしき芝居氣のまたしても
若人の胸に額をあつる事
あでにやさしきものとする、

ロマンティックの幼き夢より
醒めんとし、さめなむとする心に
しうねくも
センチメンタルの小唄を強ふる
衣裳のむれ、

たゞよふ物のかをりに
みれんの涙しみ〴〵
すゝりなく衣裳のいざなひ

望月れい子

髑髏の歌

下

横瀬夜雨

十（つゞき）

生れしは京の白河、京の水産湯に汲み
て肌の匂へる

棄てらると知らで開けゝむ嬰兒の先
見しものは母の眼なるを

蛇の跡を噛むと夢みけむわれを棄て
たる母の苦

あひゞきの待ちぼけらしき尺八の夜
深く廻る白河の里

白河の里に追はれしみどり兒は牛呼
ぶ爺が聲に馴れしか

胸毛刺す爺が懐に泣いぢやくり寢し
夜もありき似つかぬものを

二絃琴鳴らす物乞のお白粉を小いそ
が背に今日も見しかな

伏見から嫁入の來と狐火のきれぐ
なるを指さす雨夜

母無子の母戀しとにあらねども金扉
の乳を泣きて吸ひけり

最上川最上かくしの霧晴れて船行く
なべにいろは倉見ゆ

いろは倉惣漆喰の壁の上になゝつ小
女郎のふり袖書かむ

いろは倉本間が家の菩提所の寺のむ
すめと呼ばるゝも可し

母の眼をはかる聰さは預け兒の小さ
き胸にも有ちてしものを

憎まると知る知る何時か京訛忘れて
出羽のをとめとなりぬ

忘れめやあつらへ兒なる君なれば惡
まれたまふと人の教へし（あつらへ兒、方言、里子の義）

火燃え出る柘榴の實を吹打たむ母の
閉たる黒金の戸に

指の背を眼にあてゝ泣くがくせなり
しと姉は語りて今も涙す

不圖見しは山かゝちめく蛇の眼と夜
の鏡に影曳く帶と

懷かしや廊下の壁に泣いじやくり爪
もて書きし梵字羅馬字

書きさして人來と袖に秘めしかばし
わめる文ぞふそに見ますな

紅差いて押せど映らぬ君が乳はたゞ
丸らかに白しと思せ

右枕右に寢まさば寢苦しみ背向に寢
むとそばえても見し

君故に指に刺したる針の痕の疵とな
れるが悲しかりけり

「貝爪の紅く小さきを有つ指の疵つけ
りてふ見まほしきかな」

貝爪の十のをゆびを紅溶いて小菊に
捺して君におくらむ

をゆびてそ搔きも裂きつれわが肌は
御料の林人はぬすまじ

髑髏の歌を葬る

その一

老いたまふ母ざみ在さぬ世にしあらば死も美しう急ぎ
けむものを

悲しいけれどわたくしはうたなどしりませぬ、つくつたこともござ
いませぬ。

かすれ〴〵のむせび音をお聞きくださいませ「ぬす人よ綾をあたへむ今宵いんで吉備の少女を盗りてかへりね」云

ほどのひぬ恨めしき哉

人は見そね、断ちて八十九日目を月に背きて洗ふわが髪

迷ひきと言ひよ詫びよと責むれども悔の涙は湧かざりしものを

沖を見れば行く舟見れば堪へがたな何處へ行く船？こともづてあるに

一人をのみ思ひ守らむ君をのみ思ひ守らむさても悲しき

盗人よ、からたち垣を右にめぐり榎のかげを擇りて忍び來よ

繪とうたと、張り交せられし六曲の屛風は深うたたまれけむか

其屛風二人してよまむ前髪をわが頰にあてゝといひし其屛風

やすけさはこの髪の丈、帯幅も無き髪のたけ、嫁げといはず

暗がりに隠れてひとり梳く髪の一寸把りたまひし左手を見るもはかなけ



れ胸にさし入れて今宵もいねむ

なぜあんなに冷たいのだらうとあとでおつしやつたのが思へて思へてなりませぬ、あの時はめておた金の指輪、つまらない指輪だけれど、指輪はつまらないのだけれど、なつかしくてしかたがありません、毎夜はめてねます、そして冷たい手を一しよにあたゝめます、乳のぬくみで。

あゝ御涙をかうしてあたゝめやうと思つたに……

君が手のぬくみ殘る？と額にあて唇
にふるれどつめたきものを

厚帶を纏く手の手弱さ紅をさす白き
小指を君ゆゑに有つ

髮の下に置きてだに痕のつくものを
君纏くまでに手枕はせじ

その二

……遲うございました。

何にひかれて殘る命でせう、いき損ね死にそこねてと、咽び咽び泣いていらつしやいました。私が行つた時は息ふきかへしてから四日目だつたのでございますもの。

からだ中まだうか腫れて、しほたれた髮……帶はゞも無いと歌ひなされた、其短い髮が額に亂れて、うるさゝうに搔き上げ〳〵なさいます。

身動きすると潮の香がするとおつしやつて。

十八日の夜、命を籠めて書いたお文！「引きさいてしまひますわ」と寂しう笑んでいらつしやいますけれど、懷へ入れたまゝ沈んだので白い表紙の茶色ににじんだのがお机においてあります、二十八宿。

かぞいろは哀れとみずやと二十八宿の卷頭にありますわね。けれどもう駄目、嫁ぎもなさいますまいし、長くこの世に生きていらす御身とも思はれません。先生にすまない〳〵と思ひつゞけて、こんな事もなすつたのでせう。わたしは涙の中で、死んでは下さるな、といつてお嫁に入らつしやいとはいひませぬ、月波へはもう許される筈もないから靜かに死んだやうな世を過して下さい、この世に何にも〳〵殘さずにと申上たら、えゝとうなづかれました。

あれまでの悲しい努力を考へたら……水に沈んだ時

の悲しいお心を汲んで上げて下すつたら……こんな世だつたと思召して、髑髏の歌を葬つて下さいませ。

仰向にねたまゝですけれど、元氣はよろしうございます、青い顔をまつ白な枕に埋めて、潮水を呑んだから、辛い咳が出てしやうが無いのといひ〳〵、とぎれとぎれに語るのですけれど。

誰にも言はないで、何にも知らさないで、たつた一人だまつてしなうと思つて、ご覧なさいな、枳殻の垣根の上を越して、白い燈明臺が見えるでせう、まだ明け〳〵で舟もさう浮いてはゐなかつた。

燈明臺の火は夢のやうに眩いてゐました。あの下から沈んだの。

三度ばかりひどく何かにぶつかつたのは知つてるけれど、それからはちつともわかりませぬ。

二度目に深く沈んだ時、目を明けて見たら桃色の砂桃色の水、何も彼も桃色に見えました。

あゝ桃色の世界と思つたのがおしまひでした。

泳ぎを知らないから、ずん〳〵と沈んだのでせう。

悲しいこともどうもありませんでした、海月がきれいに浮いてるのを桃色の世界に見た時、海の底に誰か待つてるやうな氣がして……

けど、先生はどうしていらつしやるだらうと思つたら……私は指をしつかり組んでゐたの、右にも左にもぐわう〳〵と浪が鳴つてるやうにも思へたし、どこまで沈んだら足が地につくかとも思つたし、悲しいも辛いも夢の世に沈む間であると思つて、矢のやうに流されながら、苦しみのさ中にありながら、不圖先生は？と思つたらあつい涙が睫から湧いて來て、ぢき溶けて流れるのを感じたの。

十八日の夜は、更けるまでいろ〳〵の人に手紙をかいて。

二時前にねどこに入りました。そして十九日の朝は五時に起きたの、そのたつた三時間。

たつた三時間だつたけれど、夢は天地を驅けまはつ

てふたゝび逢ふを許されぬ人にも逢つた、お母さまにも逢つた。

柳子さんにも逢つたし、××寺も見ました。

××寺の本堂の丸柱に先生は凭りかゝつていらしつたの、柳子さんは琴、私の母は八雲、先生のお母さまは笙を吹いて。

母の里の亡くなつた祖父が太鼓を打つてをりました

聲が元のやうに出るやうになつたと仰有てお歌ひになる先生のお聲につれて、私は柑子色のうすものゝ袖で手には櫻を持つてゐた、うしとら神社の御寶前で舞つた吉備舞を舞ひました。

舞つてるうちに、後へ下げてた毛がほつゝりと切れて落ちたので、泣いてゐるとめがさめました。

夜が明けて‥‥

母が白牡丹に誂へて拵へさした入毛は脱けて、ひすゐの簪も何もありませんでした。

涙に取られた髪がせめて鹿島へ流れて行くといゝけれど‥‥

ほろ／＼と枕の上へ流れ落る涙を、そばからハンケチで拭いて上げて、片手をしつかと握り合つて泣かるるだけ泣かせて上げました。

おばあさんはお眼が見えないのです、私と向きあふ位にして、枕元にずりよつて、痩せた手で、さぐり廻すのです、泣いてらつしやる顔の上やら背中やら、いたくしげに‥‥

どうしたらあなたの涙は乾くの！と聞いだら、いゝの、どうせ。ただ、人に汚されたくない。私の涙は眞珠なのよ。

私の涙は眞珠なのよと笑つておつしやるのです。

先生。許して上げて下さいませ。あの儘死んだのなら、何とお思ひになりますか。生きかへつたからこそお恨みもございませうけれど、すべてが運命なのですもの、神が許さないのですもの、道子さまに代つて私

がお詫いたします。どうぞ許して上げて下さいませ。私はふりかへり／＼昔の學校時代を思つては涙が流れてしやうがございません、荒まなかつた其頃の道子さん、津山時代のすぐれて花やかだつた生活！　思うと悲しうございます。あの澄んだお聲が何の爲に今の悲みの極の聲となつたのでせう。

先生。道子さんは今なほお上を思ふて靜かに近寄る死の前に、戰慄しつゝお上を思ふて、泣いていらつしやるのです。

私は遅れて、前に其髪を切る時、留めることが出來ませんでした、今また遅れて、其入水を留め得ませんでした。お嫁入のしたくは殘らず出來てゐながら、久しくはあるまじきお命なのが泣かれます。

さつき廿七日

吉備の國より

き代



『髑髏の歌』に跋す

暴君　ネロが　怒りに觸れて死せし奴隷なりきと　今は思はむ。

みづからを　あざけるうたを　うたはむに
かたへぎゝして　てうちはやさね



憂鬱

山田邦子

あざ笑ふ　腦の淋しき暗がりに　媚ぶるが如く　匂ふ丸髷。
たゞれたる　腦の冷きくらがりに　ひよつこり映る　女髪結の顏。
自らを　あざけるとても　何あらむ　此おろかさを　つぐのふすべなし
此悔を　吾子も　其子も一筋に　とめてゆくらん　あはれさが見ゆ
あはれこの　なまけ遊びにしみてゆく　油の如き　いのち悲しき
時折に　涙ぞたまる瞳の底の　いのちにしみて春は來にけり
やせほそり　君戀しとて　初袷着てまゐりなば　ゆるし給ふや
空にごり　むし熱き　風にじみ吹く此憂鬱にいのち　死ぬべき
うちもだし　今日も脉うつ此いのち　又此まゝに　たそがれにけり
唯一つ　生きのこりたる　金魚をば　あはれがりつゝ　麩を與へける
夫よ子よ　此血管をめぐる血の　一しづくだに　ふれで死ぬべき
此血管の　此血の暗きわが生命にかゝはりもなき　兒のひとゝなり
かくてなほ　生てあるこそあはれなれ　火とり蟲にも　劣れる生命
火とり蟲　もろきみじかき美しき　いのち見るこそ　悲しかりけれ
日を一日　もの言はぬ母のかたはらに　眠れる吾子の　顏のあはれさ



木曾の自然

百瀬美水

碧の空。綠の地。聳え立つ四方の山々は、ちやうど藍青の幕をひき廻らしたやうな、わが信濃高原はたゞ綠の一色に包まれてゐる。

初夏の太陽が若葉に反射して、綠の底に沈んでゐる人の住居はわづかに見えるばかり、何處を見ても眩ゆいばかりの青さである。

さや〳〵と淸々しい南風が吹き渡ると、新綠が濤のやうに搖ぐ。圓い槻の森は、もくり〳〵と動いてゐる赤い美しい端午の幟が、所々に立たつて、ひた〳〵とあふられ、矢車がチカ〳〵と光つてガラン〳〵と廻つてゐる。大きい赤鯉に風がつゝまつて青葉の間に浮動してゐる狀は、海底の海藻の繁つた中に魚の遊んでゐる處を見るやうだ。光線も入らない位に繁つた樹木の太い枝から枝へ幾條も淡紫の布をさらしたやうに藤の花が咲いてゐる。その蔭で、郭公が啼いてゐる。青いところへ雪が降つたやうに、アカシヤの花が咲きだした。アカシヤの花は實に高い香りだ。並木の下を通ると、若葉の匂ひと高い花の香とで咽せ返るやうである。橋の上に立つて川の流れを見ると、兩岸の若葉やアカシヤの花が寫つて、流るともない深い水は蒼々としてゐる。流の末を見透すと、一條の川が青いトンネルの中へ入つてゆくやうである。

この水が方々に引かれて、田にそゝがれる。つひ先頃まで、見渡す限り紫雲英の花が雲の樣であつた田が束の間に水田と變つてしまつた。縱横に、碁盤の目のやうに通じてある小流の岸には、柏楊がたくさん生えてゐる。一目に見渡せる田ではあるが、この淺綠の柳に遮られて見えない。南風が吹くと、長い枝はみな一

様に北に靡いて水田に寫り、青い漣をたてゝ、仕事をしてゐる人々が如何にも涼しさうである。小流れの岸には、クロパーの花が匂ひ、川底には、梅花藻が一面に房々と繁つて、美しい白い花が水面に浮んで咲いてゐる先方側の藪ばらが、蕾豐かな枝をのばして流をひと跨ぎにし、花のアーチを作つてゐる。藪から藪へ葭切が飛つたつて、忙しさうに鳴いてゐる。

いつでも午後になると、淡い靄でも懸つたやうに天地は白つぽくなる。乾の隅に未だに雪をいたゞいてゐる連峯は、見えなくなつて仕舞ひ、つひ近くの低い山は、一黒ずむほど色濃くて、その先方は藍青に見える。幾重かの山の一重一重奥へゆくにつれて、だん〳〵白つぽく淡くなつてゆき、一番むかうの一寸と見えてゐる山は雲の影のやう、空を劃してゐる線が消えさうである。



木曾山中鳥居峠より御嶽を望む

西の高峰、怖ろしいほど樹木の繁つた鉢盛山と、東の山、樹木の少ない優しい鉢伏山とは、相對して女男山の稱がある。空高く舞つてゐる山燕は、毎夕西の山へ歸つてゆく。雨後などに見れば、手も屆きさうに思はれるが、なか〳〵嶮しい山で、熊笹が生ひ茂り、今なほ雪が深くてよういに消えないあの山中の雪の下に生ひ立つた石楠花と榊、今私の園に植つてゐる濃青の堅い葉、山中にあつたそのまゝの姿である、急に暑い處へ出て、堪へ得るであらうか。山中にはいろ〳〵の珍らしい植物があり、谷々には、わさびが茂つてゐる、が、

今雪が深くてとる事が出來ぬさうである。私は鉢伏山へ上つた事がある。峰には小さな祠と、地にはつてゐるアラヽギの一本より外には何もない、姫石楠花が叢生して、赤い實がなつてゐた。その時採つてきた、赤い紙袋をくゝつたやうな、名から優しい美しいあつもりさうは、一年咲いて枯れて仕舞つた。鉢伏山の麓は、今躑躅の眞盛であらう、午後の日に照らされて、茫乎と赤く見えてゐる。樹木が少ない故、躑躅が非常なもので、處によつては全く躑躅ばかりで、嚇と一時に咲いた時は、火の海のやうである。

躑躅は山にばかりではなく、其處此處の松林、芝原の所々に毬の様に咲いてゐる、山の細かい紅いのとは異つて大層大



木曾山中

きい朱の色である、綠の中に朱の花が咲いてゐる。學校歸りの少女たちは、手に手にこの朱の花を持つて、松蟬が無數に鳴いてゐる松林の小道を歸つてくる。松の花が咲いて少しの風にも硫黄の煙を漂はしてゐる。林の中、芝原の中へは肥えた蕨が今出盛である。ことに奈良井川の畔、未だ開墾されない曠い芝原は、蕨摘みの場所である。每日二人三人蕨摘む少年少女の姿をみぬ事はない。芝原には、美しい芼茛の花が咲き滿ちて、眩しく黄金の波を打つてゐる。花は綺麗でも毒持つ故、幼子でさへも折り取らない。思ふさまこの曠い野へ領地を擴めやうとしてゐる。

斷崖の下、川の小波に打ちよせられた砂金交りの砂地には、月見草が夥しい。斷崖

樣に北に靡いて水田に寫り、青い漣をたて丶、仕事をしてゐる人々が如何にも涼しさうである。小流れの岸には、クローバーの花が匂ひ、川底には、梅花藻が一面に房々と繁つて、美しい白い花が水面に浮んで咲いてゐる先方側の藪ばらが、蕾豐かな枝をのばして流をひと跨ぎにし、花のアーチを作つてゐる。藪から藪へ葭切が飛つたつて、忙しさうに鳴いてゐる。

いつでも午後になると、淡い靄でも懸つたやうに天地は白つぽくなる。乾の隅に未だに雪をいたゞいてゐる連峯は、見えなくなつて仕舞ひ、つひ近くの低い山は、黒ずむほど色濃くて、その先方は藍青に見える。幾重かの山の一重一重奥へゆくにつれて、だん〲白つぽく淡くなつてゆき、一番むかうの一寸と見えてゐる山は雲の影のやう、空を劃してゐる線が消えさうである。

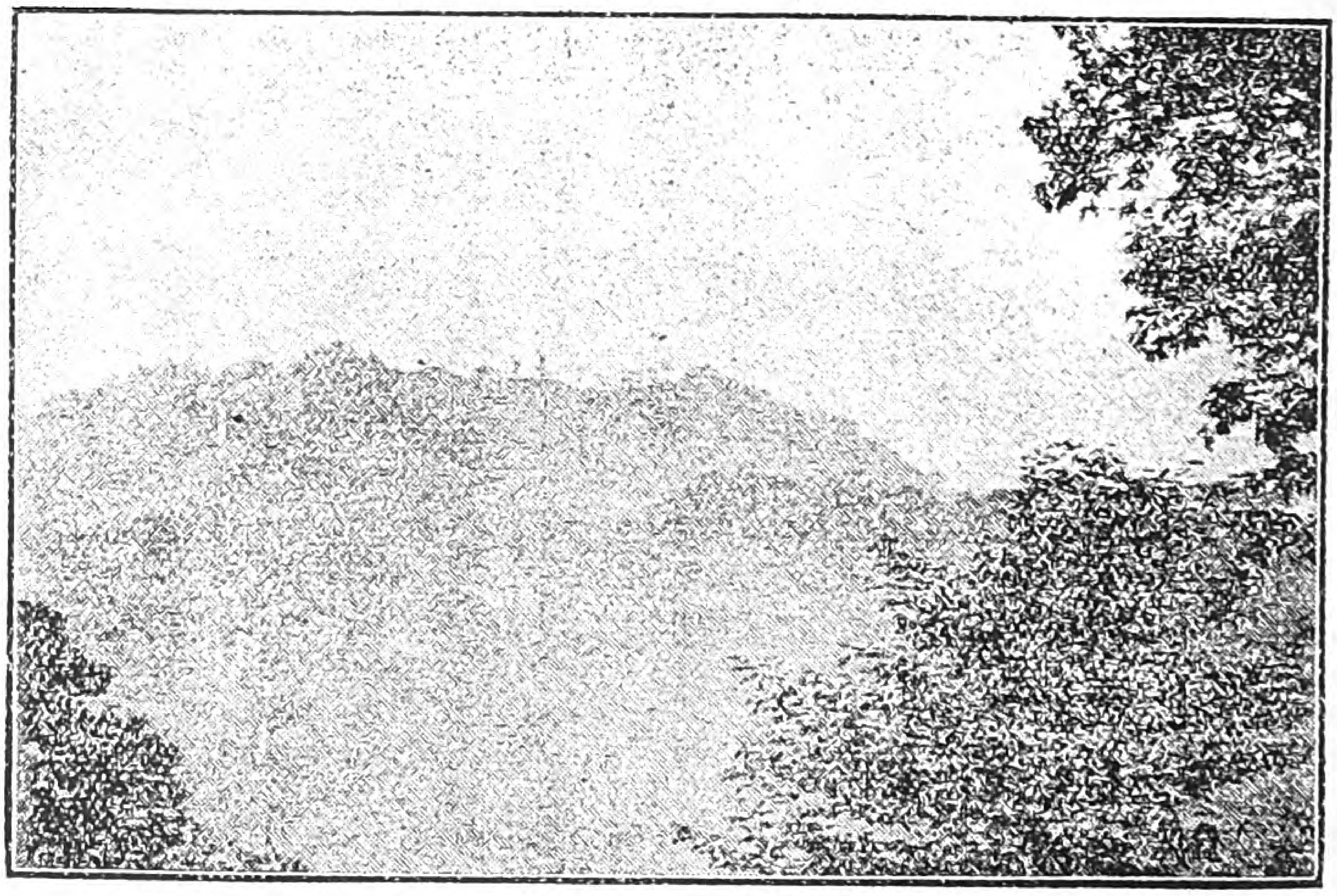


木曾山中鳥居峠より御嶽を望む

西の高峰、怖ろしいほど樹木の繁つた鉢盛山と、東の山、樹木の少ない優しい鉢伏山とは、相對して女男山の稱がある。空高く舞つてゐる山燕は、毎夕西の山へ歸つてゆく。雨後などに見れば、手も屆きさうに思はれるが、なか〱嶮しい山で、熊笹が生ひ茂り、今なほ雪が深くてよういに消えないあの山中の雪の下に生ひ立つた石楠花と榊、今私の園に植つてゐる濃青の堅い葉、山中にあつたそのまゝの姿である、急に暑い處へ出て、堪へ得るであらうか。山中にはいろ〱の珍らしい植物があり、谷々には、わさびが茂つてゐる、が、

今雪が深くてとる事が出來ぬさうである。私は鉢伏山へ上つた事がある。峰には小さな祠と、地にはつてゐるアラヽギの一本より外には何もない、姫石楠花が叢生して、赤い實がなつてゐた。その時採つてきた、赤い紙袋をくゝつたやうな、名から優しい美しいあつもりさうは、一年咲いて枯れて仕舞つた。鉢伏山の麓は、今躑躅の眞盛であらう、午後の日に照らされて、茫乎と赤く見えてゐる。樹木が少ない故、躑躅が非常なもので、處によつては全く躑躅ばかりで、嚇と一時に咲いた時は、火の海のやうである。

躑躅は山にばかりではなく、其處此處の松林、芝原の所々に毬の様に咲いてゐる、山の細かい紅いのとは異つて大層大きい朱の色である、緑の中に朱の花が咲いてゐる。學校歸りの少女たちは、手に手にこの朱の花を持つて、松蟬が無數に鳴いてゐる松林の小道を歸つてくる。松の花が咲いて少しの風にも硫黄の煙を漂はしてゐる。林の中、芝原の中へは肥えた蕨が今出盛である。ことに奈良井川の畔、未だ開墾されない曠い芝原は、蕨摘みの場所である。毎日二人三人蕨摘む少年少女の姿をみぬ事はない。芝原には、美しい毛茛の花が咲き滿ちて、眩しく黄金の波を打つてゐる。花は綺麗でも毒持つ故、幼子でさへも折り取らない。思ふさまこの曠い野へ領地を擴めやうとしてゐる。



木曾山中

斷崖の下、川の小波に打ちよせられた砂金交りの砂地には、月見草が夥しい。斷崖

には若藤が繁り、竹煮草が葉を擴げ、何時も日の光を見た事のないやうな青苔や羊齒の類がその蔭に隙間なく生えてゐる、青い色と、若葉の香りに包まれて、此斷崖の下に夜露に濡れて咲く月見草は、如何に美しいであらう。人に見られる事はなく、ひとり咲き、ひとり散つて、自由に繁殖してゐるのである。香の強い菖蒲やよもぎの中に紫の花あやめが一二輪寂しく咲いてゐる。草のない砂地には蟻地獄の巣が無數にある、蟻地獄は、二本の角を出して蟲の落るのを待つてゐる河原の石の上にねころんでゐるかの人たちは、川へすだれを張つて魚の引懸るのを待つてゐる。

淺瀨の水際に立つて雪を飛ばして石に碎ける荒波の音をじつと聞いてゐると、何處か、遠い地の底からとも聞えてくるやうで、眠氣を催す快い響である。白い石と水に、光がギラ〳〵反射して河原をみると目が痛む。千鳥は川を上下にたえまなく飛んでゐて、羽を休めた事がない。石ばかりの河原の上を何處まで飛んで行くであらう、鳴きながら、木曾の奥まで飛んでゆきまた越後の海戀しく歸つてゆく事であらう。何となく涙の湧くやうな、愁をふくんだ、海と山とを聯想させる聲。夕暮など、ゆきつ戻りつしてしきりに鳴く時は堪らなく淋しい。

遠くで杜鵑の忍び啼く皐月闇の夜半、屋根の上を蝙蝠が、ズッ、ズッ、と低くはあるが腦までしみるやうな嫌な〳〵聲で鳴くとき、千鳥は一層悲しげに、消え入るやうに啼いてゐる。

隣の二人の少女は、毎日花を摘んで遊んでゐる。春の初め、土手の日向に翁草の咲き初めた頃から、彼の少女等は、幾日花を摘んだ事だらう、小さい手に摘まれて捨てられた花はどれほどだらうか、はかり知ることは出來ない。雨のふらない限りは、毎日毎日花を摘みに相携へて家を出る、胡蝶の花を慕ふやうに少女等は、たゞ美しい花欲しいばかりである、つみたいばかりである。芝生の中の翁草は、目に付くだけはとつてしまひ、持ち切れなくなるとやつと滿足する、どうして花をとる、何にする、ときいても、たゞ大事さうに花を抱いて笑ふばかり。紫すみれの初花を探して歩いたのはわづかのうちで、今は到る處に紫の布を置いたやうである、もはや紫すみれは欲しくない。りんどうも、一面に咲いてはとつてもとつても取りきれない。

一つの唄も知らない二人は、いつも覺束ない言語で話をしながら、ある時は、黄ろいたんぽゝに埋つて後になれ、前になれ、と流に花を流したり、また畔を傳つて根芹を摘んだり、野蒜の根を掘つたりして、美しい自由の野に二人の少女は遊んでゐた。（美水）



種痘のあと

西崎花世

一

▲私たちが生きて行く間、私たちの心が動いてゆく處には止むを得ない事情として『行きちがひ』といふ事に折り節出逢ふ事がある。自分はその事を處理して了つたと思つて居て、實は處理されて居らない事を發見する。自分はその責任を果したと思つて後になつて、意外なところに氣の付かない無責任な事をして、人に迷惑を及ぼしてある事がある。自分はその人に對して自分の成し能ふ最上の事をしたのである、然しながらその成された後には『行き違ひ』がある。『行きちがひ』の細かな例をあげるまでもない、これは誰人にでも經驗されてゐる事に相違ない。

私たちは『行きちがひ』の發見されたその瞬間にはまたとない不快な焦燥的な不快がこみあげて來て、座に耐へない事がある。その時强ひて眼を閉ぢる事をしてその事情の前後左右を、高い處から見下すやうに眺めて見ると、人間と人間との生活の接觸線がきはやかに光つて見えて、自分の心の凹凸がまざ〳〵と眼に映るのに驚かされる。私は其の折に見える自分を、善惡をぬきにして眺める時ほど、自分が自分の正體に親しむ事はないとおもふので、自ら不快を忘れ去るまでになる事がある。

二

▲自分をのせた電車が雨の日の市街を走つて行く――それが丁度洪水をにげて世界のはてにゆく箱船のやうに思はれる。肺の底まで水氣に沁みて、生きてゐる此の身體が、間もなく腐つてゆくやうな不愉快な思をしながら、泥濘の丘の道をたどつて、自分の巣に歸つた時、私はひどく疲れてゐた。ねば〳〵する、水の細い

粒が泌み込んでふくれたやうに見える衣服をといて、それを衣紋竿にかける時、私ははしなく袖のまくれたところに見える自分の右の腕の皮膚が目についた。何げなくその柔く白い皮膚に指をあてゝ弄んでゐて、圓い種痘のあとが二つはつきりと見えてゐるのに氣がついた。それの目にうつゝた瞬間に、私は耻しい人に逢つたやうな甘やかな心持がした。五歳位だつた。銀の細く鋭い針の毛のやうな尖をとほして、此の種痘が生えるとそれは〳〵美い嬢ちやまになりますからお泣きにならないでと云つたあの田舎の醫者の顏までも思ひ出せるのであつた、私はたはごとのやうな事をつぶやいて、その圓いあとを眺めてゐたが、だん〳〵情にたへなくなつて唇を當てた。

三

▲『私はさう思ふ事が出來る』（私は寢言のやうにさう云つて起き上つた。深夜、外には雨の聲がして居つた） 私には私の以前のロマンチックな生活が私が生涯に一度はうけねばならない筈である種痘のやうなものであつたと思はれる

ロマンチックな生活を送り、センチメンタルな言葉でものを云つて生きてゐた日が私にあつた事は止むを得ない事であつた。此の種の種痘は女性全體に、むしろ人間全體にわたる經路であるとも云はれるであらう。そのロマンチックな生活から出發して現實の生活に眼のさめた自分にとつては、依賴的慾望、即ちその一つを云へば疲れた時にはよりすがつてなぐさめられやうとする心の欲求を、自分の外に向つて得ようとすることが、どれだけ無智であるかゞおもはれる。他人にむかつて自分の依賴的慾望を充實させやうとする心持が愚かなロマンチックな努力であるとして却下けねばならないとゝもに、神あるひは其の他の何ものにむかつても、慰めと休らひとを求めることも出來ないほどに私の心は醒め得られる迄は？ 醒めて來たと思はれる然しながら醒めたと思ふ次の瞬間には私はまた、あゝ慰め、休らひ 場處はないかとさがさずには居られない。眠りたい、その寢どころはどこにあるだらう。抱かれたい。抱いてくれる人は誰れだらう。慰められ

たい、その慰めてくれる人は誰れだらう。話をしたい
その話をきいてくれる人は誰れだらう。ロマンチック
な時代の青年や少女は、それを
さがして神を得た。そのところ
をさがして敎會を得た。
ある人はその親を得た。
ある人はその友を得る事
が出來た。然しロマンチ
ックな生活を出てしまつ
た人間にとつては、親に
も師にも、神にも何等の
權威をみとめる事は出來
ない。それらはことぐ
く骨董的存在をしかして
ゐないと云ふ事が見える
眞に醒めた新しい人達は、疲
勞れた時に、なにをもつて自分
をさゝへる事が出來るのであらうか。『自分自ら』と云



はれるだらうか。然しロマンチックな日から醒めたも
のは、自分をさへ信じない心理狀態があるではないか
人を信ぜず、自分を信ぜず、ま
して神を否定する人間はどこに
宿りを求めて、一夜の眠
りを快くする事が出來
やうか。どこに…どこ
に…（私はさう激越し
た心で思ひつめた爲めに
自分ばかりは死人のやう
に疲れて了つた。漸う舊
にかへつた時）さうであ
つた。此の依賴的慾望が
私にある事は止むを得な
い、私は自分のその心の
動かうとする正體を明に理解
して、抑壓へる事をせず、じつ
と心を据ゑて見詰めてゐる筈だつた。見詰めると云ふ

態度こそ私の生きてゆく上のすべての源でなくてはならない。今の場合では――（斯う考へつゞけて始めて安眠する事が出來た）自分を充實させる力はたゞ自分の心から出るものでなくてはならない。

四

私は今ひどく疲勞れてゐる。自分が衰へてゐるといふことは常に考へられる。あるひは私は一二年の間靜養した方がいゝのかともおもふので、青山白水の間にしばらく疲れた體と心とを養ひたいものである。私はどうもそのやうにするのが、いゝやうにおもはれる。廣々した空を仰いでゆつくりした呼吸がしたい。

五

私の眼のむかふにあるものは戀愛ではなくして疾病である。私にはさういふ事が直覺へる。こゝに在るまでの私は戀愛によりて引き上げられて來た。しかしてれからの未來に向つて、私の心を引き上げるものは戀ではない、必らず病氣が私を精練し向上させるに相違ない。病氣が私に來ることは、私の生存の階段が一きは高く上ると云ふ意味に相違ない。その故に、私は私の病ふ事を待ちつゝある。然し出來るならば私の自分を見る眼、人を見る眼、廣く自然を見る眼、世間を見る眼の調子が定まつてから、私を訪れてくれる疾病であれば、私は喜びを以てその疾病を愛しみ迎へるのだどうかさう成るのであつてほしい。

六

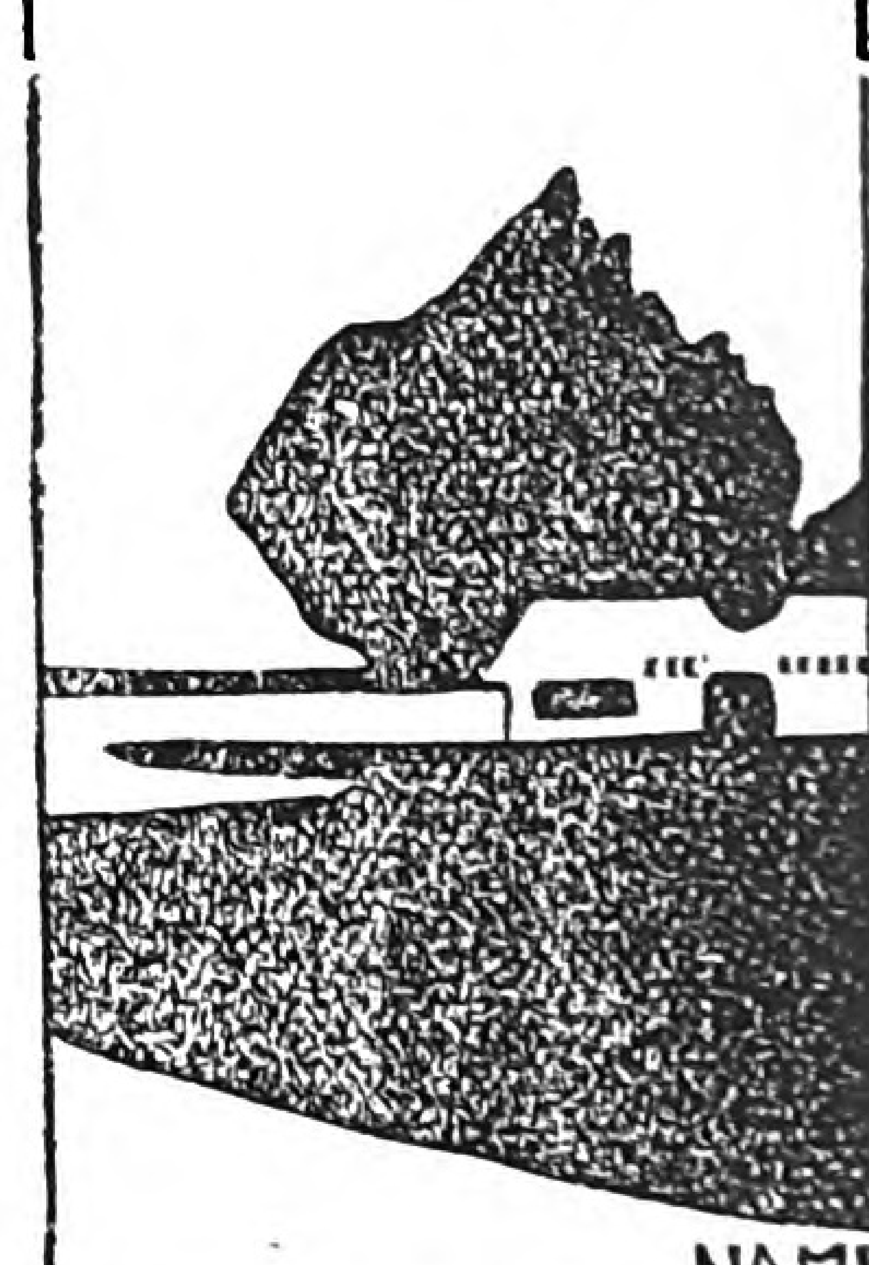
じつと此の疲勞と此の悲哀とを持ち耐へる事をしたい。自分を耐へる力が私にはないとは云はれない、私はいつも斯う自分をはげまして生きて居る。





婦人年中行事

七月



▲七月の魚▼

鯛。車蝦。伊勢蝦。すゞき。いなならめ。鰯。鮑。泥鰌。うなぎ。鮎。まぐろ。鱧。

▲七月の野菜▼

茄子。まで芋。さつま芋。南瓜。ふぢ豆、冬瓜、刀豆、白瓜、枝豆隠元。夏葱。玉蜀黍。

▲七月の花▼

睡蓮。朝顔。夏菊。鳳仙花。百日紅。夾竹桃。桔梗。忍ぶ草。桐の花。月見草。

▲避暑地▼

大森。鎌倉。逗子。茅ケ崎。大磯葉山。三崎。江之島。伊東。修善寺。箱根。稲毛。北條。銚子。霞ケ浦。輕井澤。日光。鹽原。伊香保。奈須野等。(以上東京附近)

大阪築港。堺大濱。濱寺。和歌浦箕面。寶塚。比叡山。四條河原。糺の森。琵琶湖。住吉。鹽屋。舞子。須磨。明石(以上京阪附近)

▲七月の暦▼

十四日。盂蘭盆

二十日。土用の入

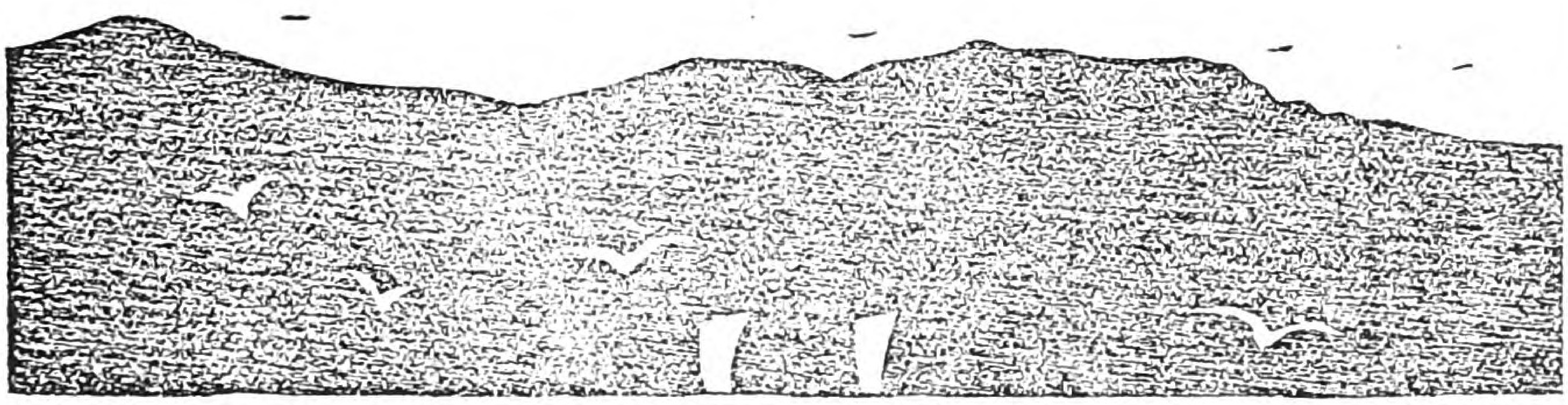
三十日。明治天皇祭

七曜表

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		



旅人の
兎逐ひ出す
夏野かな
子規

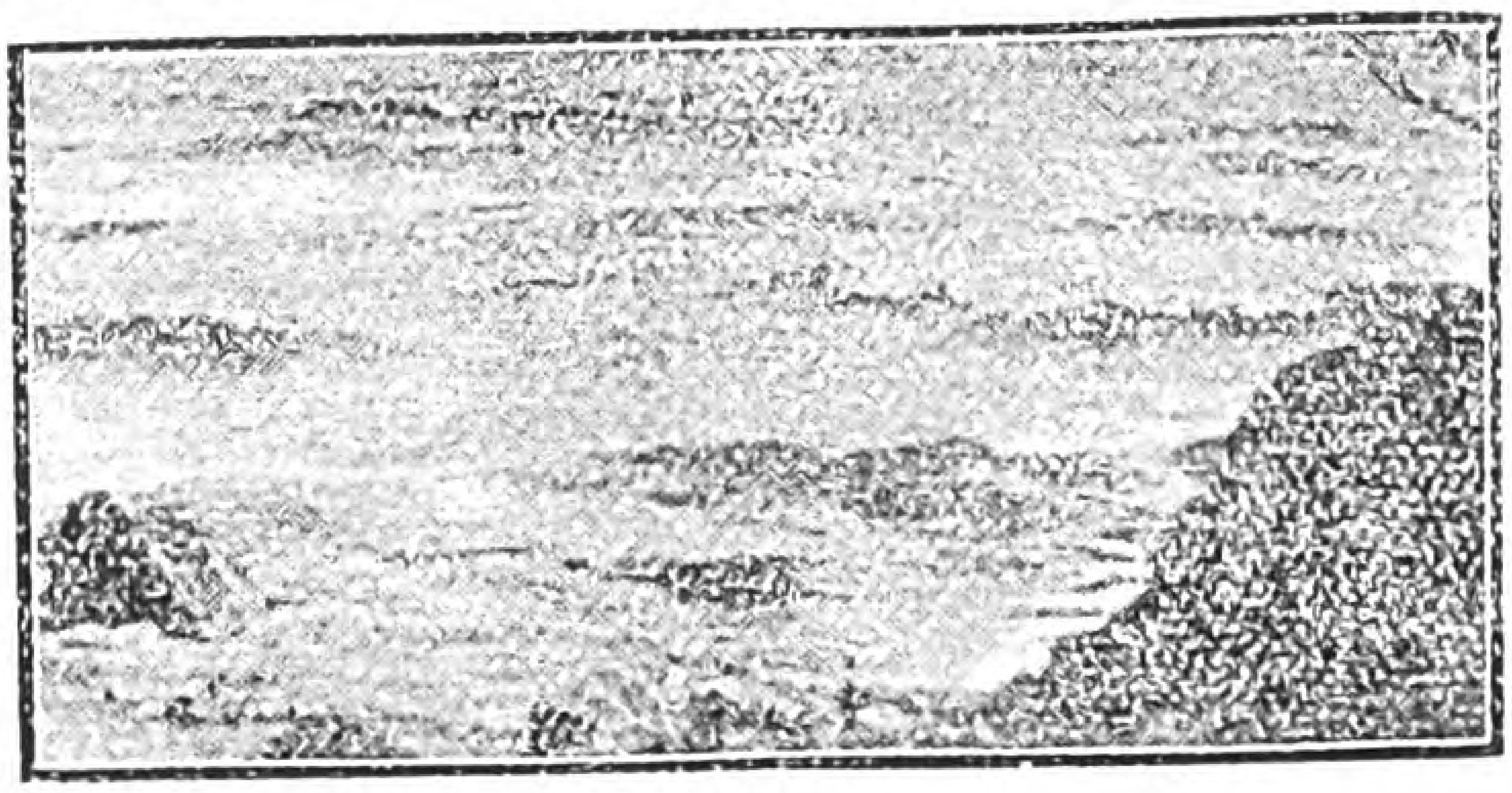


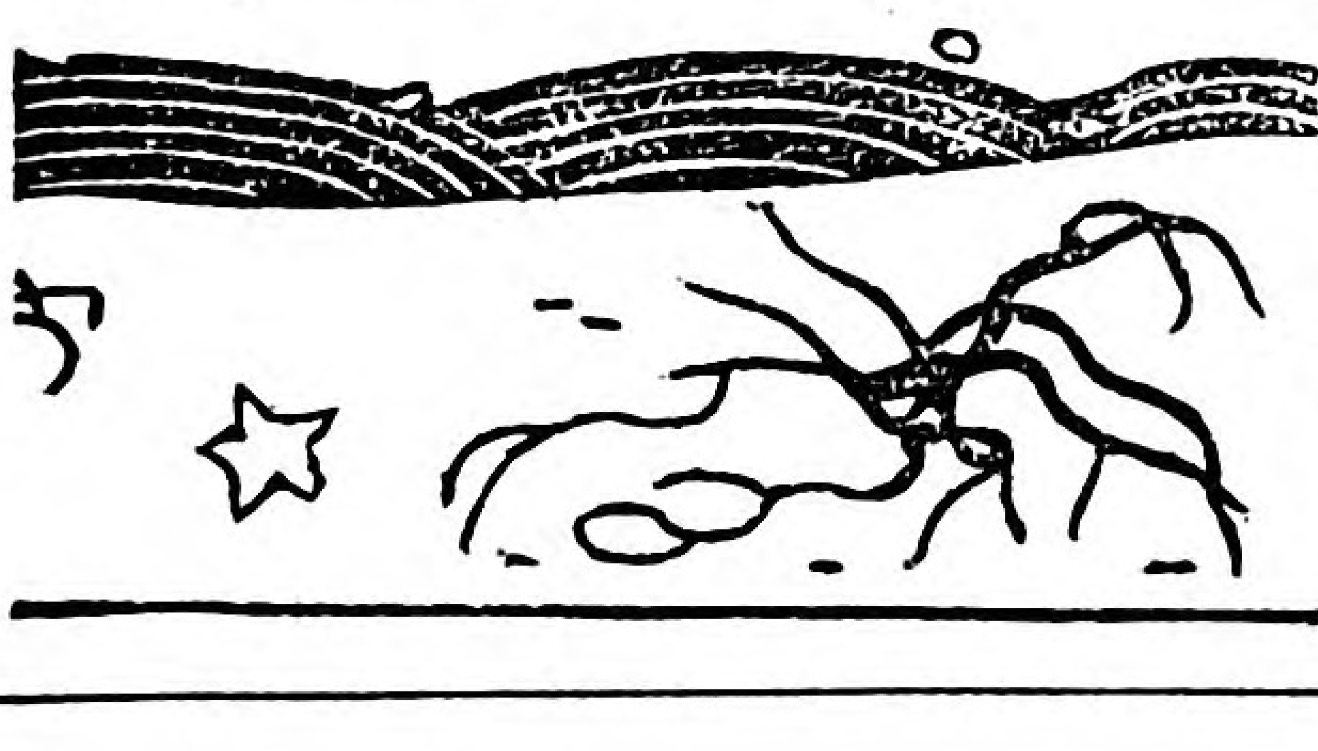
海之巻

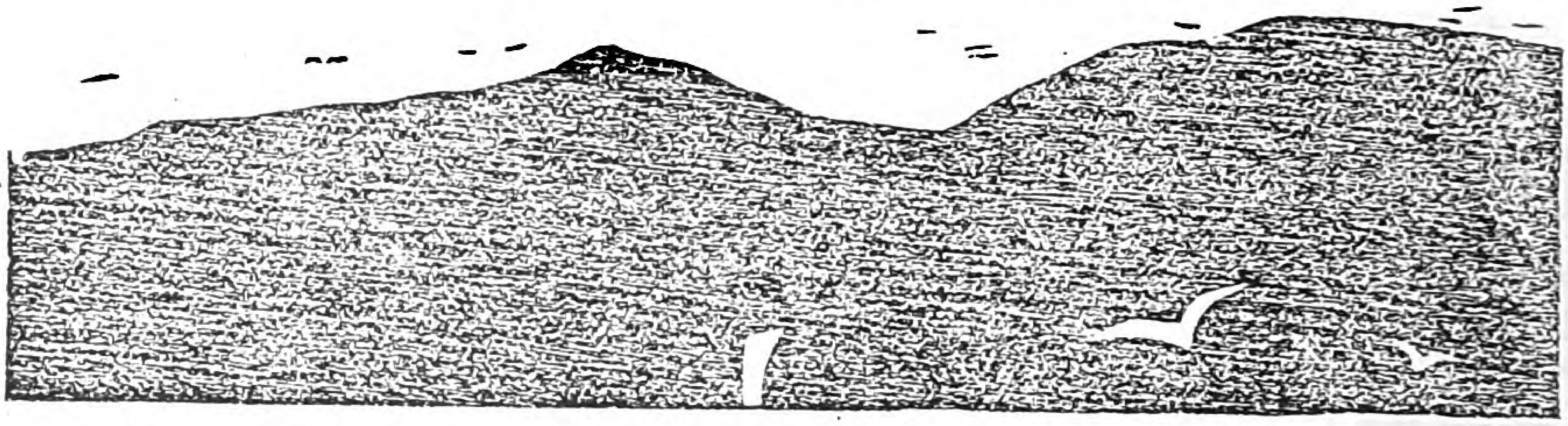
▲藻拾ふ男。今日は澤山寄つて居るぜ、やつぱりおいらの仕事には暴風の翌日がいゝや。併し如何も藻の屑が多くついていけねえ、それに木の片だの、貝の殼だのが交つてゐるのでうつかりすると足の裏が危ねえよ。(海を眺む) おや、えらく綺麗な色になつたな、まるで紫だあ、こいつあ魚が寄つたのかな、如何でえ、岬の色も變つたぜ。(勇)

▲私は砂を掘つてだん〳〵手を入れて行くと、日の溫が殘つて居るのが、指の先に感じられる。指が自然と、その溫の中に深く入つて行く――私は烈しい日光の直射して居る晝の光景を思ひ浮べやうとした。(葉舟)

▲舟は石穴の口に到りぬ。舟人は艫を棄てゝ、手もて水をかき、われ等は身を舟中に横へしに、ララは屛息して緊しく我手を握りつ。暫しありて、舟は大穹窿の內に入りぬ。穴は海面を拔くこと一伊尺に過ぎねど、下は百伊尺の深さにて海底に達し、その門閾の幅も亦略百伊尺ありとぞいふなる。さればその日光は積水の底より入りて、洞窟の內を照し、窟內の萬象は皆一種の碧色を帶び艫の水を打







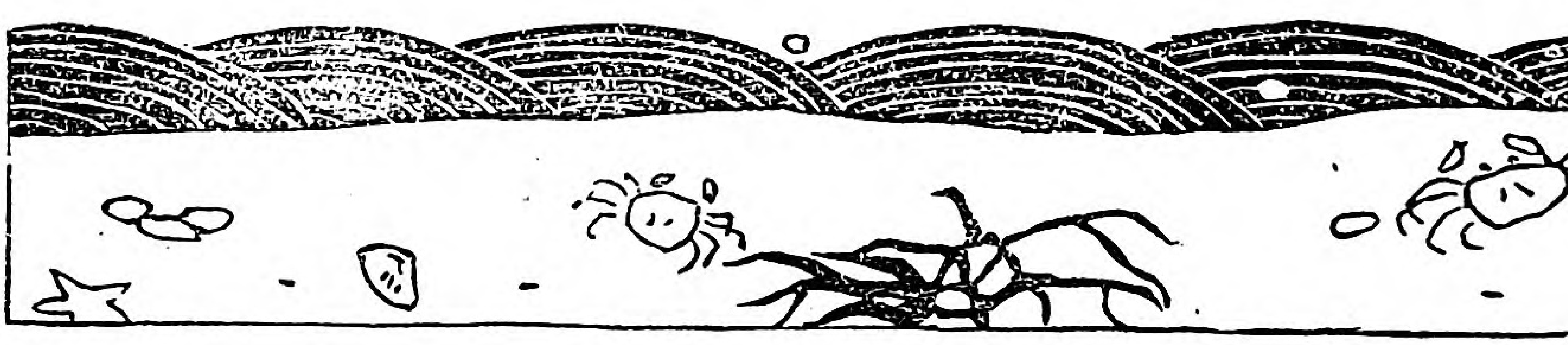
ちて飛沫を見る毎に、紅薔薇の花瓣を散らす如くなるなれ。(鷗外)

▲ペナンからコロムボの中間で、余は其思出の記を甲板から印度洋へ拋り入んだ。思出の記は一瞬の水煙を立てゝ、印度洋の底深く沈んで往つたやうであつた。(蘆花)

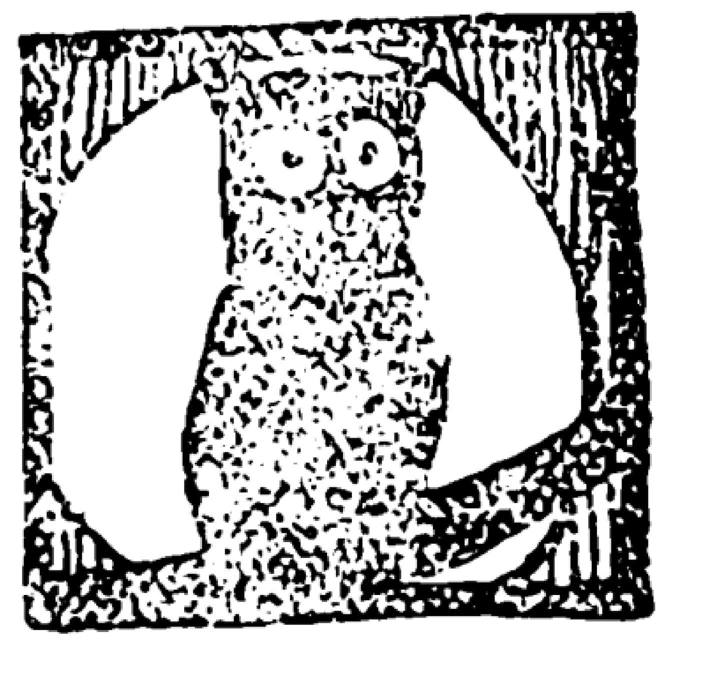
▲船のコロンボよりスエズに着かんまでは、日を要すること二週間餘、途に紅海の熱風あり、歐洲航路中最難の處なりといふ。且海上にありて單調の生活に倦むこと既に四十日、人情誰か此時に於て征衣の重きを思はざらんや。夕月の下、椅子を幷べて相對するもの、話頭すでに盡きて、默々として海水の走るを眺む、たまたま遽然として船員の肩を打つあり、ホームシックと叫ぶ。(抱月)

▲船頭の云ふ、松島七十餘島と云ひならはせども、西は鹽竈より東は金華山に至る海上十八里を合せ算ふれば、八百八島ありとぞ傳ふなる。見給へや、彼方に頂高く顯れたるは金華山なり、こなたに聳えたる山巓は富山觀音なり、舳に當りたるは觀月樓、樓の右にあるは五大堂、樓の後に見ゆる杉の林は瑞岩寺なり、瑞岩寺の左に高き建築は觀瀾亭、稍觀瀾亭に續きたるが如きは雄島なりいざ船の着きたるにたう〳〵上り給へといふ、恍惚として觀月樓に上る。(子規)

涼しさの眼にちらつくや千松島



婦人年中行事



七月の運勢

▲九紫火星の人(二十二、三十一、四十等)我本命中央に入て屈折多き凶月なり。意外の事より迷惑を蒙る事有、注意せねば福錄を失ふ。何事も愼むべし。旅行、緣談、金談凶。暗劍南大凶。

▲八白土星の人(二十一、三十、三十九等)火生土の相生にて美はしき月なり。御婦人緣談、懷姙等の事あらん、只他人の爲め爭論等生ず、注意あれ。吉方東、暗劍同斷

▲七赤金星の人(二十、二十九、三十八等)當月はいやになる事多き月・若し新方面に進む時は障害起り通達しがたし。色情、口論等愼むべし。吉方辰巳、暗劍南大凶。

▲六白金星の人(十九、二十八、三十七等)損耗多く自ら過ち生ずる月、凡て進むより退くを吉とす。御婦人緣談ならず、病兆注意あれ、重病となる恐れあり。吉方東西、暗劍同斷。

▲五黃土星の人(十八、二十七、三十六等)大に都合よく必ず喜び事ある吉月なり、諸事進んで吉、御婦人緣談纏まる。吉方東暗劍同斷。

▲四綠木星の人(十七、二十六、三十五等)木生火の相生にて幸福なる問題を持込まる月、病氣全快、旅行緣談求職吉。暗劍同斷。

▲三碧木星の人(十六、二十五、三十四等)他人と相ならびて物事成功を得る盛運の月なり然れ共世話事散財連日に涉る月なれば、人選肝要。求婚求職紹介吉。暗劍南大凶。

▲二黑土星の人(十五、二十四、三十三等)興味多く意外の利益ある月併し我意を通さず目上の言を用ゆべし。緣談金談調ふ、辰巳吉方、暗劍南大凶方。

▲一白水星の人(十四、二十三、三十二等)水剋火の相剋なるを以て衰運の時なり、兎角不調和なる事多し、百事急進すべからず、色情爭論等愼むべし、火難病難注意、暗劍同斷。吉方東。(中橋、本清堂)

歷史上の七月

▲一日。元軍を破る(弘安四年)▲二日。オランダの使節來る(弘化元年)▲三日。京濱間の郵便開始(明治四年)▲四日。米國獨立を宣す(一七七六年)▲五日。蒲生君平死す(文化十年)▲六日。銀婚紀念章授與式(明治二十七年)▲七日。人情本を禁ず(天保十三年)▲八日。抱一上人逝去(文政十年)▲九日。朴泳孝日本に遁げ來る(明治二十八年)▲十日。法學家ブレークストン生る(一七二年)▲十一日。佐久間象山殺さる(元治元年)▲十二日。源賴朝征夷大將軍となる、建久三年)▲十三日。佛國革命主領マラア暗殺さる(一七九四年)▲十四日。廢藩置縣(明治五年)▲十五日。磐梯山噴火す(明治二十一年)▲十六日。日本武尊東征(景行天皇四十年)▲十七日。江戶を東京と改稱す(明治二年)▲十八日。文部省を置く(明治四年)▲十九日。柳亭種彥死す(天保十三年)▲二十日。平野國臣刑に就く(元治元年)▲二十一日。米國使節ハルリス來朝(一八五六年)▲二十二日。アギナルド政を執る(一八九八年)▲二十三日。朝鮮暴徒吾公使館を襲ふ(明治十五年)▲二十四日。露艦東京灣附近に來る(明治三十七年)▲二十五日。豐島沖の戰(明治二十七年)▲二十六日。京都大阪間鐵道成る(明治九年)▲二十七日。熊澤蕃山死す(元祿四年)▲二十八日。牙山の戰(明治二十七年)▲二十九日。平重盛死す(治承三年)▲三十日。明治天皇崩御(明治四十五年)▲三十一日。今上天皇朝見の儀(大正元年)

婦人の服裝

東京高等女學校長　棚橋絢子

今の婦人方の服裝は極めて不自然で、秩序が立つて居ないとおもひます。服裝によりて其人の人品骨柄が大凡判るやうでござります。召物の釣合がとれて居ないと言ふことは矢張その思想もいかゞと察せられます併し此麼ことは少し考へればよく判ることで、お召しになる方の心の用ひやう一つでは御座りますまいか。たとへ立派なきらびやかなものをお召しになつて居ても、その方の人品と一致いたしません時には、隨分見惡いものでありまして、折角の衣裳も榮えません。榮えないばかりで濟むものなら宜しう御座いますが、心ある方からは侮どりを受けて氣のきかない人だと思はれませう。女子にとつては衣裳の選擇一つでその女子の心の用ひやうが押はかられます。衣裳をお選びになる時には御自分の丈の高さ低さ、色の白さ黒さ、體格の善惡などをお考へにならなくてはなりますまい。丈の低い方は格子縞よりも棒縞が丈を高く見せませうし絣でもなる可く高長のをお選びになれば丈の釣合がとれる事とおもひます。重着をなさる時は下着と上着との色の配合、色合が餘りちがつて居りますとけば〳〵しくなつて、大變に見惡いものになります。ですから色合は何より注意しなくてはなりません。

色合に氣を置かずにお召になる方はありますまいが僅な色合の違ひで見劣りがしますもの故に、よく〳〵注意しなくてはなりません。女子には肝心なことゝ思ひます。その女子の心の用ひ方の一端も推察されるかと考へられます。

衣服と言ふものは身分相當にしなくてはなりますまいかと存じます。俄分限者の孃さんが舊華族の姫君の眞似をするのは誰の目にもたゞ何となく不似合の樣に思はれます。それも人柄によりますから一がいにはいはれませんが、又堅氣の家の娘さんが藝妓の眞似をしたりして居るのも見苦しいもので、人品を落します。

昔は身分に從つて衣服を着ましたもので、身分以上の事は出來ませんでした。よしそれを押てしましたら人に後指を差されました。それが今では自由なだけにさもない人が振袖を着ましたり、緣づく時にも平常あまり用ひませぬものを澤山にこしらへ、簞笥の底へ藏つて置のは非常に不經濟では御座りますまいか、身分のある方でも大金を出して拵へその場限りにしますのは勿體ない事では御座いますまいか。自分の身分に相應した姿をしてこそ、その方の心の奥床しさも見えます身分に外れた姿をして何で奥床しさがありませう。すべて物事は控へ目にすると言ふことはその人を奥床しく見せるものであります。

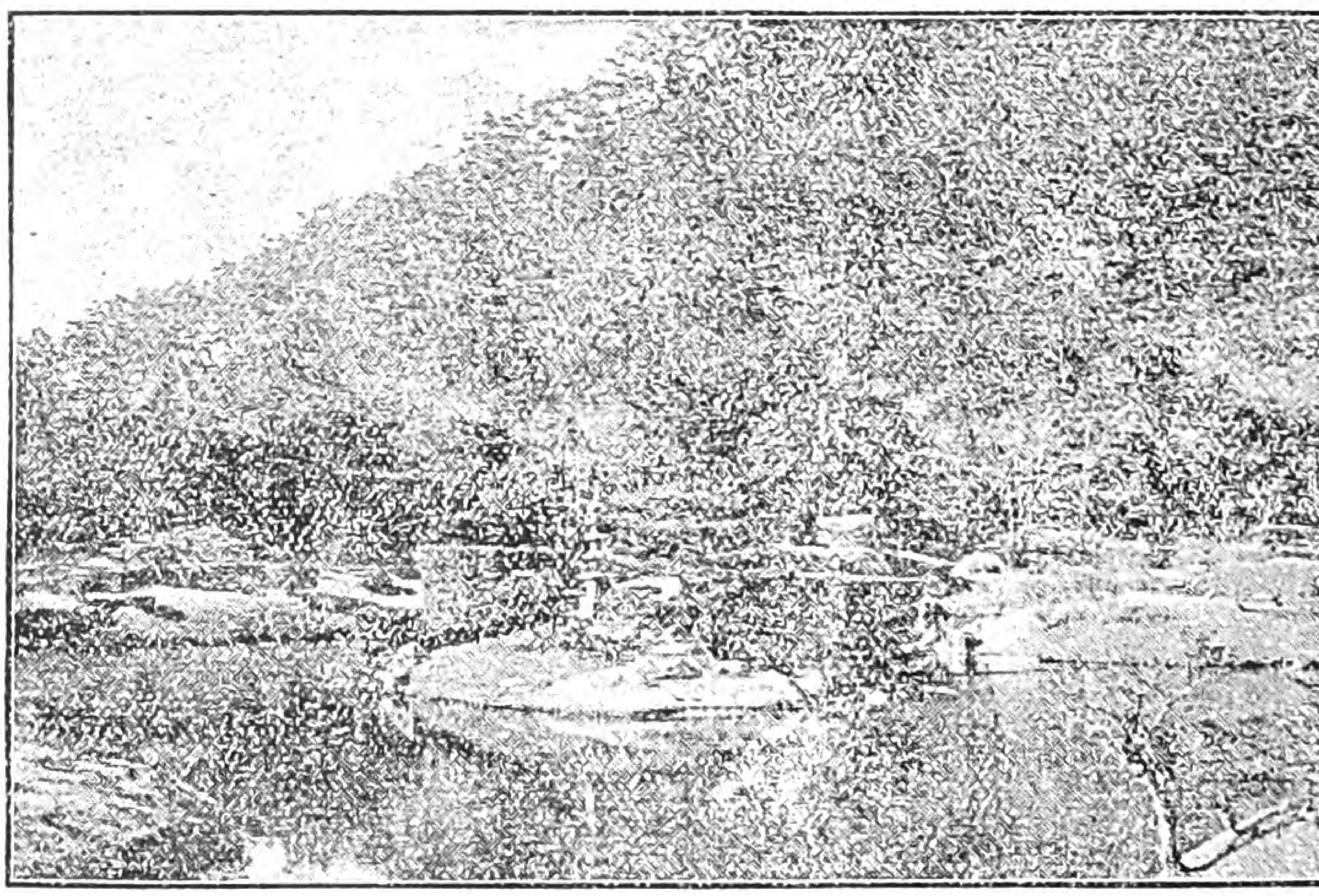
流行を追ふと言ふことも所謂流行から流行へと走るのはよいとは考へませんが、その時の風に外れず、出ず後れず中庸を保つと言ふことは大切な事と思ひます今の人が着ない色合のものを着て出ますれば眼立ちまして變で御座りますから、その時に從つて色なり柄なりを擇んで、人中へ出てもをかしくないだけの事はする必要があります。流行から流行へと流行を追ふと言ふことは何よりも贅澤な事で此上もない不經濟な事とおもひます。流行に從へば價の高いものを買はねばなりませんしそれに流行のものは長く着られると言ふことは何うしても出來ません、後つてその時々に流行するものを買ひますから不經濟なことになるのであります。故に流行に附かず離れず、その時の流行から餘り遠ざからず近寄らずと言ふ考へで居りましたらよからうと思ひます。或は古いものを染返しをしてもその時の流行に合ひますからあながち新らしい物を買はねばならない必要はありません。色や柄なども餘り流行して居るものに近寄らずにして居りますと、その時の流行の色や柄は去つても着られます。一時紋所の小さいのが流行りました。その時に餘り小くして置くより少し大きくして置きまして、又其後大きいのが流行の時も少し控へ目にして置きますといつも着られます。

色なぞも流行のない黑とか鼠とか茶とかにして置きますと、何時までたつても着ることが出來ます。併し若い方はさう斗りにはまゐりません、やはりはやりに從はねばなりませんが、そこは前に申しました通り程よくしますれば經濟にもなり人にも笑はれることはありません。

ある方に流行のものばかり召してお在での方がありました。其折ある色がはやりました時に、その方が其

色の裾模様の着物を召してお出でになりました。其色はやさしい方でなければ似合ぬ色でありました。それに其の方は嚴丈な體格のよい方でありましたから、何だかその色とそひませんでした。で皆の方がもう少し何とかお考へになつたらよからうにと言つて笑つた方もありました。これはたゞ何の譯もなくたゞ流行に從がつた缺點と、失敗とであります。中にははやりにまけまいとして、前にはやつたものを賣つて、はやるものを求める方があるさうですが、これは經濟のやうで不經濟な事であります。その方などは却つて經濟であると言つてをられますが非常に不經濟では『ありますまいか。着物は賣れば半分値にもなりません。半分値になつた所が前のと同じ價の着物を買ふには不足の半分のお金を出さなくてはなりませんこれを繰返しますと、三年目には最初の着物はなくなつたと同じで、次から次へと十年目には莫大な失費になります。これなどは經濟思想のない何よりの證據であります。

色と色との配合は女には必要な事で、帶と着物の色合一つでよい品物でもよくは見せません、色合がよければ惡いものでもよく見せます。上品に見せるのも下品に見せるのも色合に注意するとしないとであります女子には特にこの智識が必要であるのは話すまでもありません。私は一つ着物を長く着ず、萬遍に着るやうにしてをります。これは流行に從ひませんので何時でも着られ藏つて置く必要がないからであります。そして一つ着物を長く着るやうな事はなく、次から次へと着て行きますのでひどい汚れも出來ず仕立直す時に手數が掛りません。ですから一つ着物が何年も着られ何年までも殘つてをります。一つの着物を着通すのは不經濟になります。



讃岐栗林公園天女島

家庭に喜ばれるマンドリン

北村季晴氏夫人　北村初子

マンドリンが此頃流行のやうに御座いますが、マンドリンは誰れが見ても直ぐ解る通り、まことに家庭向きの樂器でございます。御承知でもありませうが、マンドリンは南歐の方に流行るもので、南歐の溫かい氣候の關係もあること見え、實に可愛らしい優美なものであります。月夜の晩などに提げて、友達をたづね、散歩しながら彈でるなどには、極く相應しい樂器であります。そのかはり深刻なところはないのでありますが家庭としては、夕方御飯のあとなどで、一家打ち集ふて開くには、さう深刻な大きいものよりも、マンドリンのやうな手輕い平易な、輕快なものが喜ばれるやうであります。

日本にマンドリンが這入つてからまださう時日はたちませんが、前に申したとほり人が直ぐ手に取りやすい手輕な樂器であるところから、上野、慶應などではマンドリン倶樂部などが出來て、上手な人も仲々あるやうであります。

マンドリンの稽古は極く容易で、月琴に似たやうなところがあつて、上達が早い上に、小さいお孃樣方にも彈く事が出來ます。ヴヰオリンやオルガンになると八つ九つと云ふお孃さまには一寸むづかしいやうでありますが、マンドリンは却つてお孃樣むきと云つてもいゝ位で、稽古もさうこみいつたものではありませんから、至極よろしいやうであります。然しマンドリンは長くいつまでも面白がられるかと云ふと、どうもそれは平易であるだけ飽かれやすいところがあつて、千篇一律となつて了ひます。在りの儘を云へば、やはり平易で優しいだけに、繰り返しく飽く事を知らない

ピアノ、ヴヰオリンの音樂とは比べる事は出來ません。稽古に骨が折れないだけやむを得ぬ事であります。專門的な音樂と云ふよりも家庭的音樂としての方にマンドリンの價値があります。

マンドリンの話に附加へて申上げる事は、日本の人は音樂が解らないと云はれてゐる事があつても、日本の人が音樂の解らないのは解らないのが本當であつて、少しも失望するところはないのであります。何故と云ふに音樂の解らないのは、もとから音樂を解する力がないのとはちがつて、日本の音樂は解るが、西洋の音樂は今までに慣れなかつたゝめにわからないのであります。日本に生れて日本の音樂ばかり聞いて育長くなつたものが、慣れぬ西洋の音樂が解らないのはあたりまへであります。こゝで音樂と云ふと西洋の音樂をさして云つてゐるやうな狀態でありますが、日本の人も慣れるに從つてそれを解する力が出來るに相違ありません。

西洋では、佛蘭西、獨逸、英吉利と國はそれぐちがつて居ましても、全體として云へばヨーロッパと云ふ一つの中で少し位の違つたところはあつても、土臺が同じでありますから、伊太利の音樂を獨逸人が聞いても略々わかり、米國人がきいても、日本人がきく程わからない事はありません。

今後日本人が段々西洋の音樂を耳に慣らしてゆく中には、よく解つて來ます。音樂は慣れると云ふ事が何よりで、私の子供を例に申しますと、宅では六つの女の子がありますが、これがピアノを聞き慣れて、その音が解つて居るやうで、オヤ誰れがひいてゐるのかしら、お稽古のお孃樣かしらと思つていつてみると、よく身體も屆かぬその娘が鳴らしてゐるのです。それから彈くのにも日本のものを彈く時と、西洋の節を彈く時とははつきり區別をして、日本の曲を彈く時に使つてはいけない鍵盤は決して使はないし、西洋の音階を承知して、アッコールドが違へばすぐ自分で直したりして居ります。

このやうに耳に慣れさへすれば、ひとりでに音の觀念が出來ますから、どう云ふ人でも慣れさへすれば音樂のわからぬ筈はありません。それで日本の人は音樂がわからぬといはれても、今の場合、不思議な事はないやうであります。

訪問みやげ（四）

婦人記者

棚橋絢子

▲つとめることは　私、いつでもさういふのぢやが、忙しいとか何とか不精をして、くすぶつてゐるのは、ちつともえらい事ではない。若い人は若い樣に、年よりは年よりの樣に、世話女房ならば世話女房相應に、身だしなみといふ事をせんければ、女といふものはいけん。私の樣に、髮も切つて隱居で居るものでも、朝はちやんと洗粉で顏を洗ひます。毎日綺麗にしつけて居れば、まことに心持がよい、さうしなければ變な氣持になつて了ふのが私の性質ぢや。

國木田治子

▲つらかつたことは　夫が未だ病氣が左程惡く成りません時。「若し僕が死んだらお前は如何する。」と申しました。その時に私は私も死にますと言つたのです。「賴み甲斐のない奴だなあ、無責任極る。」と夫は以ての外の不興なのです、でも私は、貴方有つての私ぢやありませんか、其の貴方がなければ私は不用者、生きて居る甲斐がないではありませんか！と申しますと「馬鹿、小供は如何する小供は」と夫はせき込んで申しました。あゝ小供を如何したら可いでしやうと思はず泣いてしまひました。死んでしまひたいと思ふ度に、直に胸に浮ぶのは此の時の夫の言葉、無責任、小供、眞實に死んで了ひたいなんて、我まゝだ濟みませんと心の内で今でも詫びを致してゐます。

日向きむ子

▲愛するものは　私は親が如何に自分を育てる爲めに苦勞したかといふ其心持の程度も、おぼろげながら知りました。所謂犧牲、先方の感じないのにも關らず、愛を注いで惜しまないといふ心持も、かすかながら知りましたが、最も痛切に感じた事は他にあります、それは、愛するものを持つて居ると、他に雜念が起らない、卽ち其時だけは少くとも惡人の心を持つて居ない、といふ事です。

人の持ちたい物には限りがない、又其人の持つて居る物の種類によつて其の人の高下も知られます。私は第一に、あなたは愛する物として何を持つて居ますか、といふ問を出して其れによつて其人を判じたいと思ひます。愛する物を持つて居る人は、善人です、私にはさう思はれます。

＊＊

加納子爵嗣子夫人 加納多津子

▲樂しきものは●●●●●● 當家の家庭談話會は十幾年前より續いて居りますが、私が未だ嫁りません以前、談話會の事を聞きまして、多分話の上手になる爲めと思つて居りましたが、さて嫁入つてから直きに主人が、當家の談話會は、自分の話した事に責任を以て出來るだけそれを實行して、自分も他人も精神的の修養する機會の一つであるから、其の趣意を間違はぬ樣に、と話されました、で私も愈々談話會員の一員として入會致しましたが、お互に心を磨き合ふ爲めの好い機會だと思ひますと、毎土曜日の會が樂しく、それは〳〵待たれるので御座います。良人は會長で、父母は云はゞ顧問役の位置に居ります

＊＊

貴族院議員伊澤修二氏夫人 伊澤千勢子

▲考へて置くことは●●●●●● さりながら人の新婚日記などを夢見て、良人は私に惚れて入らつしやる、可愛がつて下さる……大丈夫だ、と自惚れて了つたら失策ですぞ。新夫人艶容花の如く美くしくとも、男心に秋の空と昔からも云はれる通り、鯛も毎日は飽きて鹽鰯がたべ度くなるのが人情つけ上つて我儘してしつこいと、厭はれる元になります。ですから自分が自惚れてしまふより先きに旦那樣を自惚れさせるが肝腎ですよゝゝ

＊＊

故後藤伯爵未亡人 後藤雪子

▲喜ばしかつたことは●●●●●● 夫象次郎が病重りましたとき『今死んでは殘念だ』と申しましたから私は『何が殘念でございます、事業も道樂も仕つくして死ぬのは結構では御座いませんか』と申しました。併し象次郎は病中、人に向つて『三十年間に本當に夫婦らしくしたのは、私が病氣づいてから位のもので、永い間妻にも心配を掛て氣の毒だつた』と申したさうですが、私は此一言で、三十餘年の苦勞も一時に癒つたほどに、滿足を感じたのでございます。

訪問みやげ（四）

婦人記者

＊＊

棚橋絢子

▲つとめることは●●●●●● 私、いつでもさういふのぢやが、忙しいとか何とか不精をして、くすぶつてゐるのは、ちつともえらい事ではない。若い人は若い樣に、年よりは年よりの樣に、世話女房ならば世話女房相應に、身だしなみといふ事をせんければ、女といふものはいけん。私の樣に、髪も切つて隱居で居るものでも、朝はちやんと洗粉で顔を洗ひます。毎日綺麗にしつけて居れば、まことに心持がよい、さうしなければ變な氣持になつて了ふのが私の性質ぢや。

＊＊

國木田治子

▲つらかつたことは●●●●●● 夫が未だ病氣が左程惡く成りません時。「若し僕が死んだらお前は如何する。」と申しました。その時に私は私も死にますと言つたのです。「賴み甲斐のない奴だなあ、無責任極る。」と夫は以ての外の不興なのです、でも私は、貴方有つての私ぢやありませんか、其の貴方がなければ私は不用者、生きて居る甲斐がないではありませんか！と申しますと「馬鹿、小供は如何する小供は」と夫はせき込んで申しました。あゝ小供を如何したら可いでしやうと思はず泣いてしまひました。死んでしまひたいと思ふ度に、直に胸に浮ぶのは此の時の夫の言葉。無責任、小供、眞實に死んで了ひたいなんて、我まゝだ濟みませんと心の内で今でも詫びを致してゐます。

＊＊

日向きむ子

▲愛するものは●●●●●● 私は親が如何に自分を育てる爲めに苦勞したかといふ其心持の程度も、おぼろげながら知りました。所謂犧牲、先方の感じないのにも關らず、愛を注いで惜しまないといふ心持も、かすかながら知りましたが、最も痛切に感じた事は他にあります、それは、愛するものを持つて居ると、他に雜念が起らない、卽ち其時だけは少くとも惡人の心を持つて居ない、といふ事です。

人の持ちたい物には限りがない、又其人の持つて居る物の種類によつて其の人の高下も知られます。私は第一に、あなたは愛する物として何を持つて居ますか、といふ問を出して其れによつて其人を判じたいと思ひます。愛する物を持つて居る人は、善人です、私にはさう思はれます。

＊＊

加納子爵嗣子夫人　加納多津子

▲樂しきものは●●●●●　當家の家庭談話會は十幾年前より續いて居りますが、私が未だ嫁りません以前、談話會の事を聞きまして、多分話の上手になる爲めと思つて居りましたが、さて嫁入つてから直きに主人が、當家の談話會は、自分の話した事に責任を以て出來るだけそれを實行して、自分も他人も精神的の修養する機會の一つであるから、其の趣意を間違はぬ様に、と話されました、で私も愈々談話會員の一員として入會致しましたが、お互に心を磨き合ふ爲めの好い機會だと思ひますと、毎土曜日の會が樂しく、それは〳〵待たれるので御座います。良人は會長で、父母は云はゞ顧問役の位置に居ります

＊＊

貴族院議員伊澤修二氏夫人　伊澤千勢子

▲考へて置くことは●●●●●●　さりながら人の新婚日記などを夢見て、良人は私に惚れて入らつしやる、可愛がつて下さる……大丈夫だ、と自惚れて了つたら失策ですぞ。新夫人艶容花の如く美くしくとも、男心に秋の空と昔からも云はれる通り、鯛も毎日は飽きて鹽鰯がたべ度くなるのが人情つけ上つて我儘してしつこいと、厭はれる元になります。ですから自分が自惚れてしまふより先きに旦那様を自惚れさせるが肝腎ですよは丶丶

＊＊

故後藤伯爵未亡人　後藤雪子

▲喜ばしかつたことは●●●●●●　夫象次郎が病重りましたとき『今死んでは殘念だ』と申しましたから私は『何が殘念でございます、事業も道樂も仕つくして死ぬのは結構では御座いませんか』と申しました。併し象次郎は病中、人に向つて『三十年間に本當に夫婦らしくしたのは、私が病氣づいてから位のもので、永い間妻にも心配を掛て氣の毒だつた』と申したさうですが、私は此一言で、三十餘年の苦勞も一時に癒つたほどに、滿足を感じたのでございます。

～～～～～～～～～～





鷄卵の話

——(つゞき)——

農商務省種畜牧場
長崎發生

(7) 一年に九億七千個の鷄卵

我邦は太古から鷄とは深い關係があるだけに中々面白い話がある、彼の紅葉で名高い大和龍田川の畔に龍田町と云ふのがある、茲は古來龍田の鷄とて中々深い關係がある。養鷄も盛大であるが屠殺する譯には行かない、飼つてもよいが食つてはならぬ事になつてゐるので、鷄肉や鷄卵は食べられないが、其隣村の法隆寺村では食つてもよいが飼つてはならぬと云ふ制度になつてゐる。斯樣な迷信時代から種々の思想變遷を經て養鷄も賞翫的でなくして段々實利的になつて來た。

明治四十一年七月から四十二年六月の一箇年間に我國の産卵數は實に七億六千五百十二萬七千九百二十個であつた、此巨大なる個數を産卵して居るにもかゝはらず、日本に於ける需要は之に對し猶ほ二億千二百三萬〇二百五十八個（四十二年鷄卵輸入個數）を補はねばならぬ事となつてゐる。して見ると鷄卵は文明の進歩につれ益々養鷄の前途有望なるとは疑はれない、其處で私共の立場から申せば皆さんの餘暇にお樂みがてらに、數羽なりとも鷄を飼育せられて、少しでも新鮮なる卵を使用なさるやう、お勸めいたしたいのである

(8) 東京の鷄卵は殆んど支那卵

東京に於ける鷄卵の需要は頗る莫大なるもので、其供給地は主に茨城、千葉の近縣で、時としては尾州三州の邊からも入荷する事がある。是等の地卵の外に支那から來る所謂上海卵の輸入も實に大きい。之は明治十五年頃から二十年頃までは支那人が持ち歩いて賣つてゐたものだが、二十年頃に橫濱の商人が同地へ行て以來直取引を始める事となつた。之

等の鶏卵が市中へ入る數は近縣よりの地卵が一日約五百箱、支那よりの上卵が一航路に付き五千箱乃至七千箱の概算で、一箱に付き內地產は二百七八十個支那產は二百四十個から三百五十個入れであるから上海航路を一週間に一回宛として一航海の輸入數を七日で割れば一日七百箱から千箱となる、從つて東京市民の需要する鶏卵の中支那卵は約三分の二を占めてゐることになる。之は需要者側でも自覺して欲しい問題であると思ふ。

(9) 產卵後何日目に人の手に渡るか



產卵が一日に二三個宛として五日にして十五個、其處で鶏卵集人の手に入り、荷主の手に渡る、斯くして荷主の所から荷造して運送せられるまでには三四日は經過する、夫れから問屋に着荷する、更に小賣屋へと渡るには四五日は經過する、小賣屋が箱より出すまでには又若干日を經過すると云ふ順序で鳥渡二三週間は經過する、故に最寄の養鶏場から手にすれば產卵後四五日以內の鶏卵は得らるゝにせよ、然らざれば早くして二週間遲くして三週間目に人の手に入るので、夫れから人々の口に入る迄には猶幾日かの間があらう、斯くて一貫目一圓六十錢の相場で、百目二十錢に小賣をしてゐる、上海卵は二三週間所か其以上の古い卵を

一貫目一圓七十錢の相場で小賣百目二十錢である。上海卵は地廻よりも粒が小いから粒賣にしてゐるが、買手の方では粒より貫目買の方にすれば利益でもあり又上海卵でなくして地廻が得られる譯である。例令粒は大でも輕いやうな卵は調理しても香味が少ない、現に生立ての卵と日數經過した卵とを玉子燒にしてみれば分る、前者の一個は後者の三個位に相當するであらう。

(10) 熟さす時間

卵は種々と調理されて或程度までは肉の代りをする良好な動物質食料である。其調理の仕樣に依つて其外觀も內容も種々に變化する。熱湯に入れて二分間前に出すと薄膜に接する所が少し固まつて、其他の白味は牛乳樣の暖い液體狀である、之を軟熟卵と云ふてゐる又二分以上煮沸すると白味は全部凝固する、之を半熟と云ひ、三分間以上煮沸すると、上に浮く樣になつて全體凝固する、之を熟卵と云ひ、夫れから又十分間以上になると一層固くなつて了ふので之を過熟卵と云つてゐる。此過熟卵とする迄の關係を種々と工夫せられて彼の卵粉の製造は始まつたものである。

(11) 卵粉の用途

卵粉は生卵と同じく菓子や料理に用ひられるので、之が製造事業は頗る有利である。熟卵を粉碎して製したもので軍旅用として至極よい、例へば一個の生卵が固形分を二%五有してゐるとせば、水分が除けられると恰度四個分が一個に相當する事になつて、容積も小さく破損腐敗の虞もなく運送貯藏の都合もよい。然し我國の狀態としては製造どころか每年澤山の鷄卵を輸入する位、却々先の遠い話である、其製造は通常餘り高からぬ溫度か或は交流空氣に依て水分を蒸發せしめ之を破碎すればよいのである。又卵白を卵黃と別にして純粹なる蛋白質を製する事も出來る、製品はセルロイドの原料塗料等工業用藥品に利用せられてゐる。高木某之が研究に苦心の結果、一種の乾燥法を發明し、純蛋黃質、純蛋白質、鷄卵素の三種に分ちて、單に工業用品のみならで、製菓材料其他食用品たらしめ更に殼を粉碎して牛血と混じ血粉肥料を製出し得るに至つたのは近來の事で、目下清國韓國に於ける日本租界地にて大に發展してあるとの事である。其成分も中々營養に富んで白人の製品に劣らぬ。（つゞく）

婦人作家評論（一）

日本の文壇に婦人の作家が現れるのは、これから以後の時であると思ふ。これより以前にあつた婦人の作家は勿論、その人の持つて居る世界と云ふものがあり意義があつた。けれども其の人々は非常な少數であつた。それでもつと多數の婦人が、藝術にたづさはると云ふ時期は、今日より後の時にあると思ふ。

それで此の雜誌が永い間きはめて初歩な多數の文學愛好者を養成し、そのうちから幾何の人を生んで來たと云ふ事に對して、おもに此の雜誌に關係ある作者の批評をして見たいと思ふ。それに加へて、あるひは比較と云ふ事の正當を失ふかもしれないけれども、一般の婦人の藝術にたづさはる人の批評もして見たいと思ふ。

一、山田邦子●●●●

私は第一に此の人の批評をする、この人はまだ世間から認められて居る人ではない。またこの人の天分は未知數である。然し此の雜誌が產んだ抒情詩人の一人である、此の人はこれから相當に未來のある人だと思ふ。それで第一にこの人の批評から初める。

近來三四箇月の間、此の人が公にした歌は、所謂歌としては崩れて來た、それは此の人の性格が變化せんとする背景があると思はれる。

一體從來の此の人は純粹な、且つ訓練のないセンチメンタリストであつた。たゞ感激し、興奮する人にすぎなかつた。その底にこの人の命の力がない、海の水のたゞ上が震へて居る人であつた。その人の微動のすがたが、騷ぐ狀態に變化しつゝある。それが歌が崩れて來たと云ふ理由であらうと思ふ。

然しまだ此の人は盲動して居る。目をつぶりすぎてゐる。目をつぶつて盲目的に動搖して居る。その動搖のすがたの中に破れた蘆の葉の鳴るやうな聲がある。それはこの人のリズムの底に光りがないからである。

そのリズムが荒れてゐる、これは胸に深く抱きしめるものがないからである。その破れた聲帶から洩れる破れた響きを、此の人は才で掩ふとして居る。此の人はまだ自然の生命の底から響き出して來る聲を聞くと云ふ事を知らない。それで反動的である、たゞ痛さを感ずる、心にしみわたる痛さを、その人の命の力が握つて抱きしめて、その底から叫び出す聲でない。

私は女と云ふものが哲學者であると云ふ事が、その誇ではあるまいと思ふ。女には女のみが知つて居る靈智の世界がなければならない、哲學と云ふものよりも生きた此の身體が感ずるそのまゝの歌と云ふものが、女の世界から生れて來るものと思ふ、その中に女と云ふものが持つてゐる生命の眞底から、光つてゐるものがある筈である。

此の詩人がもし今日に於て唯從來のまゝの惑亂の狀態をつゞけてゆき、荒れた姿を惜しまず歩いて行つたらば、此の人の詩は價値を失ふ。

然し、此の人は意外な點に天惠をもつて居る、此の人自身の生命のうちには盲目でありながら、よきものを慕ふと云ふ心がある。それは此の人の極めて何でもない心がそれを教へるのである、然しそれのみを手頼にして自分の命を荒れたまゝに捨てゝ置くとしたならば、それは惡い事である。この人はもう一度子供に歸らなければならない、自分における刺擊を抱きしめなければならない。あまりに痛さに對して、反撥する性質がありすぎる一度この人は深く底へ〳〵と沈んでその中で靜に眼をあけて見る必要があらうと思ふ。

この次は瀨沼夏葉女史の『櫻の園』に對する感想を書く。

（溫室の男）

櫻の蕾が色づいて來た、其頃から私は道を通るのに自分の目のやり場がない樣な氣がして來たのに氣が付いた。女なんかいやだ〳〵何故女に生れたんだらうと身も世もない程いとはしい心に成る日もあつた。其くせ赤い襦袢の袖がほしくなつた、美しい着物がほしくなつた、リボンも思切つて幅の廣いのがいゝ（姿見日記）

初戀の描寫

外島浪之介

小說と戀愛とは殆ど離れ難い關係を持つてゐるので小說と云へば、戀愛の書いてないものは無いと云つても宜い位だ。小說に表はれたる戀といふことは、小說全體を通じての問題であつて、之は大いなる研究であらうが、今、自分が此處に紹介しやうと思ふのは、然んなに大いなる研究でも何でもない、寧ろ文章を作る初心の方々の參考に供する位の覺悟で、豫てから蒐集してゐる明治の作家の婦人描寫の一部を拔いてみやうと思ふのである。偖て文章として戀愛を描寫した處だけを拔かうとすると、思つたほどもないもので、殊に自分は未だ明治の小說と云つてもほんの一部分しか見てゐないから、此處に拔くのも、甚だ無秩序で、狹い範圍に限られたやうに見える、それは諸君に諒察してもらふことゝして、先づ第一に初戀(?)の描寫を少しばかりお目にかける、初戀と云つても意味は博いので戀ごゝろのきざしたことを描いたものと云ふ意味に稍近いものを取つた、或は初戀といふ言葉にあてはまらぬところもあるか知れないが、それはくだ〳〵しく辯明はしないことゝする。なほ次々に謂ゆる戀の描寫、失戀、覺めゆく戀などの描寫も少しづゝ紹介したいと思つてゐる。

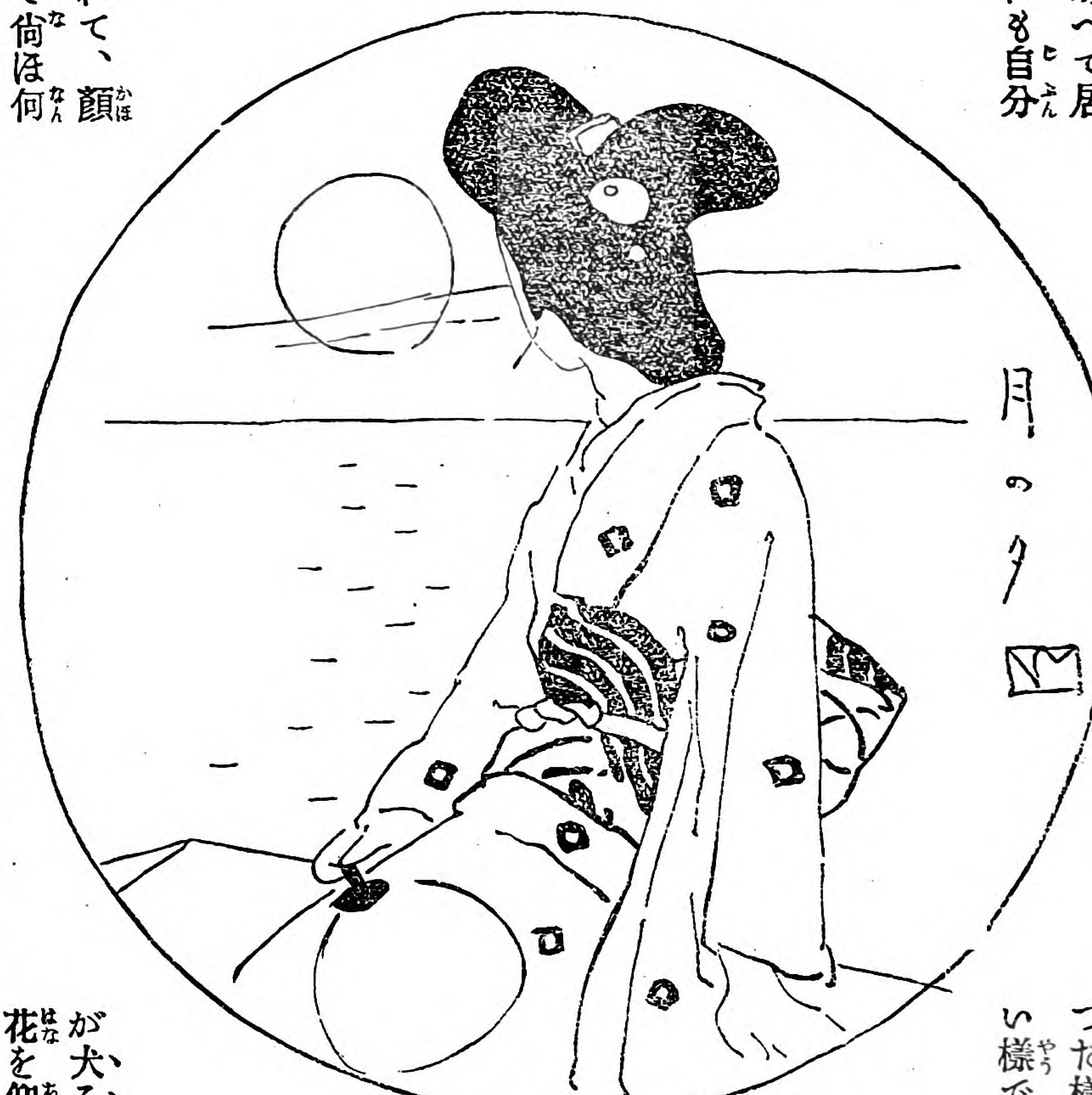
* * * * *

紅葉は、むき玉子にお喜代の初戀を書いて居る。お喜代は健實な家庭に世間知らずに育つたが、家庭の事情で畫家のモデルになつて、初て其畫家に會つた、同く主人に持つならば斯る溫和閑雅なる美男に仕れむには、同じ小言をいはれるにしても、さまでは腹立たしからず、此家に居て此の主人に仕れなば、給金などはなく

とも此方より望む所と初對面から戀に陷ちた。次に戀人の前に立つた。「胸は早鐘撞く如く轟出して、あるにもあられず、ぶる／＼と慄く足に力を籠めて踏應ふれど、なほ寒氣立ちて恐しき事限りなし。猶、滿面火の如く上氣して、額際より玉なす汗を流し、手も足も粘る程汗ばみ、體は窘縮勝にして筋骨の硬く……」とあつて羞恥さを形の上で說明しやうとして居る、同じ作者のおぼろ舟に「男の顏にはたと遇ひ、南無三！と思ふ間もなく見られたり！見たり！此時の心中人には語り難し。お藤はいとゞ羞恥しくなりて、誰か力量ある人に後方より抱きすくめらるゝ樣に覺えて、おのづと身體窘み」と書いてある柳涙の羽ぬけ鳥に看護婦のお鈴が相當の位置ある患者(辰彌)に戀をした、辰彌も戀して居た、それを辰彌の妹(光子)から兄の妻になつて吳れと賴まれた其處を「お鈴は何とも自分にも分らぬ樣な、何か只ならぬ現の樣な夢の樣な、我にもあらぬ心地で、自分には覺えず光子の顏を見詰めた。光子はお鈴が上氣した樣な顏の色で、眼に潤を有つて自分を見詰めた樣

子が何となく自分の依賴を聞入れた樣に思ふたので……」後に之を考へて、「それで母の傍に侍する者の無い事、兄が彼有樣(不身持の男)である事、妹が羞づべき業(茶屋女中)に身を委て居る事、此等の子として妹として姉として一朝岩橋の嫁になつた後の事を想像して見ると、背に水を注がれる樣な氣がして、一時辰彌へ傾けて居た意と、光子にそれとなき約に背いても、自分の身を定むべき時でないと決した。」とある。理性の交つた戀とでも云ふ可きであらう。之に比較すると同氏の女仕入の方が面白い、女仕入にはお山と云ふ女が誘惑されて惡所に賣られる事を知らずに、段々戀の淵へ引入れられる順序が書かれてある。「以前は女としては辯者の方で隨分勝氣であつたが、漸次口數を聞かなくなり、母に語を返す樣な事も尠なくなつて、さえ／＼とした顏色であつたのが、何處となくくすんで見える樣になつた。次にお山は臂掛窓に傍掛つて、何を見樣と云ふのでもなく、じつと家外の景色を眺めた、眼に見える程の物はそれ／＼に映つて居ながら、何物一つ心に留つて居

るのではない、何か考へて居るかも知れぬが、それも自分は何を考へて居るとも覺えぬので、何だか恍惚して居て、唯世の中が詰ない者の様に思はれて居る」之れ迄は只何となく考へて居たのであつたが戀して居る事を自覺した。「自分には其とも覺えぬながら何時かあらぬ考へも發つて居たのか、それと氣付いた時には可怖しさに戰慄もされて、顔色さへ變つた。それで尙ほ何とも知れぬ恍惚した心地もある。」又「一大事の身に迫



つた様な心地がして、可怖しい様でもあれば、さうでない様にもあり、心細い様な氣もする」猶「何となく胸騷が爲て居て、漸つと心を定めて、今しも口を開かうとした時、廊下に足音が爲たので、はツと思つて、何とも云へぬ程怖ろしくなり、頭を締付られる様に覺えた」とある戀とも云へないが欲情の芽した頃を星湖が犬ころに書いてある。「紅の花を仰いでも淺緑の草を踏でも心が動く時が來た、眼を瞑る間にも何とは知れず身

内から湧く思ひに包まれて、ダルク懶い樂さに耽る事があつた。フトすると甞ては厭はしかつた少年等の間に懷しい面影を覔める事もあつた」。之れよりは少し世間馴た女で對照のない戀と云ふのも可笑いが、唯人懷しく感じる頃の事を同じく星湖が一切の事に「妹の廂髮、淡紅色の襦袢などに目を着けても、そゞろに涙組折があつた、誰かの膝にすがり付いて思ふ樣泣て〳〵訴へて見たい心が胸一杯になる事があるが、誰も受け納て呉れさうな人は一人も無かつた」同じ樣な初戀、白鳥の徽光に「その頃からこれまで知らなかつた、物懷しい樣な、何か待遠しい樣な氣持が、絶えず胸に湧いてゐた。敎はつた文字を集めては戀文を書いて喜んだり、戀しき御許へと誰に宛るともなく書て見たりした。」同じ徽光に「低い聲で止切れ〳〵に言葉少なく話して居る。間々に、互の心には昔の事が小說の樣に浮んだ、そして男は段落のついた物語を振返つて思ひ出す樣だつたが、女は尙物語の中を小迷つて居る氣で居る、」自分より小さい子供を戀して「私やもう何にも—衣服だつて、お金だつて食べる物を食べないだつて、銀ちやんとさへ一處に居られりや、世間に欲い物は一つだつて有りやアしないよ、可愛くつて仕樣が無い」と柳浪の二人やもめにある。性慾ばかりの事を河内屋（柳浪）に「清二郎に對しては甞て拒れた其當初の情慾を、如何なる手段を設けても達し得たいと思つて、お染（清二郎の戀人）を憐れむ樣をほのめかすのも、一つは此に依つて清二郎の意を惹かうとも爲て居たのである、其の情慾は焚るが如く、隙あれかしと望んで居た。」とある河内屋を書いた時代に、こんな事を書いたのは珍らしいのである。又谷崎潤一郎の羹に「一度關係したら最後、萬一其男に捨てられやしないかと云ふ不安と、弱點とが娘に附き纒つて、處女としての誇も、純潔も失つてしまふぢやないか」とあるのは、能く初戀後の女の急處を捉へたものであらう。

初戀の描寫はまだ〳〵澤山にあると思ふが、以上はほんの一端に過ぎぬ、他日機會を待つてまた補ふところがあらう。

婦人職業案内（七）

山田菊水



電話交換手

◎交換局は女の國

電信係は殆んど全部男子であつて、唯だ僅かに江戸橋の中央局に七十人ばかりの女子部があるのと、市内の無集配局及び地方の三等局に、少數の女子電信係を使つて居る位で、女子の職業と云ふ方らか見れば、電信局はやつと開拓の緒に就いた所であります。之に反して同じ通信機關でも電話の方になると、僅かの監督者を除いて、その從業者の全部は女子でありまして確實に女子の占領に歸して居ります。尤も電話交換の初めて開始された頃は、男女の交換手を使ひ、夜間は男子の交換手を使つたのでありますが、段々研究の結果交換手に具備すべき性格たる、緻密、忍耐、從順と云ふ様な點になると、鬚むしやの男子では何うもいけないと云ふので、明治三十四年の五月から、東京で全部女子を使ふことになつて以來、漸次男子を驅逐し去つて、全國各地とも皆な女子を用ふることゝなり、今日では交換手と云へば直に女子を意味し、電話と云ふ便利にして且つ偉大なる通信機關は、全部纖弱なる女子の手によりて運轉されて居るのであります。

そこで、何の位の交換手が日夜働いて居るかと云ふ

と先づ東京で云へば、本局、新橋、浪花、番町、芝、下谷、京橋、本所の八つの電話局があつて、最近の調べによると交換手の數が八百名、見習が二百名、主事補及び書記補等の監督者が百九十名、都合千二百名ばかりの女子が、直接に働いて居りますし、これに事務の方に働いて居る女子吏員を合計すれば約二千三百名の女子が働いて居ます。これ丈けの女子で何れ丈けの仕事をして居るかと云ふに、市內の加入者が三萬三千八百名で、それが引つ切りなしに通話をするので、一日の通話數六十二萬度、市外との通話が一日六千通話、即ち一日五百時間と云ふ、一寸想像して量の分らない程の仕事をして居ります。更に之を全國の電話局に見るに局の數が九百箇所あつて、約七千人からの交換手が働いて居て、十六萬三千餘の加入者の通話を取扱つて居ります。この大なる通信機關は、全部女子の手で動いて居て、若し交換室の參觀にでも行つて見るならば主事と云ふ男子の顏が一つ二つ見える位で他は監督者に至るまで皆な女子でありまして、宛然女護島に行つたやうであります。

◎女子職業の先驅者

曾ては交換手と云へば何だか肩身の狹い樣に感じ、友達朋輩の間にも、交換局に通勤すると云ふと、氣恥かしい樣に思はれた時代もありました。お轉婆盛りの女學生などは、冷やかに尻目に見て「あの人は何番學校よ」と輕侮する樣なこともあつた。然し夫れは未だ女子の職業が發達せず、娘と云へば琴でも彈いて、茶の湯活け花でも弄つて居るものと思はれて居た十年も以前のことで、今日の樣に職業の神聖が漸く認められて、女子も男子も老人も青年も、皆な働かねばならぬ時代となつて見れば、交換手は女子の職業の先驅者であつたと云はねばなりません。而かも女事務員や女店員の如く、お客に直接する職業でもなく、誘惑さるる機會も亦た少なく、棟居管理局長が「交換手は結婚前の女子の理想的の職業である」と云つて居らるゝのも必ずしも我田引水ばかりではない樣であります。

而して現在勤めて居る交換手が、何んな動機で以て勤めて居るであらうか、當路者に就て聞いて見ると、所謂十人十色で各々異なつては居るが、最も多數と認めらるゝのは、お嫁入の支度のため、若くは家計を助けるため等で、中には弟や妹の學資を得んとて勤めて居るのもあるし、又は勤務の餘暇に裁縫、技藝を習ひたいと云ふ感心なものもあるさうです。而して現在勤務せる交換手の平均年齢は十七歳で、勤續年限の平均は一年八箇月、西洋の三年八箇月に比較して勤續年限の短かいのは、我國の方が早く結婚するためだらうと當局者は云つて居ります。

◎志願者及び採用法



女髮結　伊賀とよ

志願者の資格は尋常小學校卒業又は之と同等の學力あるもので、十三歳以上二十歳までの未婚者に限ると云ふことになつて居ります。然し一度交換手となつた後に結婚するのは自由であつて結婚を屆出づれば局の方でも之を認めて呉れるし相變らず勤めて居られますが、實際は若い連中ばかりのことゝて、表向に屆け出づるのは極まりが惡いと思つてか、多くは以前の儘の苗字を名乘つて、公然の秘密として勤めて居ります。

採用さるゝ場合には、前述の程度で作文算術讀書の試驗があるし、同時に體格檢査がありますが、體格檢査は主として視力聽力等を檢査するのであつて、普通の健康體のものならば、無論合格するは請合であり

ます、然し斯うして色々の條件をつけて試驗すると何所かに缺點が出來るものと見え、東京だけの志願者は毎年千九百人もあつて、其內から約八百五十名を採用して行く勘定で、先づ志願者の半分が採用さるゝ譯であります。

試驗に合格すると先づ京橋局內の養成所に入れられ約一箇月間交換業務に關する學科や、交換の技術其他發音等の練習をさせられますが、初めは樣子が分らぬので機械が恐かつたり、言葉が曖昧であつたり、又は無暗に大きな聲を出して見たりして、呼吸が難かしいが、一箇月も練習する內に段々熟練して來まして、夫より本人の希望と住所とを參酌して、夫々電話局に配屬せしめられます。而して配屬局にても約一箇月位は見習として使ひ、古參の仕事振りを觀たり、又は後見附で交換臺に着いたりして、實務に慣れるのでありまして、愈々一人前の交換手となるのは、採用後三箇月目であります。尤も市外線の方の交換手は更に一箇月位の練習があり、長距離臺に着くには電信も一通り稽古せねばなりません。

◎勤務時間

勤務時間は局によりて多少異なつて居て、晝勤と夜勤とを區別した局もあり、區別しない局もありますが槪して一日の勤務時間は七時間又は八時間でありますが假りに晝勤夜勤を區別して居る局で云へば、晝勤であれば朝の七時に出勤した日は午後二時に退け、九時に出た日は四時退け、午後から出勤する日は夜の八時退けと云ふ風に、幾組かの組があつて、組の中にまた早出晩出があつて、順次交代して行く樣になつて居ります、夜勤になると、普通四時頃に出勤して翌朝七時過ぎには退けますが、其間に交代で六時間づゝ睡眠が出來る樣になつて居ります。而して何れも一時間交換臺に着いて働けば、十五分乃至二十分の休憩時間がありますし、休暇は二週間に一度又は月三度位になつて居て、臨時夜勤の翌日は明けとなるが例であります。

勤務時間は局の方でも出來る丈け交換手の希望を容

れ、晝勤に廻したり夜勤專務にしたりしますが、中には夜勤を希望して、晝間學校に通つたり、又は裁縫の稽古に行つたりして居るものもあります。

◎交換手の收入

試驗に合格して養成所に入ると、差當り日給十八錢のお小使が貰へますし、養成所を出て配屬局に行つて見習中は日給二十錢であります、而して愈々一人前の交換手となると二十二三錢の日給から踏み出して、一年に二度二錢宛昇給し、人によりては一錢宛四度昇給するのもあります。斯くして三十錢以上となれば昇給も漸く頻繁ならず、何うかすると一年も上がらない人もありますが、然し四五年も勤めて居る内には、大抵四十錢四十五錢位になり、ソロソロ缺員の生ずるに從つて主事補となります。主事補は交換手の一部を監督するもので、主事補中成績の優良なるものは、書記補と云ふ判任官に採用されます。但しこれは極く少數であります。



流行の髮の結ぶり

交換手や主事補の給料は六十五錢が最上給でありますが、給料以外に二年以上の勤續者には一箇月四十錢乃至二圓の年功加給と云ふ割增しがつきますから、二三年も勤めて居る内には月額十四五圓には直になるらしい。夫れに年に三回勤勉手當と云ふ賞與があつて、技倆勤勉の如何により、勤續一年位のものは一回二圓五十錢か三圓位、二三年以上の勤續者は一回十五六圓づゝも貰へるのであります。又

ます、然し斯うして色々の條件をつけて試驗すると何所かに缺點が出來るものと見え、東京だけの志願者は毎年千九百人もあつて、其內から約八百五十名を採用して行く勘定で、先づ志願者の半分が採用さるゝ譯であります。

試驗に合格すると先づ京橋局內の養成所に入れられ約一箇月間交換業務に關する學科や、交換の技術其他發音等の練習をさせられますが、初めは樣子が分らぬので機械が恐かつたり、言葉が曖昧であつたり、又は無暗に大きな聲を出して見たりして、呼吸が難かしいが、一箇月も練習する內に段々熟練して來まして、夫より本人の希望と住所とを參酌して、夫々電話局に配屬せしめられます。而して配屬局にて又約一箇月位は見習として使ひ、古參の仕事振りを觀たり、又は後見附で交換臺に着いたりして、實務に慣れるのでありまして、愈々一人前の交換手となるのは、採用後三箇月目であります。尤も市外線の方の交換手は更に一箇月位の練習があり、長距離臺に着くには電信も一通り稽古せねばなりません。

◎勤務時間

勤務時間は局によりて多少異なつて居て、晝勤と夜勤とを區別した局もあり、區別しない局もありますが概して一日の勤務時間は七時間又は八時間であります假りに晝勤夜勤を區別して居る局で云へば、晝勤であれば朝の七時に出勤した日は午後二時に退け、九時に出た日は四時退け、午後から出勤する日は夜の八時退けと云ふ風に、幾組かの組があつて、組の中にまた早出晩出があつて、順次交代して行く樣になつて居ります、夜勤になると、普通四時頃に出勤して翌朝七時過ぎには退けますが、其間に交代で六時間づゝ睡眠が出來る樣になつて居ります。而して何れも一時間交換臺に着いて働けば、十五分乃至二十分の休憩時間がありますし、休暇は二週間に一度又は月三度位になつて居て、臨時夜勤の翌日は明けとなるが例であります。

勤務時間は局の方でも出來る丈け交換手の希望を容

れ、晝勤に廻したり夜勤專務にしたりしますが、中には夜勤を希望して、晝間學校に通つたり、又は裁縫の稽古に行つたりして居るものもあります。

◎交換手の收入

試驗に合格して養成所に入ると、差當り日給十八錢のお小使が貰へます、養成所を出て配屬局に行つて見習中は日給二十錢であります、而して愈々一人前の交換手となると二十二三錢の日給から踏み出して、一年に二度二錢宛昇給し、人によりては一錢宛四度昇給するのもあります。斯くして三十錢以上となれば昇給も漸く頻繁ならず、何うかすると一年も上がらない人もありますが、然し四五年も勤めて居る内には、大抵四十錢四十五錢位になり、ソロソロ缺員の生ずるに從つて主事補となります。主事補は交換手の一部を監督するもので、主事補中成績の優良なるものは、書記補と云ふ判任官に採用されます。但しこれは極く少數であります。



流行の髮の結ぶり

交換手や主事補の給料は六十五錢が最上給でありますが、給料以外に二年以上の勤續者には一箇月四十錢乃至二圓の年功加給と云ふ割增しがつきますから、二三年も勤めて居る内には月額十四五圓には直になるらしい。夫れに年に三回勤勉手當と云ふ賞與があつて、技倆勤勉の如何により、勤續一年位のものは一回二圓五十錢か三圓位、二三年以上の勤續者は一回十五六圓づゝも貰へるのであります。又

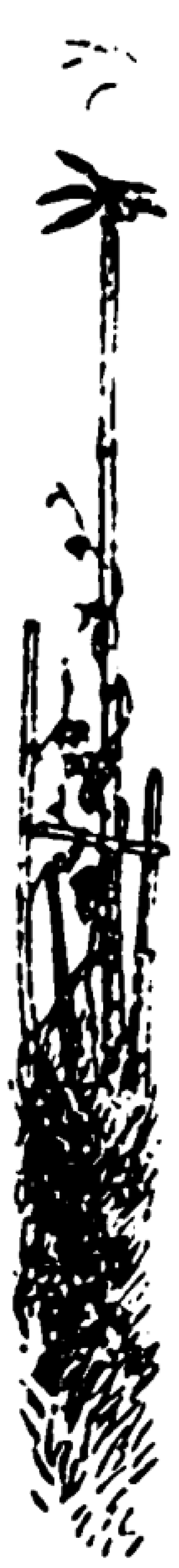
た書記補の給料は月給になつて居て、十八圓から二十五圓位までゞ、一箇月の實收入は三十圓位まで進みます。

交換手には三年以上勤續して退職するものには、退職手當として月給額相當の金額を給與せらるゝことになつて居りますし、追々は結婚手當をも給與する樣にしやうとて、當局の間に內議があると云ふことであります。又た交換手に貯金を奬勵して、現に東京だけで總額四萬圓の貯金があつて、中には一人で數百圓を貯蓄して居るものもあるさうですが、親が商賣の資本が足りないと云ふので、娘の貯金や退職手當に目をつけて、可惜有望の交換手を退かせたと云ふ悲劇のあつた實例も聞いたことがあります。

◎慰安的設備

交換手の品性を淘治するため、時々講話會などの催さるゝことがありますが、此等の外常設の慰安的設備としては、氣持ちのよい食堂や庭園を設け、休憩室あり洗面室あり、寢室等の設備あり、夏は風呂も立ち、煽風機も回ります、冬は暖かなストーヴも燃えてあります、休憩室に行つて見ると新聞雜誌類も備へてあるし、闘球盤もあるし、オルガン等も据付けてあります寢室では敷布や枕覆は一人々々專用のものがあつて出來る丈け氣持よく休める樣にしてあります。

此の外裁縫室と云ふのがあつて、爰には裁縫の先生が每日出張して來て、裁縫を敎へて居ります。十五分二十分の休憩時間には碌々仕事も出來やう譯はありませんが、早退けの時に居殘つたり、晩出の日に早く出たり、又は明や休日に此所に來て、稽古するものが大分あります、又た局によりては裁縫の外に女禮式や作法などを敎へ、傍ら活花や茶の手前の一つも敎へる所もありまして結婚前の女子をして職務に從事すると同時に、婦人一通りの稽古をする機會を失はしめないやうに出來るだけ氣を注けてあります。



三泣車（六）

金色夜叉のモデル

間貫一が巖谷小波だといふことは早くから知られてゐたが、先達の『現代』に氏のみづから書けるモデル談あり。されど宮が何人なるかは説明せず、熱海で宮を蹴つたのは尾崎紅葉だといつてる（遊佐が川上眉山なることも仄めかしてあつた）宮は誰あらう、故川田甕江先生の愛嬢、當時の日本銀行總裁男爵川田小一郎氏の三男に嫁いだ綾子其人である。あや子を許嫁の巖谷氏より奪つたのはあや子の兄川田鷹氏である（令閨は黒木大將のお子さんらしい）青春多恨の夢、さめ來つて一元に歸す、宮は發狂したが綾子は二人の子の母となつてゐる。有名な新橋のお艷に似てゐたといふから實際うつくしき人らしい。

「不如歸」に泣く女は言ふまでもなく低級の人だが、一富豪の三男に嫁いだ綾子と、死して永く人に悼まるゝ浪子と、どちらが心やすからう。はつでひの印象は深甚刻烈である、耻を知る人なるかぎりいつかは悔ひる時が來る。語を寄す花の如き都門の子女よ、欺かざれ。

珍裁判

三河國碧海郡明治村字西端鳥居幸作といふ二十八になる男は、おしやうといふ二十五の妻が、お松お梅と云ふ雙生兒を產んだ處、幸作は何と思つてか突然におしやうを離緣した。しやうは子供の引取方を肯んせず、止むなく名古屋地方裁判所の訴訟沙汰となつたが、幸作の言分がおもしろい、雙生兒の中の一人は確に自分の兒であると認めるが、一人は覺えがないから引取ることは出來ないと。

オノンが文

臺灣生蕃の女子オノンは同地の國語傳習所で日本語を學んで居るが、守備隊の一兵士がオノンに掛想して艶書をつけた、オノンは左のやうな返事を送つた、此返書は今も同樣に保存されてゐる。

うれしい、あなたこゝろなれど、わたくし、おやのさだめた、をとこあります、みだらなこと、かみさまに、すまぬ、をんなの、をしへにたがひます、あなたつゝしみなされませ、わたしもつゝしみ、べんきよします。

知事とは如何

此程泉州堺の某小學校で「知事とは如何なるものなりや」との教師の質問に對し、三年級の一生徒は答へて曰く「知事とは學校に來りて祝文を讀み折詰を喰ふ役人なり」と、妙々。

雀の結婚

米國タコマにミスタア、チユウ子と云ふ雀があつた、東洋に嫁入口を探さうと思つた譯でもあるまいが、ロバートソン氏の率ゐる觀光團がシヤートルを發してから、一船員は計らずもタコマから來たチユウ子を何かの拍子で、ミネソタ號の船室に締込むだ。何が偖て海上無聊で困る處であつたから、チユウ君は忽ち人氣を博し船中第一の花形となつた。其處でゼムソン氏と云ふ老紳士が、扉を開いて、チユウ君の拘束を解いてやつたらチユウ君大に老紳士を德とした譯か、チユウ〳〵と叫むで得意の雀躍を演じたので、益々船客の愛物となつた。斯くてミネソタ號は十七節の速力で洋上を航行する時、チユウ君は常に檣頭、或は船室に自由行動を執りながら、ミネソタ號を放れなんだ、船中のお乘合ひ別けて婦人連は可愛いのチユウ子よと愛する事一方でない、航海幾日の後、ミネソタは日本を遠山淡墨の景として望むに及んで、軈て野島岬を通過せんとする時、生粹の日本雀は晴れ〴〵とチユウ〳〵やらかして、遠來のチユウ君が居るとも知らず、船を望んで翔よつた驚奇したはチユウ君で日本雀に何か云たが異邦の言葉で頓と解らぬ、誰も相手にして吳ぬからチユウ子君甚

だ手持無沙汰であつたが、日本雀の中にも中學校の軒に育つたのがあつたと見えて、マンマと婚約がなり立つて、歸化して了つた、同じアメリカでもカナダだけ鳥中間には排日熱が傳染しないのであらう。

看板文學

書置きを集めたり落書きを蒐めたりするのが立派な文學なら看板文學も存在の價値あり。とせねばならぬ。茲に北海道は帶廣といふ艶な名の町に「各國喰パン」あり、「陸軍拂下薄利多賣主義」と主義を明かにしたのがあり、「名勝豆、西洋菓子直輸入、ロスケパン」と三つ並べた上へ、右のはしへは「銘酒千代娘」左へ「老松」と書添へたのは甘黨も辛黨も生捕るつもりと見え、儉約旅館あり、牧場はすぐ目の前なのに迷惑千萬にも「十勝牧場道案内所」と千里も遠い所のやうに看板を上げたのがあり、さては「きちねむづなの皮高く買升」あり、「賣る人來れ買ふ人來れ賣主に利あり買手に益あり」は都合がよすぎるではないか、それよりもなほ滑稽なのはなんぶせんべいを店頭に並べて、「價格低廉品質堅牢」とある看板だ、誰がそれを嚙るかと思ふとをかしくなるが、あ北海道には熊がゐるのだつけ



新流行の桃われ

十八女

竹串田樂左衞門、平平平平平、は知らず、徳島縣那珂郡加茂谷村に『十八女』と書く大字あり、年は二八か二九からぬといふから、「いゝをんな」とでも訓むのだらう、それとも「をとめ」かと思つて聞いたら、さかりだと云ふ、大いに佳。



化粧問答

化粧研究會婦人修容會顧問　藤波芙蓉

△（一改廢に就いて）（一）今日までわが化粧の友に御分布して居つた「化粧水」は、ボログリセリンナトリウムにクロールカリウムを配劑して中性のものとなし、化粧水として他のそれよりも優越して居るとの自信をもつて、それを文壇社に附與したのでしたが、單に精良品を拵へるといふ希望に囚はれたゝめ、原料の失費が嵩む缺點がありますので、其後種々改善の方途に研究の歩武をすゝめ、其後漸く從來の「化粧水」よりも啻に原料の低廉なるのみならず、更に効果の顯著なる「艷美水」を製出するに至りました。その「艷美水」は實際に於いて私が創製したものでなく、當時歐洲の競嬌社界に、「女神の肌」として稱賛されて居る最新化粧水の處方に據り、それに我日本婦人の肌に適すやう、聊か改良を加へて拵へたのです。「拔毛止」も、エピカリン、タンノプロミン、カプトール等の最新藥を重なる主材として拵へたのですが、此等は何れも一号卽ち約八匁で一圓五十錢以上三圓も致して居るので、實は或特種の人、卽ちわが修容倶樂部、化粧研究會等の會員よりの希望に從つて調製したもので、一般の人々の化粧料としては經濟の點から不適當の嫌あるを免れないのでしたが、本誌愛讀の化粧の友より強つての御依賴で遂に本社から御分布する事に致したのでしたが、何とかして之れに代ふる廉價な良劑もと苦心の結果、英國皇室の侍醫として有名なるロコック先生が、故ヴイクトリア大女皇陛下の御髮を生育し、御毛の脫落を防ぐ御料にとて謹製して獻納したローションフオアーゼーヘヤーの調製法を、私が海外の親友、佛國巴里大學の教授ラブルー君から聞かして貰ひましたので或るやんごとなき御方に、この旨を申添へて御試用を願ひましたが、その結果は如何なる有効であつたに係らず、毛髮の色澤を添へる點に於いて、日本婦人に適せぬふしがありましたからそれを補ふだけの藥劑を加へ、茲にこれを「强髮劇」と名づけ、新たにわが化粧の友に御わけする事に致した次第です、原料も「拔毛止」に比べると五分の一程にもつきませぬ。（三）洗粉に至りましては、その原料の主材たる茶豆が遠く滿州から求めねばなりませんため、時に品切れとなり、御注文の人々に、大層お待たせすることがありますので、中には私又は社の方へ責任呼ばはり信用呼ばはりさるゝやうな、相互の迷惑を致すこと一再に止まりません。それ故これに代ふる洗料としてトレートクリームと名づくる植物性の液體洗粉を以てすることに致しました。先の純植物性洗粉がアブラ性の人には極めて適當なるも、アレ性の方には適せぬ點があつたるに反し、今度のトレートクリームは如何なる皮膚の御方にも適應する長所を具て居ります以上の理由によりて、「洗粉」、「拔毛止」及び「化粧水」に茲に撤回廢止致し、改めて「艷美水」「强髮劑」並に「トレートクリーム」を調製推擧することに致しました、その性質用法及び原料代等は廣告欄を御覽下されば御わかりになります。

問（一膠質不足と申す髮の病は如何致しますれば直りませうか。（二）先生御宅にては電氣脫

毛術は御施術下さいますまいか(神田、彌生の人)

答 (一)ナフトールワゾーゲンを頭皮にすり付けなさい。(二)致しては居りません。

問 (一)餘り唇をなめた爲めか、下唇が非常に厚くなりましたが薄く致しますには、(二)身長の高くなる方法を(忘勿草)

答 二問共に私の知れる限りに於いて不可能と存じます。

問 私は當年二十三歳のオールドミスで、身體が肥太つて居りますため大層老けて見えます。尤も顔も體もブク／＼と締りなく、額には大きい深い皺があり、眼の下凹みて周圍に細かい皺がございます、此等の皺や眼の下のたるみを取りたいと存じますが(長崎、うすめ)

答 精しくは近き將來に於いて、化粧學講義の第一編として會員方に頒布する筈になつて居る「美容體育法と美容摩擦法」を御覽下さい。

問 私は年中顔にニキビが出來て種々の藥をつけて見ましたが、一向駄目でした、何卒良劑を(鳥取、御寺の人)

問 硫黄乳五匁、酒精二十五匁、ラベンダー精五匁、グリセリン七匁を煉合したものを毎日一回づゝ御つけになり翌朝、アルカリ性石鹸精で御洗ひなさつて御覽なさい。

問 いつぞや先生から御教へ下さいました藥をつけましたので、ニキビ見事に直りましたけれど、その痕が薄黒く殘つて居ります。これを除きます方法は(福岡、愛讀女)

答 枸櫞汁をすり込みなさい。

問 (一)隆鼻術によらず、鼻を高くする良法は他に御座いますまいか。(二)鼻下の發毛を防止する脱毛液を。(三)毛生、脱毛の兩劑を併用して眉形を整美ならしむることが出來ますでせうか(本郷、一少女)

答 (一)美容摩擦法によられたら宜しいかと存じます。(二)硫水化ナトリウムがよろしいでせう。(三)理論から申せば可能の如く思はれますけれど實際に於て中々面倒であります。

問 先生御召しの剝離劑を應用致したいと思ひますがその賣所、使用法及び害の有無等を(神田、みさ子)

答 私の申上げた剝離劑は賣品ではありません、害の有無は其皮膚質の如何によつて決せらるべき問題ですから、いよ／＼應用して見られたい御希望でしたら一度拙宅へ御出なさい、實地についてよく御注意申上げませう。

問 (一)子供の時に胎毒腫物のため生際の禿げました處へ生毛させますには。(二)ホクロを取りますには(金澤の女)

答 (一)恐らくは駄目かと思ひますが、肉荳蔲華油をブランデーに合したものを、毎日其所にすり付けなさつて御覽なさい。(二)苡薏仁をすりつぶしてそれをホクロの上に御つけになると取れます。

△(京城、色黒女)さんへ御手紙のと承知致しました、住所は牛込赤城下の九です、直接御尋ね願ひます。

△(乏しき乙女)さんへ、御事情によつては廉價どころか原料代を頂かんでも御助力せぬともありません、私は化粧品を賣つて糊にして居るものではなく、己が化粧の友をヨリ美麗にして見たいとの一種の趣味をもつて研究して居る氣まぐれ者なんですから、兎も角精しく私宅の方へ御申出に預りたいと思ひます。

問 (一)先生のお話の馬齒莧はどんなものでせうか、藥屋へ求めに參りましたら馬糞だと云はれましたので、止しましたが。(二)眉が髯の樣に、先で上る癖が御座いますが、美しい眉になる法を(大阪、花子)

答 (一)すべりひゆとは馬齒莧科に屬する植物で、和名鈔には宇萬比由とあり、馬齒莧とは漢名で、周防や豐前ではヌメリビユ、加賀ではズンベラビヤウ、伯耆ではイワヒヅル、木曾ではスベリグサ、相模ではイスヒヤウ、佐渡ではスベリヒヤウと申すさうで、洋名はポルチ

開きます。その色の様々な鮮かさ、誠に見事な花であります。

かはつた花が欲しいのなら、種子を蒔かねばなりません。種子は春蒔いて十分の手當をしてやりますと、秋になれば小さい球根が出來ますから、防寒の用意をしてやらなくてはなりません。すると翌年か三年目になると花が咲きます。普通の播殖の方法は、大きい球根の側に出來る球根を分けて植ゑることです。これは左程の面倒がありませんから、誰でも出來ることです東北地方のやうな寒い所、東京の郡部でも、冬は堀上げて凍らない様に貯藏し、暖かい所では植ゑたまゝにしておいても差支はありません。

肥料は注意する程には變つてはをりません。

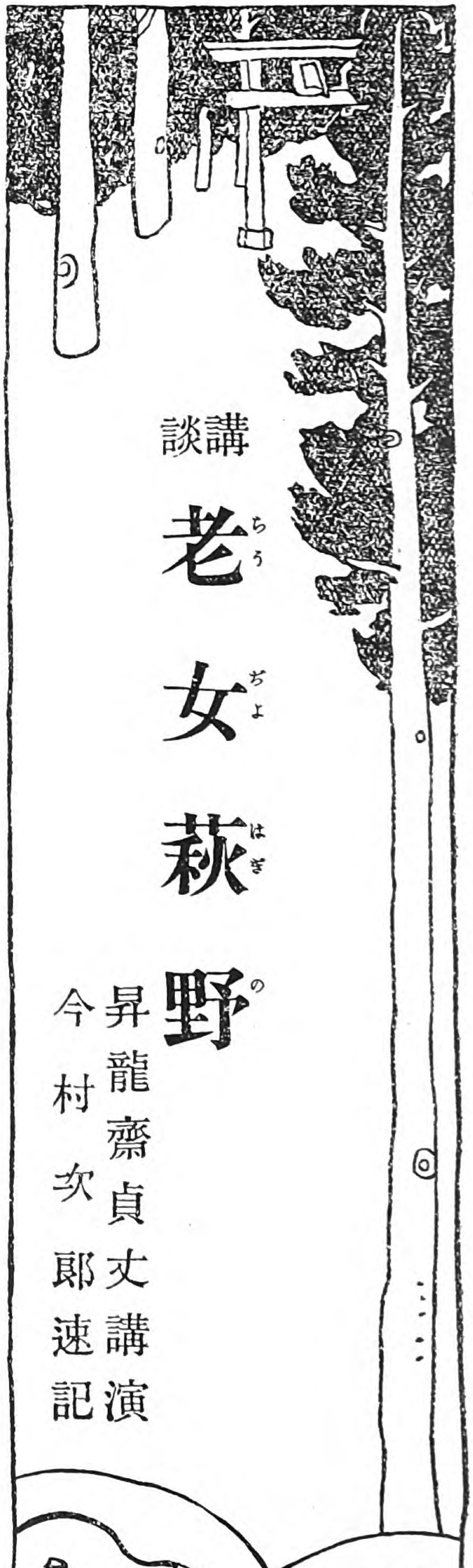
スヰートピー

切花としては餘程前からありました。香のいゝ小さい花です、草の形から花の形からが、豌豆そつくりの俤を有して居りますが、その花の白、紫、紅、黄、絞りなどの色様々の美しさがあります。その香りの高いことは草花の中では稀しい位です。歐米人がスヰートピー、スヰートピーと言つて騒ぐのも無理がありません。鉢植ゑにしても、花壇の花にしても、いかにも小さくやさしい風情を見せますので、まことに心地のよい花です。殊に之を籬作りにしますと、誠に似合しい美しさが見られます。

春、早く種子を蒔きますと、三週間もすれば生えて出ますから、五寸位にもなりましたなら支柱を立てゝやるのがよろしいのです。特に此の草に注意しなくてはならないのは、苗と苗とが絡み合はない様にすることとです、もと〳〵越年草ですから、餘り霜雪の降らない所ですと、秋蒔にすれば生ひ立ちもよく、花も晩春から秋おそくまでも咲き續きます。肥料は油糟などやれば結構です。

金鷄草

夏の盛りから、秋まで随分と長い間、その短い莖から數十の眞直な枝を出して、それに直徑一寸餘もある黄色な花を數百となく咲かせる様は、見ても賑かな花です。全體の高さは一二尺でありますが、中には五六寸しかない矮性なのもあります、丈夫な一年草で、孔雀草と同じで、種子は蒔く必要はなく、こぼれ種子でどん〳〵と生えて出ます。肥料は何でも少しやればよろしい譯ですが、多いと却つてよろしくありません。



講談

老女萩野

昇龍齋貞丈講演
今村次郎速記

越前宰相忠直公と申上げるは結城秀康公の御子息でございますが、性來御短氣な殿樣で、不圖した事の間違から自暴をお起しになつて、頗ぶる亂暴をなさいます る、心ある御家來が御意見をすれば御手討になる、御傍には佞人多く附添つて居ります、或一日十四五名の家來を連れ福井八幡へ御參詣に相成りました、大名の御參詣でございますから、神官に於てもお出迎へ申し前の茶店に於て少しく御休息の上、八幡の社務所で大分御酒を召上り、愈々御歸館といふことになり、今日はお野駈けでございまして、各々野服半纏を着用いたし、太守に於ても其の通り、一のお鳥居の處までお出でになりますると、彼方から來たのは年頃十七八、花も羞らふ絶世の美人、扮裝も大層美でございまして、頭は文金の高島田、極人柄の良い造でございます、女を賞める處は迚ても落語家のやうに巧くは申上兼ねましてどうも賞め方が堅くなる、沈魚落雁閉月羞花、天津乙女の下界へ降りしが如く、丈高からず低からず、瘠もせず又肥りもせず、ナカトミのお拂見たやうな顔の道具の揃つた、目鼻立のパラッとした美しい女、勿論道具が揃つて居るから美い女だが、一ッでも缺て居れ

ば不具者だ、目鼻立がバラツとして居るから宜いが、滅茶〳〵だつた日にやア見られたもんぢやアございません、附て參りましたのは四十二三にも相成りませうか、前帶で之も立派な扮裝をして居るのは阿母と見えます手代が一人、女中が二三人も附て、手洗水の處へ參つて手を洗ふ樣子を御覽に相成つてどうも那の婦人は餘程美形だと思召したから 忠『コレ〳〵彼は何と申すものであるか、彼の婦人の名前を尋ねい、身分を聞いて參れ』一人の若侍が夫へ罷り越したが、間もなく立歸りまして 侍『申上げます』忠『何ぢや』侍『那は本町一丁目に住居をして居りまする太物渡世松屋藤七娘にございます』忠『ウム、松屋藤七と申す者の娘か』侍『御意にございます、尤も藤七は三年以前に病死をいたし、後家きぬといふ者が、彼の前帶を締めて居りまするもので 忠『左樣な者を別段尋ねるのではない、若き婦人を尋ねるのだ』侍『彼女は松屋の娘でしまと申します、同町内萬屋金兵衞伜金三郎といふ者へ縁付きまする約束整ひて、結納の取交せも濟み、今晩輿入れいたしますに就て、福井八幡へ參詣に罷り越した由にございます』忠『ハヽア萬屋金兵衞伜金三郎に嫁入りいたすか』忠『御意にございます』忠『左樣か、艶かなものぢやアな』侍『まづどうも稀なる美女にございます』忠『アヽいふ美女を町人の妻にいたすは不便ではないか』殿樣は氣樂なことをいつて居る、町人は何も縹緻の美しい女を女房に持てないと極めて居る 忠『予が心に叶つた、同道いたせ、アヽ手許に召使ふであらう』侍『委細畏まりました』と又若侍が夫へ參り 侍『コレ〳〵松屋の後家、唯今上へ申上げたる處が、扨仕合せ者で、上のお目に止つて娘しまの儀は唯今より手許へ奉公申付けるといふ事、早速今日より御城内へ召出すやういたせ』番頭は驚ろいて 番『エー恐れながら申上げます』侍『何だ』番『エヽ唯今も申上げたる通り、今晩同町の同商賣金兵衞伜金三郎方へ婚禮の約束整つて居りまして、已に充分の手當をいたし、福井八幡に參詣に參りましたのでございます、思召しは有難う存じますが、どうか此の儀宜敷お取執を願ひます』侍『コレ〳〵何も貴樣の

知つて居る處でない、殿樣の御意に叶つてお手許に奉公が出來るといふのは仕合せではないかきぬ『誠に有難い事でございまして、好い御返事を申上げたうございますが、唯今番頭の申しまする通り、何分婚禮の支度もいたし、早や今晩に差迫つて居ることでございますからどうぞ御免を願ひます』と阿母は頻りに斷りを申し、おしまは眞青になつて、どうなることかと思つて居りまする　侍『何か殿の御意に從ふ譯にならんか、夫は不都合千萬、左樣な事を申したら却つて爲になるまい、速やかに御城内に差出したが宜からう』きぬ『でもでざいませうが、どうか之ばかりは御勘辨を願ひます』彼是問答して居る内に、殿樣は氣が急くと見えて　忠『兎や角う申すに及ばん、苦しうない、無理にも城内へ召連い』と仰せられました、若侍共斯ういふ時に御機嫌を損じてはならんと、思ひますから、泣いて居りまするおしまの手を取り、足を取り大勢擔ぎ上げましたから、一同の者はきぬ『どうぞ御勘辨を願ひます、御免し下さい』といへども聞かぬ若侍、番頭や女中を突退けて、泣き叫ぶ處のおしまを引擔ぎ立去らんといたしまする、後家のおきぬは狂氣のやうに相成り、取り返さんと縋り付くのを振放し、遂に城内へ擔いで參りました、御城下の町人は驚ろいて　甲『何だ〳〵』乙『殿樣の公引だ、どうも御領主の公引をするのだから、誰も手を付ける事が出來ない、其の中に太守も御歸城に相成り、直ぐに御酒宴を開き、御家來方大勢夫に控へて居りまするると　忠『先刻召連れたる婦人を是へ』程なく女中連に手を取られて其處へ出ましたのは、髮もシドロに相成り、擔がれて來る時に島田の根が拔けたと見え、ガックリ髷は後ろへ返つて居り、前髮が額へバラッと下つて居りまして、涙を含み、悄然と夫へ出たのを見ると一層美を增します、美婦人の憂ふる姿は海棠の夜の雨を含んだ如くといふが、女が美しいといふと何方へ廻つても宜しうございます、泣いた顏が海棠の夜の雨を含んだやうで、笑つた顏は梅の綻ろびかゝつたやうだとか申しますが、醜い女の泣いたのは化臍といつて化物が臍をかいたやうだといふが、そんな面

では仕方がない　忠『コレ〳〵前へ進め、其方はしまと申すか、承はれば町人金三郎の妻となるべき由であつたが誠に危ういことであつたな』ナニ危ういことがあるものか　忠『只今より予が手許に召使ひ遣はす、コレ盃を取らせる、前へ進め、左樣に憂いて居るな、笑い顏をして見せい、笑ひ顏は別段であらう』しま『恐れ入りましてございます、御目通り仰せ付けられまして、有難き仕合せに存じまする』忠『ウム、父は已に歿し母一人で居るとの事であるが、其の邊に於て予も含み置くぞ』野本右近夫へ出で　右『おしまどの、上含み置くといふ御意である、相當のお手當を下し置かれる、サア〳〵さう震へて居ないで、モソツと前へ進め、上のお酌をして酒宴の取持をしなければならないしま『恐れ入りました』忠『何か望みでもあらば只今申せ、聞き届け取らせる、どうぢやしま『左樣なればお言葉に從ひまして、少々お願ひ申したいことがございます』忠『ウム何であるな、衣類でも欲しいと申すか、又母へ對して手當の金子を望むかしま『イエ〳〵左樣なことは決して

願ふ次第ではございません、何なりとも聞届けやるといふお言葉に基いて願ひ上げまするが、どうぞ只今よりお暇を仕つりたう存じまする』忠『何ぢやア暇を呉れ強て其方は金三郎といふ町人の妻になりたいか、夫は惡い心得なるぞ、只今より予が手許へ差置き、一年が二年、十年が二十年でも予の氣に叶ふて居る内は手許を放す氣支はない、決して返しはせんぞしま『左樣なれば申上げますが、假令枕は交はしませんでも、一旦結納の取り交せいたした上は、主ある身體でございます如何に御領主樣の仰せでも、其のお心に從ひましては一旦約束いたしましたる金三郎に對して相濟ません、御領主樣のお掟として主ある女は操を守れ、親に孝を盡せ、朋友に信を以て交はれ、目下には仁を施せと、豫て下々お觸出しがございました』忠『默れ〳〵、何だ若輩なる婦人の身で、仁義の講釋を聞きたくもない、強て予の申付けを背き、心に從はぬとあらば、其の分に捨置かんしま『如何やうなることに相成りましても、上の仰せに從ひまする譯になりません　忠『何ぢや、如

何やうなることになつても心に從はぬとは不埒な奴だ勘太夫、其者を裸體にいたし、庭前の松の根方へ縛り上一寸試し五分試し試し物にせい』と口ではいふが其の實は脅して見たら心に從ふと云ふ思召しで勘太夫といふ家來に目配せをさせました、勘太夫も夫れを察しましたか、態とズカ〳〵と夫へ參り 勘「コレ〳〵君命として、其方を嬲り殺にいたせとの事、夫よりは上の思召しに從ひ、お盃を頂戴いたしたら宜からう しま『イエ假令命を捨てましても、殿樣の思召しに從ふ譯になりません、寧そお殺しになるものならば、少しも早く殺して下さるやうに』といひ出せしは流石に操正しきおしま、恨めしさうに殿樣の顏を見て居りました、其の內に若侍二三人立上つて、兩手を取つて夫へ引据ゑ裸體にいたして、情け用捨も荒繩を以てグル〳〵巻にいたし、庭前の松の根方の處へ繫ぎました、澁井勘太夫が一刀を引抜いたるが、彼是一尺七八寸もあらうといふ長刀、氷のやうな奴をおしまの頰の處にベタリベタリと押當てゝ 勘「强情にも上のお思召しを聞かんとなれば、此の處で切捨てるがどうぢや、思召しに從はぬか 忠「勘太夫猶豫するな、早う切れ〳〵、傷を付けんやうにいたせ、切れ〳〵、傷を付んやうにしろ 勘『へエー』傷を付けんやうに切れるものぢやアない、勘太夫之には弱つた 勘『どうだ、上の思召しに從へ』二三度四五度威して見たが、おしまはモウ淚も留り、只恨めしさうに兩眼を開いて殿樣の方を睨み しま『餘りといへばお情けない上の仰せ、操を守る女を捉へて威しても自分の申分を立てやうといふ思召しと見えますが、固より命を抛つた身體、少しも早く切殺して下さるやうに、冥土へ參つてお恨みを陳べまする、又大勢是にお控へなさる御家來方の中に、一人位は殿樣に御意見をなされ、邪の者を助け遣はすやうにと仰しやる方もありさうなもの、お髯の塵を拂つて、只己の慾に迷ひ、上の御意に背かぬといふは、獅子身中の蟲に等しき方方、アヽ思へば豫て話しに承はる、殷の紂王にも勝る殿樣の御亂行 忠『默れ〳〵、何ぢや予に對して殷の紂王にも勝る者と惡口をいたしな』と眦キリ〳〵ッと上

ると、眞蒼にお成り遊ばして、越前の大守 忠『勘太夫何で猶豫する切捨てヱ』といふ御樣子が只今までは威す心算であつたのが、モウ今度は色氣を去つて少しお怒りの樣子、勘太夫も今は是非に及びませんから、其の儀ならばと一刀を振上げたる處へ、バラ〳〵ッとお廊下を走つて參りまして『暫らく、暫らく、勘太夫樣暫時お控へ下さいまするやうに』と留めるのは何者かと、殿樣振返つて御覽になると、年はモウ五十餘に相成りまする、女中取締をして居る老女の萩野といふ、之は殿樣のお氣に入りでございます、斯ういふお氣暴れの殿樣でございますから、時に依ると御佩刀を拔いて、有合せる肴などを突き掛け、是を食へといつて女中の前へ出す、夫も手へ取つて食べるのでは承知しない、口を開けといふので誰がギラ〳〵する刀の尖先に突通してる物を口を出して食べる者はございません、夫を萩野が、私しが頂戴をいたしますと、長刀を口を開いて戯れにもいたせ、慈姑などを頂戴するといふ天晴の婦人で、女中取締をして居りまする、其萩野が夫へ參りまして、今勘太夫の一刀を振上げて居るのを止めましたから 忠『退れ婆ア、其方の出る處ではない、』萩『イエ只今お次に承知いたしました、あつたら花を眺めも敢ず散すやうなこと、夫よりは笑顔を造りお側へ出て、御酒のお對手いたすやうに遊ばしたが宜しうございませう』忠『イヤ彼は予の申分に背くのみならず何か殷の紂王に如ずなどゝ申す憎い奴だ』萩『夫は女の事でございますから、モウ其の場へ參りますると、前後の考へもなく、隨分其の位の事は申し兼ねませんものでございます、左樣なことを一々お怒りでは恐れ入りまする、只今より明日の四ッ時まで此の萩野へお預け下さるやう、能く說付けて會得をさせ、上のお側へ召連れて罷り出でます、那のやうに荒々しき刀物を以て威しましては、ッヒお心に從ひたいと思ひましても夫が宜い御返事の出來ないのが婦人の常でございますどうぞ私にお預け下さるやうに、餅は餅といふ比喩の通り、女は女同志又宜いやうに、手前が說き聞かせまする』忠『ウム、成ほど、夫はさうぢやアな、刃物を以

て威すと宜い返事をすると思つても夫はいかん、さうありさうなことぢや、勘太夫不埒な奴だ、女は氣の狹いもの、然るを刄物を持つて威すなど丶其奴のやうな多猥氣た奴はないぞ 勘『恐れ入りましてでございます』忠『切腹申付けべき奴ぢやが今日は免す』澁井勘太夫も呆れて終つた、其の内に萩野は庭へ出て參り、おしまの繩を解いて傍わきに脱してありまする衣類を自分に着せ 萩『サアく何の怖い事もない、是から私がお連れ申すから』と御前を取繕ろひ、自分の部屋へ連れて參りました、おしまに於ては尙も淚を流し、頻りにオドくして居りまするのは、寧そ一思ひに殺された方が增しであらう、叉此の人の爲に殿樣に從へなど丶責められるに相違ない、情けないことだと思つて居りまする處、何ともいはない、一間の内に差置いて、晝間の内は話しもなく、夜に至りましても、宵の内は別段に誰も知らさず、自身に張番をいたして居りましたが、モウ五ッ頃ほひになると御殿の事でございますから、森々といたし、部屋方も退つて終ひ、二人差向ひに相成りまると、手を取りまして萩野はおしまを上座へ直し 萩『おしまさん、誠に暫らくでございました、お見覺えでございますか』しま『ハイ何誰樣でございますか一向に解りません』萩『其の筈で、和女のお幼さい時分にお目に掛りましたが、阿母さんのお話しに、城内に女中が一人居るといふ事をお聞きになりはいたしませぬか』しま『ハイ夫は每度お噂をいたして居ります、鈴木新之助樣の御新造が、御城内にお在でるといふ事は承知して居ます』萩『其の新之助の妻、たかと申しますのは手前でございます』しま『オヤ夫では和女が鈴木の御新造樣でございますか』萩『左樣でございます、丁度思ひ出せば十八年以前、西國を浪人をして、良夫新之助と二人、廻り廻つて此の越前の福井へ參り、連合が俄かの病ひに難澁をいたし、貯はへもなし、何とも致し方のない處を、和女のお父上藤七郞殿が親切に世話をして下され、尙隱居所へ案内をして下さつた御夫婦の御情、連合の病氣は漸々に全快をして、其の後は何處へ便る處もなく、三年餘りお世話になつて居る内に、病

が再發して、終に良夫は病死いたし、其の亡き跡の弔葬ひ、萬事のことを和女の御兩親のお情けで、形の如くに濟ませましたが、私しは便りのない身體、再縁しろと御兩親が仰しやつて下すつたが、夫より一生御奉公をいたさうと心得、丁度今より十五年前から御城内へ御奉公をいたし、幸ひに殿樣のお氣にも入り、奥樣の思召しにも叶ひ、多くの女中の取締りをいたし、只今では萩野と申して居ります、和女が四歳五歳の頃ほひには、お目に掛つて居りましたが、お見忘れになつたのも御尤もでございます、然るに此の兩三年殿樣の御亂行、表のお役人は申すに及ばず、お奥向の者までも、誠に薄い氷の上に居るやうな心持、殊に今日取別けで和女に對して無理なる仰せ、夫を能く殿樣の前で刃物を以て勸められても御承知なさいません、夫が女の道といふもの、其の金三郎といふお連合も、定めし今頃は御心配なすつてゞございませう、餘外乍ら承まはれば、お父上も三年以前にお亡なりになり、阿母さん一人、お心細くお出でなさる中に、斯ういふ出來事では嘸かし狂氣の如くに相成つてお在でに相違ございません、今私しが御案内いたしますから御城内を此の儘お出なさるやうに』しま『有難う存じます、左樣なれば貴女のお情けで、此の城内から出られませうか』萩『夫は尋常の道を參ることは迚も出來ません、手前も豫て聞いて居ります拔道を御案内いたしませう』しま『思召しは有難う存じますが、手前をお迯し下されば、却つて和女樣が如何なる御難儀をなさるも知れず』萩『イヱ夫は年の功でございます、何といつても宜い鹽梅に言拔を致しますから、さういふ御心配はなく、併しおしまさん、御實家へお出でなさると直き露顯いたします、今晩お嫁に行くといふ其の萬屋の方へお出でなされ、夜中ながら人目に立たんやうに金三郎殿と共に此の越前の福井を二年なり三年なりお立退きになつて、他へ行つて隱れてお在でなされば夫に越したことはございません』しま『ハイ左樣なればアノ金三郎方へ參りましても宜しうございませうか』萩『さうなされた方が得策でございませう』と聞いておしまは、實は同町に居り



講談老女萩野

まして、萬屋金三郎とは不義密通した譯ではなけれど互に焦れて居りました間、媒妁人があつて表向きの祝言といふ其の日になり、此の災難に出逢ひしも、幸ひ萩野の情けに依つて、御城内を出て萬屋方へ行つたが宜いと聞いた時おしまの喜こびは幾許でございますか

萩『只今御案内いたしますが、併しおしまさん、さうでもない途中で役人にでも出遇つたら、必らず迯げやうとなさるな、迯けやうとてどうして迯げられるものではございません、サア此の品を貴女に差上げまする』と差出したのは八寸三分の匕首しま『ハイ』萩『帶の間に夫を入れて、誠にお悼はしいことでありますが、殿様の前で嬲り殺しになつたと思へば、寧そ自害をなさる方が宜しうございます、役人に捉まつた其の時に美事自害をなさいますやう、和女が自害をしたといふことが知れると、此の萩野も冥土へ後から參りますから、しま『さういふことでは萩野樣、和女へ對して濟ません私しの身の上から和女に不慮のことがあつては‥‥』

萩『イヱ御兩親に受けたる御恩は海山より勝る位ゐ、どうぞ左樣な事を仰せなく、此場をお立退なされ、幸はひ役人にも出遇ず、無事お遁れになり、後に阿母さんにお遇なされた時には、鈴木新之助の家內、たかが斯うして呉れたと、一言仰しやつて下されば、夫でモウ私は滿足いたします』手を合せておしまはしま『有難う存じます、お禮は口で述べ兼ねまする』と伏拜むのは尤も千萬、其後の四つ廻る頃ほひまで萩野の部屋に置き時刻を計つておしまを案內して出でましたが、國政が亂れて居りますから自然掟も破れ、尋常の御門こそは中々夜中でも遁れる譯になりませんが、幸ひにして搦手の空掘へ下りる、平常嚴重に締りのある所も現今は手薄になつて居ります、其代り石垣傳はつて下りなければなりません、おしまは髮もしどろに亂れて居りまして、手も足も疵だらけでございます、萩野は途中まで送つて參りました萩『サアおしまさん、是まで來れば跡は容易く出られますから、必ず松屋の方へお歸んなさらないやうに、今夜嫁に行かうといふ萬屋さんの方へ行つて、成るべく今夜の内に三里でも五里でも

離れた所へ身を隱したが宜うございます、必ず夜が明ければ殿樣から嚴しくお尋ねがあるに相違ないに依て何所ぞへ姿をお隱しなさるやうに』しま『萩野樣種々有難う存じます、母に遇ひますれば必ず此の御禮をいたし』萩『左樣な事は仰せられず、今いふ通り此の先萬一役人にでも出遇た時は逃げやうとして押へられるより寧そ自害をして潔よくお果てなさいよ』しま『私くしも其の覺悟でございます、死んでも御恩は忘れません』と手を合せて伏拜むおしまは袖に涙を拭ふ、萩野は茲に別れを告げ、元の通り御城内へ參りまする、おしまはホッと息を吐き、漸々の事で虎の顋を逃れしやうな心地して御城下へ出ましたがモウ九つ過であります、路程は左まで遠くはございませんが、何分にも道なき所を來ましたので、時刻が大層延びましたに、折しも雨模樣にて今にも降出さうな鹽梅、跣足で駈け參りますると、姿が變つて居りまするものですから、犬がワン〳〵吠える、怖さ恐ろしさは一通りではございません、萬屋金兵衛方の門口へ漸々參り、トン〳〵、しま『開けて下さいまし、少々お願ひがございますから開けて下さいまし、お願ひ申します、どうぞ開けて下さいまし』スルと萬屋の家では獨り息子の金三郎、兼て約束をして置いたおしま、互に思ひ思はれて、念が屆いて夫婦になる其の婚禮の當日に思ひも寄ぬ手違ゐにて父重兵衛も落膽いたし、況して伜の金三郎はひどく力を落し、十六軒の親類方も集まつて居りましたが何分御領主樣に嫁女は攫はれ、訴たへて出た所が其の夜の間に合はんといふので四ッ少々過ぐる頃ほひに親類方は一同引取りました、跡は何となく寂々として居りまする、金兵衛は 金『番頭や一寸來てお呉れ』六兵衛に佐兵衛とい二人の番頭は 六『何か御用で』金『外ではないが、此ういふ附の惡い時には押込でも這入るかも知れんから、今夜お前方は奧へ寢ないで、店へ寢て能く氣を附けて下さいよ』六『承知いたしました、誠に御心配のことでございます』『いくら心配だといつた所が今夜のことにはどうも仕方がない、どうか締りを氣を附けてお呉れ』六『へエ承知いたしました、奧の座

敷には金兵衛と金三郎床を列べて枕に就きましたが、中々眠る所ではございません、行末過去し方を考へて居りまする、店には佐兵衛六兵衛の二人　佐『時にマア六兵衛どん、とんだ事になつたが何うした者だ』六『どうにも斯うにも仕方がない、若旦那も漸々好いた嫁を貰はふといふ日になつて斯ういふ始末、定め、力を落して居なさるだらう』と話をして居る折こそあれ、表の戸をトン〳〵　佐『エヽ何誰でございます、夜は商なひをいたしません、どうか明朝に願ひます。しま『イエ買物ではございません、一寸開けて下さいまし、私くしでございますから』佐『ヘエー何誰でございますか、夜分の事故お名前を仰しやつて下さいまし』しま『少々手前の所は申兼ねます、一寸開けて下さいまし』佐『名前を申されんものを、夜は明ける事は出來ません、何所からお出でなさいました』しま『彼方から參りました』六『彼方では解りません』ワン〳〵とどうも噛附くやうに犬は吠える　『アレー…どうぞ開けて下さいまし』六『佐兵衛さん、開けてやるがいゝ』

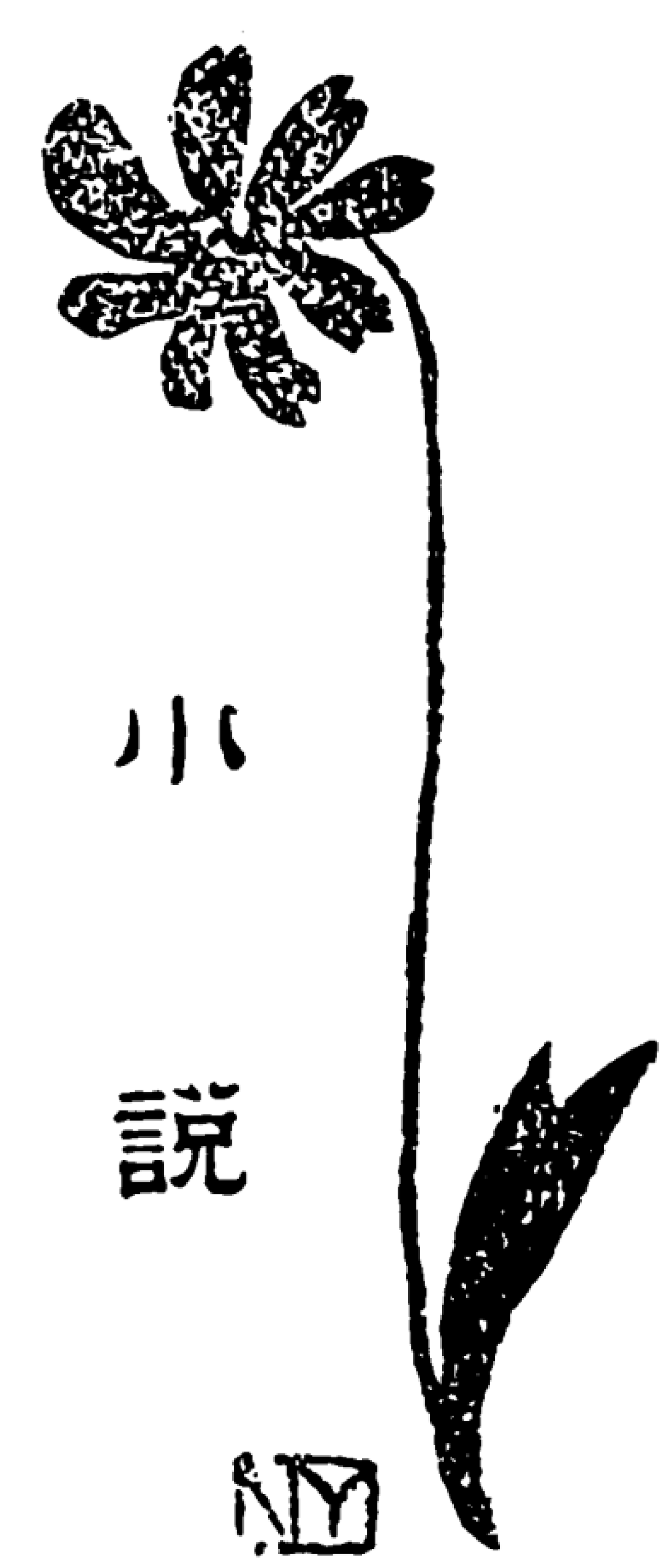
六『開けてやるが宜いといつて、何が這入つて來るか知れやアしない』六『でも女ぢやアないか』佐『女だつて迂濶は出來ない』六『イヤさうでない、私しの考へでは狐か狸だらう、若しも狐か狸なら、這入つて來た所を捉まへて打締て終ふ、是でも私は一刀流の劍術を心得てゐるから大丈夫だ、這入つて來る所を引叩くから』と六兵衛番頭尻を端折つて鉢巻をいたし、豫て貯へて置きましたる三尺餘りの用心棒を持つて這入口の所に立上り、上段に振被つて待構へてゐる　六『佐兵衛どん宜いかい』佐『六兵衛どん確かり頼むせ、今開けますよ』しま『有難う存じます、どうか早く開けて下さいまし』ガラ〳〵と表の戸を開ける途端に飛込むやうに這入りましたる姿を見れば頗る美い女だが、髮は亂れ、手足や顔に血が附いて居りますから、其の物凄いこと、見たばかりで佐兵衛はドッカリ尻餅を突いて終つた。此の物音を奥で聞いて居りましたる金兵衛、マアどうも年甲斐もない佐兵衛と六兵衛、大方脛押でもして居るのだらう、家の心配も考がへもしないで何といふ男だ

らうと、腹立紛れに寢床を起出で　金『佐兵衞や何をして居る、六兵衞どうしたんだ』といひながら持つたる手燭の燈火を差出すとしま『オヤお父さんでございますか、しまでございます』金『エヽツおしまか、どうしたヤア』しま『只今お話は致します故、どうぞ跡の締りをして下さいまし』金『ウム宜しく〳〵、早く門口の締りをしろ、何を其所へ坐つて居るのだ、佐兵衞』佐『ヘエどうも恐れ入りました、マア六兵衞鉢卷をして何といふ態だ』六『どうもハヤ飛んだ心得違ひをいたしました、已の事に御新造樣を打つ所でございました』金『マア飛んでもない』宜い年をして各自に確かりしなけりやアと叱言をいひながらおしまを連れて奧へ這入る、金三郎もおしまの姿を見て喫驚いたしました、ソコで奧の八疊へ案内をして　金『マアどうしたおしま』しま『何からお話しをして宜いやら、實は是々斯ういふ譯でございます』と萩野に助けられた次第から萬端を物語りをいたししま『今宵の内に五里でも三里でも立退いた方が宜いと萩野さんが申して呉れました、どうかお頼み申します』といふ内にも先立つものは涙ばかり、金兵衞始終を聞いて居りましたが　金『金三郎、お前は仕合せ者だ、殿樣のために已に首を切られる其の場に臨んでも、是まで枕をかはした譯でなくとも、結納の取交せをしたといふので、操を守つて呉れたといふは誠にお前の幸福だ、併し今おしまのいふ通り、此所に居たらば何日何時お手當になるかも知れない、押へられてはおしまは勿論、金三郎お前の命までも危ないから、寧そ是は今夜の内に立退いたが宜いと氣の附いたのは流石年の功でございます　金『六兵衞、佐兵衞や、聞く通りの次第、私の考へでは、越後の新潟の糸屋吉兵衞の所へ頼まうと思ふが』六『夫は宜い思召しで、近くつては危なうございますが、新潟の糸吉さんの方へお出でになれば知れる氣支ひはございません』金『今夜是から三國まで行つて、出船の用意をして越後へやりたいが、夫にしても若い者を二人手放してやる譯にもならないが、跡はどうにでもするから、御苦勞だが佐兵衞六兵衞、お前方二人附いて行つて呉れまいか』六『承知い

たしました、手前共が御案內をいたします』金『夫では金三郎、媒介役なり舅なり、私が今盃をさせるから、早々旅の用意をするが宜い、おしまも直ぐに支度をして』と俄かに旅の扮装をいたし、豫て用意の銚子土器島臺を夫へ飾りました、夜中の事でありますゆゑ、大きな聲で話も出來ないやうな始末、扨夫婦の盃も、父金兵衞が慈悲でいたして呉れました、側に見て居る佐兵衞六兵衞も互に涙を流し、アヽ斯ういふ御大家でモウ充分に御用意も出來、眞正の御婚禮なれば三々九度の盃をいたし、謠の聲も淸らかに、世間晴れて謠はれる事であらうに、扨も斯ういふ事になるとはお氣の毒の事だと思ひ居りまする、其内に二百兩の金を取出して渡し、金三郎おしまの二人は旅の支度もソコ〳〵夜の明けない內に遂々其家を立出でました、二人の番頭が附添ひ、直ちに三國へ掛り、金に飽して出船の用意をして越後の新潟なる親戚糸屋吉兵衞方へ若夫婦は無事に着しました、扨お話し別れ夜が明けて殿樣は兼ておしまを預けたる老女の萩野を呼べといふ仰せに、早速お女中方が萩野の部屋へ參りまする と驚ろいた、『萩野樣は自害をして居ります』忠『ナニ萩野は自害をした、是は』といふので大守自から老女部屋へお出でになつて御覽になると、此の世の命今日限り、書殘したる筆の跡も、殿樣への御意見狀、どうぞしまの儀は思ひ切つて下さるやうにといふ由が細々と認めてございます、殿樣は此の萩野の書置を御覽になつて餘程御悔悟遊ばした所へ、忠臣小栗美濃守が御前へ出て御意見をいたしたので、全たく御改心遊ばしたといふ萩野ありし爲めに、金三郎とおしまは目出度く添遂げられました老女萩野の傳記にてございます。

かきつばたが二人話をしてゐる『友達は皆な切られて床の眺めになつたが、君と二人は何時までも眼を開けずに莟のまゝで居やう、開くと切られるから『然うだ然うだ、開きさへしなけりや、切られる氣遣ひもない、と、二人は堅く眼を閉ぢて莟んでゐたが、餘り退窟なのでそつと眼を開けてみると、後ろは床柱。





朝（天賞）

東京のり枝

細い横丁をぬけ出た洋三は明るい廣い神樂坂の通りをのんびりとした氣持で清清歩いた。赤電車で平河町の家に歸つて來た頃は、もう無論家の人達は皆寢てしまつて居た。いつも締りのしてない臺處の戸をあけて暗やみの板の間に上ると同時に、茶の間の次の部屋で「だあれ」と奥さんの聲が聞えたので「僕です」と答へて、てゞんで下駄を持つて戸をしめた、奥さんはさうですかとも何とも云はずに枕元の電氣をひねつてくれた。洋三は障子を細目にあけて「もういゝんです消して下さい」と云つて縁側の板をならして自分の部屋の方へ行つた。正面の障子につきあたる前に、一寸梯子の下から二階をのぞいて見た。電車の赤い光りが戸のすきから絲の樣にもれて居るのを見て、竹さんはまだ起きて居るなと思ひ乍ら、それでも聲もかけずにこつそりと音のしない樣に四疊半にもぐり込んでしまつた洋三は夜のあけがた、猫が枕元に來て頭の毛を引つぱるまで何も知らずにぐつすり寢込んで仕舞つた。こゝの家の猫は朝になるときつと洋三の頭の毛をひつぱつて床の中に入れてくれと催促するにきまつて居た、猫は洋三が一番氣に入りであつた。洋三は夜具の衿を持ち上げてやつて片手で猫の背を叩いた。ひやりとうつすり毛がぬれて居たのである。雨が降つて居るんだらうと思つた。

猫は身體をすくめて足の方へもぐり込んで行つた。

かうしておいて洋三は猫と一處にもう一寢入りした、下女がもう御飯ですと呼

び起しに來たまで。

　皆が茶の間で朝飯をやつて居る時、奥さんは湯殿で楊子をくわへて居る洋三にかう云つた「ゆふべはどこ洋さん」。

　洋さんは歯磨のあわをあつちこつちへ押してやつてぎごつちなさゝうな口で「探見して來たんさ、神樂坂ですよ」と云つてポッともゝ色の泡を流しに吐き出した、「神樂坂の、さうして呼んだんですからうそ、うそでせう」「なにうそな事があるもんか行つたんですもの」「ぢやあどんなでした」「大きな女だね僕位はありますよ」奥さんはそこに居るのか居ないのか返事が聞えなかつたので洋三も、あとはだまつて顔を洗つてしまつてから手拭をぶら下げて皆と並んでお膳のはたに坐つた。

　奥さんは洋三の味噌汁をよそひ乍ら「洋さんほんと今の話は？」「ほんとさ、支那金魚の様な目つきの女ですぜ、さうして鼻の馬鹿高い、おてんば藝者さ」「ぢやあそんなに藝者らしくなつたんですかねえ」「ちつとも藝者らしかありませんよ」「だつて藝者つてものは皆おてんばぢやありませんか」「イヤおてんば風が、藝者の様でないんだね。云はゞ女優風のおてんばですよ。何しろ中年からだから賣り出しに骨が折れるつて云つてましたよ、今は[illegible]と筑前琵琶で座敷を務めて居るんだつてな事を云つて居ました、今度筑前をきかせるつて約束もして來ました」「私の事を何とか言たんですか」「エヽ云ひました、文子と書いてかう云ふ名の人を知つて居るかときいたら、頸をかしげて居ましたつけ、それから小田と書いたら、やうやく小田文子、あゝ知つて居ます家が小石川に居た時、家の地所内に居た方だつて云ひましたよ、さうですか」「地所内？うそばかん、ありや岡崎さんのだつたわ、うそつきになつてねそれから？」「さうしてあなたは文子さんの旦那さまですかなんて云つたから、さうぢやあない僕はカヽアなんてあるもんか、だから何分よろしく頼むつて云つたらそんな事はないんでせう、ほんとの事を云つてくれなくちや困るつて云つてましたつけ」、こゝまでつゞけざまに話して居た洋三は急いで御飯をかき込むだ。

　奥さんの隣りにだまつて飯と汁とをかけちがひに運び込むで居た主人の竹男は、一寸洋三の方をむいて「一體何です」ときいた。洋三が熱い飯を口の内に扱ひかねてころがして居る最中だつたので、奥さんが「あれですよ、ほら四五日前に新聞にあつたでせう孝妓竹代つて、私が話したぢやありませんか、ちひさい時、御

隣同志で友達だつたつて云つたあの女ですよ。洋さんはとう〳〵ゆうべ呼んだんですつて」「フーム、なに洋三君の云ふ事は、あてになるもんか」「ほんとね、ぢやあ今度呼時にや、私もつれてつて頂戴な」「それでそ○○女學校の教師の待合入りなんて、い丶新聞種子になりますぜ」「ぢやあかうしませう、其時に急に用が出來たからつてそこへ私が迎へに行きませう　さうならい丶でせう」「馬鹿な、待合へ入るのに家にことわつてゆくものがあるもんですか」。洋三は笑ひこけて御汁の御かはりを出した　さうしてそれをうけ取る時には、もう眞面目な顔に返つて居た。竹男は自分の妻君と洋三のかうしたそぶりを別にあやしむ必要のない様に安心して見て居た。さうして飯を頬張つた顔を振つて一所に笑つた。



（天賞）虎の門女學校附近　後藤とし子

（評）小説を書く呼吸を能く心得て居るやうに見える、底に潜んである才分といふものは未だ分らない。

罪（地賞）

廣島縣　葵の花

でつぷりと肥滿した體軀に古びた大名縞の袷をまとひ、白と淺黄の染め分け手拭もて面部を深く包み、茶ネルのだぶ〴〵したズボン下に土草鞋を穿き、兩手をしつかと後腰のあたりにて縛された安次が、村の駐在所の入り口の大きな柳の木を包圍して、黒く人だかりのした中を押し分けて巡査に拘引かれてゆくのを、土間に腰を下した父の佐吉は、俯向いたまゝ正面に見る事すらなし得なかつた。

佐吉は遣る瀨ない殘念で堪へられない情緒になつてゐた、後から追つかけても一度此の切ない胸を打あけて巡査の腕に縋つて見ようか？と云ふ樣な念も湧いた。だが先刻、

「初犯でないから願ひ下げしても駄目だ」、と年の若い巡査に嚴に云はれて再び手を合さんばかりの繰り言に「駄目だ、私情を以つて公務を曲げる事はならん」と鋭く冷かな瞳に射られ乍ら大喝されたのを佐吉は思ひ浮べた。そして駄目だ、駄目だ、と何物かゞ耳のあたりで私語いてゐるかの樣で、佐吉は失望と憂愁に落膽した體軀を土間にぶつゝけて、人目がなければ涙の限りを泣いて見たい樣な氣分になつて居た。前に集まつて居た人が一人も居なくなつた時、佐吉はやをら身を起して其處の細君に叮嚀に別れを告げて出た。

凋落の日はいつか西山に姿をかくして、血を流した樣な夕映の雲が西の空一面にひろがつて、それに面した向ふの山頂を淡紅くてらして居る。十一月も早中旬だと云ふに、總じておそい此の里の收穫が、やつと終にかたむいた時なので、まだ其處此處におくれた麥播の一團一團と集つた人々が、香氣相に高聲で語り乍らチヤリチヤラと執着のない音立てゝ土を碎いてゐるのもあつた。佐吉はなるべく人目にたゝない樣に頰冠りしてすた〳〵道を急いだ、幸な事にはそれらの人々がゐるのは道路より少しばかりはなれてゐて無言で通つても濟む樣な處ばかりなので、佐吉にはそれが何より嬉しかつた。だが話聲がぱつたり止んだり、鍬の音がひくゝなると屹度、後指さゝれてゐて嘲笑の瞳は我背に集まつてゐると云ふ思ひを去るわけには行かなかつた。穴があらば消えも入りたい心地に三丁もゆくと藁

葭の組のひくい駄菓子屋、それと同じ樣なきたなげな農家の六七戸も軒を並べて道路にのぞんでゐる處へ出た。佐吉は其處でも人目にふれず事なく通りこす事が出來た、家ばなれを二丁もゆくと中の峠へかゝつた、佐吉は漸くホッと安心した樣に深い息をもらした。峠の山はすく〳〵と伸びた男松女松にあしらつて雜木が黑く鬱蒼とよく繁茂つて居る、一方は切り落した樣な斷崖で、下には川の淵が紺青のガラス板をはつた樣に……水は靜かに睡眠つてゐる。冷たい野分けの風が後から追ひすがり樣、佐吉の破れた足具のすきから忍び込んで脛につよく食ひ入る時、サラ〳〵と二片三片の落ち葉は周章狼狽く小鳥が逃げ場を失ふた樣に佐吉の足元に迷ふ、思ふともなく考へるともなく夢と現實の境を辿るこゝちに腕をくみ首を垂れたる佐吉は、いつか追憶の絲を手操つてゐた。慚愧にみてる過去の歴史を目のあたり展開して悔恨の涙をしぼると云ふ事は此の頃の佐吉には珍らしい事ではなかつた。彼れは其かみ戀を得し喜悅びに妻子の幸福を犧牲に供し乍ら、精神的死をかうむつた妻を世に葬り乍ら、それを別に惡い事とも罪な事とも思つては居なかつた。だが年と共に荒んで枘遠かつてゆくまゝしき母と子の軋轢、母親の慈愛を笠に着てほしいまゝなる振舞の異母弟妹とのいさかいを、義理と恩愛の強くつかみ合をして居る心を抱いて傍觀してゐるより外、その何れへも一言の口出しもなし得ない自分の意氣地のない心を口惜しく思つた。さうした冷かなハラ〳〵と時雨する日の樣にそこには何んの溫みも慰安もないつめたく身に泌む空氣の充滿せる家庭に居たゝまらず自暴自棄におち入つた、安次は、此の頃ではあかの他人は元より、血を分けた親にすら同情をもたれぬ樣な行爲を敢へてして、人の目にもふれ口にも乘せられる樣になつた。また一つふえた心配の種は大きなかたまりとなつて何時までも何時までも佐吉の胸からはなれなかつた。悔悟の渦卷に身を呑まれてどうする事も出來ないで逡巡して居る自分の心を眺めた時、佐吉は屹度去つた妻——優しい柔順な女であつた——心で手を合せて詫して居るのであつた、係うした月日がかなり多く重なつて今日に及んだ。

　二度迄繩目の恥辱をかうむつた安次が、禽獸に等しきあつかひに、火の氣もない板敷ときく留置所の一隅につながれて此の夜寒をいかなる感想にふけつてゐるであらう……？と想ふと腸も千切らるゝおもひ。

「俺が惡いのだおれが——誰を恨む事もないや皆この俺が作つた罪なんだ。」

痛恨の涙はハラ〳〵と佐吉のやせおとろへた頰をつたうて地におちた、ふと氣がつくと、いつの間にか峠をすぎて家の前まで戻つてゐるのであつた。

（評）文章は拙いが、辛うじて佐吉の心を表はそうとして行かうとする同情は此等の初々しい作家の群の一人としては、相當に忠實なものである。

嫁ぐ人（入賞）

羽後　園子

袖口に頰をさしよせてふつゝり絲を切つた時ふと何とも云へない淋しい氣がして、あゝと大きな溜息をついた。と同時にハッとして側を見たが、そこには今まで裁てゐらしつた緋の長襦袢ばかり、母樣はいらつしやらなかつたので安心したものゝ、ドキ〳〵と高なる胸の皷動はしばらく止まなかつた。兩手をしつかり胸をくむで自分ながらよく出來たと思はれる位ふつくらと格好のよい褄、表の地色が黒ずんでゐるだけ濃いグリーム色の裾が、引き立つて、日暮れ時の重々しい空氣の中に、くつきりと浮いて見える、自分の着物を

見つめてゐたら故知らぬ涙がハラ〳〵と頰を傳ふた。そして朝から雜誌のページもくらずにセッセと針を運ばした、自分の心がどうしてもわからなくなつて、果てはそこらにあるものみんな、むしやくしやにまるめてなげつけてやりたい樣ないら〳〵した氣になつたのでふいと立つて窓を明けた。ほんとに、自分はどうしてあんな所にお嫁入りする氣になつたんだらう。如何に大商店だらうと若旦那樣だらうと御金持だらうと、都を慕ひ都を夢見てゐた私が……門前を、走る自動車の響きを聞いてさへ都の大きな〳〵町を想像して、胸をとゞろかしてゐた私が、どうしてあゝどうしてこんなところで、一生を送らうと考へたつたらう。片田舍の隅つこからかひま見た浮世、そして都と云ふものは、それは〳〵花々しく、きれいな、なつかしいものであつた。自分も早くあの美しい世界にお仲間入りをしてあゝもしやうかうもしようと、今まで私のゑがいた想像は、自分ながらをかしい程であつたものを、今お嫁入り等してしまつては今までせめて萬分の一でもと願つてた望は、それこそ〳〵ほんとの空想！處女時代のはかない、そして悲しい思ひ出となつてしまふのである。あゝかきむしりたいやうなこの胸よ心よ。ほん

とに私は嫁ぐのか知ら？見た事もない若い男を夫と呼び、知らない人の親をばお母樣と事へて、さうして自分の身はどうなる事なのやら。私のこの體中をめぐつてゐる血はまだ〳〵赤く熱くはげしいのに！あんな舊家の固陋な慣例に縛められて世帶じみた、どす黑い血色のお神さんになるのは、どう思つても悲しい、あゝ私はどうしやうか知ら。突然スーと襖が明いていそ〳〵と、出來た着物を見にゐらしつた母樣の橫つちよむいた丸髷のあたり、白い髮さへチラ〳〵するのを見た刹那、もう何とも云へない氣の毒なすまない氣になつて、はじかれたやうにぴしやりと窓をしめた。あゝほんとにそつだつけ、それは一週間前の火曜日の夜だつた、早鐘を打つやうな、胸をしつかりしづめて「どうでも父さま母さまのよろしいやう……」と、そこ〳〵にお茶の間をにげ出して笑はれた事を思ひ出す。何故？と聞いても下さるな。けれど〳〵私は悲しい。之をば又ない良緣のやうに進んでをられる父樣や、もう一人しかなくなつたんだから遠方へ離すのはいやだつて、泣かれた母樣やしなびて〳〵小さくなられた、お母樣のお被布姿、何から何まで姉さんでなければ氣がすまない可愛い弟を見ては胸がもう一ぱいになつてどうしてす意地を張り通す事は出來なかつたのだもの。ぶら〳〵自分等はどうでもいい、決して都にいらつしやる姉さんや君子さんの花々しい生活等は考へまいと、あれ程決心したくせに……ほんとに私はすまなかつた。あゝ私は矢張り此の平和な里に平和な女として働かう。こんないら〳〵した、もどかしい、悲しい淋しい、やるせない心は、振りの袖できれいにつゝむで晴やかに私は嫁ぎませう。



（地賞）柳の新芽　下谷　山田いま子

（評）或は作者自分の告白ではあるまいか、然うとすれば此作は藝術品としての價値數等を下るわけだが、多分然うであらう。

不安

青木葛子

何とも言ひ得ぬ不安は絶えず胸に漂ふてゐる、それは何故の不安であるか自分の心にも判斷する事が出來ぬ、かうした譯のわからぬ不安におそはれながらも、私は毎日近所のメリヤス工場に通ふて單調な平凡な日を送つてゐる。其家には私と同じ年輩のお梅さんといふ女工が來てゐる遂五六日前迄は此家に厄介になつてゐたのだ、それが急に通ふてくる樣になつたので、色々樣子を聞いて見ると、或銀行の小使に嫁いだとの事見合に連れて行かれて其まゝ置去りにされてしまつたのださうな、あまりに輕便な結婚法に私は少なからず驚かされた、零落の谷底につき落され孤獨寄るなき我身はやはり　樣なあはれな、みじめな事に滿足しなくてはならないのであらうか、美しかりし姉の振袖姿を思ふて私は現在の不遇に泣いた、お梅さんはいつも髪をハイカラ卷にして黑い上衣を着流してゐた。

まぶしい電燈の下に、今日織つた靴下の瑕をつくろひながら口を開いた。

「私こんなに貧乏してゐますけれど少しも心配しませんね、何だか心がのんびりしてゐて自分ながらあまりのんき過る樣に思ひます」

「あら、さうですか」私は此意外な言葉にかう答へるより外はなかつた私はお梅さんが男の爲に借金をしてゐる事を知つてゐる、親身の姉にさへ見放されてゐるのも知つてゐる、女の身でありながら着替一枚持つてゐないのはそれらの履歴をよく語つてゐる、私が初めてお梅さんを知り

其以前を聞いた時は實に意外の感に打たれた、そしておとなしやかな行ひに接して、いかに其胸の奥に、慚愧、煩悶の炎が燃えつゝあるかを想像して居たのであつた。

「そしてそれは以前からなんですか」

「イヽエ、去年迄は兩親の事や兄弟の事を思つては悲しくなつたり、死んで終うかと思つた事もありましたけれど、或時色々意見をされ神樣を信心する樣になつてから大變心が樂になつた樣ですのよ」

「信心て何を信仰なさるの」私は思はず熱心にきいた。

「水天宮樣なのよ」と云つて忙しく手を動かし初めた。

「まあーさうですか」と云つた私の心は實にわびしかつた、私は別に何の信仰も持たないのである、然し水天宮樣といふ言葉には何となく異樣な感じがした。

「宜いわね――幸福だわね――たとへ何がなくても滿足して安心して居られる程幸福な事はないと思ふわ、私はどういふものか安心してゐられないのよ、恰度暗い道を歩む樣な恐れと、心許ない思ひがして?あゝ、どうしてゞせうね、自分の心が分らないわ」と云つてやるせない歎息を思はず洩らした、私は眞にお梅さんの心が羨しい、他に何の雜念もない單純な心になりたい、絶えぬ心の動揺になやみつゝ死ぬ事もならで、さりとて現在の境遇を脱進する程の智力も奮發もなく、機械的に動いて、生存してゆく自分といふものがしみ〴〵あはれでならない、私は何かしら遠くお梅さんに及ばぬものである樣な思ひがした。

（評）脈絡もない、つぎはもない、如何にも幼稚なものだが、何處かに眞實がある。



詩

チューリップ（天賞）

麴町　櫻木雪江

しと、しと、しと、しと、と――
溫い雨が降りそゝぐ
柔い土の上に――
青い草の上に――
絶えずよい香ひをもたらして。
色つやの良いしとやかな――
やさしい女の胸に燃える
純潔な戀のやうに――
チューリップの花は咲いた。
うす色の花――うす綠りの葉
一重、八重、生がもえてゐる
花瓣のふるひわなゝき。
何うしても美しい女性のやう――
淡いヴエールをかけて
靜かに置きたい――。
しと〳〵降り注ぐ
柔い雨の中に――。

（評）餘りよけいなことを言はふとして苦しまない丈けでも好い。

小雨降る夕（地賞）

東京　みさ

シト〳〵と、
黃昏の小雨こそ降り出づれ。
灯ともさぬ小窓に、
憂鬱の香うかゞひ、
遣瀨なき琴の音のむせび泣き。
薄闇は刻々に身に迫り、
たえ間なき小雨は、
わが胸の底へ底へと沁み入りて、
冷たきまゝの涙こそわりなけれ。
遙に彼方の窓より、
洩れ出し灯は、
わが窓先の木犀の葉に宿り、
そこに追はれし薄闇は、
やがて水の如く、
わが部屋に流れ入る。

シト〳〵と、シト〳〵と、
小雨の冷たさひやゝかさ。
遣瀨なき琴の音は、
消えも入るかに咽び泣き、
暗き部屋に、
わが心、たゞすゝり泣く。

（評）感情の顫律は表はれてゐるが、斯ういふ表はし方は、既に本誌の上だけでも何十人あつたか知れないと云ふことを覺えてもらひたい。

池のほとり（人賞）

栃木　小森惠津子

しづけきまゝに我もねむらん

水はしづかにねむりにおち
水際の若葉燈火にふるふ
初夏の夜のさゝやき・・・

さてもしづけき池のほとりよ
かよわきその音のとだえしは
白き花の筧におちてか
筧の音のそのまゝなれ

しづけきまゝに我もねむらん
——すべてをさとらん
水底に眼とづる白き魚よ
夢やすらかにともにねむらん

（評）おちついて好い作だ。

夜の衣の色

濱松　夕やみ

其夜の衣の色は美くしかりき。
　緋に——紫に——とり〴〵に——
目こそ彩なれ、驕艶の——。
思ひ——。思ひて——
み寺の縁に木蓮の、白き香をかぎ、
らふそくの、らふの流れをしみ〴〵と
みてのみ經來し二十年の
　我も——をとめなりけり——。

彼の世の甘き享樂の
　鴆の盃はみてより、
若き日といふ毒血の
みうちにめぐる甘きゑひ。

香の煙のとり〴〵に——
　緋に——紫に——目を被ふ。
ふさはしからぬ緋のきぬを
　胸にあてゝはくちづけの
其罪の夜の影を追ふ——。

あゝ其夜衣の色は
　たへがたきよき色なりき。
木蓮の花の白きが
　さても寂しき——。

（評）なげ出した心持が、もつと痛烈にあらはれて來なければならぬ、何んなに混迷した感情でも、詩に表はれて來る時には混雜してはならぬ、何事を歌つてあるか分らぬのはよいとしても、何んな心が此處に表はれてゐるかといふことが讀者にしみ〴〵と映つて來なければならぬ。

ふたば

信濃　くに子

すみれの花の匂をかごうとした時に
ふと土に手をつこうとすると
まあ愛らしい双葉が
ゆふべの雨にぬれたのかい
お前のからだは
ほんに色よいみどりだよ
双葉のなかゝらはづかしさうに
垣間見て居る小さきものよ
生のほこり
お前の心はすこしもにごつてやしない
土のかをりと春の雨とで
お前のせいがだん〳〵のびると
焔にもにた紅の花を朝風になぶらせる時も
あるんだよ
きがるな蝶々が遊びに來ますよ
まあはづかしさとうれしさに
お前はふるへて居るのかい
お前双葉よすこやかに育つてね
花を待ちますよ、私は・
（評）思ひが流れる樣に出て來る處が好い。

蜂のあゆみ

姫路　九十子

おそろしき
王者に似たる蜂一ッ
かさこそと

花を匐ふ悲しさよ
黄なる前脚に觸角を撫し
形づくるやゝしばし
其のたくみさ いかめしさ——

うす紫の花の上を
さても不似合な、よろひ着て
かさこそと、夢みる女の肌に似し
花を匐ふ悲しさよ
恐ろしき蜂のあゆみ

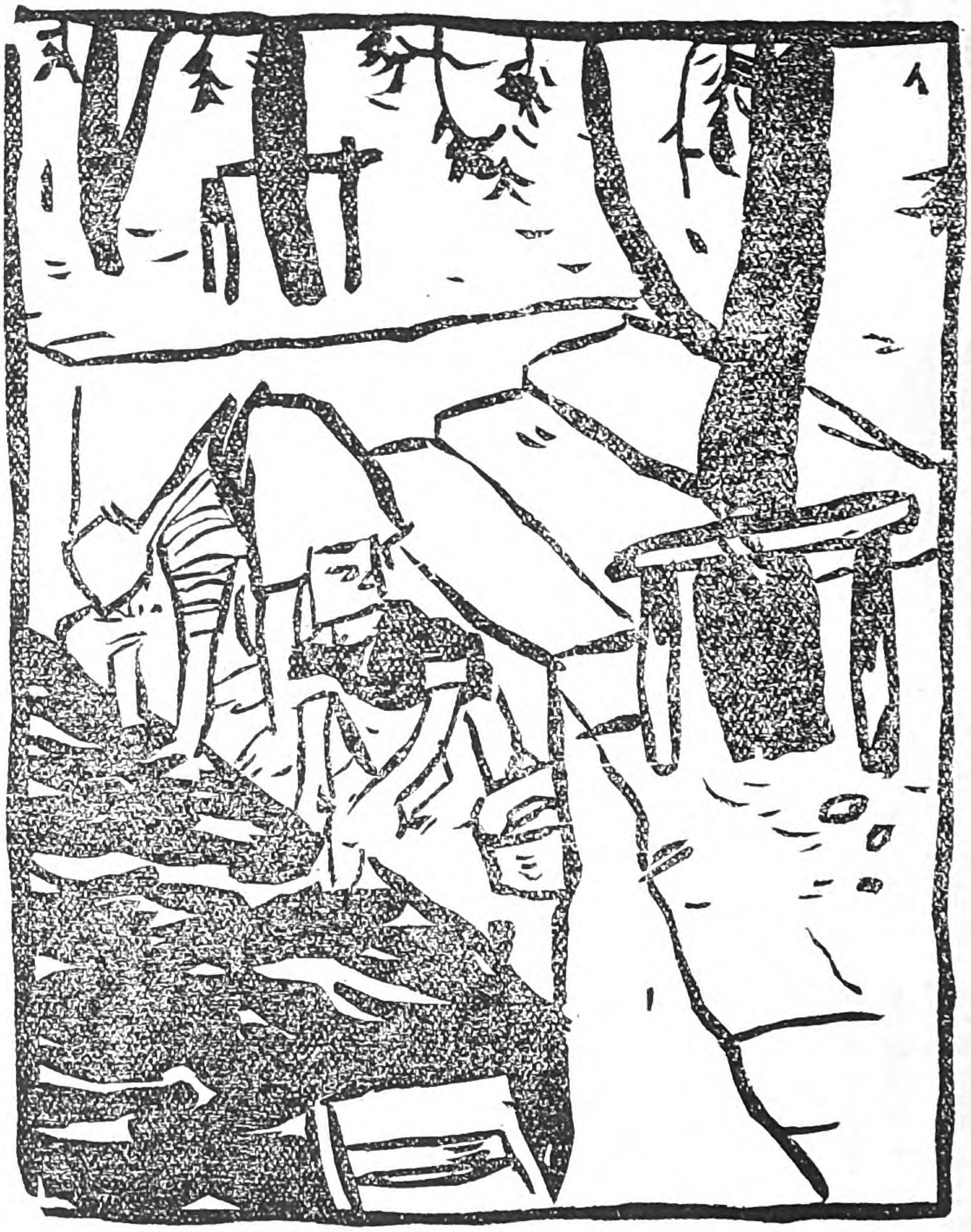
初夏の顔

淡紅色の春ば 後を見せて去り
あはい哀愁は わが心にしむ
雨後の野山の あざやかさと
みどり 葉のうるほひと
魂がハラ〳〵とあやぶむやうな
若い女の泣いてるやうな
虞美人草の 花片とその葉の間に
初夏が チラ〳〵とのぞいて居る。

（評）後の方が好い、蜂のあゆみは いやにごつごつしてゐる、うるほひに乏しい。

春の夕暮

紫の花垂れさがる藤棚——
美しい小池のほとりにも、薄き闇は迫りて
思出深き春の日は
——いつとはなしに
暮れもゆくかな



（入賞）柳の河岸　廣島縣　池田のぼる

青山　橋田　紫葉

カナリヤ

愛でにし人を思ふなる
忘れんとすれど

小暗き窓に
さゝやかなる鳥籠に
捕はれの身の、かなりやの歌ひ出づる 悲しきリーで

春の夕暮

灰色の薄闇に包まれゆく窓に身をよせて
一人思ひに ふけりてあれば
いつ知らず あふれ出づる溫かき涙
梢を離れし 花の心にも似て
いと懷しき春の 日は
漸くて暮れも ゆくかな

紫の花

紫の花一輪手 のひらにのせてあれば
いつしらず

忘れ得ぬ……心悲しや
「春の夕暮」と云ふ詩が就中好い、短いながら
充實してゐる。

蒼き心

京都　薗田久

あな悲し、
若草の蒼き心よ。
寂しくも寂しくも
くろき風さぐり出づれば、
愁はしげに我が魂ふるふ。
あゝ悶の色よ、悔の光よ。
おのゝきふるふ若き我が魂、
あな悲し
若草の蒼き心よ。

小曲

吾は寂し
色うすき草の上
身を横たへて靜かなる夢を想へば、
たゞ一輪の黄なる花
胸におち來ぬ音もなく
あゝ吾寂し。

悲しさは

深川　永井ゆめ

春ともなれば
月しらじらとさしのぼり
沈頽せし場末の町は
浮び出づ
幼き日の思ひ出を辿りつゝ
町を逍遙へば
新らしき木の香り鼻をつく
泣かまほしけれ
薄暗き行燈の
木賃宿に灯く頃ともなれば
疲れし人は軒に彳む
さばれ
悲しきは
世ぞ

小鳥

上州　かをる

あはれ吾が美しき
夢の憶ひ出
その美しき華を啄む
ましろき鳥よ。
甘し花よ
青きわが花
心の香ひぬれて
咲くなるわがかみの。
ま黒き小鳥
あな〳〵いかにつと來り
つと去り……うましき吾が
憶ひ出の華を啄む。
あはれ吾が
夢を啄む
あはれ小鳥よ。

五月

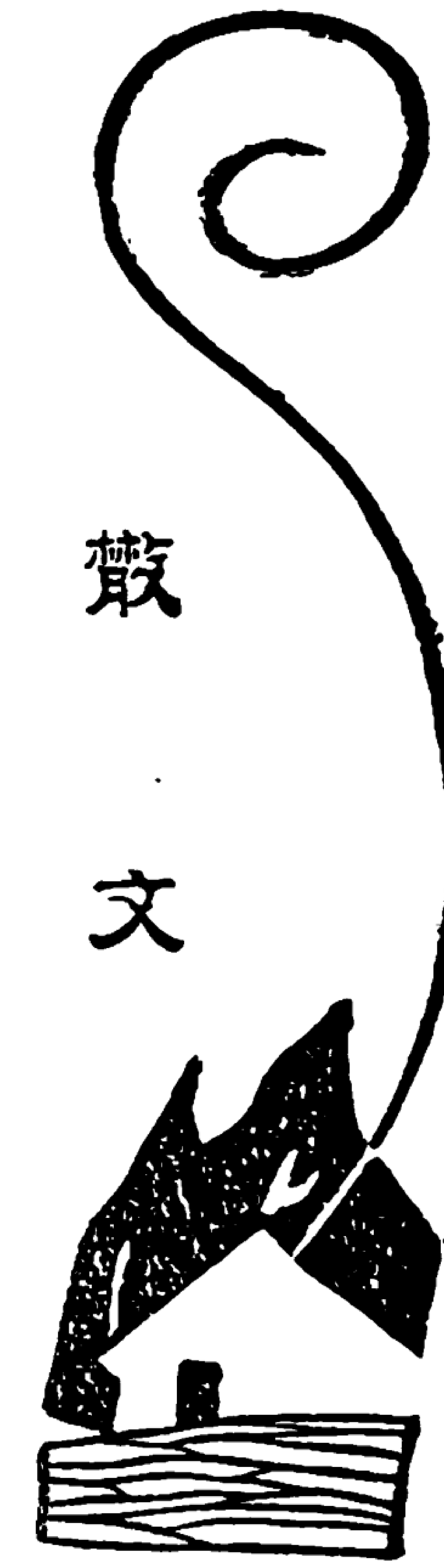
越路　俠香

麗しき日の今日のごと
そは風光る五月の好き一日なりき
悲しみもせず泣きもせでありしかど——
今はた破れし二人の心よ、
離れ行く。

初夏の風

伊藤夕陽

サラ〳〵と
葉櫻い梢揺がして
一むれの風はすぎ行く
水々しい葉毎に
初夏の光線は軟かく吸はれ
流れぬ、
秘めたる想ひの出るを怖じて
ほの温かき
血のさゝやきを
背けるがやうな
女の瞳よ、
碧の空
みどりの森、
舞ひ上り、
舞ひ下る、
初夏の風、サラ〳〵と、葉毎にゆらぐ。



散　文

春雨の思出（天賞）

小石川　高橋あき子

私は會社の歸路わざと電車にものらず、青葉にぬれたあのなつかしい一ッ橋を歩きました、そしてふと去年の或日を思ひ出しました。その日は恰度今日の樣に音もなく春雨がふつて、あの堀端の柳がボーと煙つて居りました、友の多くは電車にのりましたが、私は遠い夜學へ通ふ兄の爲に片道だけでもと思つて歸りのキップを手に持つて、重い足をはこびましたが、毎日會ふあの一ッ橋の曲り角で、兄の姿が見えだした時、私は重い足も忘れてたゞ嬉しさに胸がをどりました「兄さん」たゞから云つたまゝキップを出しました「お前歩いてきたのか」と云ひながら受けとる兄の顔を何氣なく見上げまして、おゝその時其時でした、あの兄の大きい目には涙が一パイ溜つてました、私はたまらなくなつて返事もしないでいつていらつしやいと云つたまま別れました。そして死んだ樣に靜な大道を歩いて行く兄を、妹とはどんなに悲しく思ふでせう、そして涙にかすんだ目で兄の姿の見えなくなるまで見送つて居ましたが、兄さん兄さんさへ卒業して下さつたらと、氣を取なほして樂しい未來をゑがきながら、山の手の淋しい住居へ歸りました、あゝそれも悲しい思出はかない過去の幻となりました、兄はその年の秋かりそめの病が元で床につきました庭の片隅に弱々しく咲きでたコスモスの花が日一日と色あせて、染々凋落の淋しさを感じる頃、兄も行く秋と共に此世を去りました、たつた二十日餘りの病床に……前途多望の青年は逝つて了ひました、その時の妹の心はどんなに悲しかつたでせう、夢、夢ならば早く現に歸れよとどんなに悶へたでせう、それから北風が吹いて、雪がふつて梅が散つて、世は又柳のめぐむ春となりました。今私の片手にあるキップを渡す人は居りません、いくらよんでも二度と歸つてきませんあゝなつかしい思出の一ッ橋よお堀端よ、私はたまらなくなつて絲の樣にたれ下つてる柳の下にたゞずみました、そして細い／＼雨の落ちるたびに水晶の玉をつくつては消え、つくつては消え

る水の面をジッと見つめました、あつい涙が止度なく流れます。

（評）眞實の涙が籠つてゐる。

開墾　（地賞）

熊野　中田静恵

カチカチと石原を打つクワの音は惰氣をそゝるだるいひる下りの空氣を透してハッキリとひゞいて居る。

萬物皆ぐつたりとしてなまけて居さうな中にあの音がことさら耳だつ。

時々あきてくる裁縫の手を休めていた、たゆみない川向ひの開墾のさまを見る。

ぽかぽかと照る初夏の日をあびつゝ、三々伍々こゝかしこに男はクワをふるつてゐる、女等は邪魔になる大きい石でも取のけてゐるらしい、せつせと運んでゐる。

此度此河原が拂下になつたとかで、村内の有望家等協力して此處一面に桑木を植つけるのださうだ、石原ではあるが草も生てゐるし色々な草花もさいてある、處處にイバラの繁りが澤山にある、これらは開墾の邪魔になるので片つぱしから火をかけてやき拂つてゐる。

この繁りには雲雀が巣をくうてゐるので可愛い聲をひびかせつゝ空高くまひあがる、親雲雀のゐるすをねらつては、子供等は其後にヒナやタマゴをさがしとるのだが此巣も日一日と數少なく亡ぼされてゆく。

此河原には昔は一帶の松林があつたさうだが大水の折根こぎに成つて流れて仕舞つたとかで今は跡形もないこれからは廣々たる桑木の林が出來んとする。

（評）散文詩のやうな味ひのある作だ、描寫も捉はれてゐない。

私の境遇　（人賞）

登　美　子

無意義な壓迫を感じつゝ、堪へず暗愁に囚れてゐる私は、此後の自己の責任だの、今の境遇だのを考へますと、たまらなく厭になつて。

理想もなければ希望もなく毎日同じ事計り、繰返しては日を送つて過すのは、私にとつて大なる苦痛なのです、私は父もなければ母もなく又兄姉とてもない、只一人の祖父と只一人の祖母との三人暮しなんでございます。祖父母にしたら隨分私が可愛のでせう。けれと些とも有難くないのです、こんな事云つては勿體ないけれど何かの拍子に、何者にか挑發されたやうな氣持

になつて、斯んな事を思ひます。そして取止もない事計り考へては悶へて苦しんで居ります。矢張り年のせいでせうか、堪へきれぬ空虚の寂莫斯してゐれば居る程嗚呼終にははふむられてしまふのに違ひない。

お祖父様お祖母様私はこんな、なんの變化もなければ色彩もない、平凡なライフを送つて暮すのは厭です。何卒放して下さい、放縦の世界に遊ばして下さい。どんな苦しい目に逢ふてもかなひませんと、たえず願つてますけれど。

「お前はそんな淺果な心を持つてはいけないお前がどんなにあせつても、悶えても、責任重いく責任があるではないか、今更便り少ない老人を放つて於て何處へ行くそんな無謀な事を夢にも思ふものではない、矢張りこれ迄のやうに孝行して行きなさい。」こんな事を誰かゞ暗示しゐるやうに思ひます。

「さうだ自分としては無謀かも知れないそれよりも此生活に甘んじて命少ないお祖父様やお祖母様を安心させつまらぬけれど此身を犠牲にして孝行してゆく方が一番だ」と思ひ返した事も幾度か。

此間も大平さんへお伺ひした時、「あのね私貴女のやう



子供と親　牛込　渡部ひで子

なローマンチックなライフが送りたいわ」と云つたら「大變な事を仰在るのね、男だつたら己の思ふ通り成就するかも知れませんが、とても女でこんな便りない生活は連續して行く事は出來ません、私などもつまらない一時の思ひ付きで親の云ふ事も聞かず放浪生活を望みましたが、今となりますと全く後悔します」と仰しやつた。

矢張り現在の境遇に服從しなければいけないらしい。けれど私の氣として、いくら樂しくつても面白くても自由を束縛せられては堪へられない、苦しくとも自由を束縛しられない丈の餘裕があたへて貰ひたいと、思つてますけど。「早く養子でもしてね、お二人に安心させなければ、それが孝行の第一歩なんですよ、そして貴女の義務なんですからね」。此語は近頃になつて誰でもが云ふ。

無論私の爲に。何だつて妾ばかりが女ではあるまいし娘一人誰かに呉れて遣つたと思つてればそれで濟む。生中養子など貰つたつて第一來手もないのに、よし來たつたつて碌な者は來ないに極つてる。血緣々々と仰在るけれどそれは私だつて一人前の女にして戴いたからには體面の維持位は保つて行きます。家族が絶えていけないのなら小供の一人や二人貰つてゞも續かせます。何卒私を自由の平野に投て下さいと、叉しても。

「ぢや貴女は今の生活を灰色にたとへて見ると、もつと彩色して慾しいとでも云ふのですか」。「えゝ（私は滿足したやうに）。もつと〳〵ね青く赤くに」。「馬鹿ッ。」一言のもとにけなされた。「そんな空想を夢見るものではない世の中は貴女の思つてる程單純ではありませんよ、貴女の今の境遇が一番だ、それを今逃れやうとしても親より周圍の人が許しますまい、要するに、青く赤くなる程刺激が增しますそんな中に卷込まれて平然として行けるやうな人ではない。貴女も大分生意氣になりましたね」と云はれてしまつた。

矢張り私は無意味な厭制な此境遇から到底脱れる事は出來得ないものらしい。

（評）正直な告白だと思ふ、此自由を欲する心から新しい生命は生れる、それを諦めやうと云ふ人の心は悲まざるを得ない。

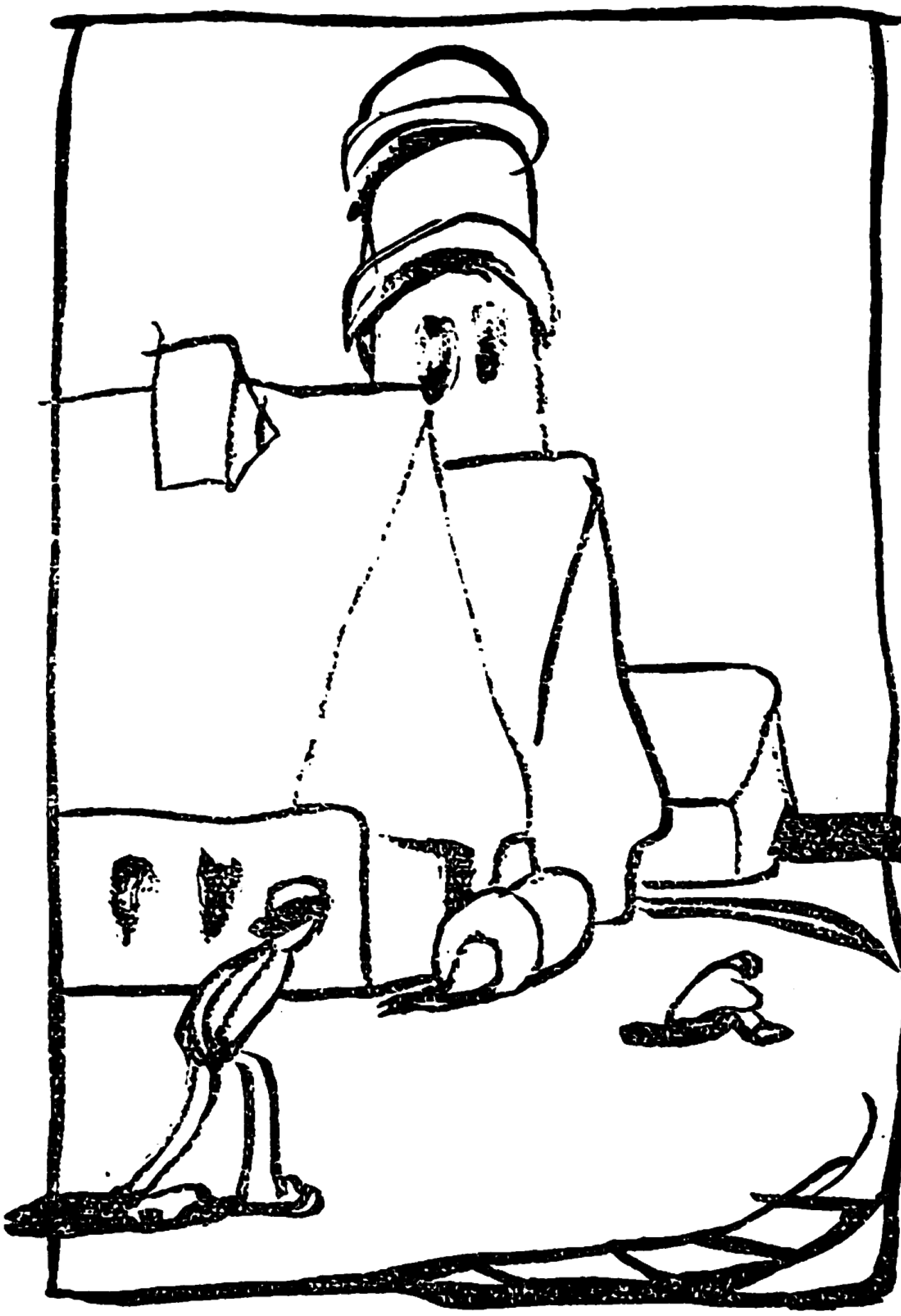
日暮れ頃

岐阜　紫陽花

人の居ぬ間にと草履を羽織の陰にかくして長い廊下を通り大奥の庭へ下りた頃日は餘程かた向いて居た。私はつながれた綱の切れた樣に全身に何となく緩みを覺えた。ネルの單衣の上から胸を覆ふ樣に兩の手を抱い

てカサ〳〵した芝の上を身を浮かす樣に歩いた。朝露にシットリ濡れた芝踏む程心良いものは無い。けれど、かわき切つて居て荒れた肌に觸るゝ樣な、けど素足に緋緒のくつちりと付いて居るのは病身の我ながら若い嬢と云ふ誇りを深くされるやうに嬉れしかつた。

日光を退けて重なり合ふた木の間をくゞり新緑の樫木を取り卷かれし池に出た。ヌラ〳〵した池水は靜かに動いて水草の白ちやけた花が震へて咲いて居る。かきつばたも緑の内から紫、白、かすりなど見せた。私は竹に色つけてこさへた葉に紙の花の何處かで見た嫌なのの感じが浮んだ。私はさうした花よりも弱々しい水草のつまらぬのゝ方がもつと溫みが有つて好ましく想つた。何事もと夫に從ふて居た古い女のやうで、濁つた中から黑赤の魚が時々ぽかり浮上つた。何といふ靜けさなのだらう。この古い水の中にはもつと何かゞ居て慾しい。私は獨りで此の池の歷史をいゝ加減に胸に畫いてたどつて見た。花散り果てゝ後は問ふ人もまれに淋しいけれど日々藥香に閉されて居る。私には田舍の思ひ出多き森の池の如く懷しくてならぬ。私は息苦しい身を人の見ぬまゝに柔い青苔の上に横たへた。



白日　岡山縣　木村水草

青苔が頰にひんやり觸れて思はず身が引締る。甘い懷しい香が添ふて來る。

碧い大空を白雲は開いて閉ぢては開き輕う東へと限り無う流れて居る。

それにも見あいて眼をふと轉じた時パッと何かゞ眼を射った露の散る瞬間よりも早く。

それは岩蔭に咲いた燃ゆる樣に赤い花だつた。赤い花？　薄暗くなつた邊りに名も知らぬ赤い花のみが私を吸ひ付けるやうに開いて居る。風吹く度に香を送りて人をよはせるとか聞いた魔の花でないだらうか。私はぞつとして我知らず立上つた。

(評)　印象的な描象に巧みな處が見える。何か暗示しやうとする力も強い。少しむだがあるのは欠點だ

西洋桃の實

對馬　伊藤夕陽子

その人に物言はれるのが氣障りで、大きい石で頭を押へられたやうな不快を覺える。

此艶もない瞳で一寸睨めちやうにしてみせる、でも頭はいつの間にか下つてゐる。頭を下るのが惜しいのではないけれど、私の母が死去つた時分よく私を脊負つてゐたと、云ふその人の母親の側で、だから已れが瞳の中に溶けよと云はむ計りの表情をする。

その人の癖かも知れないが、私にはそんなに見えて仕方がない。其家の前を通らねば私の家の畑には行けないのである。私の丈に四五寸短かい西洋桃の木に實が十四ついてゐる、誰も此桃を植ゑはしないけれど、鳥かなんか、種を知らぬ間に蒔いたのだらう、去年は七ッ實がついてゐた。其内四つは鳥がつゝいて殘りの三つの內一つは熟せぬ間に落ちた。私は氣になつて仕方がないので、自宅のうら庭に植替ようと云ふのに父が返事ばかりしてちつとも植替る運びにいたらぬ間に早や實を結ぶ頃となつた。毎日此桃の實の落ちていないかを檢査に來るのが私の日課なのである。姉も父も賴みはせぬけれど、致へ終つて幾分胸を張り乍ら、長く〳〵長く畑の清い空氣を吸ひ取る。しつとりと朝露に濡れた草履の素足の小指にふはりと土が上つてゐる。

惑の掘り返してある畑の中を歩いて居ると、後の杉の間、尖の入る位すいてゐる處から、其人が眺めてゐて、早いですねつて聲をかける。楊子を口にくはへたまゝ、又かと思ふて、私も一寸笑顏して、直に竹垣の戸を結ぶ。

桃の木を振りかへり乍ら、今日も落ちてゐなかつたと云ふ、うれしさを見せて、もつと大きくなつたら袋を作らねば等想ひ、輕々と露の細道を歸るのである。

（評）いろ〳〵のことを一緒に言はうとして混雜してゐる。

拗ねた心

春花

あゝ！此せち辛い世の中に、私は何をたのしみに生存て居るのであらう人の望んでる結婚も私にとつては何の價値もない。自分の前途には光明もない、理想もない、無論之と定まつたホープもゝたぬ、唯平々凡々と毎日此大切な青春時代をうつら〳〵すごしてゐたら人生の花はしぼんでゆく。

朝起きるとせまい事務室を掃除して、終日務める暇には雜誌も讀む、あゝこんな趣味なき單調な生活に滿足できる私ぢやなかつたに……かこちながらも猶從事してる長上から小言を云はれる口惜しい、殘念だ、切齒して熱い淚が頰を傳つても、一言の辯解もなしえない、自分に利はあつても何とも云ひ得ない、否、云ふまい〳〵と我心でおさへるまでになつた、忍んで獨り泣いてゐる。

一人娘の氣儘に育つて友にも親にも一歩も讓らずずん〳〵自我をとほした私がまあこんなにも——變れば變るものかと不思議にたへない、そして私は日一日と退步してる、何事にも積極的にあつた私の此頃は、萬事に消極的になつた樣に思ふ、確になつてゐる。

境遇が人をつくる!!!まつたくたく〳〵。

ありあまつた財產はなく共、何不自由なく育つた私は應揚であつた、おちついてゐた、けち〳〵しないと人から云はれてゐたに、今はもう昔の影は少しも私の心に殘さない、人を見る目は猜疑の目、親切にして下されぱかへつて其裏面をのぞいて疑ふ、常に私は猜疑の眼をみはつてる。

溫かき家庭に世の波風知らず咲いた花一輪、一度浮世のあらしに出あつて父を亡なつた。

爾來四星霜、或は荒波にもまれ或は深き〳〵谷におとされ、優しき人に抱きあげられしと思ふもつかの間、又も玄海の怒濤の中に投げこまれ、滿州の疾風に吹きまくられていよ〳〵荒みゆく胸、凍りゆく心、さうして猜疑の眼は益々銳く光る。

人の心程たのみがたなきものがあらうか！

父在世の全盛の頃は、しきりに出入した誰彼親身の者も世話した者も落ぶれた我家をふりかえりもしない。

落ちぶれて袖に淚のかゝる時
人の心の奥ぞしらるゝ

實にさうである、私はしみ〴〵感じた。

人生のあじきなさはかなき人の心あゝ私の心は拗ねて了つた。
愛する人はうばはれた失戀の傷手に若き胸は悶えて燃えし血しほも冷たくなつた。
最早私には愛らしい戀は出來ない。
見よ藝娼妓すら想ふ人とはシンジウするではないか何故私の心はそれまで熱しないか。
夢中になる程戀してみたい。
恥も世間もないまでに愛する人が羨ましい。
冷たい凍つた血しほに油を注ぐ人はあるが、
それに火をつくべき手をもたぬ私――
あゝ冷たい心、荒んだ胸、人をも神をも呪つて一人拗ねた暗黒な世界を辿つて行く私の前途に何の光明があらう!!!

（評）一方ばかり向いてゐないで、又違つた一方も見て御覽なさいと言ひたい

妹

羽後　露草

「姉さん耳かいて下さいな」太くよつた紙よりを渡して、妹は、縫ふてゐたもみ裏の上にごろりと横になりました。「油がつくではありませんか」大きな聲で叱つては見たもの〻、びつくりしてとび起きた樣子の可愛ゆさ！私ははじかれたやうに、裁縫を押しやりました。耳をかく事が大好きな妹は靜に目を閉ぢて待つてゐます。匂ふ樣なピンクの頰、少ないけれ共眞黑な髮、えり足の美しさ！リボンをさすと先生に叱られるつて、いつも束ねツぱなしで滿足してをります。時々雜誌の口繪を見ては、「母樣私にもこんなの買つて下さいな」、等云ふ事もありますけれ共、「あゝ矢張り駄目だな先生にしかられるから……」思ひ返しては獨り言云ふ妹を見ると、たまらなく可愛さうになります。まさか立派な着物を買つてもらつたとて、怒る先生もないのでせうけれ共、もう極端に質素々々を、叫ぶ土地の小學校に學ぶ妹はほしい着たいと、思ふ事はあつても、其等の着物は、彼岸のお寺參りと、山王樣のお祭りの時の外は、着られぬものと、思ひこんでしまつたのでせうと思ふと尙更いぢらしうございます。都で生れて派出ずきなそして勝氣な母は、土地の學校の極端な質素方針を、どの位呪つてゐます事でせう。あ！思ひ出されますの其頃が――。それは丁度私が、妹位の年だつたと思ひます。友と一しよに外に出る時、母は、いつもこんな事を云ひました「何かまふものかね、あるものをするんだもの……」、その度每無雜作に下げた後には幅廣な白や赤がヒラヒラとまひました。友は皆赤い布の片端なぞでゆはへてあるのに、自分ばかり、そんなにするのはもうくく非常な罪惡の樣に思へてなりません。ソーツと頭に手をやつて、大きなリボンを取つた時、友は手にくく取つて見て、驚愕の目を見張りました。懷にしまひわすれて歸る事等があると、母はいらくくして、自分は自分ですまして行けない弱い子の意氣地なさを、もどかしがりました。こんなにして女學校に轉じてからも質素の制裁はますくく強くなるばかりでした。生徒に對して質素を注文する敎師の服裝の？世は凡て矛盾であると思ふやうになつてしまひました、かうした日を送る中、いつか都ではでな、くらしをしてゐる從妹の寫眞を見ては物を思ふ樣になつてしまつたのでございます。あゝ紫子!!!無理にリボンはさゝせまい。矢張り色種々のリボンをばお人



河岸　群馬縣　富永かをる

形の帯と思ふて、姉さんの樣にいつはらず大きくおなり。飾らないでも美しい髮の色！唇の紅！眉のにほやかさ！お前は生れながらに美しい子なんだから——。

（評） 終の一語、千鈞より重し。

連想

遠音

父上は今夜は會社のお宿り母上は晝食をすますと清をつれて牛込の祖母樣の七十の御年賀が明日あると云ふので出てゆかれた「私も行きたいのね」といつたら「お前は明日つれて行くのだから今日はお琴のおさらへなりとしてお留守をおし」といはれて快く諾つた私は「降らねばよろしう御座いますが」と見送つて出たのであつた。

夕餐もそこ〳〵にすました雨はさつき迄ふりしきつて遲い豆腐屋の笛がかすかに聞えて居たが今はどちらも止むで、時計のセコンドが殊更室一杯に響くのである、この廣いうちには猫の子一匹も居ない、母上も未だお歸りがない、それで私は淋しくも何ともない、然し用心のために表だけ殘して外の戸締は丁寧にしてしまつた。無意識に机についた、今朝清が其上に置いて呉れた三色すみれと萬年菊が小鉢の上でゆらいだ「ほんに夜露に逢はせなくてはと思つて庭の鉢臺の上にそつと置いて來た、これから何をしやうかしらと思ひながら父上のお居間に入つて火鉢の側の座布團にすわつた、今更の樣に室中を見まはした、床の瓢簞を描いた掛物あれには面白い賛が書いてある、私にはよく讀めなかつたのを父上に敎へて戴いてやつと讀める樣になつたのである、電燈の光で再びよんで見たすら〳〵とよめる、矢張り私は覺えて居ると少さい誇りを感じた、其横にたてかけた琴オリーブ色の地にしだれ梅の模樣のメリンスで被はれて居る、今夜の寂莫を破るのも惜しい氣がして一曲手をつけて見るきもせぬ。右手の卵色の壁には油繪のソクラテスが私をにらんで居るけれどちつとも怖くない、いつまでも〳〵夜の靜けさを守つて居たい。元來私は女としてあまり大膽過ぎるのではあるまいか、けれどあのにらんだソクラテスを恐れないのは別に理由があるのだ、あの繪を描いた人！今はどんな思ひ出に暮して居るであらう、矢張繪筆は捨てないであらう、父上はあまり彼を信用し過ぎて居られたやうだ、過ぎし昔二年にあまる長い月日、私に射た戀ののろひ矢、私は遂に一矢も傷は受けなかつた、何となれば彼に面會せぬ先に彼は色魔であるといふことを聞いて居たからである、僅か三字の綴り、清い少女の胸はいかにおのゝいたことであつたらう、後に成つて新聞紙上で某の令孃誰の女と云々、あゝ私危かつた事千萬言の謎よりも色魔の二字をさゝやいて呉れた友、私の身には眞宗の念佛よりいかに有りがたかつたか、彼は常にいつた貴女は強者で僕は弱者だから何とされても仕方がないと、私は理由の判斷を下した、男らしい容貌を持つた人だと思つた、あつて女を否私を魅する力は少ないが、別れて強い印象を殘す男だと思つた。してみると私も強者にしては、はかない強者であつたかも知れぬ。

格子戸の音がからり「初ちやん淋しかつたでせう、早くかへらうと思つたけれど明日の準備がたいへんだものだから」

私の連想はパッと消えた。

（評） すらりとして毒氣のない書きぶりだ。

秩父銘仙

下谷 宇根とく子

私の郷里は秩父なんです。何方を見ても高い山！連なる峰、そして清い清い水が、何處からともなく流れて來て、谷間々々を、又は何處かへ流れ去つてゐるのです、其清い〳〵水で、さらされた絹絲が、山の上から嶺へ行く迄の、短かい太陽の光りに照らされる、斯うした絲で、虛僞も無い、虛飾もない清い美しい少年の手に依つて、織り出される、之れが秩父の名產、銘仙なんです。

ところで私は、今度斯うした感じが致しました。

若しも此の斯うした清い織物！此れに精神があつたとすれば、何んな物語りを爲るでせうか……。

私は一日、本郷の知人の處から歸り途に、電車の中で、私の緣近い此の銘仙！の着物を着た、三十歲近い一寸立派な御婦人が、私の腰を下してゐる前へ乘つて居られたので、種々と、鄉里の事共等思ひ浮べてゐたのでした、すると、髮の毛を短かくして、其白い〳〵僅かな毛を、男子の方の樣に撫で付けた、少しは腰も曲つてゐるお老婦さんが、或る停留場で乘られたので、私は急いで其老人の方に、席を讓らうとして、立つたのでした。すると、それをも見て居た先きの若い方が、忙てゝ私の空けた席へ着いたのです。私は之れを見て默つてゐまいと思つたのでした、けれど、私は田舍から來た許りで、度々皆樣に、言葉の訛りなどで笑はれては、『でもよく「がんすむし」だけは出さないね』などゝ言はれてゐるのですから、此の時私の勇氣は、まだ口を開かせるに足らなかつたので、私はたゞ考へました、アゝ彼の潔い〳〵鄉里の人々に依つて織られた銘仙精神があつて・物も言はれたならば、『私は今日只今から、貴婦の所をお遑致します、私の生れは潔い〳〵生れなんです、私は、義理も知つて居る、人情も識つて居る、溫い情けの深い其人々に賴つて、斯うした軀になつたのですから………』若しそれでもまだ遑を下さらなかつたなら、其時は、すねて〳〵、もがいて〳〵、自分から自分の身を破つて、そして、一日も早く、例へ屑屋の籠の中から運ばれて、細い路次の間の穢れた小さい勝手口に行つて、其板の間にすりつけられても、かまいません……。

斯う思はれたのでありました。

山も野も、水も草も、石も水も、皆んな私達人類に種々な暗示を與へるのを思ふと、何もかも『發動しない精神』斯うした或る力が、働いてゐる樣に思はれますのに……。

（評）秩父銘仙のことだけを、もつと詳しく書いてほしかつた、よけいな事が出て來たので感興を減じて了つた、惜しいことだ。

ボンヤリ

みゆき

「私はもう明日から學校をよすんだ――」と思ふと急に何だか、から胸にお團子でも上つて來た樣に妙に苦しくなる。

每日々々變に莵すむ樣な目付きで見送り見返へる向ひの菓子屋の白い嫁の顏、誰でも解く樣な一種變チキリンな目付をして穴のあく程見つめてゐる吳服店の小僧連かうしたグループがムレ〳〵と此の小さい私をとり卷いては目といはず鼻といはず幾千の銀の雨を貫ぬき〳〵痛くないか痛くないかといふ、それを痛くない樣な顏をして居るのが、否つき刺して貰ふのが、かへつて光榮の樣に力み返つて居るのが人生なのだそしてその忍耐力の强い人程人生に於ける所謂强者なんだ、實を言ふとかく言ふ私もその强者の一人であつたかもしれない。每日々々私はどうしたら一番痛くなく刺されるとが出來るだらうといふ問題ばかり考へて居た者だから途中に咲いてゐる高等學校の裏手の堤のタンポゝも菫も散つてくる、辦もさては右手の工科大學の煙が面白さうに若葉の中を低徊してゐるのも一向氣が付かなかつた。そして早くこんな問題を考へる必要の無い所に行きたいナーと許り思ひつゞけてゐた、ところがどうしたんだらう、愈々、、、、、、、、、、、、、、、、、、々考へる必要が無くなると俄に何だか自分許り取り殘される樣な、自分といふ者が非常に見すぼらしいもの〻樣に思はれて來て、あの尖い銀の雨にも一度刺されてみたい樣な氣がする、要するにそれが生き甲斐ある樣に思はれるのだ。

土筆の可愛がつたことや子爵さんの赤煉瓦のらく書きの氣拔だつたことなど理もなく懷かしいもの〻樣にそしてもう見られまいといふ情無さが淡いながらも油然とみなぎつてくる、椅子によつて小說なんかひつくり返して居たが氣乘りがしなくつてつまらない部屋が鬱陶しいせいも有るだらうと思つて窓を閉けたが何の役にも立たない、空も鬱陶しいんだなど思つて一寸頸をつき出してみたら、日の下に腐れ草鞋が五六足ならべてあつた、そして其の下の石の間に赤い桐島が之も氣のりのしない蒲ボ

ンヤリした顔をして咲いてゐた、向ふのミルクホールに誰か來てゐる乳を吞むでもなければ菓子を喰ふでもない、何だか之も一向要領を得ない様な脫線式な顔をしてゐる、何だか變だ、うすボンヤリは私ばかりでもないなと思つて又椅子に着いた、私は學校にはもう行かないんだね——。

（評）近頃の女子は理窟つぽくなつたといふが、全く然うかもしれない。

菫の花束

深山蔦代

群をはなれて堤上に驅け上つた×さんは、突然「絶景!!!絶景」雀躍して叫んだ。

三里あまりの遠足に強たか疲勞をおぼえてゐる女達も、其こゑにはげまされて、われさきにと驅け上つた。

黄金色こき菜の花や、見ゆるかぎりの畑と畑、蝶の群れ飛ぶさまのをかしさに、×さんの手はもうノートの上を走つてゐた。

はるかに望む月波のほつ峰!!!麓に病み給ふ傷ましき詩人よ!!!許しまさば訪ひまゐらす術もあるけれど………。

何を戀ひてや、はや姿の見えわかぬまで雲井に高く鳴きたつるあげひばりよ、あゝなつかしい可憐の小鳥よ、私はお前の自由の叫びが羨やましい。

足もとに流るゝ利根の川水は、流れ〳〵てやがてあのなつかしい東京灣に注ぐのだらう?

あつ、菫の花束が流れて來た、心なき少女のわざか、心ある人のふるまひか、水のまに〳〵流れ〳〵てはては何處へたゞよひつくんだらう。

永久に堤上に咲き誇るべきゆかりの花を無殘にも、手折つて捨てた人の心が恨めしい。

懀ころゆるやかに帆前船が一艘又一艘。さへぎるものなき眼界をかすめて去つた。

私はふと、自然と人生の「——無限のスペースを流れ〳〵て限りなく流れゆく時の流を想ふのである、あゝ白帆が見えてきた、………前をすぎゆく、過ぎゆく、もう見えない、羅馬の所謂大帝國もかくすぎてしまつたのではないか、あゝ笹の葉が流れて來る、チラリとする、もう見えない、亞歷山、那翁もこの通りであつた、あゝ彼等は今何在哉、滔々として流るゝは只川の水のみである、——」といふのを思ひ出した。

あゝわが青春時代も、かうして一歩〳〵過ぎてゆくのではないか?タイムの力を引き止むるすべあらば、私は叫びたい、タイムよ止まれ!!!わが華やかなる人生の春に……。

朝の山の手

麹町 櫻木雪江

三宅坂で電車を乘り替へた。

落ちついた雨上りの朝の空は、氣持ちよく晴れて、お濠の柳の芽がスウスウと延びて、さやさやと和い風がしきりなく頬をなでる。

青々と充ちたお濠の水は小波立てゝ時々思ひ出したかのやうに波紋が亂れる。新樹の緑葉深い參謀本部の小高い丘の上の有栖川の宮の銅像御乘馬の御勇姿雄々しく、尊き御面影が忍ばれて、思はず首べは下る。と前の空地の濃い青い色が眼に新しい感じを與へる。荒くまばらに作られた棚の中には、雜草に交つてクロヴーが萌えて緑の氈をしきつめたやう、點々と咲ける白い花の美しさ、きのふまで菜の花が鬱金の色に群り咲いてゐたけれど、皆散つてしまつた。

宮城に近き向ひの堤には常磐の老松、枝葉を交へて如何にも奥床しく思はせる。瞳を射るやうに輝く四邊の青い光の中に、電車はいき〳〵と走り行く。

櫻や柳の青葉がくれに、煉瓦造りの官省の洋館高く聳えて見ゆるもなつかしく、さわやかによみがへつた朝のけしきは遺憾なく、私の眼に映つた。賑やかにそゝられるやうな下町の華やかな氣分はなくとも、落ちついた淡白なグリーンにつゝまれた、山の手生活が堪らなく嬉しく私を思はせて、二寂しい私の胸にふさはしいと、沁み〴〵思つた。

二分間

波香

常の私ならば、師の君に逢ひ奉る事が如何に嬉しく懐しからうものを心の惱みに疲れ果てた身を、機械的にかうして運んで行く私に、何うして懐しい、滿足な御挨拶が出來ようぞ。
電車に乘れば、恨めしい家の角を曲る、曾ては、懐かしと見上げし樓上を……あかず見上げた私の目は泪に曇つた。胸は痛い、堪へ切れなくて目を伏せた。
夢心地で電車を下りて其儘驛へ急ぐ。
入場劵を手にしてぼんやりと汽車の着くのを待つて居る。
絶え間なく動搖する心を制へやうにも勇氣がない。神經が鋭敏になつてあたまがキク〱と針でもさすやうだ。
疲れ果てた、うらぶれ姿で、師の君にま見え奉る事が非常に心苦しい。
斯うした女に成れよとは、祈つて下さらなかつたらう、お導き下さらなかつたらう。
折柄起るけたゝましいベルの響き、上り――、京都行、上り――、京都行――。ドヤ〱と改札口へ押しよせる人の波、私もあの渦巻の中に巻き込まれて、何處の果てへでも行つて見度い、思ふさまさすらふて見度い等と夢二樣の繪ばなしのやうな事を想ふて見た。
師の君を乘せた汽車はまだ。
上り列車の着いたプラツーでは、新聞屋、辨當屋、パン屋、正宗ビール……等の賣手が旅人の心をうはつかせる。
手荷物掛の大きな窓の中から、身動きもせぬ私の方を迂散さうに見る。
可愛い孃ちやんのお手々を曳いた父樣らしい方、ハイカラな奥樣が車から飛び下りて大急ぎで切符を購求められる、車夫は手荷物を預ける、其せわ〱相な裡にも、スヰートな親子夫婦の情合があふれておる。
何處を見ても寂しさうな人は一人も居ない。私は恥しかつた。何の爲めにかうも物思ねばならぬのか、夫が私にも判らない、故なく物思ふ身、病氣ではないのだらうか、責られたなを偲ぶほどの私ではない積りなのだけれど。
又しても起るベルの音、次は下り――、下の關ゆきハッと我に復つた改札口を出てプラットに立つ。轟々たるひゞきと共に列車は徐々に進行して來る。
乘る人、下りる人、其間々々を物色すると、二等室の窓からさし覗かれたお姿、めつきりとお年召したやうな御面わに、殆お見逃れ申しかけたが、夫でも師の君の御面がけを忘れる程の失神はしておなかつた。
漸と御挨拶丈濟ませたけれど、案の條、不得要領な私の態度、師の君は何と御覽遊したゞらう。
たつた二分間の停車時間、おはなしする事も、何うするにも出來なかつたけれども、懐しい師の君に逢ひ奉つたるによつて、私の精神は數分前とは餘程變つて來た、プラットホームを出た私の目には、最早、涙の跡もなかつた。

新築の驛

廣島縣　みつ子

上り下りの着車ごとに小驛には珍らしい程、澤山の人が乘降する、吐き出されるやうに改札口を出で來る人々はみな、やゝ都會的な足どりでさつさと、多忙さうに四方に散つて行く日毎々々に强烈な新らしい木の香と大工の唄聲とが、ひつきりなしに街の空氣を賑はせておる、かく日一日と繁榮しゆく町に、僅か十歩に足らぬ待合室を有する古りし驛はあまりにふさはしくなかつた。
如月の霜まだ白き朝、俄然、彼の驛は荒々しい人夫の手によつて、破壞てふ慘酷な運命におちいつた、トン、トーンと重い調子で大きな木槌が動くたびにドッと高い響を立てゝ、壁が落ちると、一しきり土煙がすが〱しい朝の空氣を濁らして、からびに大空に吸ひ込まれるやうに消えてゆく、續いて鋭い刄物が鈍い冬の日のなかに光ると、柱は倒れ屋根は毀れて、瞬く間にいたましい破片はあたり一面に散りひろがつた、ただれた夕陽の滲む頃は殊更に哀れつぽく見えた。
しかし日ならずして新築てふ赤い歡びの日は來ました、勇ましい大工の唄聲！賑かなさゞめき!!齒切りのよい槌の音！
かくして春の日影長閑な五月上旬、落成式を擧行した驛は、期待した程ではなかつたけれど……それでも新開の地を想はせるには充分だつた。

群星

富山　鈴木くが子

△富直線は全通しました。嬉しくてなりません何故でせう。東京が近くなつたから……一日で行けますもの……。それのどこが嬉しいか。いつかKさんが言つた。『これから北國が榮えるのだ。歐洲の例に見るやうに』と。さうです。そのいとぐちが見出されたやうに思へて嬉しいのです。

△なんでもかう呑氣に待つてゐる事です。いらいらとあせるのは弱い。ごらんなさい。そのうちに日本にも大藝術家があらはれてきますよ。

△××××だの、世評だのを、氣にしてゐるやうな臆病者では淋しい。てんで自分の思つたまゝ、感じたまゝを、自由に歌ふ事です。

△詩でも歌でも、小說、脚本そんな類のものには一度讀むに限ると思ひます。どんな面白いと思ふものでも二度、三度と讀めば、始めの時のやうな面白みはなくて、何だかものたらぬ氣がされてなりません。

東京　みさ子

○私は六月號から文藝欄のお仲間に入れて頂いた、新參者でございます。皆樣、今後はどうぞお敎へを願ひます。——匿名は和子とも申します——

○六月號の群星欄での、鈴木くが子樣の女優のお說は、私も同感でございます。で、私も、現今の女優について一言云はせて頂きます。

○女優は藝術家でせう。ですけども、現今の女優の多くは、割合に藝に不熱心だと思ひます。

それは、——極端な例のやうですが、帝劇などの女優さん達が、御自分等のお師匠、松本幸四郎さんの假聲を、無理に眞似やうとしてゐらつしやるところを見ても解ります。——それはそれは、隨分、見にくうございます。——

○それから、所作などのお上手でないことは、まるで機械仕掛のやうでございます。

○新らしき藝術家たるべき女優さん達が、こんな風では、とても發展は覺束ないと思ひます。

○私は、現今の女優さん達の中に、藝術家として恥ぢない、例へば、劇評の一つ位書ける方が有つて欲しいと思ひます。

新潟　若井紅雨

▲前任女學校生徒のアラをさらけ出して女の涙にだまされるなど男學生に話す先生、又其麼下らぬ話をヤンヤとウエルカムする學生は眞にお目出度い人達だと思ふ。

▲五月號本欄で文さんが仰つしやつた今業平を氣取る男、嘔吐を催す樣な男、其麼男に限て綺のワイシヤツに赤いネクタイで、賑かな町賑かな町と歩いてゐる。ポツケツトには鐐が潜んで居樣けれど、女がガラス戶越に一軒一軒店先をのぞき乍ら歩くよりはましだ。

▲「紅さんさつきから辭書と首引だね何だい、ハハア、ミルトンの失樂園が古臭い女だなあ、それよりやこれを讀み給へ面白いぜ」つてモウパツサンの女の一生を借してくれたけれど私は見樣ともしなかつた。田舍にはかうしたヒステリカルな新しがる男が多くなつて來た。

▲斯麼男は屹度申し合せた樣に、僕等は新らしい女に同情するが、君等中古の女の目にはどう映るかと云ふ。それは彼の女達が太陽と自任して日に日に新しい立脚地を見出して、私共女の爲めに新しい活動をして下さるのは嬉しいけれど、實際あの行爲には感心しません。日本道德の下に生きてゐる女は、口には新らしい事を叫んでも最う少し從順であつて欲しい、何も行爲迄男のまねをせんでもよいではありませんか。

▲五月號の文藝欄は藝術的匂ひがあふれてゐて幾度讀んでも心よい響を殘します。本當に每號かくあつて欲しいと思ふ。

▲萬事都會に後るゝ田舍の悲しさ今日漸々本屋が文壇を送つてくれました。慘めなは田舍女、だから田舍女は古臭いのです。（五月十一日）

播磨　うすみどり

▲流行を追ふといふ事は一面必要であるが只一も二も流行々々と人まねをして居るのは側から見るとまことにをかしいものである。たとへば白のショールが流行すると云つて、印度人よろしくと云ふ程太陽に洒して黑光りの顏せの田舍女の白ショール掛けたのや、横にころばした方が步くより早いと思はれる婦人のコート着たのや、パラソルはクリーム色に帶は洗朱に、着物

の八ツ掛は青磁色にと流行色を一身に集めた令孃など見る度私はかへつて厭な氣がする又小說生さぬ中の高評につれて、小間物吳服物何でもかんでも生さぬ中の名をつけた。近頃菓子にまで生さぬ中といふのがある。それ程世人一般に流行を喜ぶのだ。

⁂

かげ草

▲「婦人文藝」に女優試驗を受ける記を書いた方は及第なすつたか、それとも落第でせうか、聞きたいと思ひます。

▲それとは別でせうが京都の要司村福子さんは大阪の松竹會社の女優におなりなさつたさうですね、お寫眞にもおぼえがあるので能く分りましたよ。

▲女優といへば松井すま子さんが、文藝協會をお退きになつたさうですが、新聞などにはいろいろの噂が書いてあります、實際女優の身になつて見ると、又いろ〳〵な事件が起るものですね。

▲フハアストだの、シーザーだの、西洋の芝居が多く見られるやうになつたのは嬉しいことですけれど、それと同時に日本の芝居が滅びて行くやうな氣がして悲しく思ひます。

▲帝劇もだん〳〵甘いものばかり興行するやうになりましたが、私は日本一の劇場として今少し好い芝居（脚本？）を見せてもらひたいと思ひます、なんて威張つたことをいふやうですが私も新しい女の一人ですものね。

⁂

神田　岡本都夜子

▲去年の此頃は本誌の妹雜誌——少女にどんなに熱狂して居ましたらう？でも殘念な事には七月には別れて終ひました、私は別れたくなかつたけど、あまりに短い御馴染！それでも幸ひ私と同じ悲しさを持つ若い仲間の方と、以前の通り花やかな美しい氣分で親しみ合ふ事が出來ました、それは白羊先生の御かげでした、バアジンの皆樣！都夜を覺えて居て下さいませうか、たつた三月であの好きな小雜誌とはなれた私は少し事情がありましたので——いまはどうなつて居るでせう、元通り御仲間に入れて頂き度いバアジンの事御存じの方は伺はして下さいまし本誌に榮えます きみにも私の存じて居ります方が幾人か御見えになる事どうぞ振ひませ。

⁂

紀伊　大澤古幽

▲私は此頃又眼を惡くした、去年も恰度今頃上村樣の治療を受けて居たのだ。全く使ひ過ぎるから遺憾に弱くなつて了つたのだらう。惡い事だと知りつゝ私はどうしても讀書癖が矯せない讀みたい!!書きたい!!唯一分間でも無駄に過したくないといふ事が絕えず私の心の滿ちて居る、勉强盛りを家庭の犧牲になつて自由に與へられた時間を持たなかつた私は稍自由を得られる。現在の境遇にもやはり書間机に向つて居る事は出來ない。夫れは皆もゆるさうけれど……。私は針持つ手を偸んで讀むなどは決してしない必ず無駄に過す間を拾つて自分の時間を多くする養蠶期に入ると忙がしいものと豫め宣告を受けるけれど夫れでも朝來た新聞はきつと晝寢の時間を割いて讀んで了ふ。每月の新しい雜誌も大抵讀むが自ら働いて暇を得るといふ主義だ。

此頃は夜は短かい上に晝は可成疲れる今夜こそは屹度直ぐ寢ようと心に決めて、寢室を出ると直ぐ日記を認め筆を措くと又傍の本が目に就く一寸と思つて取り上げると最後だ、日記つける者、手紙書く者、寄集まる机の傍も淋しく成つてもう兄も姉も知らぬ中に寢床の人となつて了ふ後一頁々々と讀んで居る中に時計は用捨なく進む。何卒十時であれ……と心に願ひ乍ら鳴る時計を算へるとはや十二時！

まだ起きて居るのか、と奥の間から父に促されてあゝ惡かつた……と思つて本を綴ぢた時はもう瞼が腫れて居る眼は痛い淚が切りに出る。あゝ眞に惡い事をした彼癖に机に噛り附いて居るのぢやなかつた……と思ふと堪らなく後悔する。するときつと井戸端に出て清水で眼を冷す、之れは藥の效を増すと聞いたから。これ許りは每夜かゝさない、「お節は自ら求めて惡くして居る」と兄に言はれるが全くさうかも知れない、けれども私はどうしても讀書の樂しみを捨てる事が出來ない。かうして私は每日惡い、いけない、と知りつゝ其惡い事を敢へて續けて居るが自分乍ら困つた事だと言ふ丈けは自覺して居る

投稿歡迎

群星欄は一種の評論欄ですから盛んに投稿して下さい、今一二ケ月の間に此欄の入賞者を一人指定しますが、今の處では何れも同じほどで特に勝れた人がありません、熱心で、また好いことを云ふ人が、今少し多くありさうに思ひますが、奮つて下さい。（一記者）

和歌

○（天賞）　麹町　淺井涙路

この春をたゞほそ〴〵と萌えいでゝ花も開かぬ草のさびしき

（評）すがたもよし、心もよし

○（地賞）　千葉縣　吉田ちか子

靜かにて少女のあるはいとよろし夏は疊の青き一室に

（評）日本畫を見る如し

○（人賞）　廣島縣　田村もと

さびしさにそとよる暮の石垣のひまに見出しうすいろのはな

（評）何の花にかあらむ

佳作

○　廣島縣　葵の花

なやましき花にそむきてはてもなく波たゝへたる海を見に來し

（評）實に花はなやみあり、海はなやみなし

○　深川　永井ゆめ

水底の魚戀しつゝ湖を見つめてあれば寂しさの湧く

（評）主觀的の歌なれど好き寂しさを捉へ得たり

○　陸前　黃川田かよ

浪の音にとりまかれたる漁夫の家の夕暮時をのぞきて行きぬ

（評）原作、夕食時は色氣がない

○　下谷　丘たけ

屋根の瓦小雨にぬれて光る時はるけき君の瞳を思ふ

（評）ひとみは如何？

○　宮城縣　齋藤すみれ

捨てられし種子物の如おのづからいさゝか土に芽を出しにけり

（評）よい感じである

○　麹町　櫻木雪江

氣まぐれに赤き花をば髮にさすさだすぎし身のさびしきまゝに

（評）二十五過ぎしとあつた、さだすぎしは年ごろを過ぎたる意

○　横濱　松田青龍

路絶えて朽たるまゝの橋の上の短き草に露置き渡す

（評）原作第五句「月すみのぼる」とあつた

○　尾張　ゆふづき

曙や入江につゞく野の花の白きに咲きぬ初夏の風

（評）入江につゞくとあつて印象が明かになつた

○ 小石川　大久保しげ子

別れたる後の心の淋しさに櫻咲く夜を櫻と語る

○ 下谷　山脇もと子

妻もてる君も泣くらんわがために櫻咲く夜のかの思ひ出に

○ 西茨城　田村初子

風かをる春の濱邊に礒菜つむ少女の髪に山ざくらちる

○ 越路　俠香

風光る五月の雲の行きかひに十九の青春は果敢なく去りぬ

○ 京都府　竹村槙子

紅提灯靄ににじめる小路をば踊見んとて人賑はひぬ

○ 四谷區　岩田正江

すが〲し夢よりさめし野は廣う夜あけの富士の紫の色

○ 京都府　薗田久

玉二つ君がみ前に並べるを何れを取りて愛しみ給ふ

○ 本郷　みゆき

嫁ぐべきかはた醒むべきか十九の日のさくら散る夜をふみがらになく

○ 米子　K子

空腹のはかなさびしさいかにせんせんすべもなき心なりしかな

○ 但馬　井上久子

人思ふ心疲れて春の日のくれゆく空をたゞみやるかな

○ 福島　和田三葉

さだかなる戀ともならで十八の春は暮れ行く花は散りゆく

○ 山形　千鳥

病み伏して幾度となく行燈のざれがきを讀む逝く春の宵

○ 水戸　小湊きよし

うとましき人の睫毛に似たるかな蒲公英の花ちりはてし後

○ 新潟　なでしこ

花瓦斯やカフエーの名や舗石やかゞやく樣を思ひ見るかな

○ 埼玉　保科銹子

空のはてゆく春追ふて櫻散る椿もちりぬ悲しからずや

○ 大阪　前田もん

川添の柳の枝に水越えて玉藻ぞなびく五月雨の頃

○ 高崎　村田喜美子

まつりはてゝうこんざくらの葉のへりのうす青きさま春ふかみゆく

○ 下關　金子よしの

なでしこの花の白きと紅に二人の性を見する悲しさ

○ 本郷　近藤愛子

其の時に心怪しくさわだちぬ戀にあらずとあらがふものゝ

○ 京橋　渡邊豐子

君を戀ひ君にわかれて涙するうつけわがみを笑ふわれかな

○ 濱千鳥

石牢にグレエトヘンの歌うたふ悲しき聲と星の光と

○ 前橋　石垣千代子

夕立のあとなく晴れし夕ぐれをひかりすゞしく螢とぶかな

○ 府下　近藤なほ子

その君はその愛人が悲しみにみちたる身とは知らで語りぬ

○ 淡路　國分白菫子

歌反古の中にうごめき君おもふ愛のいのちのやりどころなし

○ 和歌山　鹽谷都久枝

夕闇のきはよく下りて浪うてる小砂の渚歩みてもみむ

○ 北越　和子

其後の心のなやみたへかねて君が姿を消さんとすれど

○ 姫路　九十子

君の手に花火線香の散るごとくおどろきまどふわれと知りませ

○ 姫路　春紅子

何となく語らぬことを好むてふ此すねごゝろ深山を戀ふ

○ 上毛　みどり

五月雨に青梅落つる日の淋し失戀に泣く心に似たり

○ 兵庫縣　松並ひさ

大きなる宿のしるしのかさゝして知らぬ町行く行春の暮　○　埼玉縣　根崎久子

交りを絶つてふ君が文來し日心ありげに散る椿かな　○　廣島市　村上清子

大方の花散りはてゝ葉櫻の下行く水のさやかなりけり　○　兵庫　蓮水得子

春の雨戀にうみたる若き人來てうたふなり酒場の灯のもと　○　岐阜　佐藤史子

なげきのみしげくなり行くまひるどきほとゝぎす鳴く赤き花散る　○　上毛　有坂春風女

わすられぬ彼の劇場の女優等の生々とした瞳なつかし　○　露次子

うらぶれの子は淋しさに蝶追ひぬ春逝くしゞま遠雷のして　○　兵庫縣　秋海棠

あめ晴れて露の搖ぎは女等の髮の樣にぞ馴れ昇り行く　○　紀伊　大澤古幽

さまよひの二つの道に出でしごとわれは行途に迷ひぬるかな　○　府下　橋田紫葉

海鳴りの音を青葉の下にして磯山松の陰にきくかな　○　青森縣　上野禮子

逝く水をひとりながむる君よはたそこに默示の影うつらずや　○　播磨　龜岡みつゑ

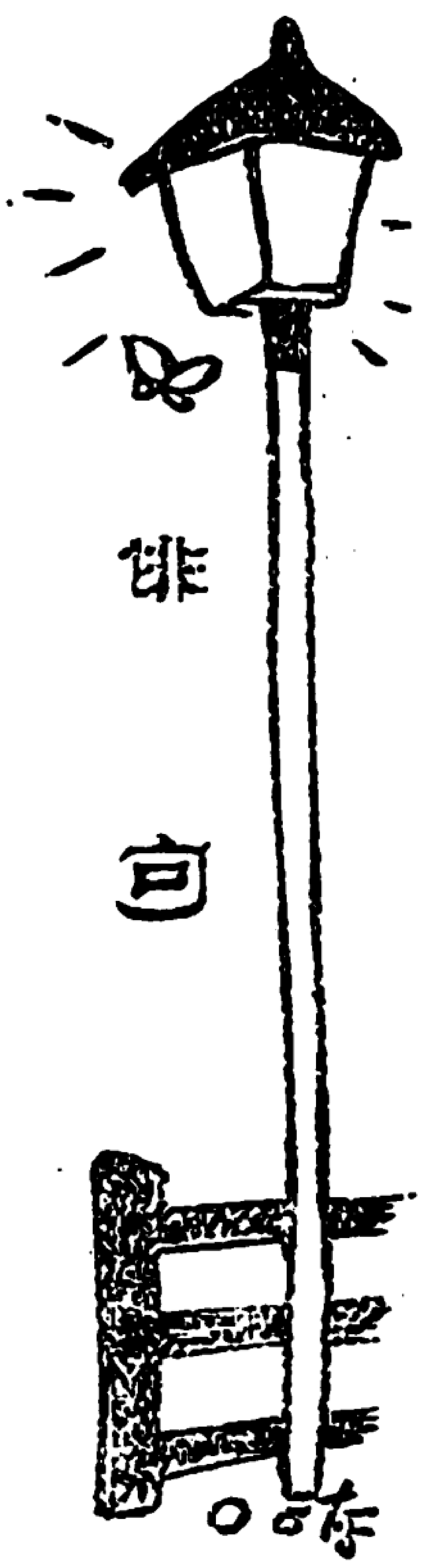
紅に黃にうつろひて行く紫陽花は哀れ悲しゝあはれ嬉しゝ　○　廣島　紅つた

すだれごし軒のしのぶに風立ちて女許りの夏の夕かな　○　栃木　小森いつ子

ふるさとは夕ざり來れば母びとの山椒の芽などつむが悲しや　○　周防國　若栄

夜の闇のよせくる背戸の草原に悲しきものゝ立ち姿かな　○　下總　浮舟女

空想の夢の花とはたれがいふふたつ心はわれもたなくに



○（天賞）　下谷　丘たけ

葉柳に雨大粒の夕かな

○（地賞）　京橋　桃子

磯を行く四つの袂や風かをる

○（人賞）　京都府　竹村槇子

落花して神燈淡き夜明かな

縮緬の襦袢の袖や花ふゞき　秋田縣　藤木高子

風にまふ落花にざれる小猫かな　赤坂　金田咲子

化粧して笛吹く窓や夏の月　對馬　伊藤夕陽子

淪落の女淋しき暮春哉　京橋　藤澤みつ子

梅雨晴や蘇鐵にかけし檜笠　澁谷　前田はるの

新緑や赤きもの干す島の家　神戸　石井須磨子

待ち人を思ひ切る時ほとゝぎす　下野　渡邊秀子

ほがらかな琴のしらべや餘ごし　前橋市　石垣千代子

苗代に蛙の聲や夜は靜　紀伊　大澤古幽

いま雨の晴れし野に舞ふ小蝶哉　群馬　新井延子

猫の背に胡蝶の眠る春日かな　下總　浮舟女

斧の音のどかにひゞく春の山　福島　松本保子

神前のともしび遠しおぼろ月　茨城　田村初子

椿咲きて明るくなりぬ賤が家　下谷　山脇もと子

雑報

葉山御轉地

聖上陛下には、一時御不例に在せしも神明の加護と國民の熱誠に由り程なく御快癒遊ばされ、前月十八日東京御出發、皇后陛下御同列、相州葉山御用邸に行幸啓遊ばされた。御用邸の眺望は、大峰山を東に、一色の浦を抱いて左手に長者ケ崎を限り右手に豆相の連山を望みて雲煙糢糊たる中に富嶽を仰ぐ、誠に天然の景勝で、空氣は柔かに、溫度また快適此度の行幸啓に就て御用邸は清々しく装飾され、御座所の設備も瀟洒たる中に尊嚴の趣申すも畏しと承る。

大飛行

飛行將校の武總大飛行は前月十六日午前九時十五分、岡中尉先づ徳川式第三號に搭乘して出發し、續て長澤中尉はモーリスファルマン式に乘じて空中の人となつた。然るに岡中尉の乗れる第三號は發動機に故障生じて中途荒川の上より引返し、長澤中尉の乗れる飛行機は往路約四十分歸路約三十分を以て所澤、國府臺間の飛行を無事に成功した。

旅行のシーズン

七八兩月は例年旅行の期節になつてゐる、今年は諒闇中だから遠慮する向もあるであらうが、靜粛なる心を以て、夏向の山や海を旅行することは宜からうと思ふ。吾人は年々同じことを繰返すやうだが、婦人の方々に登山を勸めたい、富士は徒に高いに止まるが、其他吾國到る處に山嶽はあるのだから、大いに登山思想を養つて欲しい。海も宜いが山も忘れてはならぬ。

女優の立脚地

文藝協會の問題は、今後一年なり二年なりの間に自ら解決されるであらうが、吾人は今遽に其是非を評論しないまでも、痛切に感ずることは女優と云ふ者の立脚地である。松井須磨子の名は一時都鄙に喧傳せられ羨望の的となつたものだが、今や一轉して彼女自らは煩悶懊惱の人となつてゐる。女優と周圍との關係は、他の藝術家とは異つた一種の深い關係があつて、周圍に動搖があると、何んな名女優でも多少の動搖を免れない、之が須磨子だから宜いやうなものゝ、若し須磨子以下の女優に斯る問題が起つたら何うであらう、否毎に起らんとしてゐる問題ではなからうか、吾人は此意味に於て、未だ我國の女優といふものゝ地位の危殆を感ぜずには居られない。

あはれな遺書

前月初旬相模花水川で溺死した女があつた、年の頃十七八の美人で、懷中には十七錢五厘の金と、左の遺書があつた、遺書といふものは大抵單純で、讀むと此れで死ぬほどの決心になれるかと思ふものが多いのに此遺書は同じ單純でも能く表直な感情が表はれて居てあはれである。

自分の郷里は大分ですが親も誰も居ない悲しい境遇であります父母は四年前歿しまして一人の兄は行方不明私は三年前上京して奉公して居ましたが思ふやうにならず今度の事を決しました誠に恐入りますが其邊の木の下へでも葬つて戴きたい願上げます新聞等に出さないで下さりませ

星野いく子

▲多摩川の遊び場所と云へば、多摩川電車の終點双子の渡し附近に限られてゐたが、此程京王電車の大部分が開通したので、所謂武藏野と相模野の間で多摩川沿岸の風光を探る地が多くなつた。新聞でみると右電車の沿道で國領停留所から北へ十二三町の玉翠園といふ丘陵は好い風景だと云ふことである。

▲前月十七日、麻布長谷寺歌仙堂に於て、柿本人麿の一千百九十年の祭があつた。

▲梅雨期に入つて雨が多い、氣候順當のしるしであらう。

▲前月は文學物の禁止が多かつた、『新小説』と『白樺』が發賣禁止され『圓窓より』も禁止された。

▲『報知』では明治天皇の御聖徳を歌つた小學唱歌を募集してゐる、締切は七月三日で、一等賞が金三百圓選者は森、上田、芳賀、佐々木の四博士である。

▲中央停車場の工事が追々進捗して今は丸の内に巍然たる大建築が聳えて居る、帝都の中央も此處數年の間には見違へるやうな大變化を來すて

とであらう。

▲能く清水の舞臺から飛んだと思つて――と諺に云ふが、實際飛ぶ人が有らうとも思はなかつたが、前月三日京都清水寺境内の忠僕茶屋で休んだ五十年輩の男は、酒一合を飲み、舞臺の一隅から飛下りたが、中途の足場に引かゝつて縡切れた、其男は大阪の人で、原因は迷信らしい。

▲電氣局で電車乘客に對する車掌用語の募集をして、『どうぞ中程へ願ひます』と云ふのを當選せしめた『どうか中程へ願ひます』といふのは落第した、ぞとかと一語の相違でも多少感情が違ふといふことだ、成程然うかも知れぬ。因に澤山應募して來た中には『中程には別嬪がゐます』『入口にはすりが立つてゐます』などいふ愛嬌のあるのもあつた。

▲此頃電車の中で居ねむりしてゐる人が多くなつた、それも女に多いので、女も若い細君に多い。セルの單衣に夏らしい帶を締め、金色の指環まで嵌めてゐる美しい奧樣が、電車の中でコクリ〳〵とやつて、隣の人が立つはづみに、ひよつてこり倒れかけさうになるなどは、餘り見好い圖ではない。

▲文學上の讀書社會は今や飜譯時代に入つてゐる、國文復活時代を經て飜譯時代に入つたのだから、此次は必ず創作全盛の時代であらう。新しい主張の下に動いて來る創作熱は何んなものを將來するであらう

●うきよ　發賣禁止　新號飛躍

新機軸を以て雜誌界のレコードを破りたる『うきよ』の六月號は風俗壞亂の廉を以て發賣を禁止された。併し七月號は局面を新しい方に展開して、所謂うきよ式の記事は益々天下を驚倒せしめずんば止まぬ勢ひである、七月號載する處の材料は項目約二十、一件として記者自らが苦心して採取した材料ならぬものはない恐らく世間の評判となるものばかりであらう。

▲美粧倶樂部　女子大學卒業生磯本みね子女は、今回日比谷に美粧倶樂部と云ふを起し、自ら主となつて髮の結ひぶり、お化粧の仕方を初め、結婚、見合などの扮粧も充分注意して需に應ずるさうだ、時節柄必要なことであらう。

▲ルブナール　下谷御徒町一ノ九安藤製藥研究所で頒布するルブナールといふ新藥は、神經衰弱的生殖器諸病の根本的治療藥として、大に世評を博して居る、證狀だけでも日に幾通來るか知れないさうだ、なほ委細は本誌の廣告で御承知あれ。

新刊

○圓窓より　平塚明著

『青鞜』に出た評論と創作を一冊にしたもので、此書を見れば平塚明子は何んな人かと云ふことが分る、猶本號には諸家の平塚明子論があるから此處に詳しく云ふ必要はなからう本書出版後、直ちに發賣禁止されたが、或る一篇だけを拔いて『扃ある窓』と改題し再版して世に行はれてゐる。（定價金九十錢、日本橋區檜物町東雲堂發兌）

○埋れた春　秋田雨雀著

『埋れた春』外三篇の戯曲を收めてある、雨雀氏の脚本は心に訴へやうとする方だから讀物としても力が深い、「埋れた春」には幼い戀を描いて神秘な暗示がある。（現代文藝叢書第二十四篇、定價金二十五錢、春陽堂發兌）

○奈良と平泉　黑田鵬心著

美術と云ふものを背景とした一種の紀行文である、普通の旅行記よりは特色があつて、又それほど深く專門に渉つて居ない丈け何人にも興味を與へる書である。（同廿五篇、同上）

○女學生　柴田柴庵譯

ストリンドベルヒ原著、譯筆は少し硬いが、彼方の女學生の近代生活が能く分る。（定價金二十錢、京橋尾張町警醒社發兌）

○春返る日に　松村英一著

本誌でお馴染の白木絲子さんの良人の歌集です、空穗君の感化が深いだけに歌の調子もじみで、しんみりとした味ひがある、近頃最も嫌味のない歌集だと思ふ。（定價金五十錢、小石川江戸川町九十月會發兌）

○涙　痕　原河佐継著

○水仙咲く日　杉野照子著

右二書は增刊『新しき文藝』に於て原田さんの『ふるへる花』と共に批評することにした。

○赤き地圖　有本芳水著

『日本少年』編輯主任有本芳水氏が少年の爲に作つた小說である。（定價金二十五錢、實業の日本社發兌）

○悲しき故鄕　植松美佐保著

例の優しい少女小說である。（定價金四十錢、本鄕區東片町本鄕書院發兌）

○少女詩集 母の御手　村山至大作

少女向きの口語詩である、體裁が頗る可愛らしい。（定價金三十五錢、早稻田大學前敬文堂發兌）

▲背●水●畫●會　洋畫家高木誠一（背水）氏は、白馬會の出身で、苦學多年歐洲に遊學し歸朝後も熱心に斯道を研究してゐるが、此度背水畫會を起し、山水又は肖像の油繪を需に應じて揮毫する事となつた、同好の士女は麴町區鍋島侯邸內背水畫塾宛に問合されると宜い。

編輯だより

▼本誌は此月から多少體裁が異ひました、それは御らんの通り文藝欄の擴張と、小說、散文其の他に五號活字を用ひるやうになつたことですが本欄も多少文學的になつて居ます。

▼文藝欄を擴くせよ、投稿を優遇せよ、雜誌を文學的にせよと云ふ聲は、四方から聞えますので、此等永久の本誌愛讀者の意を汲み、傍ら新しく增加して行く愛讀者の要求をも參酌して、今後の方針を取つて行かうと思ひます。

▼文學的にせよと云はれる方は、多年本誌の歷史上尤も當然な要求でせうし、又婦人雜誌として好い記事を載せよと云はれるのも新らしい讀者には至當の注文でせう。

▼記者は趣味といふ廣い立脚地から、興味があつて善良なる讀物を多く供給し、女子文壇といふ性質は何處までも失はぬやうに、新しく伸びて行かうと云ふ若き婦人方の味方として大いに步調を進めて行きます。

▼右につき投書も從來より多く採用し、且出來る丈け優遇して行く方針ですから、盛に御投稿あるやうに願ひます。

◎寫眞募集

諸嬢のお寫眞は勿論、風景、風俗各種の寫眞を蒐集します、掲載の雜誌は必ず贈呈し、寫眞は御入用なら返しいたします。猶ほ全國寫眞業者諸君にも、同好の方は御寄贈を願ふ

◎文藝欄 投稿規定

△文藝欄の投稿は女子に限る △小說詩は自今振りがなを要す △小品文は二十四字詰三十行乃至五十行以內 △小說は二十四字詰百行以內 △詩は長短隨意 △群星欄も長短隨意二十一字詰 △和歌俳句は一人一首限り △圖畫は必ず方二寸以內 △投稿は毎月十五日、嚴に締切る。

▽賜賞改正 △小說は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢△小品文は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢、△詩は天賞金一圓、地賞金七十錢、人賞金三十錢△和歌は天賞金一圓、地賞金五十錢、人賞金三十錢△俳句は天賞金五十錢、地賞金三十錢、人賞金二十錢△圖畫は天賞金七十錢、地賞金五十錢、人賞金三十錢 △群星欄は平素優秀なる投稿を送る人に三箇月毎に金一圓の特賞を呈す △以上賜賞は總て相當の物品を贈呈す。

改正 定價表（毎月一回一日外年四回増刊）定期號增刊號同額

△一冊分	（送料とも）	前金拾九錢五厘
△三月分	（增刊共四冊）	前金七拾參錢
△半年分	（同八冊）	前金壹圓四拾錢
△壹年分	（同十六冊）	前金貳圓七拾錢

▷申込注意◁

注文は總て前金のこと◎振替貯金（口座東京一七二九番です）にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと（用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます）◎郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと◎郵券代用は必ず壹割增のこと（收入印紙は絶謝）◎最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ本社への照會は返信料添付なければ回答せず

大正二年七月一日第九年第九號發行

編輯兼發行人 野口竹次郎
印刷人 松本魁
印刷所 東京國文社

不許複製

東京市京橋區大鋸町十一番地
發行所 女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京一七二九番

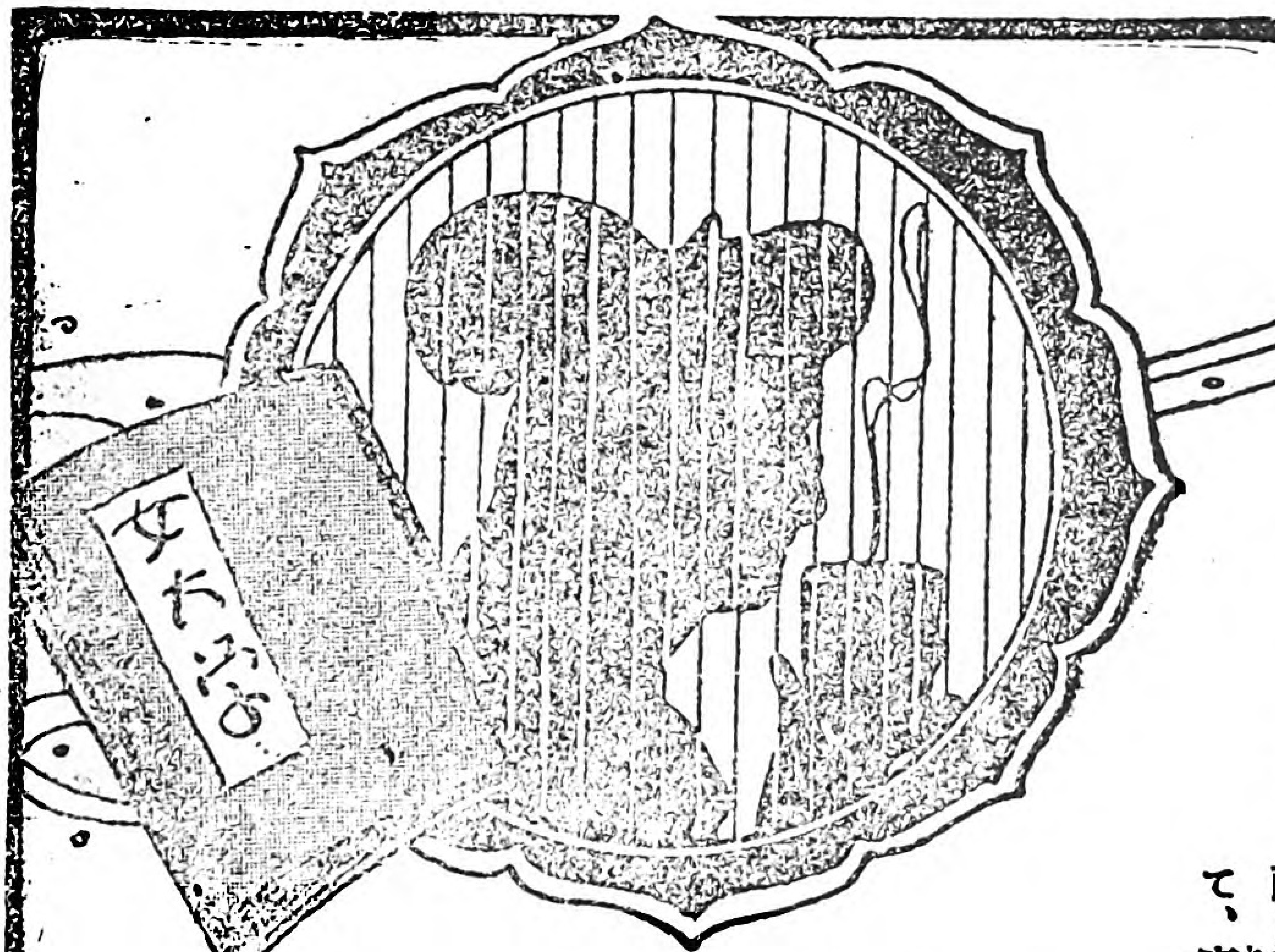
特約販賣 東京堂北隆館上田屋至誠堂東海堂永久堂良明堂大阪盛文館

大正二年六月廿五日印刷納本

女子文壇

第九年第九號 七月一日發行（毎月一回一日）

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）





子無き女は去る（女大學七去の一）

此教訓は一寸考へれば薄情にも見えるが、好く味はつて見るとナルホドと合點が行きます扨て妻たる者の第一の務は所謂内助の功で、家政は自分で萬端切り廻し、夫に少しも心配を掛けず、愉快に夫を生存競爭の激い社會に送り出して、事業に從事させる事が必要です、さうなると夫の成績はあがり、一身一家の幸福は待たずして來ますが、若し身體が弱ければ是と反對で、世間には身體の弱い妻を有つた爲に、一生浮ぶ瀬の無い者が少くない、妻たる者の第二の務は丈夫な好き子を產んで子孫の繁榮を計るに在るが、家には山ほど寶を積んでも子供がなければ誰に遺らうといふ當も無いから、夫はそろ〳〵妾を蓄へ花柳界に出入するといふ風で果は、家庭に風波が起きて一生涙で送らねばならぬのです、サア斯う考へると此教訓は實際に於て「子なき女は去れ」といふ意味で無くて、妻たる者の健康は斯の如く大切なもので有るぞといふ事を強い言葉で言ひ現はしたに過ぎないものと思はれます、で身體が弱くて内助の功は擧らず子供が無くて家庭の風波に堪へない婦人は婦人良藥中將湯を飲んで身體を丈夫にし可愛い子供を擧げて目出たく此世を送る樣心掛られたいものです

中將湯は子宮血の道より起る左の諸症を治す

◉子宮病 ◉血の道
◉内膜炎 ◉膣加答兒
◉下腹痛み ◉夜眠れず
◉難產流產 ◉つはり
◉氣ふさぎ ◉月經不順
◉產前產後 ◉胸先差込
◉腰足冷込 ◉白帶赤帶
◉こしけ ◉癇高ぶり
◉月經滯り ◉逆上頭痛
◉月經痛み ◉血ぶとり

定價

一週間分	六拾錢
二週間分	壹円拾錢
三週間分	壹円六拾錢
五週間分	弐円五拾錢
十週間分	四円九拾錢

本舖

東京日本橋通四丁目 津村順天堂本店 振替口座六〇八番

大阪市堺筋大寶寺町 津村順天堂支店 振替口座四五六番

▲女子定價金拾八錢 郵税一冊